長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

諏訪市内 その1・その2

昭和48年度

日本道路公団名古屋建設局
育委員会

信州大学附属図書館
3470205331

長野県中央道埋蔵文化財
包蔵地発掘調査報告書

― 諏訪市内その1・その2 ―

昭和48年度

日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会

序

昭和48年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の一環として，諏訪市内その１・その２地区９遺跡の発掘調査が，７月30日から12月14日にかけて実施された。

この諏訪市有賀・真志野・大熊地区は，諏訪湖の南部，諏訪盆地西南縁から有賀峠，真志野峠を経て守屋山に続く山塊の山麓にあって，釜無山断層崖による崖錐面の連続する所である。諏訪市の湖東から山麓にかけては，遺跡分布が濃厚な所と知られているが，湖南地区は近年調査が進むにつれて新遺跡の発見が続き，古代東山道や中世諏訪神社にまつわる遺跡も存在し，注目すべき地域のひとつになっている。中央自動車道は，山麓の崖錐扇状地を横切っているため，この調査には大きな期待がかけられていた。

発掘調査の結果は，報告書に見られるように予期以上の遺構，遺物の発見が多く，縄文時代中期から中世にいたる集落の複合を確認した。本城，荒神山遺跡，過去の調査で破壊されたものの，高台に立地した古墳築造法の解明を見た小丸山古墳，中世の山城に考古学調査のメスを入れた大熊城址，中世居館址と想定される建築址を確認した城山，荒神山，大熊道上遺跡等，学界に新知見をもたらすものも数多く，この発掘調査の成果は極めて多大であった。

報告書の刊行に当って，この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた日本道路公団名古屋建設局，同諏訪工事事務所，炎暑きびしい７月末から，凍土と寒さに悩まされる12月中旬にかけて，長期間この発掘調査に精励された大沢団長を始めとする調査団の各位，この調査のためにご協力いただいた諏訪中央道事務所，諏訪市当局ならびに同町中央道用地被買収者組合等関係各位に対し，深甚なる謝意を表する次第である。

昭和49年３月20日

長野県教育委員会教育長　小　松　孝　志

例　　言

1．本書は，昭和48年度，日本道路公団と長野県教育委員会との契約に基づいて発掘調査した諏訪市内その1，その2地区9遺跡の調査報告書である。

2，本書は，契約期間内（昭和49年3月20日）にまとめることが要求されており，また，調査班が富士見町，箕輪町地区も担当したため，調査結果について充分検討，研究する時間がとれなかった。そのため，調査によって検出された遺構・遺物をより多く図示することに重点を置いた。

3．次年度に於て，第二次調査が行われる本城遺跡については，その概要のみを記載し，荒神山遺跡については，土器集中区，土壙1～174 を次の調査報告書で報告することとした。

4．遺構関係の図類は竹内・伴が製図した。土器復元には細川・堀調査補助員があたり，辰野班福沢の援助を得た。土器実測は伴・唐木・小林・竹内・長沼が，製図は平出が担当した。石器は小林・松永・高桑調査補助員が実測し，松永が製図した。土器拓本・実測には伊那班の宮沢主任始め調査員の方々の応援を得た。金属器は小林が担当した。写真撮影は遺構については木下・岡田・伴が，遺物については木下が担当した。

5．原稿執筆は全員が分担し，それぞれ，文末に文責を記し，編集には岡田・伴があたった。

6．遺構図中のドットは焼土を表わし，主要遺物出土箇所は×印で表示した。柱穴，ピットの深さはcm単位で数を内部か附近に表示した。石器実測図中，自然面及び敲打痕をドットで，磨滅部を平行線で表示した。

7．縄文式土器については整稿段階で武藤雄六氏の御指導を，また，宮沢光昭氏，神村透氏の助言を，石器の石質については松島信幸氏の御指導を，中世城郭関係については一志茂樹博士の御指導を頂いた。

8．遺物，実測図類は，辰野町平出，辰野東小学校内，中央道遺跡調査団本部に保管してある。

目　　次

序
例言
Ⅰ　調査状況……1
1　調査にいたるまで……1
1）　中央道関係の経過……1
2）　発掘調査委託契約……10
3）　発掘調査開始までの準備……16
2　調査の実施と経過……17
1）　調査の開始と経過……17
2）　発掘調査協力者……18
3）　現地指導・視察者……19
3　発掘調査の方法……20
Ⅱ　諏訪市の概況……21
1　諏訪市の環境……21
2　諏訪市の遺跡……23
Ⅲ　調査遺跡……28
1　清水遺跡……28
1）　位置……28
2）　遺物……28
3）　まとめ……28
2　小丸山古墳……30
1）　位置……30
2）　過去に於ける調査……30
3）　古墳の築造……30
4）　出土遺物……31
5）　まとめ……32
3　平林遺跡……41
1）　位置……41
2）　遺物……41
3）　まとめ……41
4　本城遺跡……43
1）　位置……43

2） 遺構と遺物……43
3） まとめ……43
5 金山北遺跡……45
1） 位置……45
2） まとめ……45
6 城山遺跡……46
1） 位置……46
2） 遺構と遺物……46
ア 住居址……46
イ 建築址……47
ウ 井戸址……48
エ 土壙……49
オ 暗渠排水路址……49
カ 土器集中区……50
キ その他の遺物……50
3） まとめ……50
7 大熊城址……64
1）位置……64
2） 遺構と遺物……64
ア 郭……64
イ 空濠……66
ウ 土橋……67
エ 帯曲輪……67
オ 溝址……67
カ 土壙墓……68
キ その他の遺物……68
3） 大熊城址の植生……68
4） まとめ……71
8 大熊道上遺跡……78
1） 位置……78
2） 遺構と遺物……78
ア 住居址……78
イ 建築址……80
ウ その他の遺物……80
3） まとめ……81
9 荒神山遺跡……88

1）　位置……88
2）　遺構と遺物……89
ア　縄文時代の住居址……89
イ　弥生時代の住居址……107
ウ　平安時代の住居址……108
エ　中世の住居址……110
オ　中世の建築址……113
カ　溝状遺構……113
キ　配石遺構……114
3）　まとめ……114
あとがき……223

表　目　次

第1表　諏訪市遺跡一覧表……18
第2表　発掘調査経過一覧表……116
第3表　遺跡別遺構一覧表……117
第4表　遺跡別出土遺物一覧表……118
第5表　住居址一覧表……119
第6表　荒神山遺跡埋甕一覧表……126
第7表　荒神山遺跡出土石器一覧表……127

挿　図　目　次

第　1図　諏訪市中央道遺跡分布図……24
第　2図　清水遺跡地形図及び遺物……29
第　3図　小丸山古墳地形図……32
第　4図　小丸山古墳地形図及び石室実測図……33
第　5図　小丸山古墳墳丘土層図……34
第　6図　小丸山古墳出土鉄製品……35
第　7図　小丸山古墳出土鉄製品……36
第　8図　小丸山古墳出土鉄製品……37
第　9図　小丸山古墳出土鉄製品……38
第　10図　小丸山古墳出土鉄製品……39
第　11図　小丸山古墳出土鉄製品及び土器……40
第　12図　平林遺跡地形図及び出土遺物……42
第　13図　本城遺跡地形図・遺構全体図……44
第　14図　金山北遺跡地形図……45
第　15図　城山遺跡地形図・遺構全体図及び1号住居址……52
第　16図　城山遺跡2号住居址及びカマド……53
第　17図　城山遺跡1号建築址及び井戸址……54
第　18図　城山遺跡2号建築址……55
第　19図　城山遺跡土壙及び暗渠排水路址……56
第　20図　城山遺跡出土土器……57
第　21図　城山遺跡出土土器……58
第　22図　城山遺跡出土土器……59
第　23図　城山遺跡出土土器……60
第　24図　城山遺跡出土土器……61
第　25図　城山遺跡出土石器……62
第　26図　城山遺跡出土遺物……63
第　27図　大熊城址地形図……73
第　28図　大熊城址遺構全体図及びセクション図……74
第　29図　大熊城址セクション図……75
第　30図　大熊城址実測図・溝址及び土壙墓……76
第　31図　大熊城址出土遺物……77
第　32図　大熊道上遺跡地形図・遺構全体図及び1号住居址……82

第 33図　大熊道上遺跡３号住居址……83
第 34図　大熊道上遺跡２号・４号・５号住居址……84
第 35図　大熊道上遺跡建築址……85
第 36図　大熊道上遺跡出土土器……86
第 37図　大熊道上遺跡出土遺物……87
第 38図　荒神山遺跡地形図……88
第 39図　荒神山遺跡遺構配置図……131
第 40図　荒神山遺跡１号・３号・11号・36号・59号住居址……132
第 41図　荒神山遺跡２号住居址……133
第 42図　荒神山遺跡４号・５号・32号住居址……134
第 43図　荒神山遺跡８号・10号新・旧住居址……135
第 44図　荒神山遺跡６号・７号・９号・23号・53号・55号住居址……136
第 45図　荒神山遺跡12号・13号・25号・46号住居址……137
第 46図　荒神山遺跡14号・15号・24号住居址……138
第 47図　荒神山遺跡16号・17号・18号住居址……139
第 48図　荒神山遺跡19号・20号・21号・26号・27号・28号・54号・57号・58号・61号住居址 140
第 49図　荒神山遺跡29号・30号・33号・34号住居址……141
第 50図　荒神山遺跡22号・31号・35号住居址……142
第 51図　荒神山遺跡37号・38号・39号・40号・41号住居址……143
第 52図　荒神山遺跡42号・43号・44号・45号住居址……144
第 53図　荒神山遺跡47号・48号・49号・51号・52号・56号・65号住居址……145
第 54図　荒神山遺跡50号・60号・62号・63号・64号・66号住居址……146
第 55図　荒神山遺跡中世建築址……147
第 56図　荒神山遺跡配石遺構……148
第 57図　荒神山遺跡Ａ区地層図……149
第 58図　荒神山遺跡埋甕出土状況断面図１……150
第 59図　荒神山遺跡埋甕出土状況断面図２……151
第 60図　荒神山遺跡１号・３号・４号住居址出土土器……152
第 61図　荒神山遺跡４号住居址出土土器……153
第 62図　荒神山遺跡４号住居址出土土器……154
第 63図　荒神山遺跡６号・７号住居址出土土器……155
第 64図　荒神山遺跡８号住居址出土土器……156
第 65図　荒神山遺跡８号・10号住居址出土土器……157
第 66図　荒神山遺跡12号・16号住居址出土土器……158
第 67図　荒神山遺跡17号・18号・19号・21号・22号・26号・32号・37号住居址出土土器……159
第 68図　荒神山遺跡31号住居址出土土器……160

第 69図　荒神山遺跡33号・35号住居址出土土器……161
第 70図　荒神山遺跡41号住居址出土土器……162
第 71図　荒神山遺跡48号住居址出土土器……163
第 72図　荒神山遺跡48号住居址出土土器……164
第 73図　荒神山遺跡49号住居址出土土器……165
第 74図　荒神山遺跡50号住居址出土土器……166
第 75図　荒神山遺跡38号・42号・43号・45号・51号・52号・55号住居址出土土器……167
第 76図　荒神山遺跡60号・62号・66号住居址出土土器……105
第 77図　荒神山遺跡1号住居址出土土器……168
第 78図　荒神山遺跡1号住居址出土土器……169
第 79図　荒神山遺跡1号・3号住居址出土土器……170
第 80図　荒神山遺跡3号住居址出土土器……171
第 81図　荒神山遺跡4号住居址出土土器……172
第 82図　荒神山遺跡4号住居址出土土器……173
第 83図　荒神山遺跡6号住居址出土土器……174
第 84図　荒神山遺跡7号住居址出土土器……175
第 85図　荒神山遺跡8号住居址出土土器……176
第 86図　荒神山遺跡8号住居址出土土器……177
第 87図　荒神山遺跡10号住居址出土土器……178
第 88図　荒神山遺跡10号住居址出土土器……179
第 89図　荒神山遺跡12号住居址出土土器……180
第 90図　荒神山遺跡12号・16号住居址出土土器……181
第 91図　荒神山遺跡16号住居址出土土器……182
第 92図　荒神山遺跡17号・18号住居址出土土器……183
第 93図　荒神山遺跡19号住居址出土土器……184
第 94図　荒神山遺跡19号・31号住居址出土土器……185
第 95図　荒神山遺跡31号住居址出土土器……186
第 96図　荒神山遺跡31号・32号住居址出土土器……187
第 97図　荒神山遺跡33号住居址出土土器……188
第 98図　荒神山遺跡35号・37号住居址出土土器……189
第 99図　荒神山遺跡39号・40号住居址出土土器……190
第 100図　荒神山遺跡40号・41号住居址出土土器……191
第 101図　荒神山遺跡41号・42号住居址出土土器……192
第 102図　荒神山遺跡42号・43号住居址出土土器……193
第 103図　荒神山遺跡45号・48号住居址出土土器……194
第 104図　荒神山遺跡48号・49号住居址出土土器……195

第 105図　荒神山遺跡49号住居址出土土器……196
第 106図　荒神山遺跡49号・51号住居址出土土器……197
第 107図　荒神山遺跡50号住居址出土土器……198
第 108図　荒神山遺跡53号・54号・56号住居址出土土器……199
第 109図　荒神山遺跡55号・57号住居址出土土器……200
第 110図　荒神山遺跡58号・60号・61号・62号住居址出土土器……201
第 111図　荒神山遺跡63号・64号・65号・66号住居址出土土器……202
第 112図　荒神山遺跡1号・2号・4号・5号住居址出土石器……203
第 113図　荒神山遺跡3号・7号住居址出土石器……204
第 114図　荒神山遺跡8号・10号住居址出土石器……205
第 115図　荒神山遺跡10号・12号住居址出土石器……206
第 116図　荒神山遺跡15号・16号・17号・18号・19号住居址出土石器……207
第 117図　荒神山遺跡22号・31号・32号・33号・35号住居址出土石器……208
第 118図　荒神山遺跡37号・38号・40号・41号住居址出土石器……209
第 119図　荒神山遺跡41号・42号・43号・45号住居址出土石器……210
第 120図　荒神山遺跡42号・48号住居址出土石器……211
第 121図　荒神山遺跡49号・56号・57号・63号住居址出土石器……212
第 122図　荒神山遺跡50号・53号住居址出土石器……213
第 123図　荒神山遺跡41号・55号住居址出土石器……103
第 124図　荒神山遺跡1号・3号・4号・6号・10号・12号・16号住居址出土石器……214
第 125図　荒神山遺跡8号・17号・19号住居址出土石器……215
第 126図　荒神山遺跡31号・33号・37号・41号・42号・43号・48号・49号住居址出土石器……216
第 127図　荒神山遺跡50号・53号・62号住居址出土石器及び5号・13号・28号住居址・中世建築址出土鉄器……217
第 128図　荒神山遺跡12号・17号住居址出土土製品・9号・42号住居址出土石製品及び2号住居址・中世建築址・土器集中区出土古銭……218
第 129図　荒神山遺跡1号・3号・4号・6号・7号・8号・26号・42号・48号・50号・62号住居址出土土製品……219
第 130図　荒神山遺跡44号・46号・47号住居址出土土器……220
第 131図　荒神山遺跡5号・9号・13号・27号・29号・36号住居址出土土器……221
第 132図　荒神山遺跡2号・14号・15号・30号住居址出土土器……222

図　版　目　次

第 1図　清水・平林遺跡……224
第 2図　小丸山古墳……225
第 3図　小丸山古墳遺構……226
第 4図　小丸山古墳出土遺物（本調査）……227
第 5図　小丸山古墳出土遺物（東京国立博物館蔵）……228
第 6図　小丸山古墳出土遺物（平林氏蔵）……229
第 7図　本城遺跡……230
第 8図　金山北・城山遺跡……231
第 9図　城山遺跡住居址……232
第10図　城山遺跡住居址……233
第11図　城山遺跡住居址出土遺物……234
第12図　城山遺跡建築址……235
第13図　城山遺跡……236
第14図　城山遺跡……237
第15図　城山遺跡包含層出土遺物……238
第16図　大熊城址……239
第17図　大熊城址……240
第18図　大熊城址……241
第19図　大熊城址……242
第20図　大熊城址……243
第21図　大熊道上遺跡……244
第22図　大熊道上遺跡……245
第23図　大熊道上遺跡……246
第24図　荒神山遺跡地形……247
第25図　荒神山遺跡遺構全景……248
第26図　荒神山遺跡 1 号・2 号住号址……249
第27図　荒神山遺跡 2 号・3 号住居址……250
第28図　荒神山遺跡 3 号・4 号住居址……251
第29図　荒神山遺跡 4 号住居址……252
第30図　荒神山遺跡 5 号住居址……253
第31図　荒神山遺跡 6 号住居址……254
第32図　荒神山遺跡 7 号・8 号住居址……255

第33図　荒神山遺跡７号・８号住居址……256
第34図　荒神山遺跡８号・９号・10号・23号・63号・64号住居址……257
第35図　荒神山遺址10号・11号・12号・15号・24号・34号住居址……258
第36図　荒神山遺跡12号・13号・46号住居址……259
第37図　荒神山遺跡13号・14号・15号住居址……260
第38図　荒神山遺跡16号住居址……261
第39図　荒神山遺跡17号・18号住居址……262
第40図　荒神山遺跡18号・19号・20号・21号住居址……263
第41図　荒神山遺跡22号・23号・24号住居址……264
第42図　荒神山遺跡25号・27号・30号住居址……265
第43図　荒神山遺跡31号住居址……266
第44図　荒神山遺跡31号・32号住居址……267
第45図　荒神山遺跡33号住居址……268
第46図　荒神山遺跡33号・34号・35号・36号住居址……269
第47図　荒神山遺跡35号・37号・38号・39号住居址……270
第48図　荒神山遺跡40号・41号住居址……271
第49図　荒神山遺跡41号・42号住居址……272
第50図　荒神山遺跡42号・45号・47号・48号住居址……273
第51図　荒神山遺跡48号住居址……274
第52図　荒神山遺跡49号・50号・53号・55号住居址……275
第53図　荒神山遺跡55号・62号・64号住居址・中世建築址……276
第54図　荒神山遺跡中世建築址……277
第55図　荒神山遺跡中世建築址・溝・配石……278
第56図　発掘調査スナップ　1……279
第57図　発掘調査スナップ　2……280

Ⅰ 調 査 状 況

1．調査にいたるまで

1）中央道関係の経過

ア 整備計画とその経過

昭和32年4月、高度経済成長政策の一つとして「国土開発縦貫自動車道建設法」が公布され、その中の一つに中央自動車道予定路線も発表された。その後、諏訪回り案に改正され、本線は西宮線、岡谷から分岐し長野へ通ずるものを長野線と呼んでいる。昭和41年7月に五縦貫道整備計画が決定し、その後、道路整備施行命令が日本道路公団に出されている。中央自動車道西宮線は、小牧・東京間やく360km、そのうち長野県内は、岐阜県中津川市から恵那山トンネルで伊那盆地に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ケ岳山麓を通って山梨県に至る間、やく122kmとなっている。

昭和41年に、日本道路公団名古屋支社は飯田市に飯田工事事務所を設置し、その後の進展に伴い恵那山トンネル東工事事務所、伊那市・諏訪市にも工事事務所が設けられた。長野県でもこれに呼応して、県庁内に長野県中央道建設対策本部が組織され、企画部に中央道課が、その出先機関として中央道事務所が、飯田・伊那・諏訪3市に置かれた。このような現地体制の整備につれて、ルート発表・立入測量・設計協議・巾杭設置そして用地買収へと業務は段階的に進むのではあるが、現実は遅々として進まず、年月を費やしていたが、昭和45年頃から用地買収も進展し、それに伴って全線がいくつもの工区に分けられて本線工事が発注されている。昭和42年3月恵那山トンネル補助トンネル工事が始まり、昭和44年11月には恵那山トンネル本線トンネル工事に着手し、昭和45年には阿智工区から本線工事に入っている。昭和47年後半になると埋蔵文化財発掘調査の終るのを追い駆けるように、飯田・高森・松川・飯島・駒ケ根工区には大形機械が導入されて整地作業がなされ、長期間人手をかけて掘りあげた遺跡が、短時日のうちに姿を消している。ここで問題になることは、日本道路公団から施工業者への工事仕様書の中に、調査予定の埋蔵文化財包蔵地が記載されていないことがあって、工事によって発掘調査前の遺跡が破壊されそうになった例のあったことなど今後の保存事業について、きめのこまかい対策の必要性を痛感している。

イ 埋蔵文化財の対策とその経過

縦貫道計画が発表された昭和41年頃、開発が全国的に広まりだして、各地で文化財保護についての問題が取りあげられていた。文化財保護委員会（現文化庁）では、開発機関との間でその保護についての調整を計っていた頃であったので、日本道路公団との間で、昭和42年9月に「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」を取交した。それより先、昭和41年には、中央自動

車道関係県文化財主管課協議会を開催し、文化財の取扱いについて打合せている。県教育委員会では、昭和42年に入って関係市町村連絡協議会を、飯田・伊那・諏訪３地区で開きその対策を打合せる。さらに、昭和42年国庫補助事業として、中央自動車道用地内とその周辺の遺跡分布調査を実施し、下伊那地区147遺跡、上伊那地区 112遺跡、諏訪地区90遺跡計 349遺跡を確認する。その後ルート発表に伴い補足調査を実施し、中央道用地内には、下伊那地区で63遺跡（含斜坑広場）、上伊那地区83遺跡、諏訪地区44遺跡の計 190遺跡の存在を知る。分布調査では埋蔵文化財を除く文化財についても調査しているが、その取扱いについては「覚書」に触れられていないこともあって、関係市町村教育委員会にその交渉が任せられている。「覚書」にもとづいて、埋蔵文化財包蔵地（以下「遺跡」という。）の取扱いについては、その下交渉及び発掘調査は各県教育委員会が当ることになっており、文化庁の指導もあって、長野県が中心となり愛知・岐阜・山梨の４県で「中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会」を持ち、この会には日本道路公団関係者も加って、昭和42、43、44年に開催されたが、管轄公団支社の業務進展がまちまちであり、各県の取り組み方も一様でないため、充分な連絡調整もできないうちに、愛知・山梨・岐阜県の順で、路線内の遺跡発掘調査が開始されていった。

遺跡の取扱いについては、「覚書」の中で、Ａ・路線計画からはずすもの、Ｂ・路線計画の中に入れるが保護するもの、Ｃ・路線計画の中に入れ、事前に発掘調査をし記録して保存するものの３区分されている。それに基づいて、中央自動車道地内遺跡についても、Ａ・Ｂ・Ｃの３区分されていたが、路線決定の後では、その変更が容易でなく、結局 190遺跡すべてＣとなった。この最終決定は、県教育委員会の意見聴取に基づいて文化庁でなされる。これらの遺跡の発掘調査は、日本道路公団が費用負担して、県教育委員会と契約して実施するように「覚書」できめられている。しかし、県教育委員会では、直営の発掘調査体制を組織することが困難であるとの立場から、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、その中に遺跡調査団をおいて業務を遂行することにし、そこへ指導主事を調査主任として出向させることにした。

この調査体制が確立する前の昭和45年３月に、飯田市上飯田地区の２遺跡（さつみ・古屋垣外）の発掘調査が行なわれた。この調査は、年度末も迫っているため県教育委員会が受託することは困難なためと、試み的な意味もあって、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、同調査会が受託して実施した。暫定的な措置であったが、長野県下最初の中央道用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査である。

同年４月から、本格的な発掘調査体制確立のために、県教育委員会社会教育課（後に文化課に独立）では、担当指導主事を２名増員し、４名とする。一方では、各地区の関係市町村教育委員会との打合せ会を持ち、日本道路公団名古屋支社との協議も具体化し、６月と７月の現地協議によって昭和45年度の調査地区も決定した。そこで、７月には「長野県中央道遺跡調査会」を整備充実した。

昭和45年度は、８月に下伊那郡阿智村地内７遺跡（調査費 179万円）、９月に飯田地内その１地区10遺跡（調査費1590万円）の発掘調査委託契約を相次いで結び、９月２日には、下伊那郡阿智村川畑遺跡において、長野県下中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査の鍬入式を挙行している。翌９月３日から２班編成の調査団によって発掘調査を開始している。10月に上伊那郡宮田村地内その１地区６遺跡（調査費 500万円）の発掘調査委託契約を結び、昭和46年３月45年度の業務を完了した。

昭和46年度は、４月に、上伊那郡飯島町内その１地区（調査費1224万円）、８月に下伊那郡高森町内その１地区（調査費3120万円）、９月に下伊那郡阿智村圃原斜坑広場その１杉の木平遺跡（調査費 730万円）

の発掘調査委託契約が結ばれ、上伊那郡中田切川橋梁工事先工に伴う上伊那郡飯島町内その２、久根平遺跡（調査費 123万円）の発掘調査委託契約も、９月に結ばれ、昭和47年３月この年度の業務を完了している。

昭和47年度になると、用地買収業務も進展し、上下伊那郡ともに各工区ごと工事発注が続出する年とあって、県教育委員会においては、担当指導主事３名を増員し、４班の調査団を組織した。飯田・下伊那地区に２班、伊那・上伊那地区に２班づつ常駐させて発掘調査に当ることにした。４月に、飯田市内その２地区17遺跡（調査費2367.5万円）、上伊那郡飯島町内その３地区８遺跡（調査費 677.1万円）、伊那市西春近地区18遺跡（調査費3361.6万円）が、７月には、下伊那郡高森町内その２地区５遺跡（調査費2002万円）、下伊那郡松川町内12遺跡（調査費1864.3万円）、駒ケ根市内８遺跡（調査費 563.5万円）が、８月には、上伊那郡南箕輪村内その１地区５遺跡（調査費1051.5万円）のほか、飯田市山本地籍石子原遺跡において、多量に発見された石器群は、中期ローム層包含の旧石器としてその重要性が認められ、第２次調査の協議が成立し、飯田市その３（調査費410万円）として発掘調査委託契約が結ばれている。さらに10月に入って、上伊那郡南箕輪村内その２地区４遺跡（調査費514.4万円）と辰野町内その１地区３遺跡（調査費497.2万円）等10地区81遺跡、調査面積 132,180㎡の広範囲にわたって発掘調査委託契約が結ばれている。

昭和48年度は、調査地区の主体が上伊那郡から諏訪郡に移動するため、長野県中央道遺跡調査団本部を辰野町に移設し、伊那市に作業場をおいてこの業務に当ることにした。調査地域も３郡にわたって広範囲にわたるため、県教育委員会においては、担当指導主事をさらに１名増員し調査に万全を期している。４月に、伊那市内その２地区４遺跡（調査費2121.6万円）、箕輪町地内３遺跡（調査費1214.4万円）、辰野町内その２地区14遺跡（調査費3480万円）、富士見町内その１地区５遺跡（調査費1588.8万円）の発掘調査委託契約が結ばれ、伊那市から富士見町にわたる広域内の調査が開始されている。７月においては、下伊那郡阿智村斜坑広場その２杉の木平遺跡（調査費 989万円）、諏訪市内その１地区７遺跡（調査費1588.8万円）、10月には、諏訪市内その２地区２遺跡（調査費 888万円）の発掘調査委託契約が結ばれている。

ウ　中央道関係の経過一覧

この経過一覧は、前項のものと重複するものも多いが、10数年にわたる道路建設の過程と発掘調査の経過は、将来活用されることがあろうと思われるので記載した。中央自動車道建設法案とそれに基づく機関県の対策機関設置、ルート発表の経過、文化財保護のための諸協議・諸会合、発掘調査に関する経過については全部報録した。用地買収契約および工事着工については、最初のものだけ記載した。

32・４・16　国土開発縦貫自動車道建設法の公布（施行同年７月31日）

〃・７・25　中央自動車道予定路線を定める法律制定

39・６・16　国土開発縦貫自動車道建設法の一部改正により、中央自動車道予定路線は諏訪回りに改正

41・７・25　五縦貫道整備計画決定、道路整備施行命令が日本道路公団に出る

〃・８・12　長野県中央自動車道対策協議会開催

〃・８・12　恵那山トンネル立入測量開始

〃・９・22　中央自動車道長野県建設協力会開催

〃・９・30　下伊那郡阿智村の一部、飯田市、鼎町（14km）ルート発表

41・11・16　長野県中央道建設対策本部設置、県企画部に中央道課および飯田中央道事務所設置
〃・12・15　中央自動車道関係県文化財主管課協議会開催（東京）
42・2・14　中央道建設用地内文化財の取扱いについて関係市町村連絡協議会開催（下伊那地区）
〃・2・21　〃　〃　（上伊那地区）
〃・2・22　〃　〃　（諏訪地区）
〃・3・23　恵那山トンネル（4.7km）ルート発表
〃・3・28　下伊那郡上郷町・飯田市座光寺・高森町・松川町（14.5km）ルート発表
〃・3・31　恵那山トンネル補助トンネル工事着工
〃・4・15　文化庁で中央自動車道用地内の埋蔵文化財保護対策打合せ会開催
〃・5・4　伊那中央道事務所設置
〃・5・30　中央道建設地域内埋蔵文化財分布調査費国庫補助申請
〃・6・13　中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第1回　長野県庁）
〃・8・1～12　下伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査　調査遺跡数　147（団長　大沢和夫）
〃・11・1　上伊那郡飯島町・駒ヶ根市・宮田村・伊那市・南箕輪村（36.6km）ルート発表
〃・11・10～26　上伊那地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査　調査遺跡数　112（団長　林　茂樹）
〃・11・27～12・15　諏訪地区中央道建設用地内埋蔵文化財緊急分布調査　調査遺跡数　90（団長　藤森栄一）
〃・12・16　下伊那郡阿智村殿島・智里地区（5.65km）ルート発表
43・2・27　公団名古屋支社と中央道埋蔵文化財の保護措置について協議（43年の発掘調査について）
〃・3・5・公団本社と保護措置について協議（43年の発掘調査について）
〃・7・23　下伊那郡阿智村智里殿島地区、県内のトップをきって用地買収契約成立
〃・10・12　中央自動車道関係県文化財対策連絡協議会開催（第2回　松本市）
44・3・18　〃　〃　（第3回　岐阜市）
〃・7・15　公団名古屋支社と協議　（飯田市上飯田地区の発掘調査について）
〃・8・12　上伊那郡辰野町（8km）ルート発表
〃・10・3　飯田市上飯田地区3遺跡について公団名古屋支社から意見聴取（県教委回答　12・11）
〃・10・8　中央道関係市町村教委連絡協議会開催（飯田市）
〃・10・20　飯田市上飯田地区3遺跡について公団名古屋支社との現地協議
〃・10・31　中央道関係市町村教委連絡協議会開催（伊那市）
〃・11・11　恵那山トンネル本線トンネル工事起工式
〃・12・11　公団名古屋支社と協議　（45年の発掘調査について）
45・1・29　諏訪郡富士見町（11.2km）ルート発表
〃・2・2　公団名古屋支社と協議　（上飯田の3遺跡と45年度の発掘調査について）
45・2・23　岡谷市と諏訪市の一部（14.7km）ルート発表

45・2・24　下伊那郡阿智村殿島地区において、県下最初の平地地区本線工事開始

〃・2・27　長野県中央道遺跡調査会結成（飯田市上飯田地区の調査に限る）

〃・3・2　公団名古屋支社と長野県中央道遺跡調査会との間で、上飯田地区２遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額　80万円）

〃・3・5　飯田市上飯田地区さつみ・古屋垣外遺跡の発掘調査開始（～３・21）（団長　大沢和夫）

〃・3・31　飯田市上飯田さつみ・古屋垣外遺跡発掘調査報告書刊行

〃・4・22　公団名古屋支社と協議　（45年度の発掘調査について）

〃・4・23　上・下伊那地区中央道用地内遺跡視察（県教育委員会担当者）

〃・5・8　下伊那郡阿智村～松川町間（57遺跡）埋蔵文代財包蔵地についての意見聴取（県教育委員会回答　5・26）

〃・5・14　中央自動車道西の宮線起工式（於多治見市）

〃・6・1　公団名古屋支社と協議　（発掘調査上の問題について）

〃・6・9　下伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（飯田市）

〃・6・11～12　下伊那郡阿智村７遺跡・飯田市（上飯田・座光寺）７遺跡・鼎町２遺跡・上郷町１遺跡について、公団名古屋支社と現地協議

〃・6　昭和45年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査予算案を６月県会に提出

〃・6・29　上伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（伊那市）

〃・6・30　諏訪地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（諏訪市）

〃・7・8　上伊那郡宮田村地内７遺跡について、公団名古屋支社と現地協議（～10日）

〃・7・22　長野県中央道遺跡調査会結成準備会・第１回理事会開催（飯田市）

〃・8・17　下伊那郡阿智村地内７遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額　179万円）

〃・9・1　飯田地区その１地内10遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額　1590万円）

〃・9・2　中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査鍬入式挙行（下伊那郡阿智村小野川川畑遺跡）

〃・9・3　下伊那郡阿智村地内７遺跡（川畑・北垣外・橋場・矢平Ⅱ・杉ヶ洞・宮の脇・坊塚）発掘調査開始（終了９・22）

〃・9・3　岡谷市内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～５日）

〃・9・5　伊沢県教育長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察

〃・9・7　諏訪郡富士見町内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～10日）

〃・9・8　田中県教育次長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察

〃・9・22　飯田地区その１地内10遺跡（山岸・天伯B・権現堂前・さつみ・赤坂・宮崎A・宮崎B・大門原B・大門原D・大久保）の発掘調査開始（終了46・１・18）

〃・10・19　上伊那郡宮田村地内６遺跡（高河原・釈迦堂・宮の沢・元宮神社東・天伯古墳・円通寺）の発掘調査開始（終了45・12・18）

〃・10・28　公団名古屋支社総務部長・田中県教育次長、権現堂前・大門原B遺跡視察

〃・10・29　公団名古屋支社副支社長、大門原B・大門原D遺跡視察

〃・11・16　長野県中央道遺跡調査会第２回理事会開催（飯田市座光寺大門原B・宮崎A、上伊那郡宮田

村天伯古墳視察、理事会宮田村福祉センター）

45・11・17　公団名古屋支社との協議　（昭和46年度発掘調査地区の選定について）

〃　11・28　下伊那郡阿智村地内発掘調査報告会開催（下伊那郡阿智村智里東小学校）

〃・12・5　上伊那郡宮田村地内発掘調査報告会開催（上伊那郡宮田村福祉センター）

〃・12・25　茅野市・原村・諏訪市の一部（12.4km）ルート発表、これをもって県内やく122kmのルート発表完了

46・1・12　伊沢県教育長、下伊那郡鼎町山岸遺跡視察

〃・2・1　公団名古屋支社と協議　（昭和46年度の発掘調査地区について、飯田市山本・伊賀良地区用地内遺跡視察）

〃・2・2　下伊那郡高森町・松川町・上伊那郡飯島町地内遺跡について、公団名古屋支社と現地協議（昭和46年度発掘調査地区決定）

〃・2・28　上伊那郡宮田村地内中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・11　飯田地区その１発掘調査報告会開催(公団・各事務所・市町村教委に対して)

〃・3・15　飯田地区その１発掘調査報告会開催（一般公開）

〃・3・20　飯田地区その１中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・4・1　飯島町地内その1地区(七久保)7遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額　1224万円）

〃・4・12　飯島町地内その１地区（七久保）発掘調査団結団式挙行（飯島町役場）

〃・4・13　飯島町地内その１、７遺跡(鋳物師原・鳴尾天白・鳴尾・尾越・道満・北原東・小段遺跡）の発掘調査開始（終了46・７・３）

〃・4・26　長野県中央道遺跡調査会第３回理事会開催（伊那市上伊那郷土館）

〃・5・24　恵那山トンネル斜坑口および土捨場問題協議会、長野県庁企画部長室で開催（公団名古屋支社、恵那山トンネル東工事事務所、阿智村教育委員会、同建設課、長野県中央道課、飯田中央道事務所、下伊那地方事務所商工建築課、飯田教育事務所、長野県教育委員会）

〃・6・7　下伊那郡阿智村園原杉の木平・児の宮遺跡緊急分布調査（～８）

〃・6・16　公団本社・同名古屋支社と協議（下伊那郡阿智村園原恵那山トンネル斜坑口と土捨場予定地の保護措置について）

〃・7・1　公団名古屋支社から恵那山トンネル飯田方斜坑広場（杉の木平遺跡）埋蔵文化財について意見聴取

〃・7・15　飯島町地内その１発掘調査報告会開催（飯島町役場七久保支所）

〃・7・20　公団名古屋支社総務部長と県教育長の協議（恵那山トンネル斜坑土捨場問題について）

〃・8・1　下伊那郡高森町地内その１（10遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額 3120万円）

〃・8・6　下伊那郡高森町地内その１地区発掘調査団結式と打合せ会（高森町役場）

〃・8・10　下伊那郡高森町地内その１地区、10遺跡（弓矢・無縁堂・神堂垣外・鐘鋳原Ａ・瑠璃寺前・大島山東部・赤羽根・出原西部・出早神社附近・正木原Ｉ）発掘調査開始（９・14中断、1023再開、終了47・１・14）

〃・8・18　恵那山トンネル飯田方斜坑広場埋蔵文化財保護措置について県教委回答

46・8・30　公団名古屋支社と恵那山トンネル斜坑広場（杉の木平遺跡）の現地協議

〃・8・31　公団名古屋支社と上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）の現地協議

〃・9・4　伊沢長野県教育長、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡・高森町鐘鋳原遺跡視察

〃・9・10　下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査打合せ会（阿智村駒場公民館）

〃・9・13　下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額730万円

〃・9・14　赤尾長野県教育次長、下伊那郡高森町鐘鋳原遺跡視察

〃・9・16　下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査開始（終了11・1）

〃・9・17　上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）委託契約成立　（委託金額　123万円）

〃・9・20　上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）発掘調査開始（終了10・13）

〃・11・18　長野県議会社会文教委員会一行下伊那郡高森町瑠璃寺前遺跡視察

〃・11・19　長野県中央道遺跡調査会第4回理事会開催（高森町畜産センター）

47・1・25　飯田市山本・伊賀良12遺跡、下伊那郡鼎町1遺跡について公団名古屋支社と現地協議

〃・1・26　下伊那郡高森町地内4遺跡、松川町地内10遺跡、上伊那郡飯島町地内8遺跡、宮田村地内1遺跡、駒ヶ根市地内8遺跡について公団名古屋支社と現地協議

〃・1・27　伊那市西春近地内18遺跡について公団名古屋支社と現地協議

〃・2・29　上伊那郡飯島町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・2・29　上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　下伊那郡高森町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　下伊那郡阿智村斜坑広場その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・25　下伊那郡阿智村園原斜坑広場（杉の木平遺跡）発掘調査報告会開催（智里西診療所）

〃・3・26　下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（高森中学校）

〃・3・27　園原斜坑広場（杉の木平遺跡）、高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（一般公開）

〃・4・1　飯田市内その2地区（17遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額　2367.5万円）

〃・4・1　飯島町内その3地区（8遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額　677.1万円）

〃・4・1　伊那市西春近地区（18遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額　3361.6万円）

〃・4・3　飯田市内その2地区発掘調査打合せ会（飯田合同庁舎）

〃・4・10　飯田市内その2地区ほか下伊那地区発掘調査団結団式挙行（飯田合同庁舎）

〃・4・10　飯田市内その2地区、17遺跡（かぶき畑・柳田・山田・石子原・石子原古墳・ようじ原・上の平東部・寺山・六反田・滝沢井尻・小垣外・三遊淵・上の金谷・辻垣外・大東・酒屋前・大門原B）の発掘調査開始（終了48・2・7）

〃・4・24　上伊那地区発掘調査団結団式と発掘調査打合せ会（上伊那地方事務所会議室）

47・4・25　飯島町内その3地区、8遺跡（うどん坂南・うどん坂Ⅱ・うどん坂Ⅰ・山溝・八幡林・石上神社前・炭申平・太田沢春日平）の発掘調査開始（終了47・6・28）

〃・4・25　伊那市西春近地区・18遺跡（和手・富士山下・富士塚・菖蒲沢・南丘A・南丘B・名廻南・名廻東古墳・名廻・白沢原・山寺垣外・細ヶ谷B・百駄刈・北丘B・大境・山の根・城平・

城平上）の発掘調査開始。（終了47・12・14）

47・4・26　長野県中央道遺跡調査会第５回理事会開催。（伊那市上伊那図書館）

〃・6・20　公団名古屋支社と、上伊那地区橋梁工事に伴う調査遺跡追加と、飯田市山本石子原遺跡第２次調査について協議（県庁教育次長室）

〃・6・22　公団名古屋支社と飯田市山本石子原遺跡第２次調査について現地協議。

〃・7・3　下伊那郡高森町内その２地区（５遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額2,002 万円）

〃・7・6　下伊那郡松川町内（12遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額 1,864.3万円）

〃・7・6　駒ケ根市内（８遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額 563.5万円）

〃・7・7　駒ケ根市内８遺跡（大徳原南B・大徳原南A・大徳原北・横前南・中山原・新田原・女体北・切石墓地）の発掘調査開始。（終了47・9・1）

〃・7・12　飯田市内その３（石子原遺跡第２次調査）の発掘調査委託契約成立。（委託金額 410万円）

〃・7・14　下伊那郡松川町内12遺跡の発掘調査打合せ会。（松川町福祉センター）

〃・7・24　下伊那郡高森町内その２地区５遺跡（神田裏・新田西裏・増野新切・増野川子石・鐘鋳原A）の発掘調査開始。（終了47・11・9）

〃・7・24　下伊那郡松川町内12遺跡（里見Ⅱ・里見Ⅴ・境の沢・中原Ⅰ・庚申原Ⅰ・庚申原Ⅱ・平林・やし原・片桐神社東・水上・丈源田Ⅲ・丈源田Ⅳ）の発掘調査開始。（終了47・11・11）

〃・8・15　公団名古屋支社と上伊那郡南箕輪村内９遺跡と辰野町内その１地区３遺跡について現地協議。

〃・8・17　飯田市内その３（石子原遺跡）発掘調査団結団式。（飯田教育事務所）

〃・8・17　飯田市内その３（石子原遺跡）の発掘調査開始。（終了47・9・30）

〃・8・21　上伊那郡南箕輪村内その１地区（５遺跡）の発掘調査委託契約成立。(委託金額1.051.5万円)

〃・9・1　上伊那郡南箕輪村内の発掘調査打合せ会開催。（南箕輪村公民館）

〃・9・4　上伊那郡南箕輪村内その１・その２地区９遺跡（南原・三本木原・曽利目・在家・大芝原・大芝東・南高根・北高根A・北高根B）の発掘調査開始。（終了47・12・9）

〃・10・9　上伊那郡南箕輪村内その２地区（４遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額514.4万円）

〃・10・9　上伊那郡辰野町内その１地区（３遺跡）の発掘調査委託契約成立。（委託金額 497.2万金）

〃・10・11　上伊那郡辰野町内その１地区の発掘調査団結団式と発掘調査打合せ会。（辰野町公民館）

〃・10・12　上伊那郡辰野町内その１地区３遺跡（五反田・越道・平出山の神）の発掘調査開始。（終了47・11・30）

〃・11・15　長野県中央道遺跡調査会第６回理事会開催。（伊那市上伊那図書館）

〃・12・4　公団名古屋支社と昭和48年度調査体制・調査地域について協議。（公団伊那工事事務所）

〃・12・5　公団名古屋支社と伊那市内その２地区（４遺跡）・箕輪町内（３遺跡）・辰野町内その２地区)(14遺跡・諏訪郡富士見町内（７遺跡）について現地協議。

〃・12・15～・16　上伊那地区中央道埋蔵文化財包蔵地出土の遺物展示会開催。（上伊那地方事務所大会議室・一般公開）

〃・12・16　上伊那郡辰野町内その１地区（３遺跡）の発掘調査報告会開催。（辰野町公民館）

48・2・28　上伊那郡辰野町内その1地区（3遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・16　上伊那郡飯島町内その3地区発掘調査報告会開催　（飯島町公民館）

〃・3・18　飯田市内その2・その3、高森町内その2、松川町内発掘調査報告会開催　（下伊那教育参考館）

〃・3・19　上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区発掘調査報告会開催　（南箕輪村公民館）

〃・3・20　飯田市内その2地区（17遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　飯田市内その3（石子原遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　下伊那郡高森町その2地区（5遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　下伊那郡松川町内（12遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　上伊那郡飯島町内その3地区（8遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　駒ケ根市内（8遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　伊那市西春近地区（18遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・20　上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区（9遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行

〃・3・24　駒ケ根市内発掘調査報告会開催　（駒ケ根市役所）

〃・3・26　伊那市西春近地区発掘調査報告書開催　（伊那市福祉センター）

〃・4・9　昭和48年度長野県中央道遺跡調査団結団式挙行　（上伊那地方事務所会議室）

〃・4・12　伊那市内その2地区（4遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額2121.6万円）

〃・4・12　上伊那郡箕輪町内（3遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額1214.4万円）

〃・4・12　上伊那郡辰野町内その2地区（14遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額3480万円）

〃・4・12　諏訪郡富士見町内その1地区（5遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額1065.6万円）

〃・4・16　伊那市内その2地区、5遺跡（赤坂・ますみが丘・城楽・月見松・山本田代）発掘調査開始（終了48・7・31）

〃・4・17　上伊那郡箕輪町内・諏訪郡富士見町内その1地区発掘調査打合せ会　（各教育委員会）

〃・4・18　上伊那郡箕輪町内、3遺跡（南大原・堂地・中道）発掘調査開始　（終了48・8・31）

〃・4・18　諏訪郡富士見町内その1地区、5遺跡（手洗沢・長尾根・足場・母沢・甲六）発掘調査開始（終了48・7・11）

〃・4・18　上伊那郡辰野町内その2地区発掘調査打合せ会　（辰野町教育委員会）

〃・4・19　上伊那郡辰野町内その2地区、14遺跡（手長神社旧跡・若宮・荒神社矢沢・樋口内城館址・大久保尻・神送・公家塚・牧垣外・大窪・堂ケ入・藤の森・沢頭・沢入口・上の原）発掘調査開始　（終了48・10・23）

〃・4・23　長野県中央道遺跡調査会第7回理事会開催　（伊那市上伊那図書館）

〃・5・22　長野県議会社会文教委員一行、上伊那郡箕輪町中道遺跡視察

〃・6・4～6　公団名古屋建設局と、下伊那郡阿智村斜坑広場と、諏訪市内・富士見町内の発掘調査予定地域について現地協議　（県庁教育次長室、各公団工事事務所）

〃・6・20　長野県教育委員一行、上伊那郡箕輪町中道遺跡視察

48・6・27　長野県中央道遺跡調査会一志顧問、上伊那郡箕輪町中道遺跡・諏訪市大熊城址現地指導
〃・7・2　下伊那郡阿智村斜坑広場その2（杉の木平）の発掘調査委託契約の成立（委託金額989万円）
〃・7・2　諏訪市内その1地区（7遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額1588.8万円）
〃・7・20　諏訪市内用地問題について公団・諏訪市・被買収者組合委員と協議　（諏訪市役所）
〃・7・21　下伊那郡阿智村斜坑広場その2地区の発掘調査団結成　（飯田教育事務所）
〃・7・23　下伊那郡阿智村斜坑広場その2地区の発掘調査打合せ会　（阿智村教育委員会）
〃・7・25　下伊那郡阿智村斜坑広場その2（杉の木平遺跡）発掘調査開始　（終了48・10・20）
〃・7・26　諏訪市内その1・その2地区発掘調査打合せ会　（諏訪市役所）
〃・7・30　諏訪市内その1地区、7遺跡（清水・小丸山古墳・金山北・城山・大熊城址・荒神山・大熊道上）、同その2地区2遺跡（平林・本城）発掘調査開始　（終了48・12・14）
〃・8・8　長野県小泉教育次長、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡視察
〃・10・10　諏訪市内その2地区（2遺跡）の発掘調査委託契約成立　（委託金額 888万円）
〃・10・10・11　長野県酒井出納次長、辰野町樋口内城館址・諏訪市大熊城址・阿智村杉の木平遺跡視察
〃・10・14　日本道路公団本社理事・名古屋建設局長等、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡視察
〃・10・16　恵那山トンネル斜坑貫通式に伴い、公団名古屋建設局長等下伊那郡阿智村杉の木遺跡視察
〃・11・18　長野県中央道遺跡調査会一志顧問、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡現地指導
〃・11・1　長野県中央道遺跡調査会第8回理事会開催。辰野町樋口内城館址遺跡視察　（辰野町）
〃・11・13　昭和49年度諏訪地域用地買収状況について打合せ会　（公団諏訪工事事務所・県高速道課・県諏訪中央道事務所・伊那教育事務所・同諏訪支所・県文化課、於諏訪合同庁舎）
〃・11・21　公団名古屋建設局と昭和49年度調査体制と発掘調査地区について協議　（諏訪工事事務所）

2）　発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施行前に、公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で協議することになっている。その結果、記録保存と決定され、発掘調査が必要となった場合、公団は、県教育委員会に委託して実施されることになっている。そのため、県教育委員会は、公団と現地協議などの事務接衝のうえ、調査遺跡の発掘面積、調査費、調査期間、調査方法等が決められる。その後、公団から調査依頼、県教育委員会から調査受託の文書の往来があって、つぎのような発掘調査委託契約が締結されている。

ア　発掘調査委託契約書

1　委託事務の名称　　中央道埋蔵文化財発掘調査　（諏訪市内その１）、（諏訪市内その２）
2　委　託　期　間　　昭和48年７月２日～昭和49年３月20日、昭和48年10月５日～昭和49年３月20日
3　委　託　金　額　　¥15,888,000円也、¥ 8,880,000円也
4　委託金支払場所　　日本道路公団名古屋建設局

日本道路公団（以下「甲」という。）は、長野県教育委員会（以下「乙」という。）に頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第１条　甲は、別紙発掘調査計画書に基づき、頭書の委託金額の範囲内で頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第２条　甲又は乙の都合により委託期間を延長し若しくは発掘調査計画を変更し、又は発掘調査を中止するときは、事前に協議して書面により定めるものとする。

第３条　乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し甲に提出しなければならない。

第４条　乙は、第３条の資金使用計画書に基づき頭書の発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

２　甲は、前項の請求のあったときは頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して請求書を受理した日から15日以内に所要の額を支払うものとする。

第５条　甲は、必要と認めるときは頭書の発掘調査の処理状況について調査し又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

２　乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。

３　乙は、発掘調査の実施にあたり作業個所に作業表示旗をかかげ発掘調査関係者には、腕章等を着用させなければならない。

４　乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書（B５版20部）を作成し委託期間内に甲に提出しなければならない。

５　乙は、費用精算調書を作成し、委託期間満了後１箇月以内に甲に提出しなければならない。

第６条　この契約に基づく報告書、費用精算調書其の他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指定しない限り、乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第７条　乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等はすべて甲に帰属するものとする。

第８条　発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については、乙が代行するものとする。

第９条　乙の責に帰する事由により頭書の期間内に第５条第４項に規定する報告書を提出しないときは甲は遅滞損害金として期限満了日の翌日から起算し提出当日までの遅滞日数に応じ頭書の委託金額に対して年8.25％の割合で計算した金額を徴収することができる。

2　甲の責に帰する事由により第４条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には、乙は、甲に対して遅滞日数に応じて年8.25%の割合で遅延利息の支払いを請求することができる。

第10条　乙の責に帰すべき事由により甲が契約を解除したときは、乙は頭書の委託金額の10分の１を違約金として甲の定める期限までに甲に納付しなければならない。

第11条　この契約を変更する必要が生じたときは、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書２通を作成し、当事者記名の上、各自１通を保有す　。

昭和48年７月２日、昭和48年10月５日

委　託　者　　名古屋市中区栄４丁目１番１号（中日ビル11～12階）
日本道路公団名古屋建設局
局　長　　平　野　和　男

受　託　者　　長野県教育委員会
教育長　　小　松　孝　志

イ　長野県中央道遺跡調査会

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当ることになっている。

昭和45年７月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年２回の理事会が開かれている。年度頭初の理事会において、発掘調査の受託を決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。同調査会規約・昭和48年度役員・斜坑広場その２地区調査団組織はつぎのとおりである。

(ｱ)　長野県中央道遺跡調査会規約

第１条　この調査会は、長野県教育委員会の委託を受けて、中央道建設及び関連工事用地内遺跡の発掘調査を実施し、その記録の作成、発掘された文化財の保存活用方法を研究することを目的とする。

（名称）

第２条　この調査会は長野県中央道遺跡調査会（以下「調査会」という。）と称する。

（組織）

第３条　調査会は、次に掲げる役員をもって組織する。

(1)　会長　１名　　(2)　理事　若干名　　(3)　監事　２名

事務所）

第４条　調査会の事務所は、会長が別に定める事務所内に置く。

（会長及び理事）

第５条　会長は、長野県教育委員会教育長をもってあてる。

2　理事は次に掲げるもののうちから会長の委嘱した者をもってあてる。

(1)　学識経験者　　(2)　関係学会の役員

(3)　関係市町村教育委員会連絡協議会の代表者　　(4)　関係市町村教育委員会の教育長

(5)　関係行政機関の職員

（会長及び理事の職務）

第６条　会長は調査会の業務を総理し、調査会を代表する。

2　理事は、理事会を構成し、次の事項を審議する。

(1)　調査会の運営に関すること。　　(2)　発掘調査の受託に関すること。

(3)　規約の改正に関すること。　　(4)　その他必要な事項

3　会長に事故があるときは、理事のうちから会長が指名した者が、その職務を代行する。

（理事会の招集）

第７条　理事会は必要に応じて会長が招集する。

2　理事会は、理事の半数以上の出席がなければ開くことができない。

3　前項の場合、当該議事について書面をもってあらかじめ意志表示し、または他の理事を代理人として表決を委任した役員は出席したものとみなす。

4　理事会の議事は、出席理事の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

（顧問）

第８条　調査会に顧問若干名を置くことができる。

2　顧問は理事会の推薦により会長が委嘱する。

3　顧問は会長の諮問に応ずるとともに、理事会に出席し調査会の業務について助言する。

（監事）

第９条　監事は、理事会の推薦により会長が委嘱する。

2　監事は、調査会の会計を監査する。

（役員の任期）

第10条　役員の任期は一年とする。ただしその職にあるゆえをもって委嘱されたものの任期は、当該職の在職期間とする。

（幹事）

第11条　調査会に幹事を置く。

2　幹事は、県教育委員会事務局職員のうちから会長が委嘱する。

3　幹事は、会長の命を受け調査会の事務を処理する。

（調査団）

第12条　調査会に調査団を置く。

2　調査団の組織及び運営について別に定める。

（事務の管理執行の規定）

第13条　調査会の事務の管理及び執行にあたっては、この規約ならびに理事会の決定する規定に従って行なう。

（経費）

第14条　調査会の事業に要する経費は、長野県教育委員会の委託料をもってあてる。

（会計の区分）

第15条　調査会の会計年度は、毎年４月１日に始まり、翌年３月31日に終わる。

２　調査会の会計は、長野県教育委員会と締結した委託契約に区分して行なう。

（出納及び現金の保管）

第16条　調査会の出納は、会長が行なう。

２　調査会に属する現金は、会長が理事会の議を経て定める銀行または、その他の金融機関にこれを預けなければならない。

（決算）

第17条　会長は、会計年度終了後１ヶ月以内に収支決算書を作成し、監事の監査を経て理事会の認定を経なければならない。

（財務に関する事項）

第18条　この規約に特別の定めがあるものを除くほか、調査会の財務に関しては、長野県の「財務規則」の例による。

（委任）

第19条　調査会の業務の運営に必要な事項は、この規約に定めるもの及び理事会で議決するものを除くほか会長がこれを定める。

（付則）

この規約は、昭和45年７月22日から施行する。

イ）昭和48年度長野県中央道遺跡調査会役員名簿（昭和48年11月現在）

顧問	一志　茂樹	（県文化財専門委員）		
会長	小松　孝志	（県　教　育　長）		
理事	金井喜久一郎	（県文化財専門委員）	米山　一政	（県文化財専門委員）
	藤沢　宗平	（県文化財専門委員）	藤森　栄一	（長野県考古学会会長）
	原　　嘉藤	（信濃史学会理事）	小泉兵次郎	（県教育次長）
	飯島　丁巳	（県 文 化 課 長）	馬場　昌人	（飯田教育事務所長）
	瀬尾　忠幸	（伊那教育事務所長）	羽生　保吉	（下伊那地区教委協議会長）
	坂井　喜夫	（上伊那地区教委協議会長）	小松　　穣	（諏訪地区教育協議会長）
	小林　　彰	（阿智村教育長）	松沢　一美	（伊那市教育長）
	河手　貞則	（箕輪町教育長）	熊谷　大一	（辰野町教育長）
	小林　繁治	（富士見町教育長）	中村　文武	（諏訪市教育長）
	倉田　利久	（下伊那教育会長）	木下　　衛	（上伊那教育会長）
	藤森　純一	（諏訪教育会長）	林　　茂樹	（長藤小学校長）

監事	岡沢　伸朝	（県文化課長補佐）		浦野　孝之	（伊那市社会教育課長）
幹事	金井　汲次	（県文化課文化財係長）		泉　勇一郎	（県文化課文化係長）
	西沢　清	（県文化課主査）		浅川　欽一	（県文化課主査）
	矢島　太郎	（県文化課主任）		堀内規矩雄	（県文化課主事）
	佐藤　文武	（飯田教育事務所総務課長）		佐藤　陸	（飯田教育事務所主任）
	下平　久雄	（飯田教育事務所主事）		矢野　公一	（伊那教育事務所総務課長）
	松沢　成海	（伊那教育事務所社会教育課長）		久保田秀明	（伊那教育事務所主任）
	麻生　弘明	（伊那教育事務所主任）		鈴木　長治	（伊那教育事務所主事）
	今村　善興	（県文化課指導主事）		桐原　健	（県文化課指導主事）
	山田　瑞穂	（　〃　）		伴　信夫	（　〃　）
	宮沢　恒之	（　〃　）		丸山徹一郎	（　〃　）
	岡田　正彦	（　〃　）			

ウ）　長野県中央道遺跡調査会　諏訪市内その1・その2地区調査団

調査団長	大沢和夫				
調査主任	岡田正彦	伴　信夫	桐原　健	今村善興（総括）	
調査員	唐木孝雄	竹内三千夫	徳永忠雄	平出一治	
	細川光貞	松永満夫	木下平八郎	郷道哲章	
	酒井幸則	竹村和紀	田畑辰雄	長沼英光	
	中村龍雄	三浦孝一	山岡栄子		
調査補助員	高桑俊雄	堀　知哉			

エ）　発掘調査前の遺跡の状況と面積

遺跡名	現況	遺跡の状況	全体面積	用地内面積	最低調査予定面積
清水	畑	台地上の遺跡で、縄文時代中期の遺物包含地である。中世陶器片も出土している。	m² 19,000	m² 2,925	m² 580
小丸山古墳	畑	支脚の先端台地を利用した6世紀代築造と想定される独立古墳である。	4,065	3,190	2,500
平林	畑	テラス状の台地上にあり、縄文時代中期の遺物包含地である。	32,000	10,050	2,000
本城	畑	平林遺跡に面した台地上に位置し、縄文時代中期の集落址の存在が予想される。	22,200	8,525	1,700
金山北	畑	野明沢の南に面した台地上にあり、縄文時代中期の遺物包含地である。	5,000	775	150

遺跡名	現況	遺跡の状況	全体面積	用地内面積	発掘調査予定面積
城山	畑	大熊城址の西側に隣接した遺跡で、縄文時代の遺物包含地である。	10,500	5,375	1,070
大熊城址	畑	トイシ沢とオタイ沢の間に張り出したテラス上の城址である。	3,500	2,125	420
荒神山	畑	大熊城址の南東側に面した傾斜地で、縄文時代の遺物包含地である。	7,000	5,375	1,070
大熊道上	畑	オタイ沢をはさんで荒神山遺跡に面する台地上にある縄文時代中期の包含地である。	8,000	4,175	830

3） 発掘調査開始までの準備

諏訪市内の発掘調査は、当初、箕輪町内の調査終了後、7月上旬頃より開始する予定であったが、遺構が続出し調査が延長されたため、富士見町区その1地区の調査が終了した班が先ず入ることになり、7月30日を発掘開始日と決め、その前を準備期間にあてた。

6月5日　公団名古屋建設局と諏訪市内の発掘調査予定地域について現地協議を行なう。

7月18日　今村・伴・岡田で調査予定地域内の現況下見をし、上物処理状況をみて当初入るべき遺跡を決める。「諏訪市内その1地区」の発掘調査日程及び方法について立案する。

7月20日　諏訪市内用地問題について、道路公団・市教育委員会・市企画課・被買収者組合役員・調査団との間で協議する。（於　諏訪市役所）

7月23日　調査に必要な資材・文房具等の点検をし、不足品を調達する。

7月26日「諏訪市内その1・その2地区」の発掘調査打合せ会をもつ、参加者は県教育委員会・伊那教育事務所・諏訪市教育委員会・調査団である。（於　諏訪市役所）
夜、地元被買収者組合役員・道路公団・調査団との間で、発掘調査についての詳細なる打合せ会をする。　（於　大熊公民館）

7月27日　富士見町内その1地区で使用した資材を、長尾根遺跡より城山遺跡に運搬する。飲料水・駐車場等の依頼をし、後、市教委に赴き調査協力員名簿を貰うと共に諸連絡をする。午後、今後の発掘調査について、調査団内部での打合せ会をもつ。

7月30日「諏訪市内その1地区」の発掘調査を開始する。

2　調査の実施と経過

1）　調査の開始と経過

昭和48年7月30日、今にも降りだしそうな空模様の下、ここ諏訪市大熊の城山遺跡の一角に全員集合する。予定していた人員よりはるかに少なく、精密工業都市諏訪市の人手不足を痛感させる最初の出発であった。先ず、調査開始にあたっての集会がもたれ、唐木調査員の進行により、県教育委員会桐原文化課指導主事・諏訪市教育委員会山田社会教育課長・中央道遺跡調査団主任岡田の挨拶のあと、調査員諸氏を紹介。続いて今後の発掘調査日程及び調査方法について説明した後、テント設営に入り、諏訪市の調査を開始したのである。

諏訪市の中央道用地内遺跡数は14ケ所、うち本年度調査遺跡数は9ケ所である。用地買収等土地問題の関係から契約を2回にわけ、その1地区7ケ所（清水・小丸山古墳・金山北・城山・大熊城址・荒神山・大熊道上）を先ず調査し、引続き、その2地区2ケ所（平林・本城）に入る予定であったが、出発当初の人手不足がしばらく続き、それに加えて各遺跡における遺構の検出も多く、計画通りの実施は不可能であった。9月3日から箕輪町区の発掘調査を終了した伴調査主任以下6人の有力メンバーが合流し、また、作業員も増加したため、調査はやっと軌道に乗りはじめたのであった。この間、大熊城址を中心とした4遺跡では中世の山城に関する遺構・遺物が検出発見され、山城調査の基本的方法論の確立の必要性を痛感したのである。その中にあって、調査会顧問の一志茂樹先生、理事金井寄久一郎先生、米山一政先生の指導を得、また、国学院大学城郭研究会の本沢・高橋両君の協力を得たことは未知の調査だけに幸いであった。9月中旬から本年度の調査で最も期待された小丸山古墳の発掘が行なわれ、桐原調査主任を中心に全員で調査にあたったが、すでに徹底的なる破壊撹乱にあっていたため、その遺構すら明確にすることはできなかった。本古墳調査を見学にこられた調査会理事故藤森栄一先生の元気なお姿に接したのは、調査も終りに近い9月27日のことであった。これ以来現場で先生に拝眉する機会は二度となかったのである。慎んで哀悼の意を表するものである。荒神山遺跡では、既成概念にある地形上からみたる遺跡の立地がくずれ、凹地における遺構の埋存状態が問題になったのである。ちなみに、表土からローム層まで3mあり、その中間に中世の居館址・住居址・土壙をはじめとし、平安時代・弥生時代・縄文時代の各住居址・土壙が相次いで検出されている。諏訪市その2地区2遺跡の調査も並行して行なわれ、本城遺跡では約200m²の範囲に17軒の住居址が重復して検出された。しかも用地内に広範囲に遺構が分布していることが推測されたため、来年度二次調査をすることで今回は打切ったのである。荒神山遺跡の調査も、冬将軍の到来による厳寒と降雪に苦しめられ、調査止むなきの事情から12月14日をもって終了したのであった。

調査団は引続いて、先ず、「富士見町内その1地区」及び「箕輪町内地区」の整理執筆を終え、2月より本格的な整理作業に入り、7ケ月を費し報告書作成に全力を傾注したのである。

以上が本調査の大略であるが、遺跡調査の経過については次表を参照されたい。

諏訪市　その１・その２地区発掘調査経過表

遺跡名＼月	7	8	9	10	11	12	1～3	主な遺構	主な遺物
清水	発掘諸準備		29 1				遺物整理・図面作成・原稿執筆	なし	縄文前期土器片 土師器片
小丸山古墳			17 1					玄室・羨道 周溝	小札・鉄鏃 玉類
平林					2			なし	縄文中期土器片 縄文中期石器
本城					2 28			縄文中期竪穴住居址 15 〃 土壙 35 平安時代住居址 2 中世配石址 1	縄文早期・前期・中期土器 縄文中期石器 土師器片・須恵器片・灰釉陶器片 青磁片
金山北					1			なし	なし
城山		30	22	25				縄文中期竪穴住居址 1 平安時代住居址 1 土壙 2 中世建築址 1 井戸址 1 近世建築址 1 現代建築跡水路址 3	縄文前期・中期・後期土器片 弥生中期土器片 土師器・須恵器・灰釉陶器 つばがき・梵字陶板かわらけ 陶磁器(2)・鉄鏃
大熊城址			3 22	2 19				郭・空濠・土橋 柵列・礎址 土壙墓	内耳ナベ片・大日如来像片・ 古銭
荒神山				2		14		縄文時代竪穴住居址 46 弥生時代竪穴住居址 3 平安時代住居址 8 中世住居址 9 土壙 174—縄文・弥生・中世 建築址1 礎址3 土器集中区1	縄文前期・中期土器・石器 弥生中期土器 土師器・灰釉陶器・かわらけ 青磁片・天目茶碗片・内耳ナベ片 古銭・鉄鏃・石臼
大熊道上				20	8			平安時代竪穴住居址 3 中世住居址 2 中世建築址 1	縄文中期土器片 土師器・須恵器・灰釉陶器 内耳ナベ片・古瀬戸片・古銭

2）　発掘調査協力者

諏訪市内の調査ではあったが、人手不足のため近隣市町村からの応援を得、７月30日から12月14日までの発掘作業を事故一つおこすことなく無事に完了した。遺跡が点在していたことと長期間の調査のため、全期間を通じて出て戴けなかった方が大半である。しかし、仕事に対する熱意と学問的探究心の旺盛さが、意義深い調査を遂行し、多大の成果をあげる結果となった。その１地区・その２地区の発掘調査協力者は次のとおりである。　　（五十音順）

赤沼きぬ子　有賀二三子　有賀　仲人　伊藤　倭男　伊藤美智子　伊藤　清香　岩波やよい
岡田　篤子　荻原小夜子　小川　久輝　小坂　真夕　小沢　タイ　小野塚信雄　笠原　重幸
笠原　勘治　笠原　一美　金子　哲治　金子　修吉　小泉いそ子　小泉ふじ子　小泉　松平
甲賀　勝雄　小島　操　小林扶左枝　小林　環　小林　上　小松　大三　小松　貞男
清水　史夫　下田なつ実　白鳥　誠　白石　明子　鈴木御恵子　関　ツルギ　関　雅一
関　喜子　武井スミエ　高林　均　高林　重水　田中　隆彦　田中　文六　田中　惇子
中島　きみ　永井　和子　長峰　ウタ　花岡　恭子　原　富子　原　お志ん　原　ヨシ子
原　トメ　平出　林子　平出　芳郎　平林　邦造　平林　中子　平林　和一　平林　忠利
平林　定義　平林　光昭　平林　久木　平林きし子　平林　清人　平林登喜子　平林　和子
藤森　栄一　藤森　清久　藤森ミツ子　藤森平右衛門　藤森　てる　藤森　泉　藤森　幸子
藤森　良枝　藤森　繁雄　古川斗美夫　古畑　順子　増沢　光義　松見　こと　丸茂　幸武
宮坂　庄平　宮坂みさ子　宮沢　隆義　宮下　勝子　宮本　康雄　宮本　敏男　向山　利見
毛利　長子　毛利　光政　両角　忠幸　森山　久夫　矢ケ崎弥太郎　矢崎つな子　矢島　槙郎
矢島　健二　矢島　宏雄　矢島さだ子　柳沢　典夫　柳沢なかえ　矢花　民次　矢花　保朗
山崎みつ子　山本　佳子　新村　利雄　新村　和好　新村とよせ　新保　典子　西沢光之輔
西沢喜美子　保坂　四郎　細田　敦子　丸山　優子
赤羽しげえ　赤羽ちかえ　赤羽みやの　飯野　竹山　板倉たせ子　牛山和歌子　大槻　浅男
大森　春子　小笠原礼次　小沢みつる　春日かよ子　金子まつ代　桐原喜代子　桑沢　初子
参沢　敦彦　佐久間きくえ　城倉けさみ　竹淵うけ子　竹淵ちか子　茅野かつえ　戸田　幸女
中谷あき子　中谷美代子　仁科　うめ　根橋　倉子　松沢つね子　丸山　幸子　丸山　雅子
宮沢さだえ　宮沢　善広　両角　康雄　森野　勇　山内志賀子　山崎とくえ　山崎もも子
山口千代子　若尾さと子

3）　現地指導・視察者

日本道路公団	諏訪工事事務所所長・同副所長・同庶務課長・同工事課係
県教委事務局	県文化課課長補佐・同文化係長・同文化財係長・同文化財担当指導主事・伊那教育事務所所長・同総務課長・同文化財担当主事・調査会伊那事務所事務員
諏訪市当局	教育委員長・教育長・社会教育課長・社会教育係長・文化財担当係・市文化財専門審議委員
研　究　者	志茂樹・故藤森栄一・金井喜久一郎・米山一政・原嘉藤・向山雅重・佐藤甚信・友野良一・樋口昇一・岩野見司・河西清光・武藤雄六・宮坂光昭・神村透・本田秀明・佐藤攻・矢口忠良・会田進・国学院大学城郭研究会
そ　の　他	湖南公民館・農科高校地歴班・諏訪二葉高校地歴班・地元諏訪市住民の皆さん多数。

3　発掘調査の方法

中央道用地内の遺跡発掘調査は，工事により破壊される遺跡を事前に記録保存することを目的とした緊急発掘である。そのため、本調査は用地内にどのような時期の遺構・遺物があるかをさぐり、それを報告書としてまとめることが目的となる。当然のことながら発掘調査は中央道用地内に限定される。

遺跡の範囲・時期は分布調査により一応確認されている。その遺跡の中において、中央道がいかなる部分を通過するかによって4区分し、遺跡名の略記号の末尾にそれを付した。A－遺跡の頂部が中央道にかかるもの、B－遺跡の中央部を中央道が横切るもの、C－遺跡の先端部に中央道がかかるもの、D－遺跡の全面が中央道にかかるものの4区分がそれである。用地内の遺跡は全面にグリットを設定するのを原則として、小さな遺跡や、やむを得ない遺跡は適当にトレンチを入れることにした。グリットの設定は、2m間隔の基準方眼を設定し、中央道の幅員方向に01～99の2桁の数字を用い、名古屋方面から東京方面に向って立ったとき、左から右へ01～99と数える。但し、中央道のセンターライン（20mおきにセンター杭が打たれている）は50とする。この幅員方向に直交する長軸方向にA～Yの25字のアルファベットを用い、センター杭のうちの遺跡内で最も名古屋よりを基点として東京方面へA・B・C……とする。A～Yの25字で50mをおさえ、その範囲を地区とし、A地区…B地区…C地区……と表示する。これによって、25地区1250mがとれる。だからそれぞれのグリット地点は「SHJC　AC55」の如く表示できる。これは、Sが諏訪地区、HJが本城遺跡、Cが遺跡の先端部に中央道がかかる、AがA地区、C55がそのグリット地点をさし、本城遺跡のA地区C55地点を意味することになる。このようにグリットを設定してから、適宜それを発掘し、遺構が確認されるとその周辺を拡張する方針をとった。

調査中の記録としては、「調査日誌」「発掘グリット図」「遺構カード」「住居址調査カード」等を使用した。また、発掘調査及びその結果について調査協力者に理解して貰うべく、毎日作業終了後ミィーティングの時間をとり、さらに、調査員の努力によって「調査通報」を発刊して、相互の理解を高めた。

なお、こまかな調査方法については、「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査指針」という小冊子にまとめ、それをもとにして調査を進めている。

（岡　田）

Ⅱ 諏訪市の概況

1 諏訪市の環境

「諏訪市は、長野県のほぼ中央に位置し、諏訪湖の東南一帯に接して南北に長く、中央部は平坦で諏訪平の大部分を占めている。東北は霧ケ峯一帯の諸山となって起伏し、小県郡に達している。南は上伊那と境し、西は諏訪湖をへだてて岡谷市を望み、西北は下諏訪町、東南は茅野市と隣接している。

平坦地の東方丘陵に接する湖畔一帯は多量の温泉が湧出し、平坦地の中央は上川、宮川の諸川が南から貫入して諏訪湖に注ぎ、流域は地味肥沃で農耕に適している。湖畔水田中からは天然ガスが湧出し、湖周一帯では漁業も盛んである。東に広がる丘陵は霧ケ峯、蓼の海があり、天与の景勝に恵まれて八ケ岳中信高原国定公園に指定され、四季を通じて観光客が絶えず、東方山地からは建築用材として需要の多い鉄平石（輝石安山岩）を産出している。」と、市政30周年記念諏訪市勢要覧に書かれている。面積やく 104.8㎢ 東西やく14.7㎞、南北19.5㎞の地域で人口は昭和45年現在48,125人を数える

市内の行政区域は上諏訪・豊田・四賀・中洲・湖南の各地区に区分されている。諏訪市のおいたちについては、「諏訪市勢要覧」に詳しいが概略はつぎのとおりである。諏訪は、洲羽・洲輪・須波・諏方などと書かれた時代もある。その昔、諏訪明神（建御名方命）が出雲から入御して以来永くその子孫によって治められたと伝えられ、鎌倉時代には弓馬にすぐれた諏訪武士の名も高く、戦国時代においては、領主諏訪頼忠が武田信玄に謀殺され、その後40年にわたって武田氏の支配下にあった。その後織田氏に領せられたが、信長の死後諏訪氏の領に復したが、やがて諏訪氏は上総国に移封され、豊臣秀吉の臣日根野織部正高吉により統治された。高吉は諏訪湖中の小島を選び、浮城として名も高く、天然の要塞を誇る高島城を築いている。昭和45年に復興された高島城がそれである。その後（慶長年間）諏訪氏が再び旧領に帰り、明治維新まで続いている。

明治２年版籍奉還により高島県となり、明治４年筑摩県に編入された。明治７年城下の下桑原・小和田・大和の３ケ村を併せて上諏訪村とし、明治24年に町制を施行している。その後、昭和16年８月には豊田・四賀の両村と合併して諏訪市が誕生し、さらに昭和30年４月には、隣接村中洲・湖南両村を合併して現在に至っている。

中央自動車道は、諏訪湖の西側岡谷市小坂地区から諏訪市有賀・北真志野・南真志野・大熊地区の山麓を横切り、神宮寺手前から中洲の平坦地を通り、茅野市へ抜けているので、諏訪湖と湖西・湖南地域の地形について概観することにする。

諏訪盆地は北東の霧ケ峯・八ケ岳火山群と、西南の守屋・入笠山地（赤石山脈の北端）にはさまれた紡錘形の盆地で、その東翼の塩尻峠付近から岡谷市長地山地・下諏訪町高木・諏訪市大和・茅野市永明寺山

に続く断層線と、西翼の塩尻峠付近から岡谷市間下・花岡・小坂を経て諏訪市有賀、真志野の山地帯から守屋・入笠山地の東斜面・釜無山脈へと続く断層線の二つの構造線で載られてその中間が陥没し、両側の山地が隆起してできた地溝帯で形成されたものである。これは糸魚川から安曇平―松本盆地―諏訪盆地―甲府盆地―富士川―駿河湾へと続く中央大地溝帯(フォッサ・マグナ)の一部である。この大地溝帯は大断層運動で生じたもので、その西部の飛騨山脈や赤石山脈の東面には大断層崖が存在している。これは幾度かの断層運動によってその前面の盆地との間に所によっては2000m にも及ぶ比高を生じている。諏訪盆地はこの大地溝帯の中央に位置し、この盆地の北西低地に水をたたえたものが諏訪湖である。

諏訪湖は現在東西に長径5.55km、南北に短径2.83kmの長方形状の湖面を示している。古くから諏訪の住民と深い関係を持ち、豊富な魚類や天然氷を供給し、又重要な水上交通路ともなっている。その反面対岸を結ぶ陸路には大きな障害にもなっている。湖面の大きさは時と共に変り、その水位も常に変化している。周囲の山地から押し出す土砂や諸河川から流出する堆積物で次第に表面積は縮少の傾向を示しているが、諏訪の受水区域の51.2㎢に降った水の約60%内外は湖に流入するとあって、降水量の多少によって、その水位が大きく左右されることにもなっている。

諏訪湖と、その東南に続く低湿地に東面する湖西・湖南地域は、比高300～500m の断層崖によって湖又は低湿地に接している。この断層崖は、釜無山断層崖と呼ばれるもので、塩尻峠東麓から諏訪湖西岸・茅野市を経て富士見町狭隘南部に至る延長やく30kmに及ぶ断層崖である。この断層は逆断層でできたもので、崖面には山脚を切る凹地と、山脚上の小丘とが列状に並んでいる。断層崖の基部には小さい沢から崩れ落ちた岩砂が堆積していくつもの崖錐が作られ、そこの崖錐面に列状に集落が形成されている。峠の沢による有賀、中沢川による北真志野、野明沢川・砥沢川による南真志野、小田井川・唐沢川・権現沢川による大熊の集落はその好例である。湖岸から東にかけて盆地内低湿平坦地も上流に行けばいくほど古い集落が集村状に形成されていて。小川・文出・田辺・下金子・中金子・中洲等である。

有賀峠・真志野峠・杖突峠を越えて伊那地方を結ぶ陸路も古くから開かれ、とくに有賀峠越えの諏訪辰野線は、屈曲の多い峠路ではあるが、辰野へ抜ける最短コースとして自動車の通行量は多い。これらの峠路は伊那側にゆるやかで、諏訪側には極端に急な片側峠の形態を見るにつけ、諏訪側の断層崖の急峻さをうかがい知ることができよう。これらの山脚から北に伸びる丘陵性の台地が並列し、殆んどがその先端部が急崖となって湖盆低地に接している。この丘陵上にのぼると、諏訪湖と湖盆低地が一望に入り、東方には八ケ岳とその広大な裾野が、北に霧ケ峯の連峰が雄姿を見せ一幅の絵である。眼下に広ける低湿地は、沖積平地で、現在なお諏訪の穀倉地帯であるが、近年工場、諸庁舎、住宅の進出がめざましく、大きな変遷の気配を示している。諏訪地方の寒気は厳しいが、湖西・湖南地域は一般に西山地域と呼ばれ、日照時間が短く、俗に「半日村」の異称さえ聞く所である。

中央自動車道は断層崖の先端、山脚から伸びる丘陵やその両翼に形成される崖錐状の小扇状地や小河川によって深く浸食された沢を横切りながら、西から東へ通過することになっているが、急傾斜地でしかも基盤の不安定さもあって難工が予想される所とも言われている。

参考文献

上伊那郡誌編纂会編　「上伊那誌　自然編」
岡谷市史編纂会編　「岡谷史」　上巻

2　諏訪湖西・湖南地区の遺跡

諏訪地方は、全国的に見ても遺跡の濃厚な所として知られている。とくに著名な遺跡は東方八ケ岳山麓に広く分布している。諏訪市の場合は、地形的に見て湖盆平地の外郭縁、地溝帯両翼の断層崖下の小丘陵や崖錐状の小扇状地に立地し、列状に分布している。湖盆地帯の沖積地にも数カ所の遺跡が分布しているに過ぎないが、近年建築工事等において3m以上も深い所から遺物の発見が報告されていることから、今後新発見の遺跡もあろうかと予想されている。

湖西・湖南地区は湖北地区に比較すると過去における考古学調査の少ない地域で、中央道通過に伴い年々調査が進んできている。しかし、有賀峠や真志野峠其の他の峠の開発は古く、また諏訪神社上社にまつわる遺跡の多い所である。峠について文献記載のものとしては、中世の頃諏訪神社上社の大御立座神事において、神使が外県の地へ巡行に行く折に用いられており、古代については確たる証拠資料はないが有賀峠頂上の石塚、東麓有賀地区の石製模造品や有孔玉器等注目すべきものもあり、古道通過地の解明もほど遠くはなさそうであろう。諏訪湖盆周辺には中世の山城の存在が多く、30余ある。地形的に見て当然とはいいながら標高900m内外の丘陵上に直線的に分布しているのも興味深い。諏訪市湖南地域では、有賀城跡・真志野城跡・大熊城跡(27)・新城城跡(32)・武居城跡(41)等が並び、今回の発掘調査（中央道用地内と諏訪市による）によって、大熊城跡の諸郭の解明等は貴重な資料となろう。古くから諏訪神氏は諏訪大社との結びつきが強く、領主は幼時にして大祝として神に仕え、年長じて諏訪の棟梁となって政治を司るしくみという。しかし、年と共に幾多の変遷はあったものの、時には棟梁家の上社大祝が神宮寺神殿辺に、その両翼の守りとして安国寺千沢城・神宮寺片山城・大熊城を、向いの固めを上原城（46）・桑原城（55）とした如く関連的な城址群であろう。その周辺に館址も存在し中世遺物の出土地も多い。

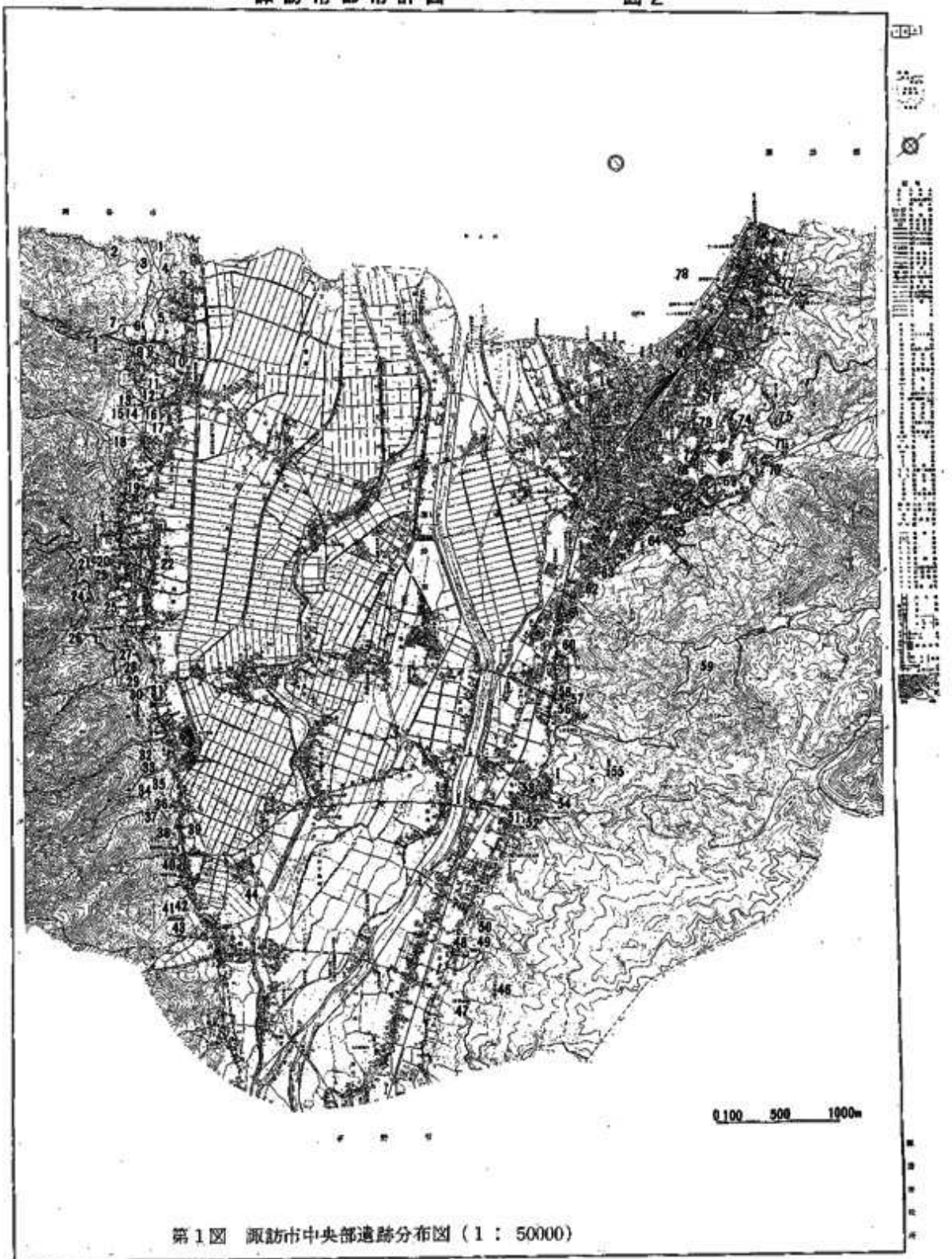
古墳の築造を見ると、有賀地区に久保塚（7）・清水古墳（12）・北真志野地区に小丸山古墳（13）のほか北山の神（15）・有賀塚屋（17）・山姥塚（19）、南真志野地区に真弓塚（22）、大熊地区に双子塚（31）・片山（34）・フネ（36）等が山脚の小丘陵や崖下の崖錐面に立地し、その分布密度は少なくない。

弥生時代の遺跡は総体的には少ないが、今回の中央道用地内の発掘調査による本城（18）・荒神山遺跡（29）から中・後期の相当量の土器片と何基かの住居址の発見を見ているので、既発見の遺跡（3・25・28・43）と共に今後に期待されるであろう。

縄文時代の遺跡は最も多く、その分布も濃厚である。今回の発掘調査によって確認された本城・荒神山遺跡においては、早期から晩期にいたる各期各様の遺物の発見と、極めて複雑な遺構の重複が確認されたように所によって大複合遺跡の埋蔵も予想される地域もあろう。

後載の遺跡一覧表と、数カ所の発掘調査の結果から見て、主たる遺跡は各期の遺物の出土から見て複合的遺跡の存在が多く、諏訪神社上社にまつわる特殊遺跡や諏訪神氏や他の豪族に関連する中世遺構の存在される地域と考えられよう。（諏訪市の遺跡分布図と遺跡一覧表について諏訪考古学研究所中村龍雄・宮坂光昭氏のご教示により作成・作図したものである。）

（今　村）



第1図　諏訪市中央部遺跡分布図（1：50000）

第1表　諏訪市中央部遺跡一覧表　(No. 1)

番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代						弥生時代			古墳・平安時代				中世	近世	備考
				創	早	前	中	後	晩	前	中	後	土師	須恵	灰釉	其ノ他			
①	神送り山	豊田有賀					○						○						
2	鋳上げ	〃　〃			○	○													
3	甑原	〃　〃					○					○	○						
④	鐘鋳場	〃　〃						○					○	○			○		
⑤	千鹿頭社	〃　〃					○	○					○	○					
⑥	十二の后	〃　〃				○	○						○	○	○		○		
7	久保塚（廊下久保古墳）	〃　〃														○			
⑧	女帝垣外	〃　〃					○						○						
9	女帝塚	〃　〃														○			
10	中道祭祀	〃　〃														○			
⑪	清水	〃　〃					○												
12	清水古墳	〃　〃																	
⑬	小丸山古墳	〃　〃												○	○	○			
⑭	平林	〃　〃					○												
15	北山ノ神古墳	湖南北真志野																	
16	大安寺	〃　〃					○	○	○										
17	有賀塚屋古墳	〃　〃																	
⑱	木城	〃　〃			○	○	○				○		○	○	○		○		
19	山姥塚古墳	〃　〃																	
20	御屋敷	〃南真志野				○	○												
㉑	金山北	〃　〃					○												
22	真弓塚古墳	〃　〃																	
23	南沢	〃　〃																	
24	金山窯址	〃　〃																○	
25	福松	〃　〃									○		○						
26	（無名）	〃　大熊			○														
㉗	大熊城址	〃											○	○	○		○	○	
㉘	城山	〃				○	○	○			○		○	○	○	○	○		
㉙	荒神山	〃				○	○	○			○		○	○	○		○		
㉚	大熊道上	〃					○						○	○	○		○		

第1表　諏訪市中央部遺跡一覧表　(No.2)

番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代						弥生時代			古墳・平安時代				中世	近世	備考
				創	早	前	中	後	晩	前	中	後	土師	須恵	灰釉	其ノ他			
31	双子塚古墳	湖南大熊																	
32	新城々址	〃〃																	
33	新城祭祀	〃〃																	
34	片山古墳	〃〃					○						○						
35	湯ノ上	〃〃					○						○	○					
36	フネ古墳	〃〃														○			
37	入込畑	〃〃				○						○	○						
38	上社々城	〃神宮寺																	
39	上社敷地	〃〃															○		
40	神宮寺址	〃〃											○	○	○		○		
41	武居城々址	〃〃																	
42	武居城	〃〃				○													
43	仲畑	〃〃									○		○	○	○				
44	大祝邸	〃〃																	
45	金子城々址	〃〃																	
46	上原城々址	四賀上原																	
47	板垣城々址	〃〃																	
48	鉄甲塚古墳	〃〃																	
49	上原矢穴古墳群	〃〃																	
50	神ノ矢穴古墳群（火穴塚）	〃〃																	
51	山崎通り・金山通り	〃桑原					○				○	○	○	○					
52	まわり場古墳・金山古墳・角道古墳(群)	〃〃																	
53	べっさわ（御社宮司社）	〃〃										○							
54	四ッ塚古墳（群）	〃〃																	
55	桑原城々址	〃〃																	
56	みそぎ平	〃普門寺									○		○	○			○		
57	新塚古墳	〃〃																	
58	有員の墓	〃〃																	
59	古岩窪	〃〃										○		○					
60	武津通り	〃武津									○	○							

第1表　諏訪市中央部遺跡一覧表　　(No.3)

番号	遺跡名	所在地	先土器	縄文時代						弥生時代			古墳・平安時代				中世	近世	備考
				創	早	前	中	後	晩	前	中	後	土師	須恵	灰釉	其ノ他			
61	細久保通り	四賀細久保										○							
62	津島神社	上諏訪					○												
63	秋葉神社	〃										○							
64	コダッショ	〃																	
65	大石古墳	〃																	
66	地蔵寺下	〃					○						○		○				
67	北沢	〃					○						○	○					
68	綿の芝古墳	〃											○	○					
69	穴場百姓地	〃					○												
70	山ノ神古墳	〃																	
71	カアゴ石	〃				○													
72	茶臼山	立石町	○																
73	上ノ平	〃	○																
74	新井	〃	○				○												
75	丘石	〃	○																
76	温泉寺	湯ノ脇	○																
77	わたなべ沢	千本木					○												
78	曽根	(湖底)		○															
79	高島城	高島町					○											○	
80	中浜町										○								
81	片羽町		○			○						○							

Ⅲ 調 査 遺 跡

1 清 水 遺 跡

1） 位 置

遺跡は諏訪市豊田有賀小字清水3498番地を中心とした地域にある（図2、写1の1）。諏訪湖の南方有賀峠の入口にあたる江音寺から東方約 300m の傾斜地にあり、山寄り50m 地点から急峻な山になっている。東方には馬鈴・直刀・小札など多量の遺物が出土した小丸山古墳が横たわり、西方の江音寺を中心とした一帯は女帝垣外遺跡と呼称され、縄文時代中期から中世にかけての土器片が表採され、本遺跡と関連深いことが推定されている。北方には清水遺跡の中心部があり、その地目は宅地と桑畑で、標高 750～815 m である。分布調査の際、縄文時代中期土器片、平安時代の土錘片、中世の内耳破片などを表採し注目されたが、中央道は本遺跡の山寄り、遺跡の頂部を東西に通過する。

調査はセンター杭 112＋00を基点ＡＡとし、東西ＡＨ～ＢＴまで、それに直交する南北に50～59までグリットを設定し調査を実施した。遺跡は南西から北東へ緩傾斜しているため、地山までの上層は南西が薄く北西が厚い。その層序は耕作土、黒色土、ローム層となっており、第２層は礫混在層であると同時に遺物包含層でもある。第１層から第３層直上までの厚さは40～70cmで、黒色土層は20～50cmの厚さで堆積している。

2） 遺 物

調査の結果、遺構は確認されず遺物の出土量もわずかであった。本遺跡の遺物包含層は礫混在黒色土であり、その遺物は土器と土製品である。土器は縄文時代前期土器片２点、中期土器片３点、平安時代須恵器甕形土器片２点、中世内耳破片３点でいずれも磨滅している。土製品は平安時代の土錘破片２点と時代不詳の土錘１点（図２）がある。

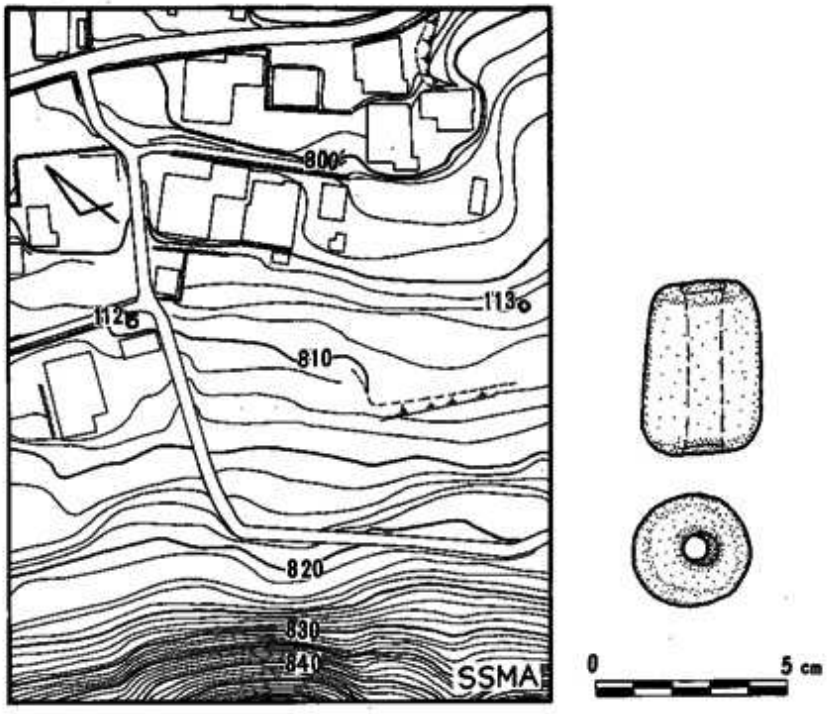
3） まとめ

本遺跡は中央道用地外宅地周辺部にその中心があり、本調査では遺構の検出はなく、遺物も少量であった。調査前には、その東方に小丸山古墳があり、西方には女帝垣外遺跡、十二の后遺跡があることから、

一連の遺跡群として、場合によっては住居址等の検出も可能かと思われたが、山に近接し日当りが悪く、やや凹地である等の地形的悪条件から期待に反した結果になった。しかし、遺物の出土量はわずかであったが、比較的平安時代から中世にかけての遺物が散布する地籍だけに、清水遺跡及び女帝垣外遺跡は諏訪地方の古代史及び中世史を考察する上で注意すべき内容を保持していると言えよう。特に女帝垣外遺跡はその地名や伝承等から推して、今後の調査に期待が寄せられる遺跡である。

ともかく、中央道は遺跡の中心をはずれた頂部を通過するだけに遺跡破壊の非難をこの地籍においてはまぬがれたことになる。この周辺を開発する場合においては、用地外諏訪湖寄りを特に注意する必要があろう。

（三　浦）



第２図　清水遺跡地形図（１：2000）及び遺物（１：２）

2　小　丸　山　古　墳

1）　位　置

小丸山古墳は諏訪湖盆西を画する山麓に営なまれた円墳である（図3、写2の5～7）。標高は墳丘頂部で 822m 、諏訪湖面との比高差63m を計る。微地形についていうならば、有賀峠から下り来たってくると右側に江音寺があり、それとほぼ同じ位置で南へ 400m 離れた舌状台地の先端に立地している。古墳は円墳ではあるが単独墳で、古墳からの眺望はすこぶる良い。すなわち、眼下に諏訪湖が見え、それに接して諏訪市湖南の水田が広がる。その中には一条に文出の部落がのび、さらに山裾には上諏訪から桑原にかけての集落が遠くかすんで見えている。

2）　過去に於ける調査

本墳は、規模の大きい単独墳であるため早くから村人により崇敬の対象にされてきた。江戸時代後半より平林氏が墳丘上に八幡の御堂を築造し守護神とした（写2の3・4）。明治維新の折、ある人が墳丘を開墾し石材を採掘した。平林氏は大変驚ろき直ちに開墾地を購入した。大正8年3月、八幡社の石垣修理のための石材を墳丘に求めた。この際、多量の遺物が出土し、その一部は東京国立博物館に収蔵され、他は平林氏が保管して現在に到っている。その後、大正15年11月再び社殿修築の際、大石の下より鈴3個・直刀二振を見出した。これも現在平林氏が保管している。

このように、注目されていた古墳であるだけに関係報文も多く、代表的なものとして鳥居龍蔵氏の『諏訪史第一巻』、両角守一氏の「小丸山古墳出土の鈴について」（『信濃考古学会誌』1の3）、藤森栄一氏の「考古学上よりみたる古墳墓立地の観方」（『考古学』10の1）がある。

3）　古墳の築造

前述したように、本墳は山麓舌状台地の先端に営なまれている。その台地方向はおよそN20Eで、北から仰ぐと高さ15m 、真西からでも4 m はある。墳丘の大きさは、舌状台地上の築造であるだけに主軸径60 m 、短軸径35m を計る。もっとも人工をもって築いた規模はそれよりはるかに小さいが、後述する周溝が台地下方をめぐっていることから、築造者は台地全体を墳墓として設計したことが推察される（図4の1）。実際に土を盛ったのは現在八幡社の境内を示す石垣の範囲内であっただろう。その規模は15×20m ほどである。平林氏の祀った八幡社は南西隅にあり、その横に樹齢65年のサワラと20年のケヤキが植えられてお

り、また数個の盗掘孔・炭焼き穴が石室近くに穿たれていた。

内部主体が横穴式石室であることは大正8年の発掘ですでに判明していた。また、石室の規模の大きいことも八幡社の磐石や石垣中の平石から推定されていた。さらに、天井石がすでに欠失していることも想像できた。発掘の結果はまさにそのとおりで、向かって左側の側壁石は1個もなく、右側のそれも最下の一列が4個あるのみであった。石の抜かれた痕跡をたどって主軸方向N56°W、長さ8m、巾2mの無袖式であることだけがわかった。石室の床面はロームであり、敷石などの痕跡はなかった。羨門前方部について精査したが、この部分は舌状台地東側の急斜面で後世の攪乱が著しく、特別な痕跡を見出すことはなかった（図4の2、写3の8～12）。周溝は多分に形式的なものではあったが一条めぐっていた。墳丘外に放射状にトレンチを設けたところ、舌状台地下西方の畑地内に巾1.2m、深さ0.6mのレンズ状の落ち込みを確認した（図5）。南側は舌状台地の基部で平坦面が続いていたが、ここにも巾3.9m、深さ0.7mの溝を検出した。東側については不明である。溝中には黒土が堆積していただけで特別な遺物などの発見はなかった。

墳丘は台地上に若干の土盛をしただけのものであるが、北に一本トレンチを設定した結果によると少なくとも1ケ所に段が造られていた。それ以外に葺石や埴輪列は見られなかった。

4） 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物についてのみふれ、既出遺物については説明を省略する。出土遺物は玉類・鉄鏃・馬具・挂甲小札及び土器片がある。いずれも破壊攪乱された土層内から出土したもので、その出土地点が原位置とは言いがたいものばかりである。

ア 玉類 （図7の10～18、写4の13）

ガラス白玉7点がある。色はコバルトブルーで、大きなものは径1.2cmである（11～17）。10は銀製のみかん玉で、縦に丸味をもった八稜が走っている。径1cmを計る。18は砂岩質の小片で、一端に両えぐりの小孔が穿たれている。

イ 鉄鏃 （図6の1～9、写4の14）

いずれも尖頭鏃で、中子部分には木質部が付着しているのもみられる。

ウ 馬具 （図7の1～6、写4の15）

1～3は辻金具破片で、1は径1.8cmの円孔外に4つの枝を出している。それぞれの枝には3つの鋲が打たれ、それに接して巾2mmのベルトがしめられている。2も同様の破片でこの枝を押える巾狭いベルト

には銀箔が施こされている。5は東京国立博物館収蔵品例から辻金具に付随するものであろう。3はカーブの状態から異質のものと思われるが、便宜上併せて図示しておく。4は鉸具破片で4つの鋲が打たれ裏面には有機質の錆着が見られる。

エ　挂甲小札　（図6の10～23、写4の16）

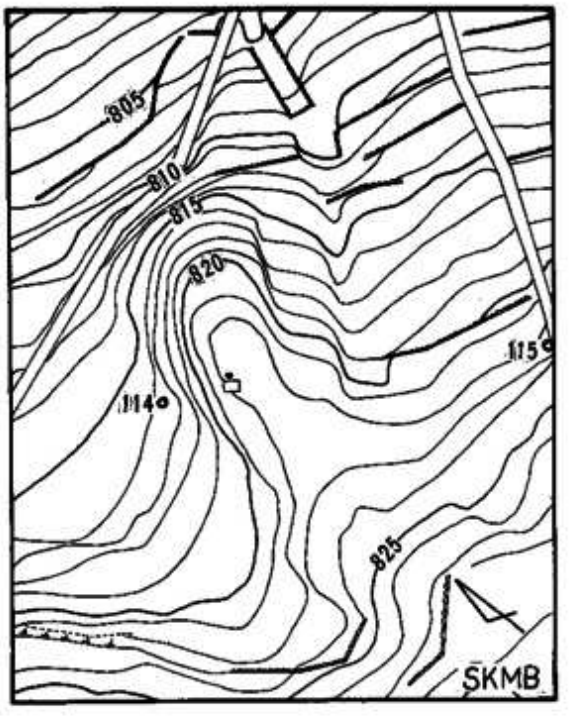
800点近くが発見されている。大正8年の発掘において鉄片約1貫目を箱に納め、再び石室内に埋納したとの記録があるが、そのとおりに688点が一括出土した。その外にも100点近くが発見された。小札は一端がわずかに丸い巾2.5cm、長さ8cm、厚さ3mm程度のもので、中辺両側に2孔ないし3孔、丸味を持つ先端両側に2孔づつ穿たれている。大部分は単片となっていたが、中には三重ねの状態をとるものがある。なお、23は巾4cmであるいは挂甲小札以外のものかも知れない。

オ　不明鉄製品片　（図7の7～9）

性格不明の鉄製品3片が出土している。

カ　土器　（図11の4～15）

マウンド内撹乱層より出土した土器で、いずれも破片である。須恵器と土師器がある。



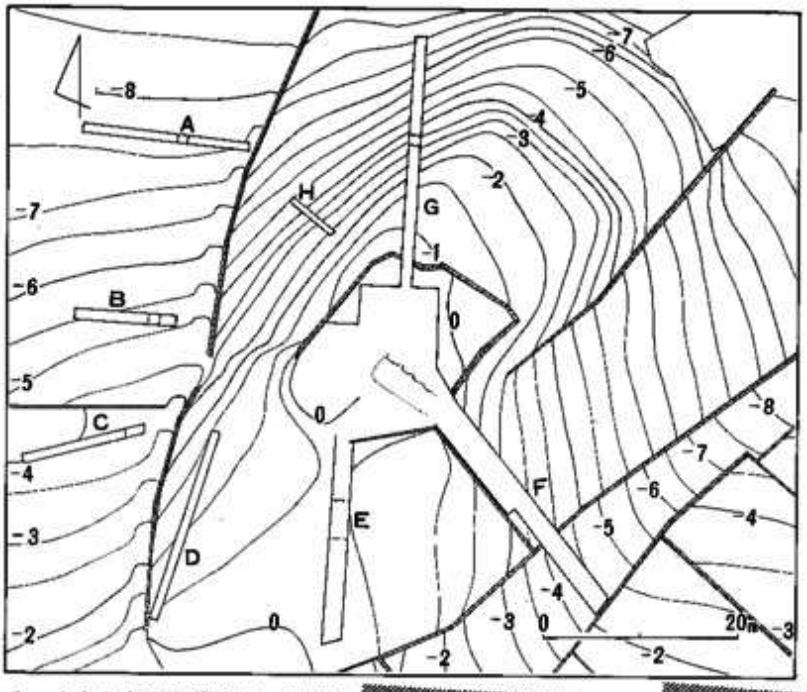
第3図　小丸山古墳地形図（1：2000）

5）　まとめ

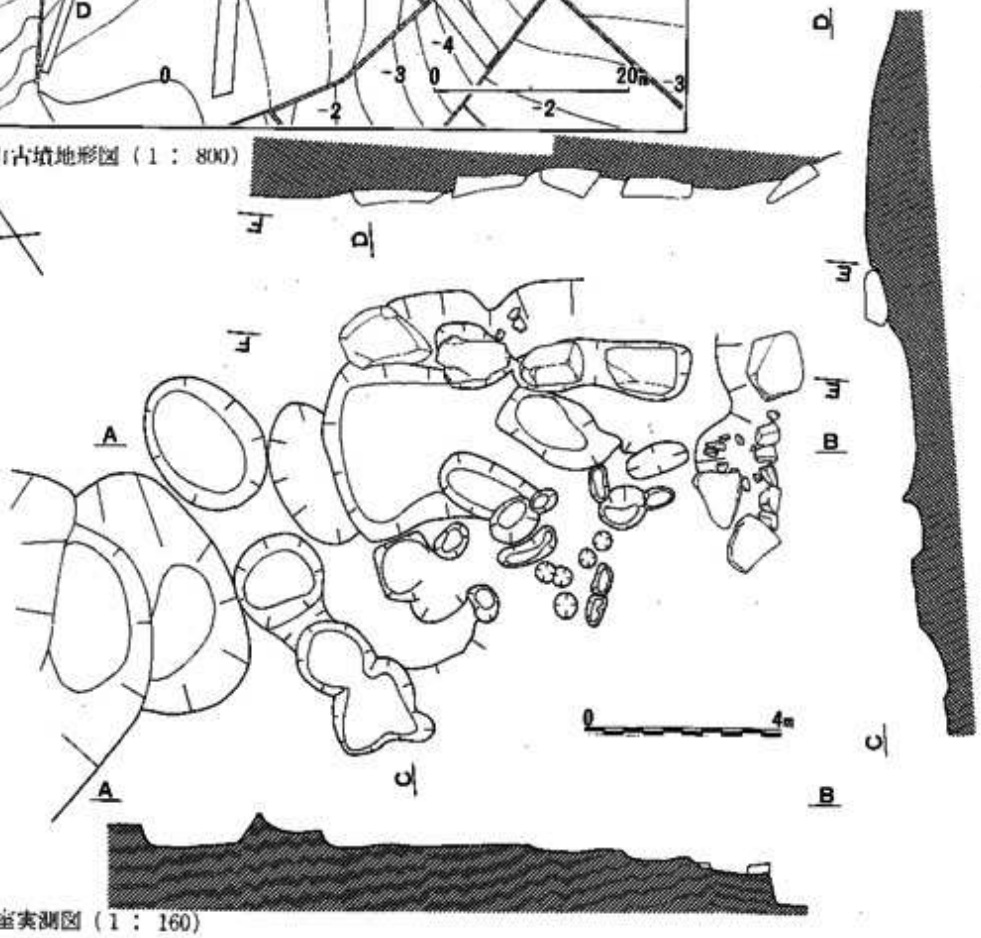
本古墳の既出遺物については、藤森栄一氏の論考中に一部図示してあるが改めて掲図する。輪鐙（図7の19・20、写5の20・21）は全国的に見ても僅少なもので、轡・杏葉・菱形留金具・辻金具及び鉸具（図8、写5の17～19）と共に東京国立博物館の好意により実測させて戴いた。また、直刀をはじめとする既出遺物（図9・10・11の1～3）は、平林牧の平林氏所蔵品を宮坂光昭氏が実測したものを、氏の好意により戴いた。さらに、馬鈴3点（図10の14～16、写6）は今回実測したものである。あわせて感謝の意を表したい。

本古墳の時期及び諏訪盆地における意義については、すでに先学諸氏が述べられている。今回の調査結果はその考察の正しさを裏付けるものであった。ちなみに、築造時期については7世紀初頭とするのが妥当であろう。

（唐木・桐原）

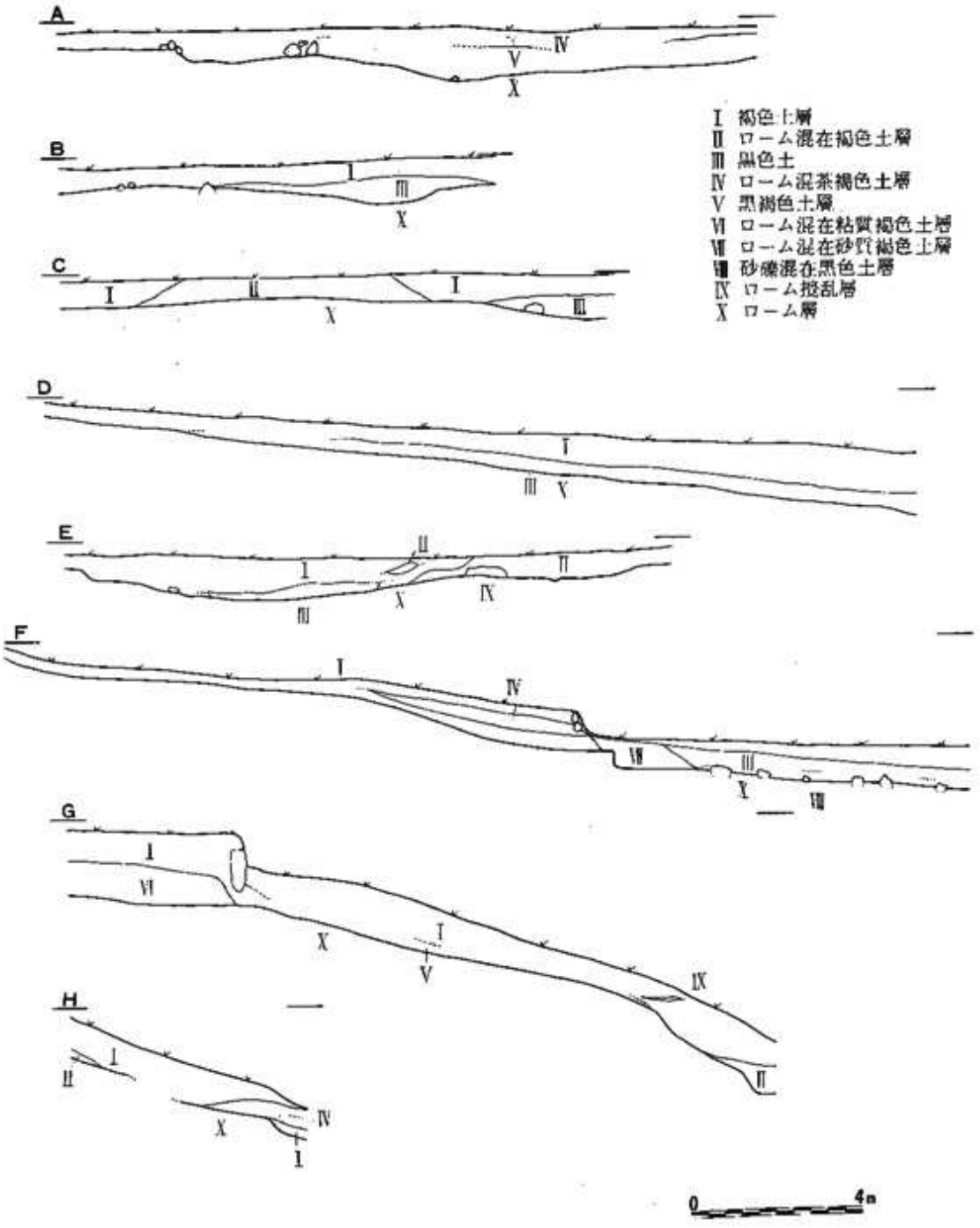


1．小丸山古墳地形図（1：800）

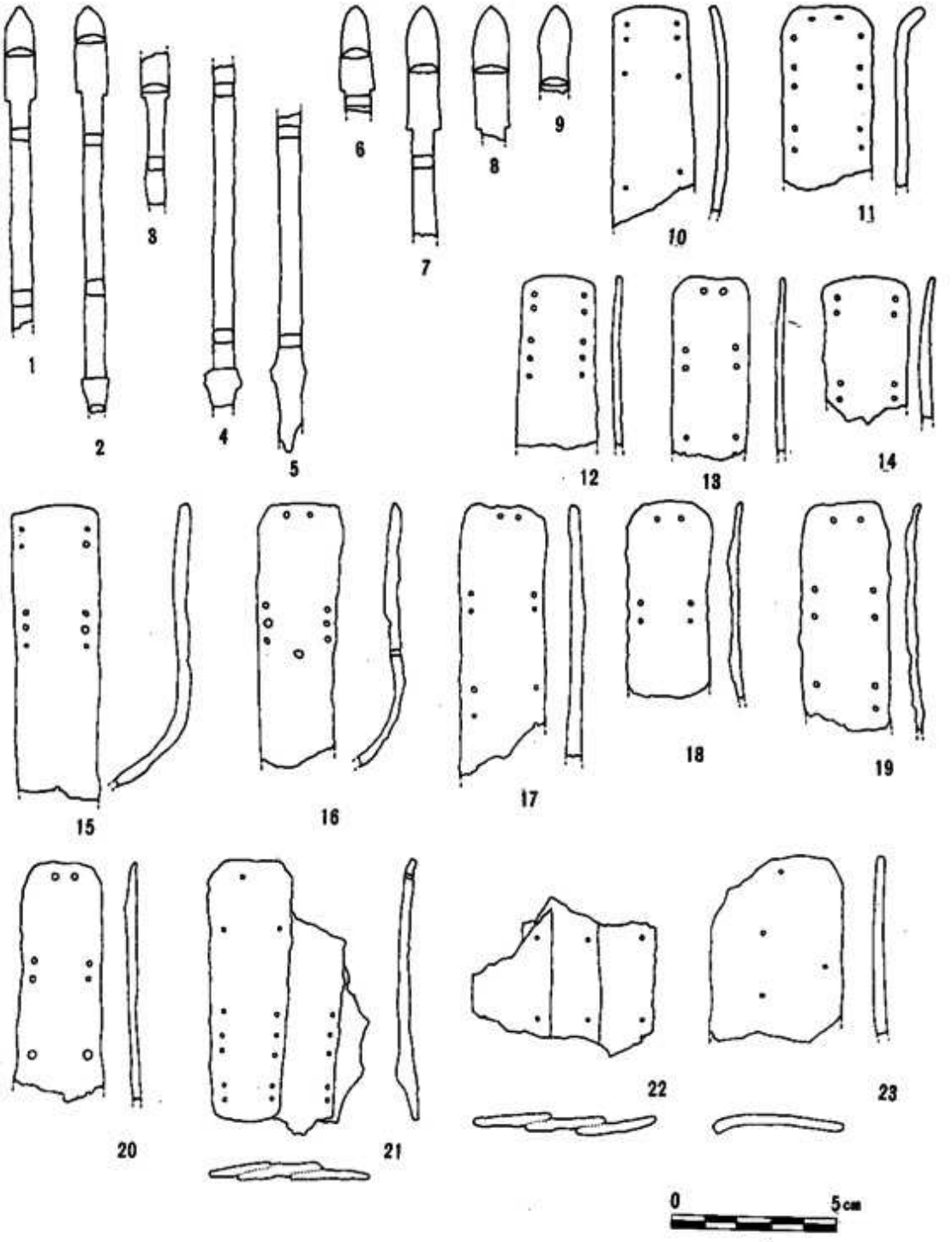


2．石室実測図（1：160）

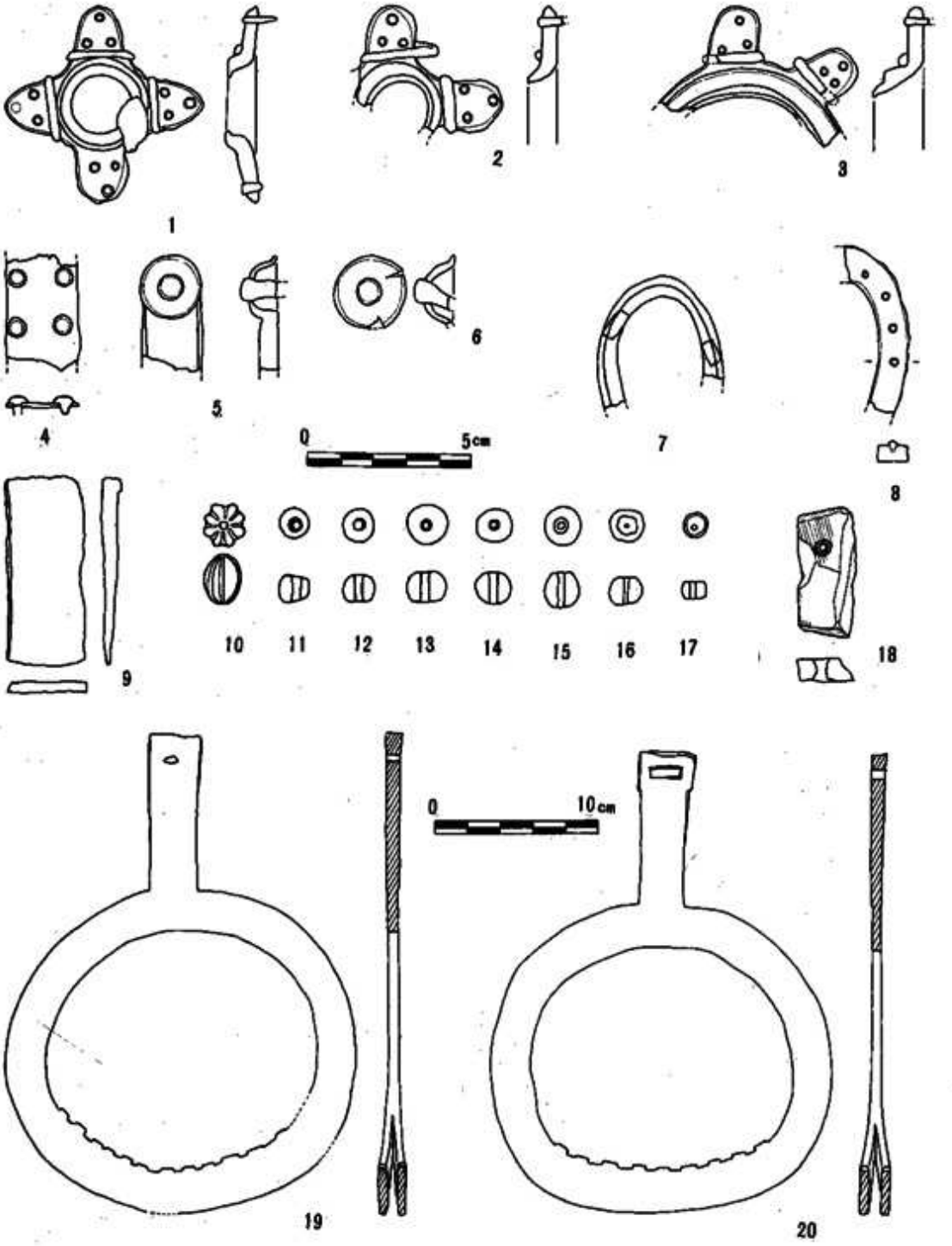
第4図　小丸山古墳地形図及び石室実測図



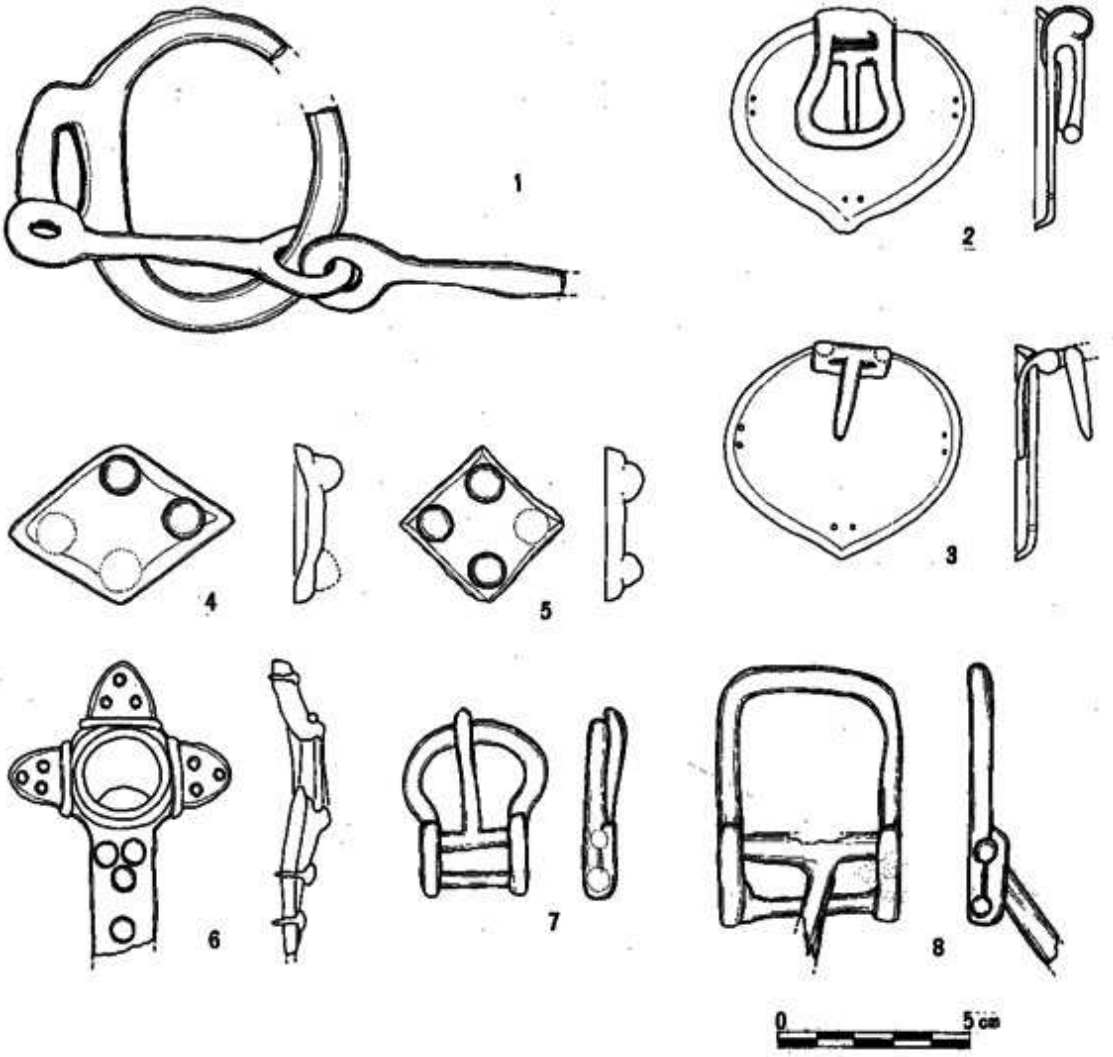
第5図　小丸山古墳墳丘土層図(1：160)



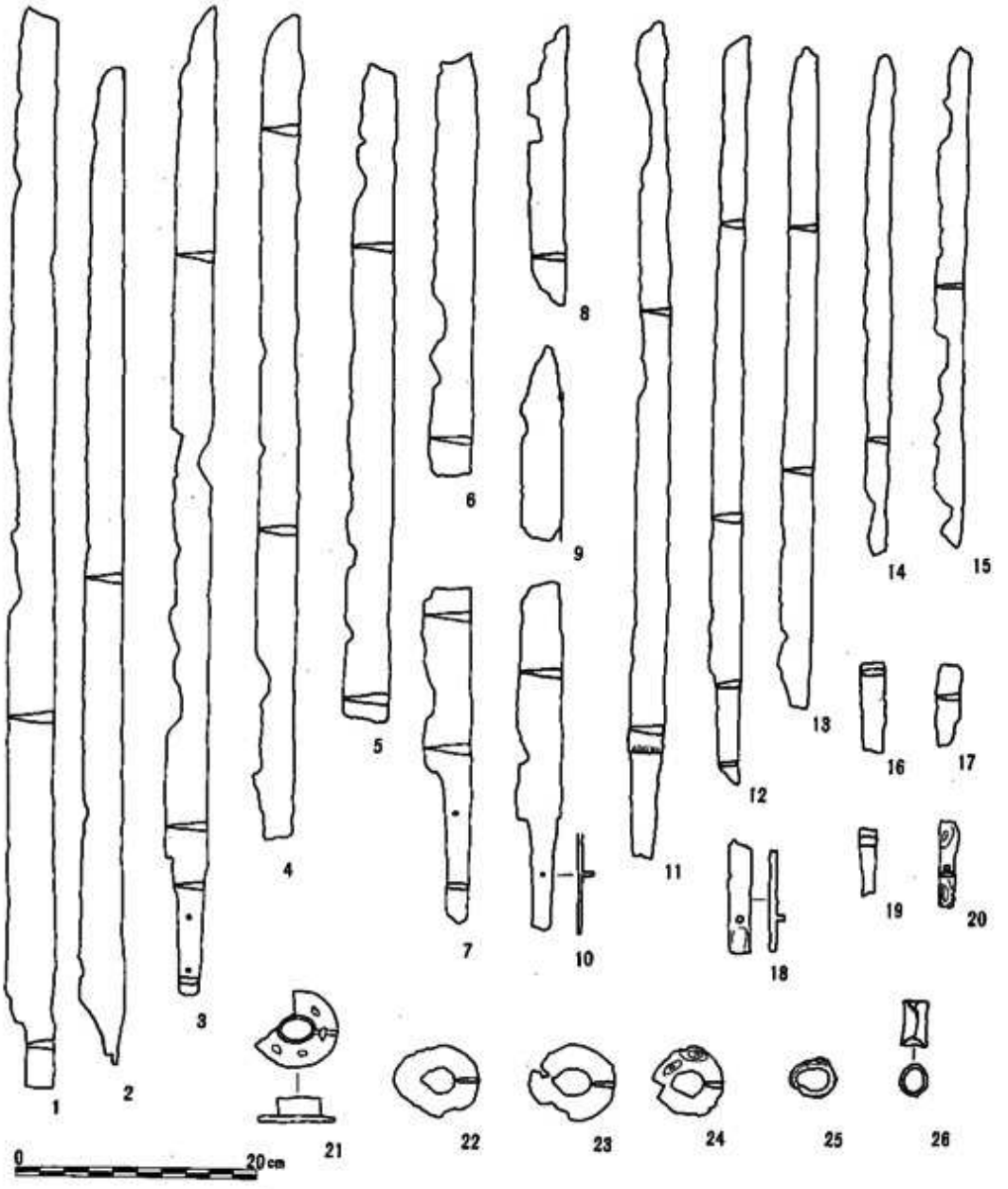
第６図　小丸山古墳出土鉄製品（１：２）（１～23水調査出土）



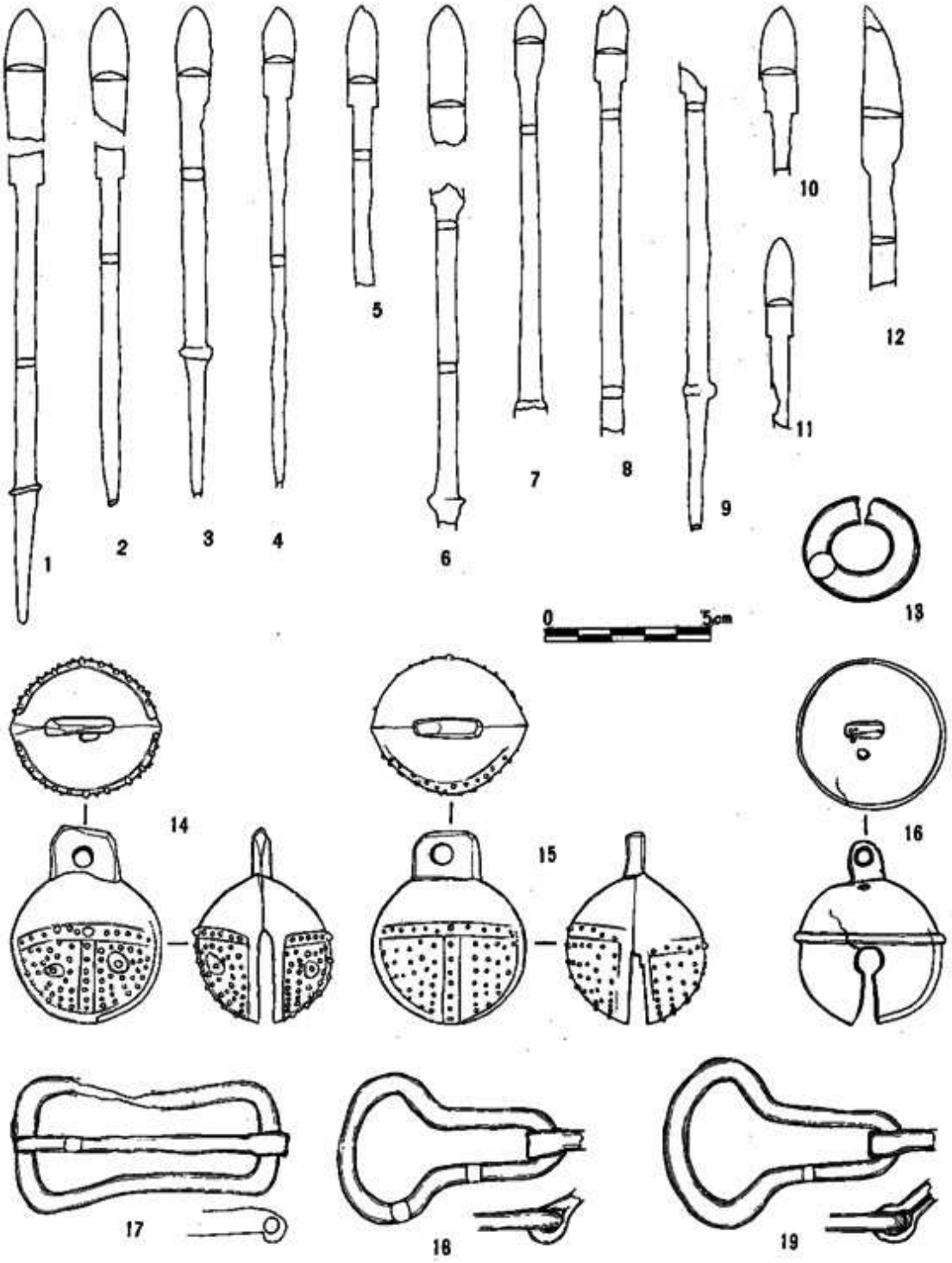
第７図　小丸山古墳出土鉄製品（１：２，但し19・20　１：４）
（１～18　本調査出土，19・20　東京国立博物館蔵）



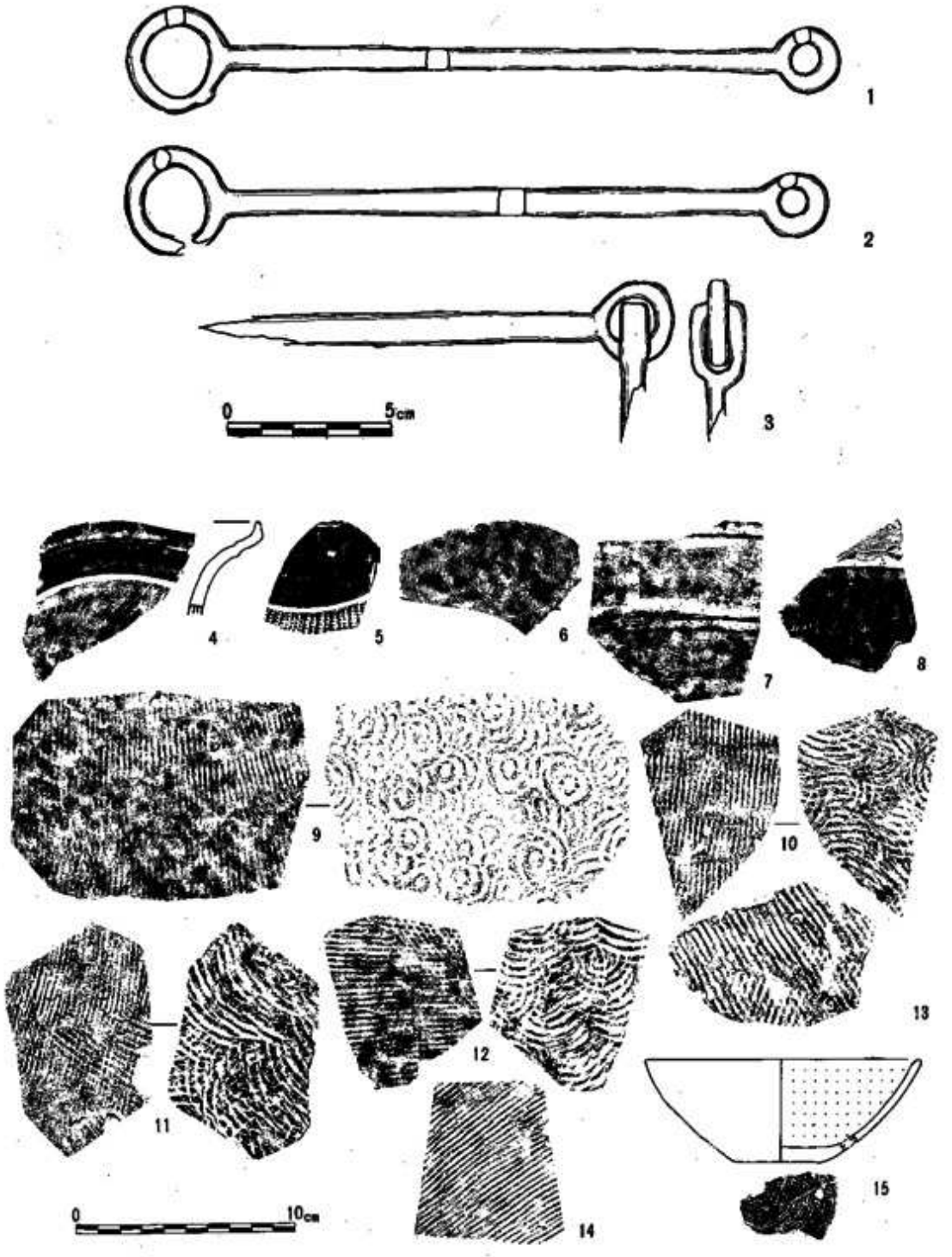
第８図　小丸山古墳出土鉄製品（１：２）（１～８　東京国立博物館蔵）



第９図　小丸山古墳出土鉄製品（１：６）
（１～26　平林氏蔵）



第10図　小丸山古墳出土鉄製品（１：２）（１～19　平林氏蔵）



第11図　小丸山古墳出土鉄製品及び土器（1：3，但し1～3　1：2）
（1～3　平林氏蔵，4～15　本調査出土）

3 平 林 遺 跡

1） 位 置

遺跡は諏訪市豊田有賀小字平林にある（図12の1、写1の2）。本遺跡は小丸山古墳の南方にひろがるテラスで、北東方向に流下する中沢川に面した緩傾斜地に立地する。遺跡の北東には縄文時代後期の遺跡として著名な大安寺遺跡があり、中沢川の東方台地上には縄文時代から中世にかけての遺物が散布する本城遺跡が指呼の間にある。本遺跡はこの両者中、特に前者の遺跡との関連性が注目される地域であり、先ず表採を試みたが遺物は皆無であった。このため、中央道用地内での全面グリット発掘方式は止め、任意な地点に出来るだけ多くのグリットを設定することに決め、調査を実施したのである。

調査はセンター杭 115＋00を基点にし、中沢川の西側まで、幅は用地内全域を対象としてグリットを35ケ所設定し調査を行なった。本遺跡の層序は、耕作土（黒褐色土）下に砂礫混入褐色土が20～50cmあり、その下層にローム層が堆積する。上層よりローム層までは40～120 cmと、地籍によりその深さは異なるが中沢川の氾濫の影響を受けており、一部黒色土の堆積も認められ、砂礫が比較的多くみられる。

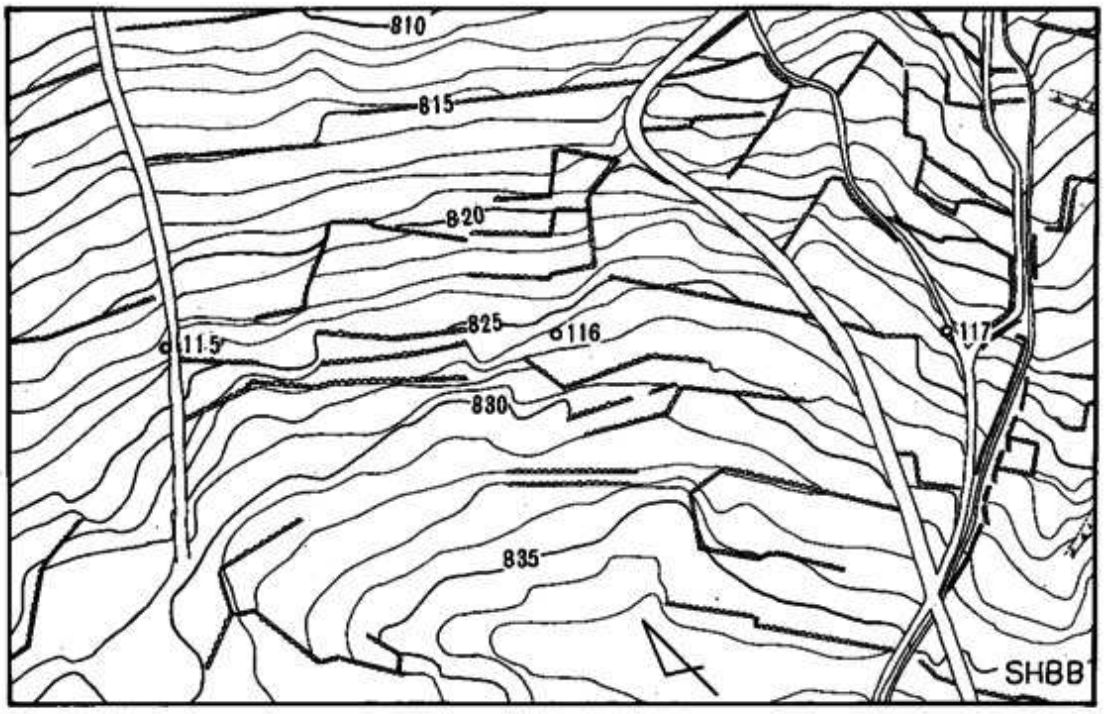
2） 遺 物

調査の結果、遺構は確認されず遺物の出土量も非常に少なかった。本遺跡の遺物包含層は砂礫混入褐色土であり、出土遺物は土器と石器のみである。土器は縄文時代中期の破片4点のみで、うち1点（図12の2）を除き他は磨滅した曽利期の土器片である。石器は乳房状石斧1点と打製石鏃1点である。(図12の2)。以上の遺物はいずれも用地内山寄りに点在して出土したものである。

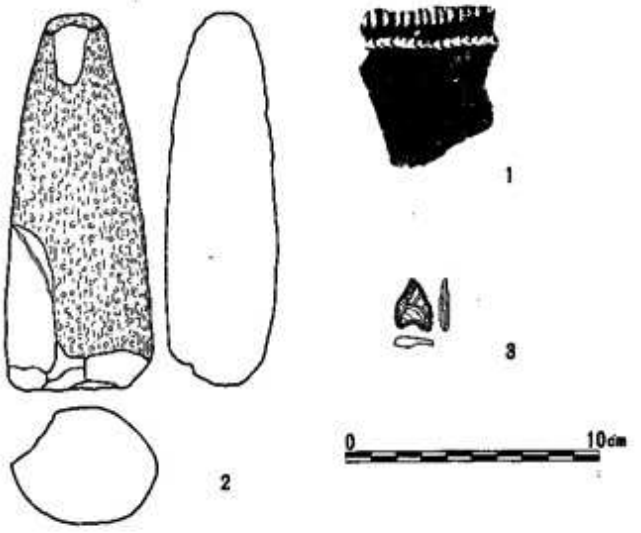
3） まとめ

本遺跡はその中心が山寄りにあると言うものの、中央道用地の下方に大安寺遺跡があることから、一応の期待をもって調査に臨んだのであるが、結果は最初の予想通り、遺構はなく遺物も数点しか発見されなかった。これは用地内の層序とその砂礫の分布状況から、中沢川の氾濫原であることが理解でき、磨滅した土器片等はそれを如実に物語るものと言えよう。中沢川の東岸台地上の本城遺跡の住居址検出状況からみて、山寄りは遺物も比較的多く散布すること、及び飲料水が容易に得られることを考慮すれば、海抜835m以上の中央道用地外山寄りにその中心があるものと想定されるのである。

（岡 田）



1．平林遺跡地形図（1：2000）



2．平林遺跡出土遺物（1：3）

第12図　平林遺跡地形図及び出土遺物

4　本　城　遺　跡

1）　位　置

遺跡は諏訪市豊田北真志野本城7568番地を中心とした地籍にある（図13の１、写７の25）。本遺跡は平林遺跡の東側台地に立地し、両遺跡の境界をなす中沢川が北流して途中より深い谷を作っている。北側と東側は急傾斜になり、南側は尾根状の幅の狭い緩傾斜で、西側が山寄りの平坦地から中沢川への急激な傾斜をもつ舌状台地となる。この台地は北東に緩い傾斜を持つ海抜 835～845 m の桑畑となっている。表面採集では、台地全体より縄文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器及び中世陶器片が得られた。中央道はこの台地の先端部を西から東へ横切る。

調査はセンター杭 117＋80を基点ＡＡとし、東西ＡＡからＣＹまで、それに直交する南北に40～75までグリットを設定した。このうち今回は第一次調査として、Ａ地区上段の西側、幅杭 118＋20までの約 250 ㎡を中心におこなった。今回検出された遺構は全てこの範囲内のものである。本遺跡の層序は耕作土・黒色土・褐色土・ローム層となり、ローム層までは各20cmの厚さで堆積し、遺構は褐色土を切ってローム層中に検出されている。

2）　遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は住居址17軒、土壙35基、配石址１である。(図13の２、写７の26）。遺構は複雑に切合っており、しかも耕作による攪乱もあり、確実に遺物がおさえられたのは平安時代の住居址２軒（４号・12号住居址）と縄文時代中期の住居址５軒（２号・３号・５号・８号・11号住居址）のみであった。また、土壙は中央部の台地頂部付近に集中しており、住居址よりも古い時期のものが多い。遺物で特記すべきは、押型文土器片が発見されていることである。

詳細については第二次調査分と一括して報告するため、ここでは省略しておきたい。

3）　まとめ

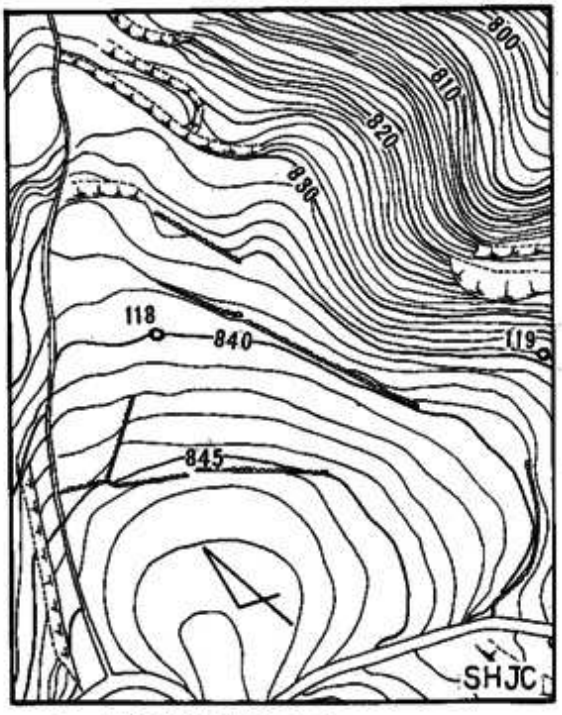
本城遺跡の第一次調査では、住居址17軒、土壙35基，配石址１が検出されたが、用地内全体の面積からすれば稀少であり、それだけに二次調査が期待されるところである。それはともかく、今回の調査は調査部分のうち上段西寄りのほんの一部分を調査したにすぎないが、遺構の最も集中している箇所を調査したものと考えられる。15軒の縄文時代中期の住居址は他の遺跡と比較した場合、堆積を有する住居址が一軒

もない事に注目された。また、他の2軒は平安時代の住居址と推定されたが、方形であることが確認されたのみで、遺物も少なく詳細は不明である。土壙は35基のうち、1基は平安時代のものと推定されるが、他は全て縄文時代の土壙である。土壙は住居址よりも古いものが多くみられた。前述したように、今回の調査区東端部分より押型文土器片が出土して居り、次回の調査で何らかの遺構が検出されることが期待できそうである。

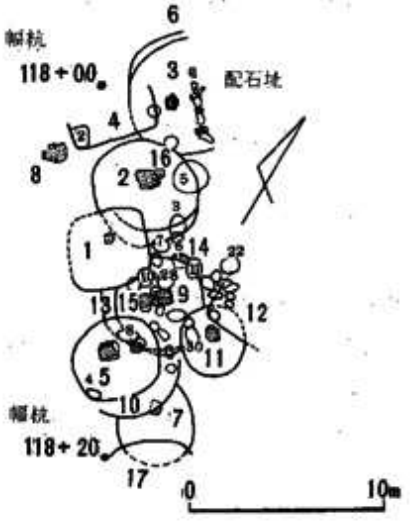
本城の地名については、伝承及びその地形のあり方からみて、中世の山城としての性格を考えさせるものがあるが、本調査の結果では青磁片1点が目下の資料であり、断定はできかねる。

いずれにしても、遺物の散布状況から推測すれば、用地外をも含めた本遺跡は、縄文時代から中世に至る複合遺跡であり、今後、この周辺の開発には充分に注意する必要があろう。なお、遺跡の性格から多少用地外の調査を余儀なくさせられたが、快く調査を承諾して戴いた地主の方々に厚く御礼申し上げたい。

（郷　道）



1．本城遺跡地形図（1：2000）



2．遺構全体図（1：400）

第13図　本城遺跡地形図・遺構全体図

5 金山北遺跡

1） 位置

遺跡は諏訪市大字豊田字南真志野にある（図14、写8の27）。諏訪湖の南いわゆる西山地区の山麓から流出する野明沢川と南沢川とにはさまれたやや急傾斜な台地である。分布調査の際、縄文時代中期の土器片が少量ではあるが採集されている。地目は桑畑と野菜畑である。

中央道は本遺跡の頂部、台地の基部からその背後にせまる山麓にかけてのかなり急な東向き傾斜面、換言すれば、センター杭 128+20～128+60 まで、標高 837m ～845 m の間を通過する。

調査は地形的状況から、傾斜の方向と平行に1本、垂直に3本のトレンチを設定して実施した。地層はいずれのトレンチにおいても同様で、赤褐色砂礫層の上に約30cmの砂礫混在黒褐色土（耕作土）層の堆積が見られた。

2） まとめ

調査の結果、中央道用地内では遺構は検出されず、また遺物も全く採集されなかった。用地内及び用地外東方の標高 825m の台地上について改めて分布調査を試みたが、黒曜石の破片2点を得たのみである。当初の分布調査においても採集された遺物の少なかったことを考え合わせると、本遺跡より上方の標高 855m 付近の平坦地に遺跡の存在が推測され、そこから雨水などにより小破片が流出したものと考えられる。

いずれにしても、中央道が遺跡を破壊しないわけであり、本遺跡の場合に限っては幸いであった。金山北遺跡はその中心が用地外 810m 付近にあるものと推定される。

（唐 木）

第14図 金山北遺跡地形図（1：2000）

6 城 山 遺 跡

1） 位 置

遺跡は諏訪市湖南字南大熊2674～2677番地にある(図15の１、写８の28)。東側には三日月状の形態を有する大熊城址があり、その尾根が本遺跡をとり囲む形となっているため、三方ふさがりの凹地である。凹地は一時期、畑から水田になり、また後に畑となっている。凹地中央には良質の湧水がみられ、梅雨時には湿地帯となることもあるため、ガニ水道（暗渠排水路）がつくられている。遺跡は小範囲の凹地であるが、それをとりまく尾根は、大熊城址に関連すると思われる遺構のため、地形が人為的に変えられている。過去の分布調査では、縄文・弥生・土師器・灰釉陶器の破片が多量に表採されている。中央道は、西側の尾根から凹地を通り東側の大熊城址を横断する。遺跡の標高は 800から 810m である。

調査はセンター杭 136＋20を基点ＡＡとし東西にＡＦ～ＣＱまで、それに直交する南北方向に40～60までグリットを設定して実施した。本遺跡の層序はＡ地区尾根部から凹地への中段部は、耕作土・黒色礫混在層・黄褐色角礫層（地山）である。凹地は耕作土・黒色土・褐色土・黒色土・ローム層である。凹地はローム層まで１～ 2.5m の深さで、第４層の黒色土は40～70cmの厚さに堆積している。遺物は第二層の黒色土層中に土師器・須恵器・灰釉陶器片、第三層の褐色土中に縄文後期・弥生土器片、第四層の黒色土層中から縄文前期から中期初頭の遺物が出土している。

2） 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、住居址２軒・建築址２軒・井戸址１・土壙３基・暗渠排水路址３・土器集中区１である(図15の２)。建築址・井戸址・暗渠排水路址等の中世以後の遺構は中段にあり、平安時代以前の住居址・土壙はやや凹地に近い所に位置している。大熊城址の空濠の延長部が凹地の中央を東西に横断している。Ａ・Ｂ地区の尾根部は大熊城址関連地区と考えられるが遺構はない。遺物はＡ・Ｂ地区の尾根部で中世の遺物が少し出土し、他はＣ地区の凹地に集中している。Ｃ地区でも建築址など中世以後の遺構の位置する段には、遺物の包含は少ない。

ア 住居址

ア） １号住居址 （図15・20・23・25、写９）

遺構 本住居址は遺跡の東側の大熊城址のある尾根の裾部に位置しており、北側は城址の空濠に切られている。遺構は黒色土の厚い土層内で検出され、また床面が軟弱であり、構造・施設について不明な点が

多い。プランは東西径3.75mの円形を呈し、その主軸方向はN54° Wを示す(図15の3、写9の29)。住居址の掘り込みは垂直で床面まで15～24cmを計る。床面は軟弱で炉の西北側に大きな平石が敷かれている。柱穴は2ケ検出されたのみで、それぞれ深さ17cm、27cmを呈するが明確に柱穴とは断定できない。炉は中央やや東寄りに位置し、その規模は45×26cm、深さ15cmを計る長方形石囲炉である(写9の30)。炉内から深鉢形土器破片が出土しており、その下から焼土が検出されたが、土器は炉内に敷いたものではない。炉の北西に敷かれている平石の壁寄りの床面下から深鉢形土器が破片で一括出土しているが、埋甕とは断定できがたいものである（図20の1、写9の31)。

遺物　本住居址の出土遺物には土器と石器がある。土器は深鉢形土器（図20の1～6、写9の31）と釣手土器の釣手部分（図23の19・20）である。石器は打石斧（図25の1～3）である。特に3は形態的には打石斧と異なるが、用途としては打石斧かも知れない。

イ）　2号住居址　（図16・20・21・26、写10・11）

遺構　本住居址は遺跡の東側、大熊城址の西側に位置し、1号住居址の北側にある。プランは東西径5.20m、南北径4.65mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、その主軸方向はS73° Wを示す（図16の1、写10の32)。壁は垂直で床面まで20～50cmを計る。床面はローム及び黒色土の貼床で固く平坦である。柱穴は不明である。カマドは東壁のほぼ中央とそのやや右寄りに各1基構築されている。いずれも石組粘土竈である(図16の2、写10の33)。中央の竈は保存が良好でその形態が明確であり、本住居址の廃絶期まで使用されていたものと考えられる。その規模は焚口部から煙道部先端まで2.2m、焚口幅0.8mで、中央部に支脚がある。右寄りの竈は小形で破壊されており、廃絶期が住居址の廃絶と同じとは断定できない。2基の竈が同時に使用されていたのか、右寄りの竈が廃絶された後に中央の竈が構築されたのかは明確ではないが、東側に一段高くテラス状の箇所があり、右寄り竈の構造から考えるとテラス状の面が床面と想定される。つまり、中央の竈を構築する際にテラス状の面を残し、床を深く掘り直して新しい住居址とし、この時右寄りの小竈を廃絶した可能性が大きい。たゞ矛盾するのは西寄りに一部分貼床がみられたことである。中央の大きな竈右側からは鉄滓・フイゴ口が出土し、竈が一般のものより大きく煙道が長い構造であることから、工房址的性格をもつ住居址にたて直しされたと考えることができる。

遺物　本住居址出土遺物は土器・鉄製品・土製品・石製品がある。土器は土師器甕形土器（図20の7～9）・小形甕形土器（図20の11、写11の37）・鍔釜（図20の10）・坏形土器（図20の12～17、写11の37)、須恵器甕形土器・灰釉陶器壺形土器（図20の18、写11の35）・埦形土器（図21の1～12、写11の36）・皿形土器（図21の13～19、写11の36）である。また、土錘（図26の4、写11の38)、フイゴ口（図26の6・7、写11の39)、石錘（図26の5)、砥石などもあり、フイゴ口と共に鉄滓・溶滓（写11の40)、鉄製ヤス(図26の1、写11の38)、鉄釘（図26の2・3、写11の38)、不明鉄製品など鉄製品の出土が多いことに注意される。土器はいずれも平安時代後期のものであり、灰釉陶器の皿形土器の1点は輪花皿である。いずれも遺物は竈右側のテラス状の面と床面とに多く出土し、住居址西側には少ない。

イ　遺　構　址

ア）　1号建築址　（図17、写12）

遺構　本遺構は遺跡中央の凹地よりも一段と高い中段に位置する。炉址はL字状に3個の炉石が残っており、1.3×1.9m、深さ26cmの規模をもつ方形石囲炉である。炉内には炭化物と焼土が少量検出された。その炉址を中心に挙大の角礫を含むロームで築いた柱跡状の不整方形遺構が4ケ所確認された。この柱跡状の遺構はロームでマウンド状に築いてあり、柱の土台と考えられる。耕作による攪乱もあるため、柱跡を全て検出することは出来なかったが、一応、柱間2間1間を確認し得た。建物の主軸方向はN70°Eであり、長軸の柱間は曲尺で真々10尺（3m）、それに直交する短軸は20尺（6m）を計る（図17の1、写12の41）。炉址の南西1mに、隅丸方形に平石で囲み、底に粘土を貼った竪穴状遺構がみられ、その規模は、2.4×1.4m、深さ20cmを計った（写12の42）。この遺構の覆土上面には炭化物が少量含まれていたが、焼土は認められなかった。性格不明ではあるが、検出状況からすれば、この建築址の付属施設と言えそうである。

遺物　本遺構に確実に伴う遺物は皆無である。

イ）　2号建築址（図18・21、写12）

遺構　本遺構は遺跡中央凹地よりやゝ高い中段にあり、1号建築址の南東に位置する。挙大の礫を幅30～40cmに敷き、ほぼ方形に配置している。石列は地山を10～20cm掘り中に石を入れている（図18の1・2、写12の43）。第1列東側の方形配石は地山に敷いてあるだけである。その石の間には少量ではあるが砂がみられる。第3列の南側半分は石列の上にロームがかぶり、そのローム中から黄瀬戸・カワラケが出土している（写12の44）。第4列西側の円形配石は柱穴状のプランであり、底にも平石が敷かれている。第5列は他の石列と異なり暗渠排水路址の破壊されたものと思われる。第1列南端から西側にはロームのマウンドがあり、炭化物・焼土が検出された。ロームマウンドの位置から考えて石列に伴う施設と考えられる。全体的に石列のあり方からみて、建築物の土台的配石と考えたい。しかし、その規模・柱間等については明確ではない。

遺物　本遺構に伴う遺物はカワラケ（図21の20、写12の45）と黄瀬戸の壺破片各1点のみである。特にカワラケの内側には梵字が中央部に一字、それをとりまいて八字、都合九字の梵字が記されており、遺構の性格と時期を決定する好資料である。梵字についてはまとめの項にて後述する。

ウ　井戸址　（図17、写13）

遺構　本遺構は遺跡中央の凹地より一段高い中段の3号暗渠排水路址の東横に位置する。本遺構は遺跡内に井戸あるいは池があり、最近までその付近が湿地であったという話を得て、その場所と推定される地点を掘ったものである。地元の伝承では「首洗い井戸」あるいは「首洗い池」とよばれている所である。プランは直径80cm、深さ90cmで硬いローム層まで掘り込み、自然石を使用して円形に石積みされている（図17の2、写13の46・47）。いわゆる円形石組井である。石は下部まで積んではなく、先ず底から55cmのところで杉材を四角形に組み、側壁に杭を打ち込んで押えている。その木枠の上に持送り的に平石を三段に積み、平面円形のプランを形成している。木材の下はロームの壁で、直径50×70cmの底部は石により壁を

補強している。水はローム層と沖積層との間の透水層を通して上から流れ込み、9月初旬の頃で一晩に約40cmの高さまでに達する。これから推測すれば、常時石組の中段まで水がきていたと思われる。井戸址内の土壌堆積状況は実測図を参照されたい。

遺物　本遺構の出土遺物は少なく、室町期と想定される陶磁器の破片と骨片のみである。

エ　土壙

ア）　1号土壙　（図19・21、写13）

遺構　本土壙は遺跡中央に位置している。プランは1.6m×1.5m、深さ40cmの方形である(図19の1、写13の48)。黄色砂礫層から褐色土層まで掘り込み、覆土の中層に土師器鍔釜・灰釉陶器各1個体が出土している。明灰黄色を呈する灰状のものも共にみられたが、骨粉とは断定できない。覆土上層には拳大から頭大位の石が数個入っており、初め竈を想定したが、石に焼けた痕跡も焼土もなく、結局土壙としておさえたわけである。覆土下層には少量の炭化物が検出された。

遺物　本土壙の出土遺物は、土師器鍔釜（図21の21、写13の49・50）と灰釉陶器の高台椀形土器（図21の22）である。鍔釜は完形品で土壙からの出土は珍しい。いずれも平安時代後半の土器である。

イ）　2号土壙　（図19・22）

遺構　本土壙は1号住居址の東側に位置する。プランは1.85×1.15m、深さ10cmの長楕円形を呈する土壙である(図19のλ)。黒色土内に掘り込まれ褐色土が覆土となっている。覆土中には拳大の石が数個入っていた。

遺物　本土壙の出土遺物は土師器の坏形土器（図22の1・2）と灰釉陶器の椀形土器（図22の3～6）のみである。いずれも破片であるが平安時代後期の土器である。

ウ）　3号土壙　（図19・22、写14　）

遺構　本土壙は遺跡のほぼ中央の凹地内にあり、土器集中区のほぼ中央に位置する。プランは50×60cm、深さ25cmの小形方形土壙である(図19の1)。黒色土内に褐色土の落ち込みがあり、覆土中には多量の骨片と炭化物が発見され、土壙のほぼ中央に須恵器の完形坏形土器1点が出土した（写14の51)。

遺物　本土壙出土の遺物は土師器の坏形土器片と須恵器の坏形土器（図22の7）である。いずれも平安時代後期のものである。なお、多量に人骨と思われる焼骨片が出土している。

オ　暗渠排水路址　（図19、写14）

遺構　本遺構は遺跡中段に位置しており、3箇所検出されている。1号・2号暗渠排水路址は幅40cmの溝状の掘り方をつくり、一辺30cm程の平石を側壁にたてて土崩れを防ぎ、内部に円礫をつめて上に平石を置き蓋をしている(図19の2、写14の52～55)。3号暗渠排水路址は側壁に平石を使用せず、溝状の掘り方内に円礫だけを敷きつめ、上部に平石の蓋をして水路としたものである(図19の3、写14の56)。一時期水

田に改田した際に構築されたものであり、特に3号址は湿気抜きのため十数年前につくったものである。地元ではガニ水道と呼称している。

遺物　本遺構出土遺物は皆無である。

カ　土器集中区　（図15・22・26）

遺構　遺跡の中央の凹地にあり、3号土壙を中心とした地点にある。最初黒色土層内の約5×5mの範囲内に遺物が比較的集中して発見されたため、住居址の可能性を考えたがプランは摑めず、また竈など住居址としての施設が検出できなかったため、土器集中区としておさえたものである(図15の2)。この地区には黒色土層の下に2～3cmの黄褐色土層が一杯入っており、その下に褐色土層が堆積している。土器はこの黄褐色土層までに集中しており、下層の褐色土層中には少ない。黒色土層中には焼土も2ケ所みられたが、竈としての痕跡は認められなかった。

遺物　集中区から出土した土器は、土師器の坏形土器（図22の8）・皿形土器、須恵器の甕形土器、灰釉陶器の壺形土器・椀形土器（図22の10～13）・皿形土器（図22の14～19）である。ほかに土錘が2点出土している(図26の8・9)。土師器の坏形土器の出土量は比較的多く24点出土しているが、完形品は少なくくいずれも破片である。遺物は全て平安時代後期のものである。

キ　その他の遺物　（図22・23・24・25・26、写15）

本遺跡のA・B地区では中世以降の陶磁器片がみられ、C地区で縄文時代・弥生時代・平安時代の遺物が出土している。本遺跡の包含層出土の縄文式土器は、早期の押型文土器(図22の20)、前期の諸磯C式土器（図22の21～29)、中期初頭の土器（図22の30～34)、中期後半の土器（図23の1～18・21）及び後期の土器（図24の1～5）が出土している。弥生式土器は少なく中期の土器片のみである（図24の6～11、写15の58)。土師器（図24の12～14)・須恵器（図24の15）・灰釉陶器（図24の16～24）はいずれも平安時代後期のものである。灰釉陶器のうち三点（図24の22～24、写15の59）は底部に墨書されている。中世の遺物にはカワラケ(図24の25)、内耳ナベ（図24の26）があり、近世以降のものとして各種の陶磁器がある（図24の27～33)。石器は打石斧9点（図25の4）・横刃形石器1点（図25の5）・凹石6点（25の6・7）・磨石斧2点（図25の8、写15の57）・石鏃12点（図25の9～20、写15の57）・ドリル2点（25の21・22、写15の57）・スクレイパー1点（図25の23）・石皿3点（図25の25～27）・敲打器1点・砥石2点・海浜石2点が出土している。他に平安時代の土錘2点（図26の10・11、写15の60）も出土している。また鉄釘6点、キセル3点、火打金具1点（図26の12、写15の61)、刀片1点（図26の13、写15の61)、古銭6点（図26の14～19）及び鉄滓が出土している。

3）　まとめ

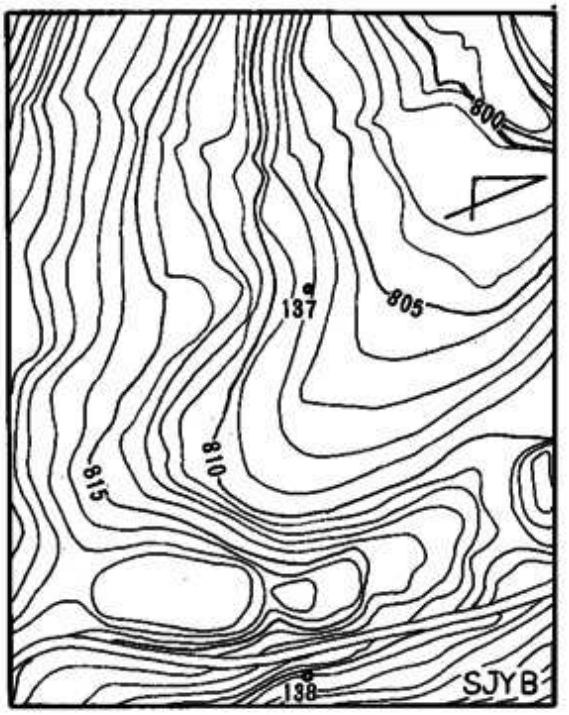
今回の調査で検出された遺構は住居址２軒（縄文中期・平安後期）・建築址２軒（室町期・江戸期）・中世の井戸址１・平安期の土壙３基・現代の暗渠排水路址３である。以下若干の考察を加えておきたい。

縄文時代中期後半の曽利Ⅳ式に比定される１号住居址は、炉の周辺に部分的に平石を敷いた敷石住居址と考えたい。平安時代後半の２号住居址は普通の竈よりも長大な構造で、しかもフイゴ口・鉄滓・溶滓の出土等鉄製品に関係する工房址的性格が強く、この畑を地元の人達は「かじ畑」と言い伝えている。また遺跡の中央に鍛治師の神様といわれる金山様の祠があり、過去にその祠下より古い薙鎌１点が出土している。２号住居址とこれらの伝承や祠を結びつけることは出来ないが、興味がもたれる事実である。銀蔵屋敷と言われる地点からは１号建築址が検出され、伝承と発掘調査の結果とが表裏一体をなした点に興味がもたれ、その人名や土地の古老の話を総合して、先ず江戸時代中期以降の建築址と考えられる。

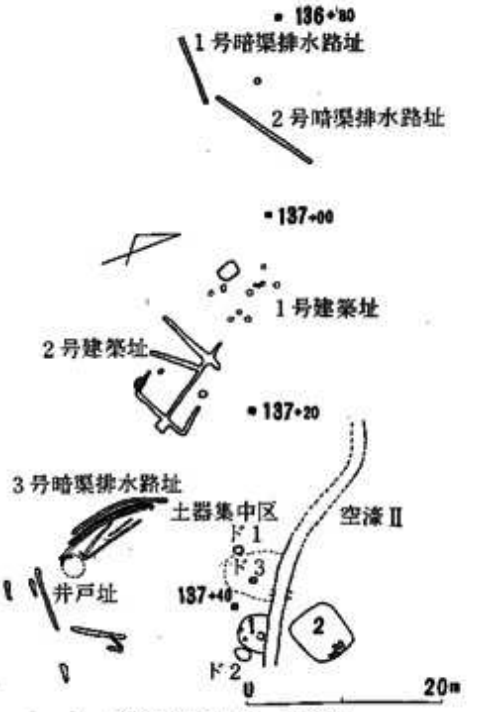
２号建築址は石列内から出土した梵字墨書カワラケに重要な意義がある。高野山大学教授の宮坂宥勝氏の教示によれば、「書体は鎌倉末期から室町中期にかけてのものであり、中央の梵字は不動明王の種子を表し、周囲の八字はこれをもって光明真言の全文を表したものと解される」とのことである。また「この土器の梵字の配合は種子安鎮曼荼羅の構成であって安鎮法の本尊として用いるものであり、換言すれば鎮宅法（家宅を建築するときに行なう密教の修法で俗に言う地鎮祭）に使用されたものと推察される。普通、将軍・大名・豪族などが居館を建立する時、安鎮曼荼羅を本尊として不動安鎮法が修せられる。そして別に伴像なるものを一幅掛けて、それを結願の日に居館の梁の上に収めた。伴像を安置した梁の部分は建物のほぼ中央に相当する。おそらくこの土器は伴像の代りに用いられたと思われる。特に地方にあっては当時、略式化された伴像としてこのような土器が使用されたのかも知れない」との教示を得た。つまり、梵字解読の結果得られたことは、①先亡の慰霊・鎮魂のために光明真言による土砂加持法をおこなった際に用いられた土器、②城址の居館建立をしたときに安鎮法をおこなった伴像としての土器、の二説が考えられるのである。２号建築址は居館までいかなくとも、それに相当する家屋を建築する時、後者の説の如くに安鎮法をおこない、その土器をそこに置いたものと解し、大熊城址に関係する遺構と考えてさしつかえあるまい。

次に地元の人達が首洗い井戸・首洗い池と伝承してきた井戸址は、最近までその地点が湿地帯であり、遺構確認に手間どったが、言い伝え通り井戸が検出された。その構造からみて室町期までさかのぼらせてもよく、大熊城址と直接関係あるものと断言しても良い地形にある。本遺跡の中世遺構はいずれも大熊城址に関係することは明白である。土壙は平安時代のものであるが、特に１号土壙の出土遺物中鍔釜は注目すべきものである。暗渠排水路址は明治以降に造られたものであるが、この地域では比較的多くつくられており、農業関係の資料として一応測量し載せてある。

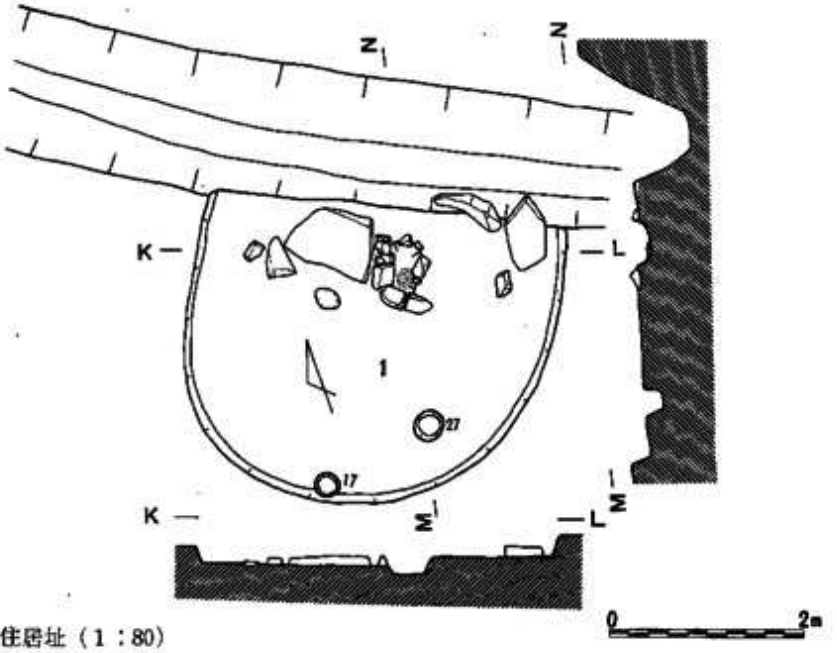
いずれにしても本遺跡は凹地ではあったが、縄文時代から現代に至る資料が豊富で、また大熊城址とも密接な関係を有しており、中央道用地外の開発にあたっては、十分なる調査が必要である。　（竹　内）



1．城山遺跡地形図（1：2000）

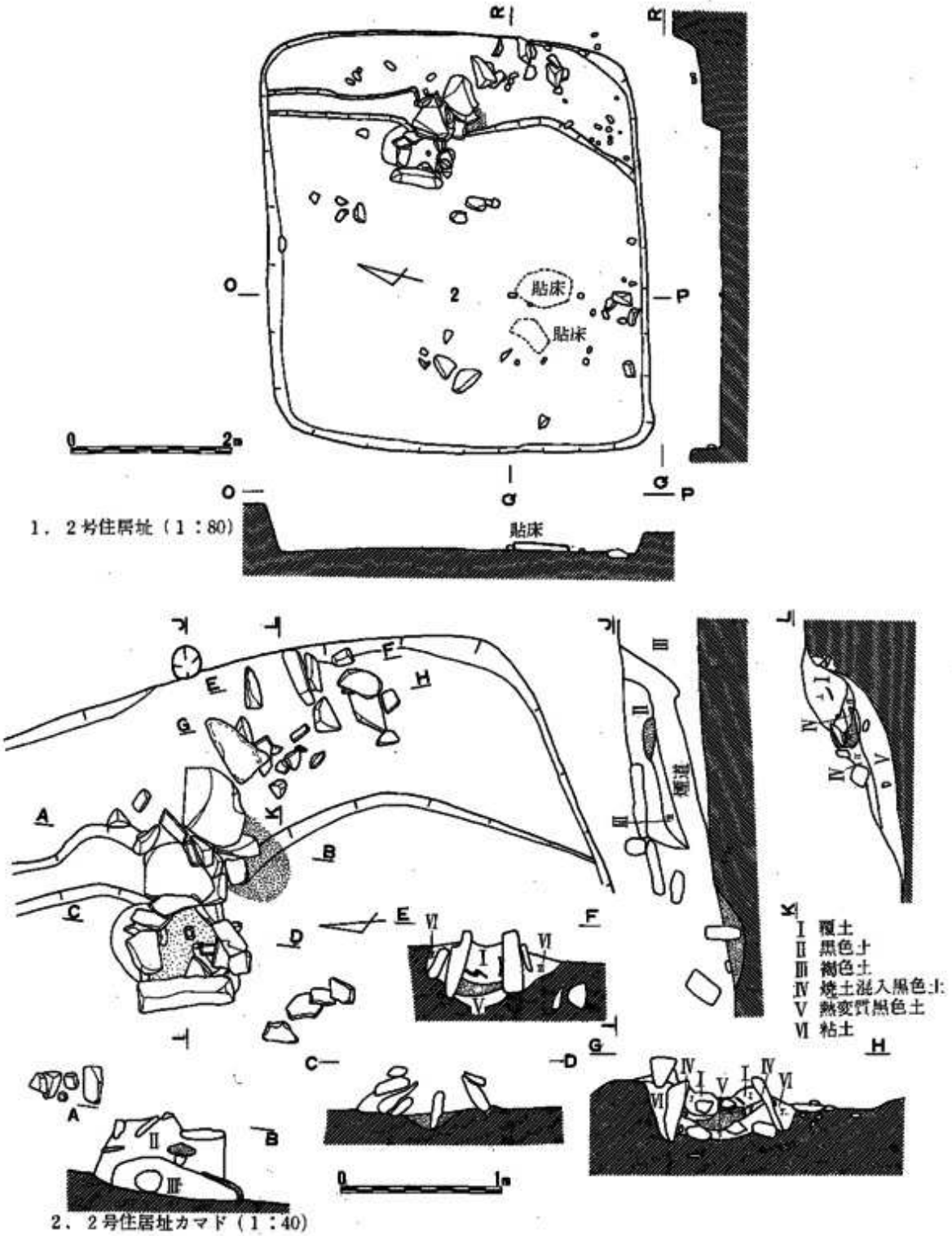


2．遺構全体図（1：800）

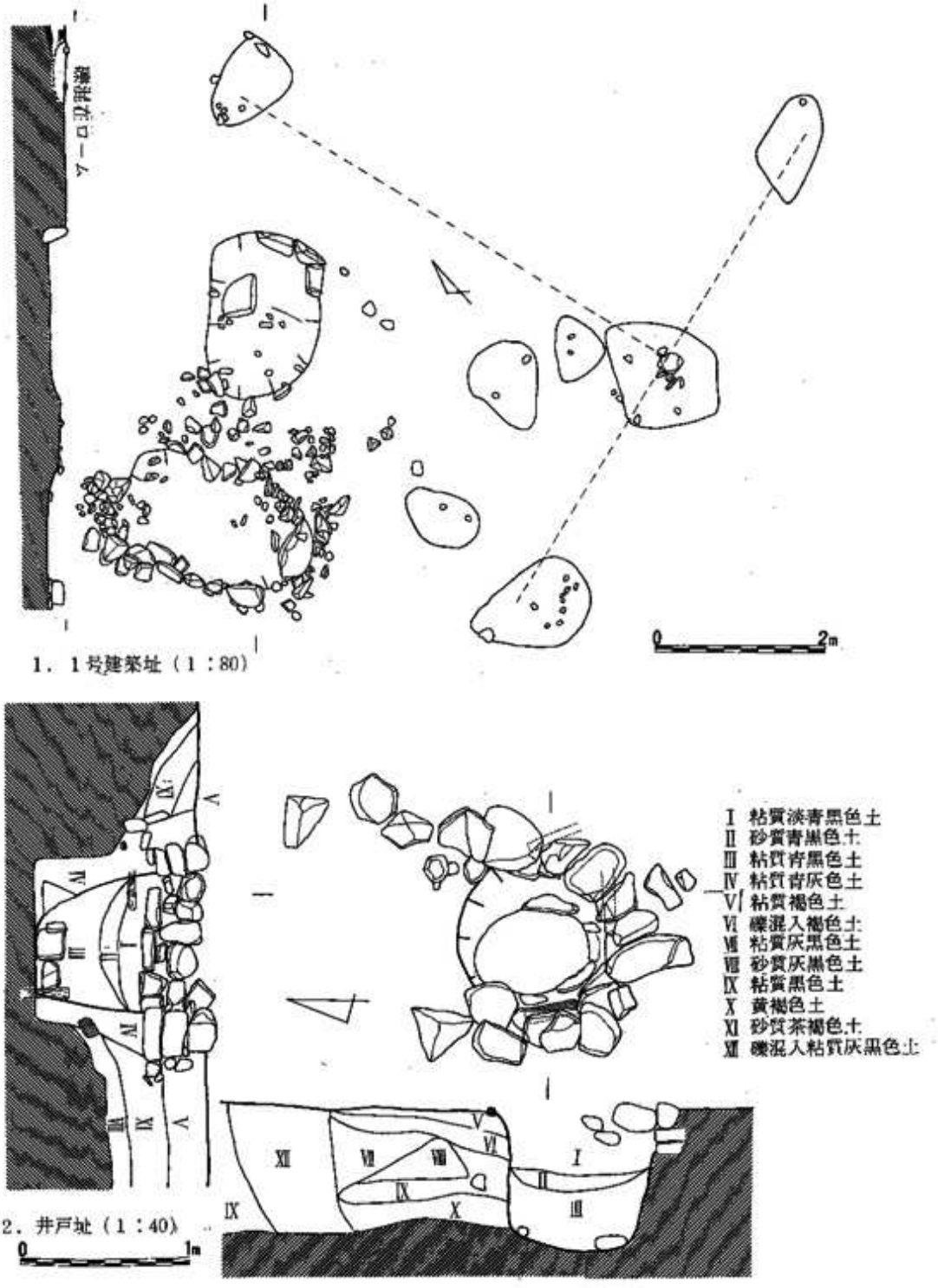


3．1号住居址（1：80）

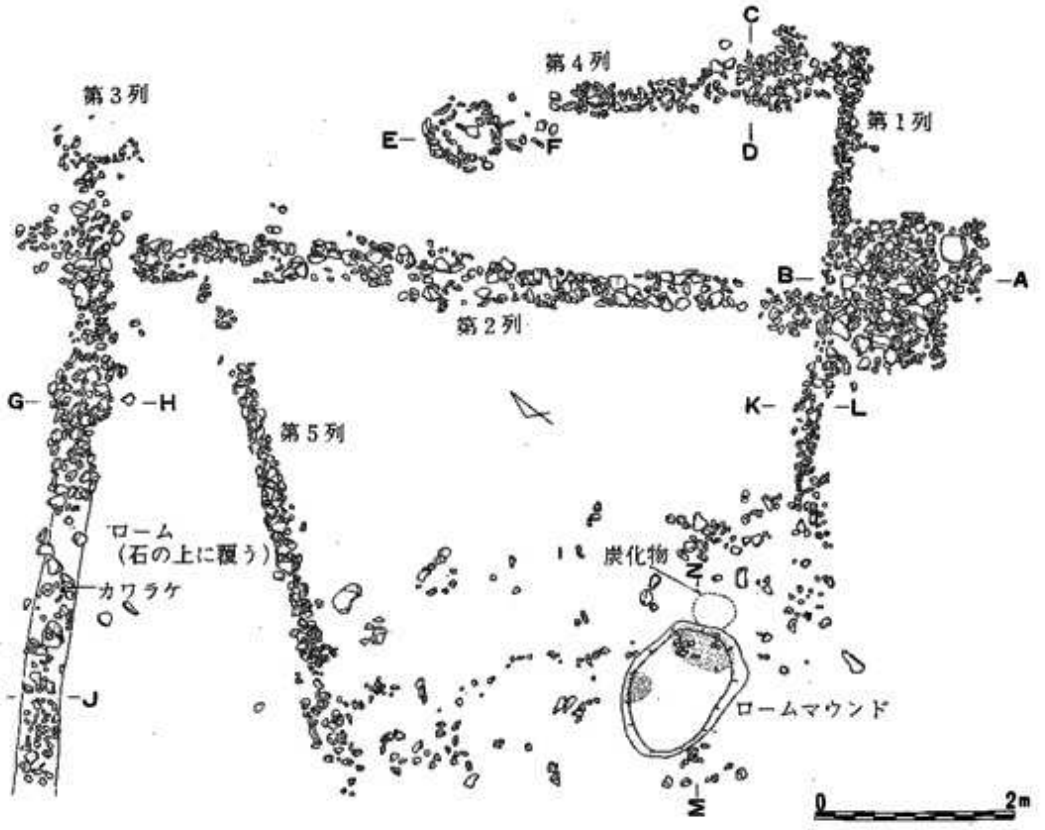
第15図　城山遺跡地形図遺構全体図及び1号住居址



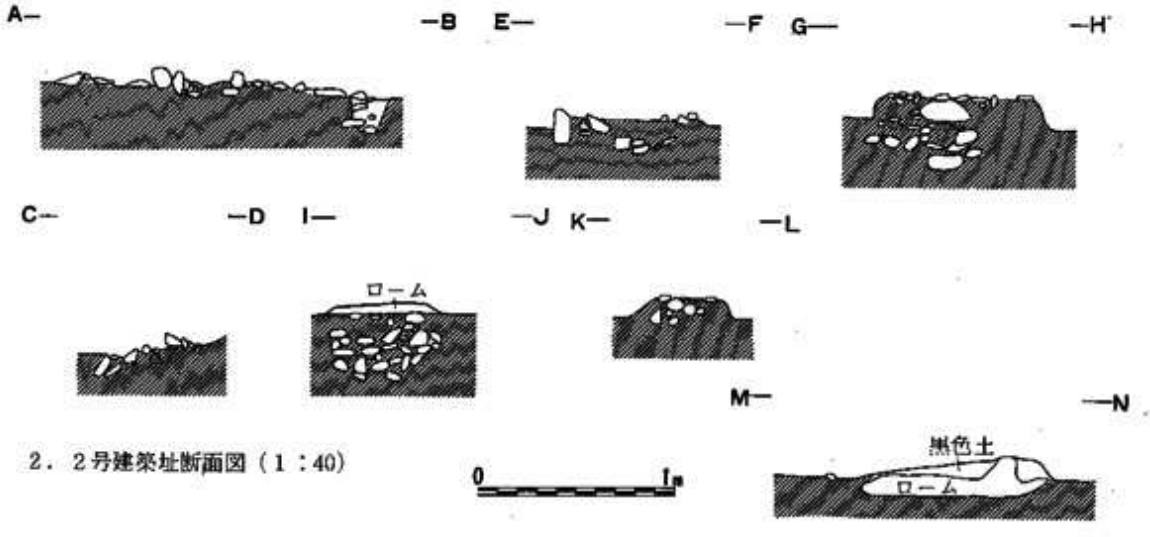
第16図　城山遺跡2号住居址及びカマド



第17図　城山遺跡1号建築址及び井戸址

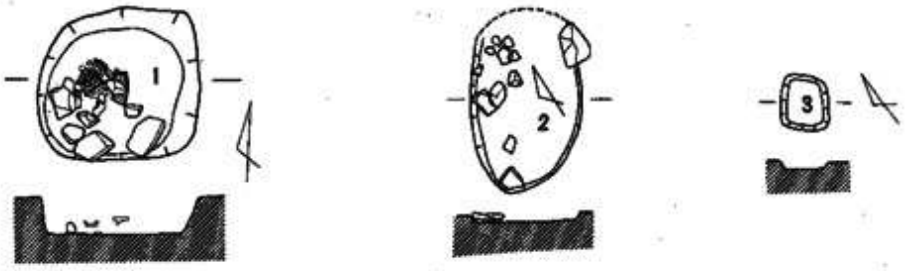


1．2号建築址（1：80）

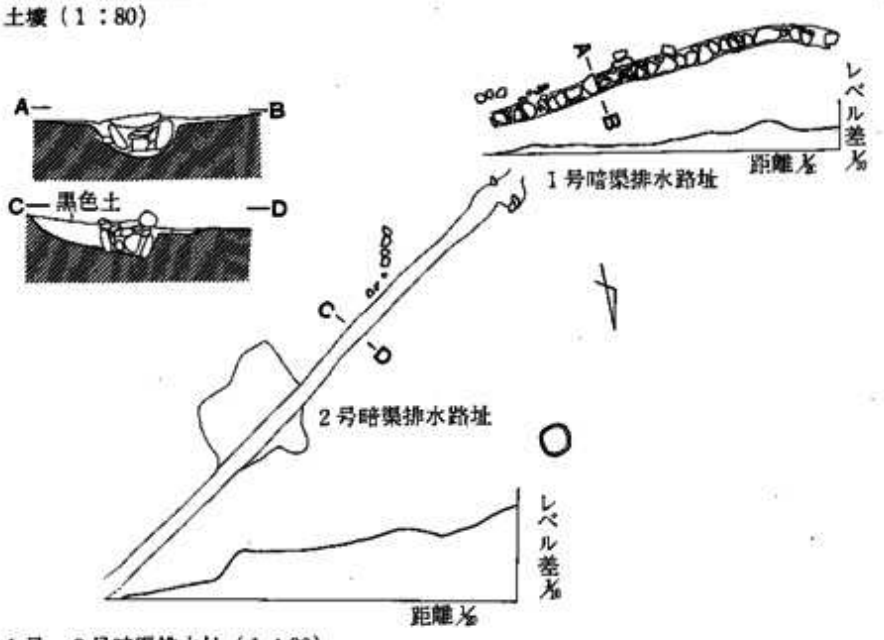


2．2号建築址断面図（1：40）

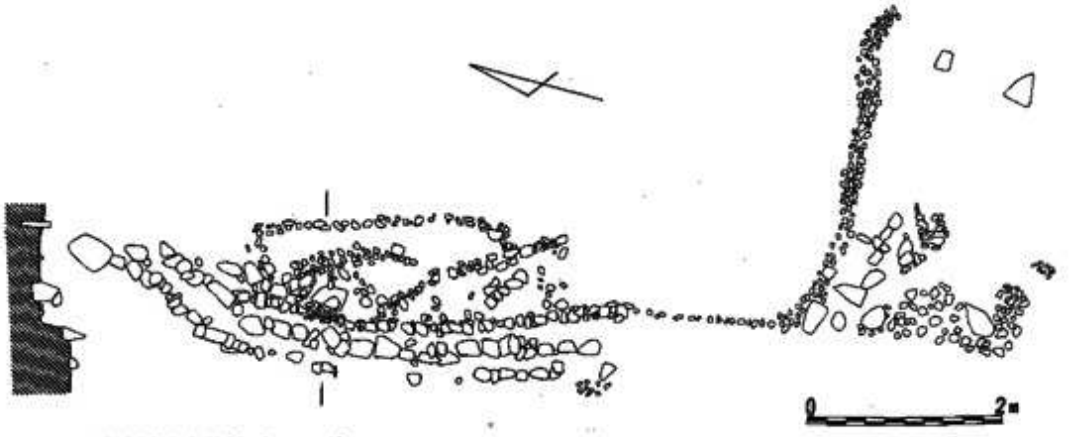
第18図　城山遺跡2号建築址



1．土壙（1：80）

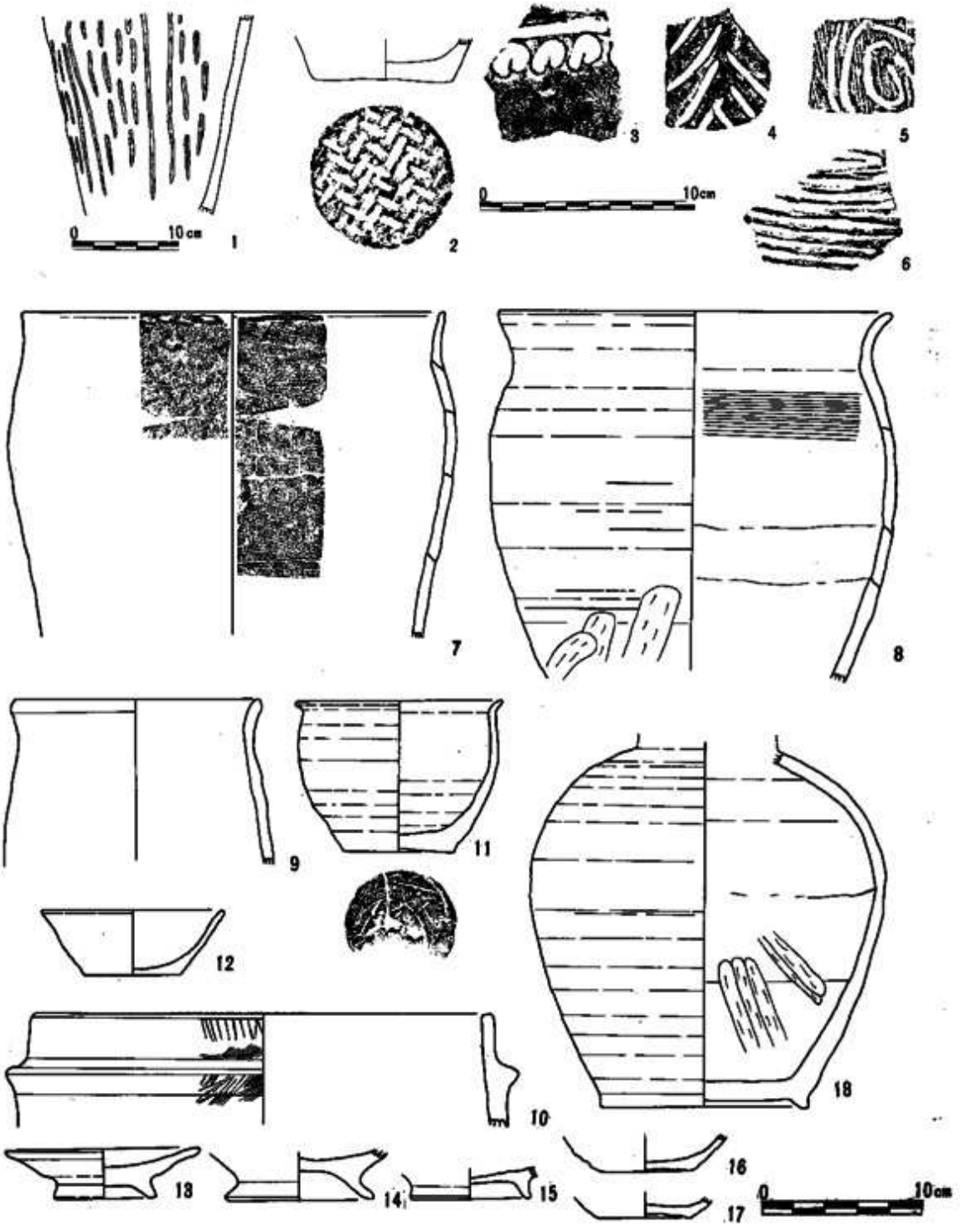


2．1号・2号暗渠排水址（1：80）

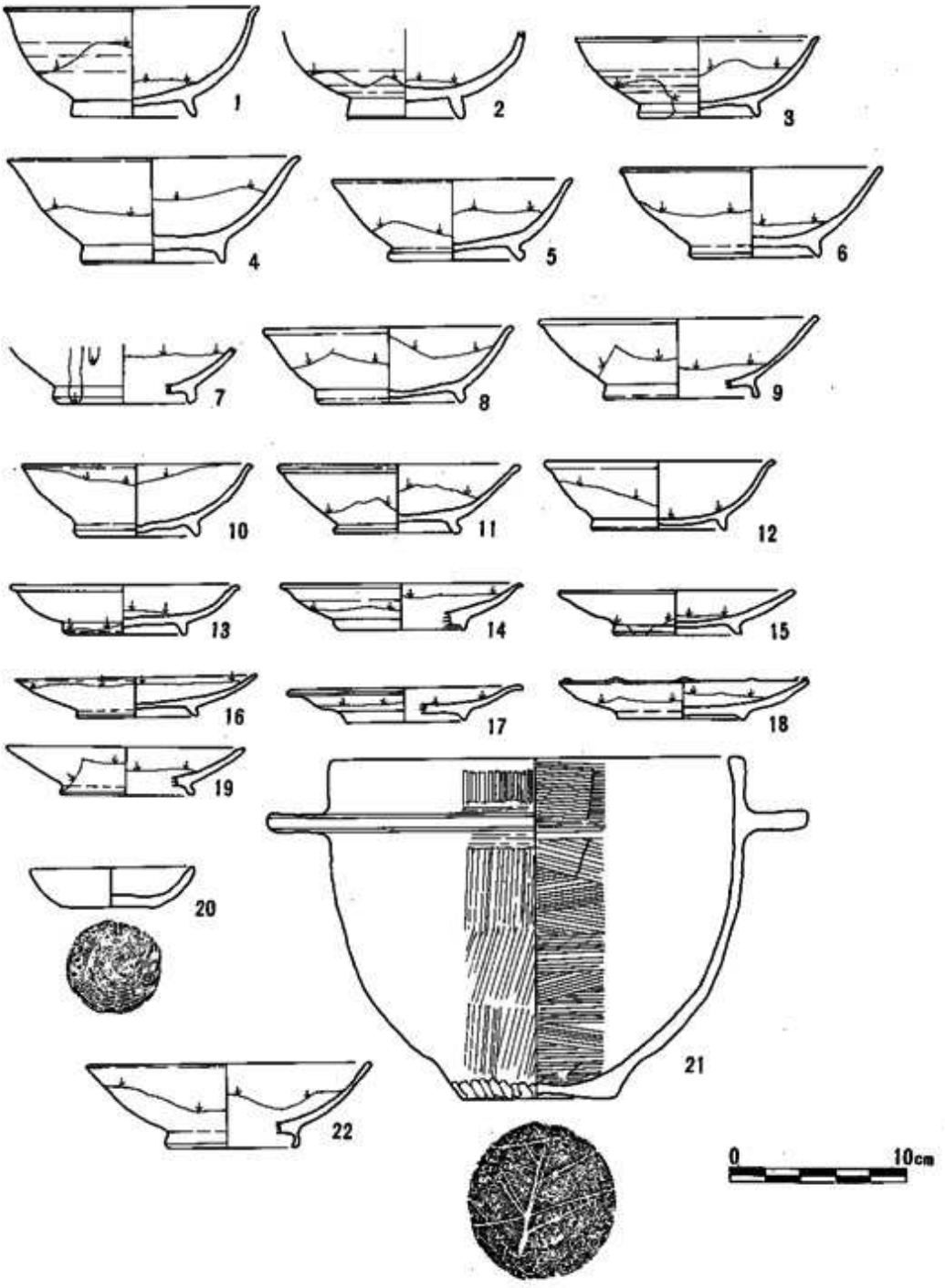


3．3号暗渠排水路址（1：80）

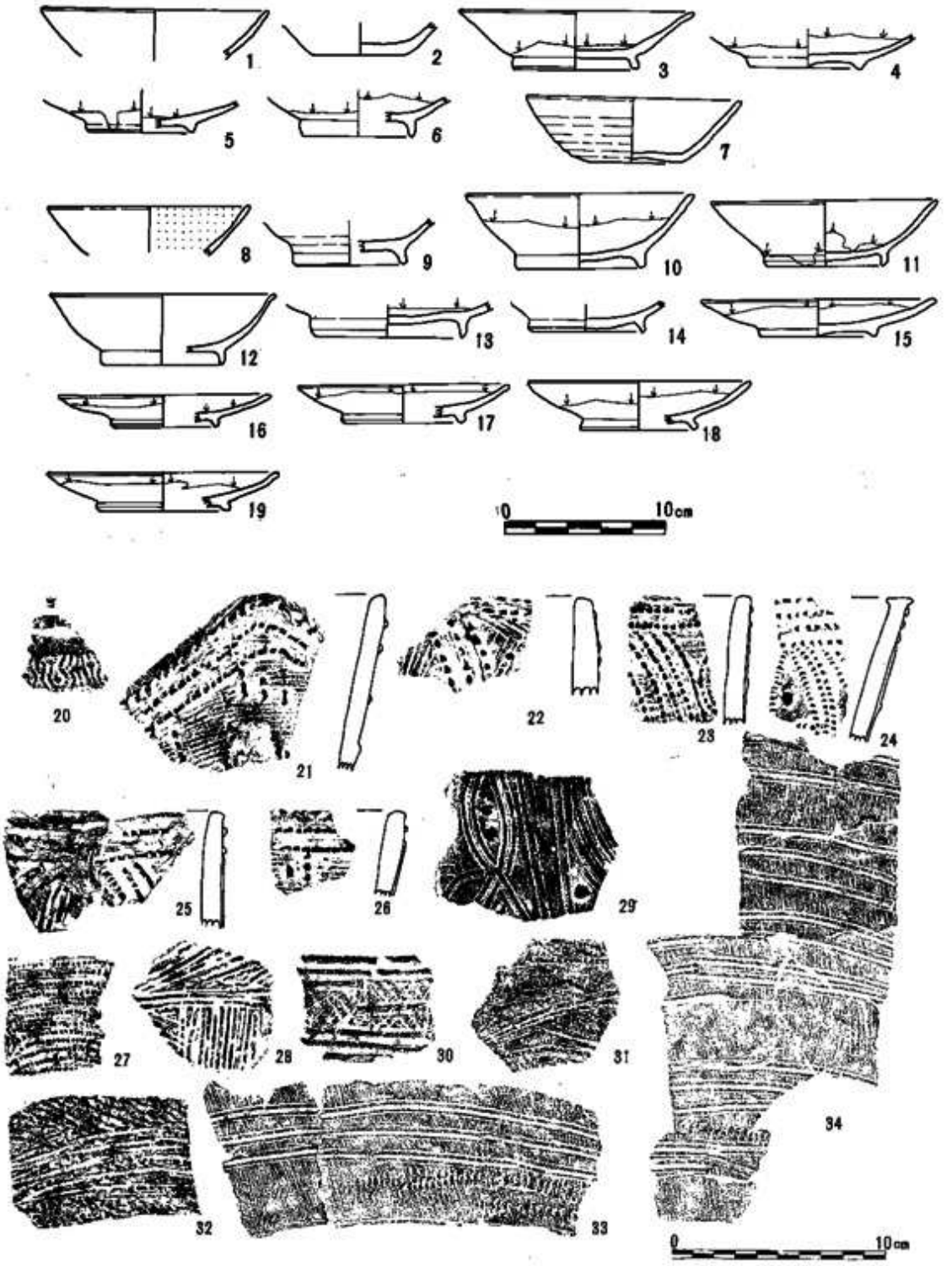
第19図　城山遺跡土壙及び暗渠排水路址（1：80）



第20図　城山遺跡出土土器（1：4）（1～6　1号住居址，7～18　2号住居址）

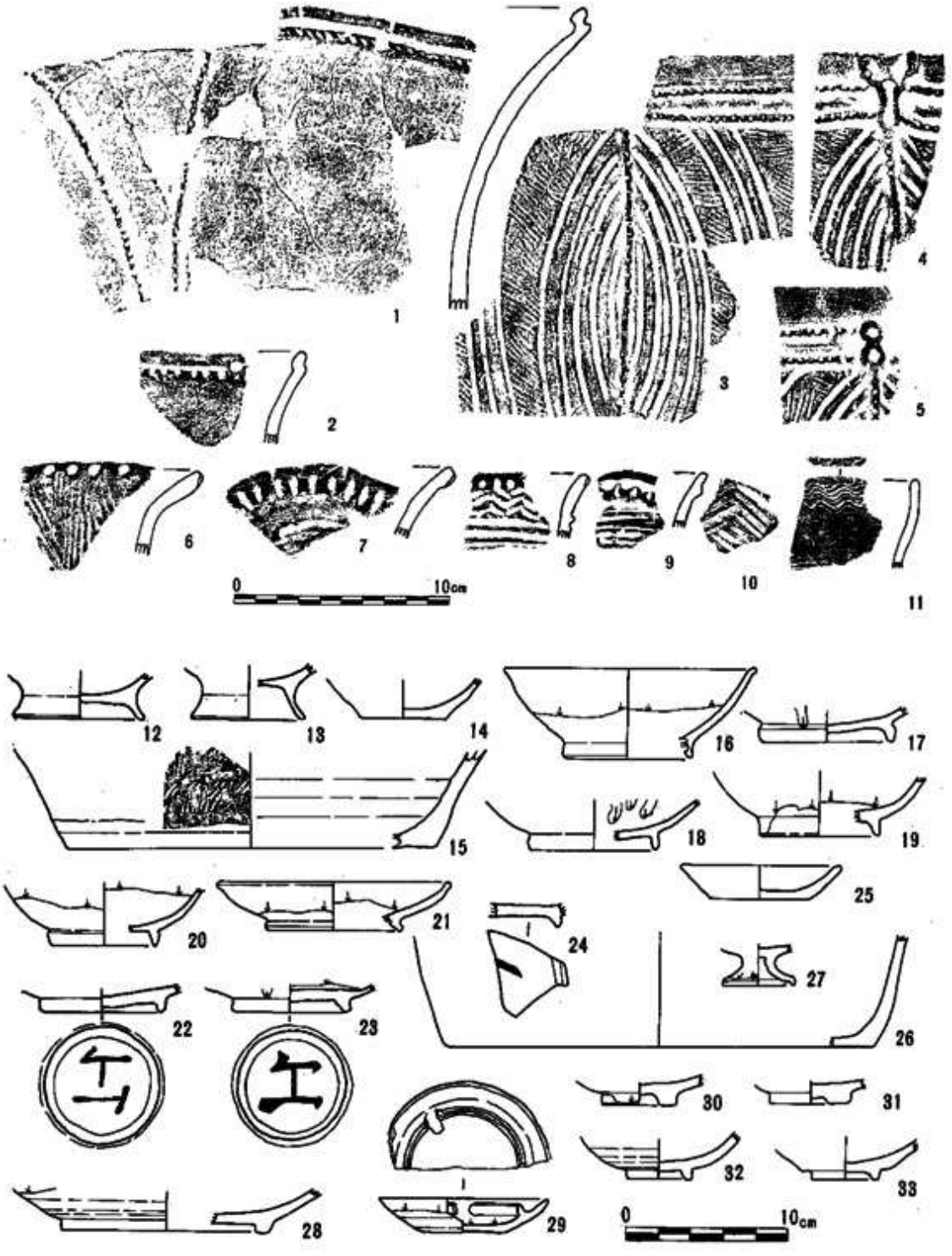


第21図　城山遺跡出土土器（1：4）（1～19　2号住居址，20　2号建築址，21・22　1号土壙）

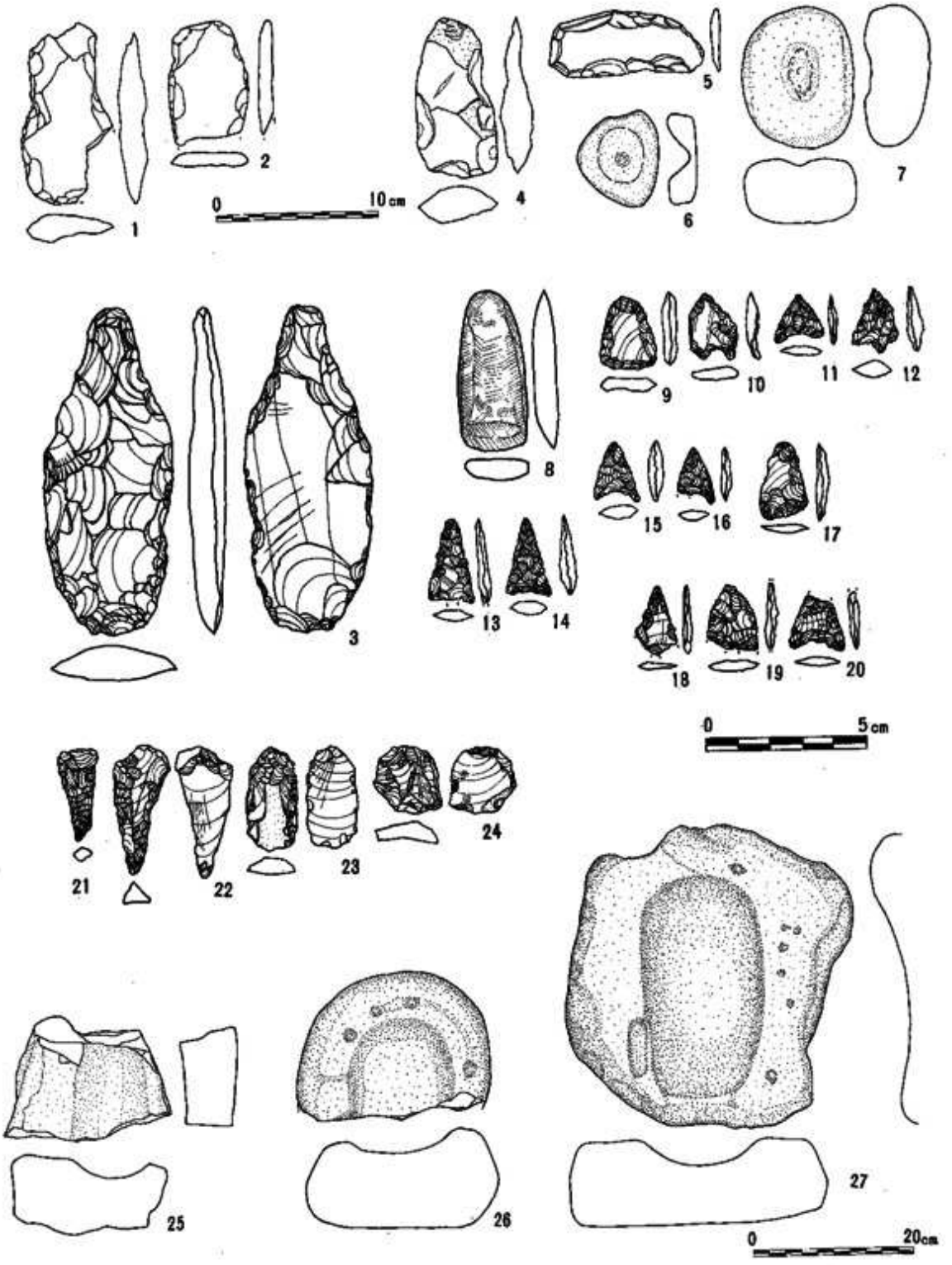


第22図　城山遺跡出土土器（1：2但し20～34　1：3）
（1～6　2号土壙，7　3号土壙，8～19　土器集中区，20～34　その他）

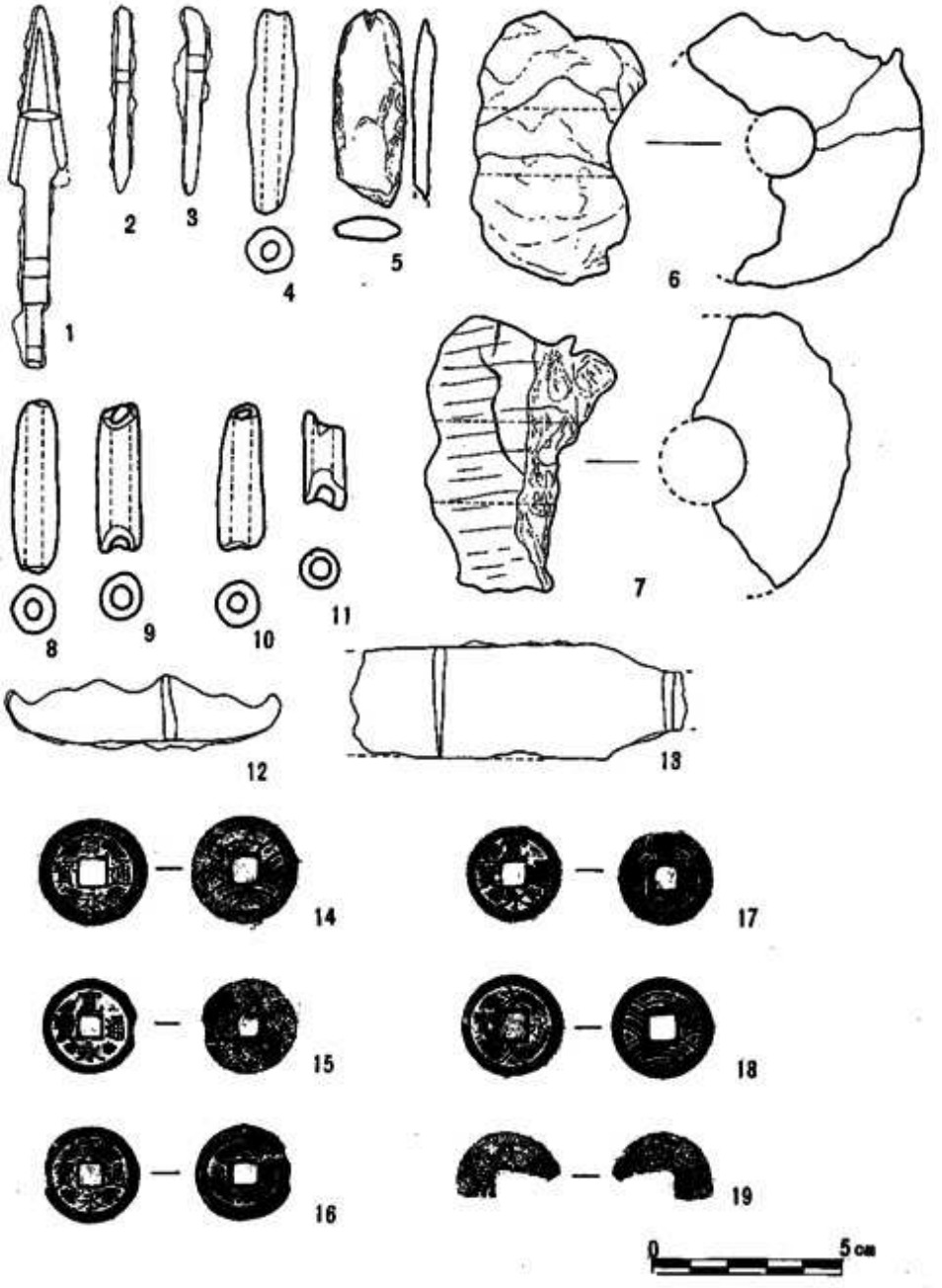
第23図　城山遺跡出土土器（1：3）(19～20　1号住居址，1～18・21　その他)



第24図　城山遺跡出土土器（1：3但し12～33　1：2）（1～33　その他）



第25図　城山遺跡出土石器（1：2但し1・2・4～7　1：4，25～27　1：8）
（1～3　1号住居址，4～27 その他）



第26図　城山遺跡出土遺物（1：2）（1～7　2号住居址，8・9　土器集中区，10～19　その他）

7 大熊城址

1） 位置

大熊城址は諏訪市湖南南大熊2662番地にある(図15の1、38の1、写16の62)。本城址は赤石山脈の北端に位置する守屋山の一支脈で、諏訪湖の沖積地帯に三日月状に伸びる海抜 816m の丘陵上にあり、丘尾切断利用の山城である。丘陵の西側の凹地は城山遺跡であり、東側は荒神山遺跡である。その東側に小田井沢川をはさんで大熊道上遺跡がある。本城址の東側を十数年前つくられた道路が通り、急傾斜地には雑木が繁茂している。城址の地目は畑である。三日月状の城址は、真北に主郭（Ⅰ之郭）があり、その北西に主郭を廻る空濠Ⅰを境にしてⅡ之郭、それより一段下がってⅢ之郭がある。主郭より真南に一段下がってⅣ之郭、一段上がってⅤ之郭、さらに南端にⅥ之郭が存在する(図27)。Ⅵ之郭に隣接する南側が丘尾切断となり凹地になっているが、ここを地元では「トイクチ」と呼んでいる。城址の各郭には地名の面での伝承は特別ないが、主郭は「本丸」、Ⅱ之郭とⅢ之郭を「二の丸」、Ⅳ之郭・Ⅴ之郭・Ⅵ之郭を合わせて「三の丸」と言い伝えている。また、城址の西側の凹地である城山遺跡内に、「カジ畑」・「首洗い井戸」・「銀蔵屋敷」・「立小路」・「サムライ石」・「鎌倉街道」の小字名及び地名伝承が残っている。本城址の西 2.7km に中世の山城有賀城址が、南東2kmに武居城址があり、平坦地をはさんで北北東4kmに桑原城址が、東4kmに上原城址がある(図1)。

中央道は大熊城址のⅣ之郭の南半分、Ⅴ之郭・Ⅵ之郭の北半分を西から東へ通過する。Ⅴ之郭に現存する三等三角点は海抜 816.81m であり、諏訪湖面（759m）との比高差は 57.81m である。

調査は用地内のⅣ・Ⅵ之郭の頂部各半分、Ⅴ之郭頂部全面を掘り、さらに各郭斜面にトレンチを設定して、空濠その他の遺構を検出した。用地外については、諏訪市教育委員会の主催により発掘調査がなされ、一応、大熊城址の全容を掴むことができたのである。用地外の調査についてはそちらの調査報告書を参照されたい。

2） 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、郭・空濠・土橋・帯曲輪・溝址及び土壙墓である。そのあり方から見ると空濠により各郭が独立し、Ⅴ之郭とⅥ之郭は土橋により連繋している。本住居址は自然地形を利用しているが、この種の山城としては比較的大規模な土木工事をしたと考えられる（図28の1、30の1、写16の63)。

ア 郭 （図27・28・29・30、写16・20)

大熊城址は三日月状の自然丘陵を利用して、主郭を中心に6箇所の郭から構成されている(図27)。主郭（Ⅰ之郭）は空濠Ⅰを境にして北西にⅡ之郭・Ⅲ之郭を見下し、真南にⅣ之郭・Ⅴ之郭・Ⅵ之郭を見る位置にある。主郭の北側は急傾斜をなし、北西の空濠Ⅰと主郭の平担面との比高差は約2cmである。Ⅱ之郭と主郭との比高差は1mを計り、Ⅱの郭とⅢ之郭とは2mの差で順次下がっていく。主郭をとりまく空濠Ⅰは、北斜面に両側から急激に落ち、その東側下方に段曲輪の痕跡がいくつかみられる。主郭には建築址が検出され、主郭の南側には高さ3m、長さ約20mの土塁が東西に走向し、その頂部に大熊城主千野丹波守房清の霊祠がある(写20の82・83)。後孫の千野源五郎房儀が建立し、千野儀正が再建したと裏面に刻まれている。その土塁の東側、主郭の東端部に約5cm幅の平担地があり、空濠Ⅰへ緩傾斜を保ってつながる。現在は主郭への農道として利用されているが、往古もあるいはこれに類似した機能をもつ場所であったかも知れない。主郭の面積は1,000㎡、Ⅱ之郭は450㎡、Ⅲ之郭は680㎡であり、空濠Ⅰは上端幅で10mを計る。また、Ⅱ之郭とⅢ之郭の北西斜面中腹に空濠Ⅵが地形と平行に走り、両者を独立させている。

中央道用地内における郭は、前述した如く主郭の南側に位置している。Ⅳ之郭は375㎡で、その頂部が主郭の土塁と同じ高さにあり、Ⅴ之郭との比高差は3mと低い。調査できた範囲内には遺構は見あたらず、Ⅴ之郭との境に空濠Ⅱが検出されたのみである。表土であり耕作土である褐色土は丘陵頂部であることから、地山である礫混在明褐色土まで20～30cmと浅く堆積する(図29の10)。しかし、東側斜面になると幾分厚くなり、その堆積も50cmを計る（図29の9）。

Ⅴ之郭は一部破壊されているものの全面調査出来たが、郭頂部に建築址的痕跡を見出すことはできなかった。南北径22m、東西径13m、面積286㎡の長方形を呈する郭である。西側の凹地に対しては最も急な斜面をつくり、郭直下1mに等高線に沿って帯曲輪を構築している。Ⅴ之郭とⅥ之郭との間には土橋があり、これによって両者は連繋されているが、Ⅳ之郭との間には何もなく木橋的なものと考える必要があろう。Ⅵ之郭との比高差をみると当時は1mくらいであったが(図28の2の1、30の1)、現在は1.5mの差が等高線により読みとれる。Ⅵ之郭から土橋を通りⅤ之郭の西端部を南北に通過する溝址が、Ⅴ之郭にみられる唯一の遺構と言える。この溝址は空濠Ⅱまで続いている。

Ⅵ之郭は大熊城址の最南端の郭であり、主郭に次いで規模の大きな郭である。南北径40m、東西径19m、面積760㎡で、西側に帯曲輪が残り、東側は急斜面となっている。東側の石垣は明治以降に積んだものであり、直接、城址とは関係のないものである。南側は自然地形を切断して弧立した丘陵とし、外敵防禦の意味で幾分空濠的な凹地を形成している。市教委の調査結果によれば、凹地ではあるが空濠的な痕跡を認めることはできなかったとのことである。Ⅵ之郭の平担面には建築址及び土塁的な痕跡はなく、溝址がやや中央部に検出されたのみである。Ⅳ・Ⅴ之郭の地山が礫混在明褐色土であったのに対し、Ⅵ之郭の地山はローム含みの粘質黄褐色土である。また、耕作土である褐色土の堆積も60cmと比較的厚いことが知られている（図29の16)。

以上、主郭からⅥ之郭までその遺構を中心にみてきたが、郭内出土の遺物については、丘陵頂部であり、比較的その面積も狭いことから、皆無と言って良いほど稀少であった。中央道用地内のⅣ・Ⅴ・Ⅵ之郭の包含層遺物は、内耳土器片2点、土師器小片1点、縄文時代中期土器小片1点のみである。また、主郭より鋳物用鉄皿・天目茶椀片、中世陶器片・鉄釘等の発見がみられた。

イ　空濠　（図28・29・30・31、写17・18）

大熊城址の発掘調査で明確に検出された空濠は６本であり、荒神山遺跡側に空濠とは言い難いが溝址が検出されている。空濠Ⅰ・Ⅵは前述した如く諏訪市教育委員会の主催により調査され、空濠Ⅰは主郭をとりまくものであり、空濠ⅥはⅡ之郭とⅢ之郭の側壁面中腹を走向し、その断面形状は空濠Ⅰに類似する。主郭をとりまく空濠Ⅰは、現地形で上端幅約10m、深さ２ｍであったが、調査の結果、深さ４ｍのU字形を呈するいわゆる片二段の箱薬研掘であることが判明した。この空濠は主郭を巡って北斜面に急角度で落込み、等高線でみる限り山裾までその掘り込みが続いている。出土遺物には人骨・馬骨・内耳土器・中世陶器・カワラケ及び古銭がある。やはり主郭に関係する空濠だけにその遺物も豊富である。

他の空濠ⅡからⅤについては用地内検出のものであり、以下順を追って説明していく。空濠ⅡはⅣ之郭とⅤ之郭との間を東西に走向する空濠であり、東側は荒神山遺跡に、西側は城山遺跡の凹地中央部に向って走り、Ⅱ之郭、Ⅲ之郭を防禦する形で浜氏宅の方向に北走する（図28の１）。郭頂部における上端幅は２ｍ、東斜面１トレンチにおいて、４ｍ、西斜面Ｇトレンチ３ｍ、同じく13・14地点 2.5m、凹地中央部の15地点で２ｍの幅員をもち、深さは平均して 1.3m を計り、検出された長さは55m である（図29の９～15、写17の64～66）。空濠はU字形を呈する二段の箱薬研掘である。濠内の土層を13・14地点でみると５層からなり、砂礫層の堆積層が４層みられる。しかも、最下層は砂質明黄褐色土で水の流れた痕跡が明瞭であり、上層のⅡ層・Ⅶ層は地山の礫が水とともに流出してきたきらいがある。中腹のＧトレンチにおいては空濠Ⅴと交わる（図29の12、30の１、写18の71）。空濠内出土遺物は天目茶碗１点（図31の２）、内耳土器小破片、鉄製品１点（図31の３）、祥符元寶１点（図31の４、写17の67）のみである。祥符元寶は北宋の真宗の大中祥符元年（1008年）に鋳造されたものである。

空濠ⅢはⅤ之郭とⅥ之郭を連絡する土橋の両側にある（図28の１、30の１）。両側とも土橋の付近はやや浅く、次第に深くなり最深で５ｍ以上の箇所もみられる。東側の空濠の幅員は６ｍで、Ⅴ之郭側は垂直的に落ち、Ⅵ之郭側はやや緩やかである。空濠の深さはⅥ之郭側東端にて約５ｍ、５地点にて２ｍであり、その断面形態は片側垂直を呈する片薬研掘である（図29の５、写17の68）。空濠最下層には砂礫が堆積し、水の流れたことを如実に物語っている。遺物は縄文時代の石皿１点が出土したのみである（図31の１）。西側の空濠は幅員６ｍ、深さ２ｍであるが、土橋から10m 下方では幅員３ｍ、深さ１ｍとなり、Ｖ字形のいわゆる薬研掘である（図28の１）。Ｅトレンチの第８地点から下方については、城山遺跡内でグリット掘りをした結果、明確な溝址は検出されなかったが、石垣に沿って浜氏宅の方向に北走することがそのレベルから推定された。第６地点の断面は比較的明瞭であり、土層の堆積状況が明確に見られた一列として特記される（図29の６、写17の69）。遺物は皆無であった。

空濠ⅣはⅥ之郭中腹から地形に平行して南北に走向しているが、空濠Ⅲとの関係は不明である（図30の１）。幅員２ｍ、深さ１ｍの断面Ｖ字形を呈する薬研掘で、傾斜面の粘質黄褐色土を掘り込み、谷側に黒色土を盛上げている（図28の２の２、写18の70）。遺物は出土しなかった。

空濠ⅤはⅤ之郭の西斜面、空濠Ⅲ付近から空濠Ⅱに接続する全長21m の比較的小規模な濠である。第２トレンチ第３地点のセクションでみると、幅員1.5m、深さ0.8m で、断面U字形を呈する空濠である（図

28の２の３)。また、空濠Ⅲと接続するＧトレンチにおいては、その規模もやや大きくなり幅員２ｍ、深さ１ｍを計り、その最下層には少量ではあるが砂層が認められる(図29の12、写18の71)。遺物は皆無である。

ウ　土橋　(図28・30、写18)

大熊城址は６の郭からなっているが、各郭を連繋する構造物で明瞭に検出されたのは、Ⅴ之郭とⅥ之郭をつなぐ土橋である。土橋は両郭の西端部に近く、凹地である城山遺跡寄りにつくられている。土橋の幅は３ｍ、長さ８ｍ、両側は空濠Ⅲにより掘鑿され、地山が計画的にとり残されたものである。土橋の東側はⅥ之郭からⅤの郭に走向する溝址があり、そのため実際の通路として利用された幅員は２ｍである（図28の１、30の１、写18の72～74)。溝址が土橋の東側から土橋を交差して、Ⅴ之郭に至る土橋部分の箇所は、何の施設の痕跡もなく、その部分は木蓋をしたものと推定される。土橋検出部分においては遺物は皆無であった。ちなみに、土橋直下の空濠Ⅲの深さは50cmである。

エ，帯曲輪　(図28・30、写19)

ここで帯曲輪と称すのは帯状に細長く郭の側面を囲む曲輪を指す。帯曲輪はⅤ・・Ⅵ之郭の西側にみられる。Ⅴ之郭西側にみられる帯曲輪は犬走り的なもので、郭から 1.2m 下にあり、地形に平行に南北に20m走向し、その幅は60～80cmである（図28の１・２の３、写19の78)。

これに対し、Ⅵ之郭西側に南北に全長45m、幅員３ｍで走向する帯曲輪は、腰曲輪と言うべきものであり、郭より1.8m 下に削平されて構築されている（図28の１・２の２、30の１、写19の75・76)。この帯曲輪の郭側直下に幅１ｍの集石が検出された(写19の77)。その断面をみると約15cmの凹地を掘り、そこに拳大から頭大の河原石や山石を、比較的整然と置いている。北側には土橋がありそのためか集石はみられない。石は土留石かあるいは戦闘用の投石かも知れない。帯曲輪には柱穴らしき痕跡も土塁も認められなかった。

オ　溝址　(図28・29・30、写19)

溝址はⅥ之郭からⅤ之郭にかけて検出され、Ⅳ之郭にはその遺構の痕跡は認められなかった(図28の１)。Ⅵ之郭においては、中央道用地内幅杭に平行してＪトレンチを設けたところ、郭の中央部より西側で幅が1.5m、深さ60cm、Ｋトレンチ内にて幅２ｍ、深さ80cmの遺構が確認され、いずれもその下層に砂礫混在褐色土がみられた(図29の16)。空濠Ⅲに近いⅥ之郭の北側９ｍを全面はがした結果、郭中央部に幅４ｍ、深さ 1.4m、全長約10m の貯水的性格を有する遺構が検出され、溝址はこれにつながることが判明した（図29の17・18、30の２、写19の80)。Ｊトレンチ内で10cmほどの砂層もＫトレンチではやゝ増加し、貯水地では深いところで80cmも砂利の堆積がみられる。この貯水池で水の流れは拳大の石列土手により分岐して、幅60cmの溝址となり、土橋を経てⅤ之郭の西端部を北に走向し、空濠Ⅱに至り消滅する(写19の79)。分岐したもう一方は貯水地から空濠Ⅲの東側に流下する。その直下の堆積は30～50cmと比較的厚く、水の流れ

たことを如実に物語っている。貯水地の堰堤は溝底に拳大の石とともに頭大の石もみられることから、あるいは石等により簡単に構築し、溝址内に常時水を流した余水を空濠Ⅲに落したとも考えられる。土橋からⅤ之郭内を通過する溝址の幅は60cm、深さは土橋で10～25cm、Ⅴ之郭では40cmを計る。土橋とⅤ之郭最北端の両者の溝底のレベル差は42cmとゆるやかであり、そのためか砂利と砂の堆積度が顕著であった。溝址内の出土遺物は内耳土器小破片と鉄片である。

カ　土壙墓　（図30・31、写20）

大熊城址と直接関係をもつ土壙墓は、Ⅴ之郭西側斜面中腹の空濠Ⅱ内にて検出された1基のみである。本遺構は空濠Ⅱがすでに機能を停止した時点でつくられたらしく、空濠Ⅱの底部より50cm上方にて検出され、土壙墓の上面には礫混在黒褐色土層が覆っていた。土壙墓は直径2×1.5m、深さ40cmの長方形を呈し、拳大から頭大の山石を集石している（図30の3、写20の81）。集石の中には木炭片・炭化物・人骨片（焼骨）が多量に出土し、その中から高熱のため形がくずれた古銭などが発見され、火葬場と墓地とを兼用した土壙墓と推定された。

土壙墓内出土遺物は古銭5点のみである（図31の5～9）。高温にあっているため判読不可能なものもあるが、開元通宝2点、至道元宝1点が読みとれる。開元通宝は唐銭であり、至道元宝は北宋太宗の至道年間（995～997）に鋳造したものである。

キ　その他の遺物　（図31）

大熊城址の包含層出土遺物は比較的少量である。土器は縄文時代前期・中期・弥生時代中期・後期・平安時代土師器・須恵器・灰釉陶器、中世及び近世の陶磁器片が若干発見されている（図31の10～13）。また、土師器の墨書土器小破片が1点ある。石器は特殊磨石1点（図31の16）のみであり、他に寛永通宝2点が出土している（図31の16）。

3）　大熊城址の植生

大熊城址は一地方の一豪族の山城ではあるが、いざ戦闘となった場合に籠城と言うこともあり、自然環境を最大限に利用する必要性が生じる。その意味で当時と現在とでは時間的・景観的な差異はあるが、一応、大熊城址の植生を記録し今後の参考に供したい。本調査は諏訪教育会自然研究部植物委員会の坂本圭司・森山久夫・保坂四郎・毛利光政の四氏にお願いし、昭和48年10月20日に実施したものである。科の配列は大井次三郎著「日本植物誌」、種は本田正次著「日本植物名彙」により記載した。※印は薬用植物である。但し、調査時点の関係のため、草本類は春から初夏のものが大部分姿を消し記録に留め得なかった。

とくき科	スギナ　※利尿
おしだ科	ヘビノネコザ　イヌワラビ
いちい科	イチイ
ひのき科	サワラ
いね科	ヤダケ（写20の85）　ミヤコザサ　アオカモジグサ　カモジグサ　ヌカボ　トダシバ　ノガリヤス　カモガヤ　メヒシバ　アキメヒシバ　イヌビエ　オヒシバ　カゼクサ　アシボソ　チガヤ　ススキ　ネズミガヤ　チヂミザサ　ヌカキビ　チカラシバ　キンエノコロ　オオエノコロ　ムラサキエノコロ　オオアブラススキ
かやつりぐさ科	ミズガヤツリ
さといも科	アオマムシグサ
つゆくさ科	ツユクサ　※利尿
ゆり科	ヤブカンゾウ　※淋病　アサツキ　アマドコロ　※打撲・強壮剤　シオデ　タチシオデ　ヤマガシュウ　サルマメ
やまのいも科	ナガイモ（逸出）　タチドコロ
やなぎ科	イヌコリヤナギ　バッコヤナギ
くるみ科	オニグルミ　（野化）
ぶな科	クリ
にれ科	ケヤキ
くわ科	クワクサ　カナムグラ　カラハナソウ
いらくさ科	クサコアカソ　アオミズ
たで科	ツルソバ　イシミカワ　サクラタデ　ヤナギタデ　イヌタデ　※（駆虫剤）　アキノウナギツカミ　ミゾソバ　※止血　ミチヤナギ　イタドリ　※（利尿）　エゾノギシギシ　ミズヒキ　キンミズヒキ
あかざ科	シロザ　アカザ　※（歯痛・解毒）
ひゆ科	ヒナタイノコヅチ　イノコヅチ　※（利尿・外傷）　イヌビユ
やまごぼう科	ヨウシュヤマゴボウ
すべりひゆ科	スベリヒユ　※利尿・解毒
なでしこ科	ナンバンハコベ　フシグロ　ウシハコベ　ハコベ
きんぽうげ科	ボタンヅル　クサボタン　カラマツソウ　※（下痢止）
あけび科	アケビ　※利尿・鎮痛・排膿　ミツバアケビ
くすのき科	ダンコウバイ
けし科	クサノオウ　タケニグサ
あぶらな科	ナズナ　※下痢・腹痛　イヌナズナ　※利尿
ゆきのした科	ウツギ　チダケサシ　ザリゴミ
ばら科	ヤマブキ　ノイバラ　※下剤・利尿　ニガイチゴ　ナワシロイチゴ

ま　め　科	ヤブマメ　ヌスビトハギ　イタチササゲ　ヤマハギ　クズ　※解熱剤 クサフジ　ヨツバハギ　ナンテンハギ　フジ
ふうろそう科	ゲンノショウコ　※整腸剤
かたばみ科	エゾノタチカタバミ
みかん科	サンショウ　※駆虫剤・健胃・整腸剤
にがき科	ニガキ　※胃・駆虫剤
とうだいぐさ科	エノキグサ
うるし科	ヌルデ
にしきぎ科	オニツルウメモドキ　ニシキギ　マサキ　ツリバナ
みつばうつき科	ミツバウツギ
つりふねそう科	キツリフネ　ツリフネソウ
くろうめもどき科	クロツバラ
ぶどう科	ノブドウ　※洗眼
すみれ科	タチツボスミレ　ヒカゲスミレ　ケマルバスミレ
あかばな科	アレチマツヨイ
うこぎ科	ヤマウコギ　ウド　※頭痛・中風　タラノキ　※糖尿・腎臓
せり科	シラネセンキュウ　ミツバ　ヤマゼリ　オヤブジラミ
みずき科	ミズキ
つつじ科	レンゲツツジ
えごのき科	エゴノキ
くまつづら科	コクサギ
しそ科	クルマバナ　ナギナタコウジュ　※利尿・脚気　カキドウシ　ヒメジソ
なす科	クコ　※解熱・強壮剤　センナリホウズキ
ごまのはぐさ科	キリ（逸出）
おおばこ科	オオバコ
あかね科	ヤエムグラ　ヨツバムグラ　クルマムグラ　ヘクソカズラ　カワラマツバ アカネ　※利尿・止血・解熱剤
すいかずら科	スイカズラ　※利尿・健胃　ミヤマウグイスカグラ　ニワトコ（写20の84） ※利尿・解熱剤
ききょう科	ツリガネソウ　※健胃・強壮剤　ヤマホタルブクロ　バアソブ
きく科	ヨモギ　アメリカセンダングサ　ノコンギク　タイアザミ　ノアザミ　※ 利尿・胃　ヒメジョオン　ヒメムカシヨモギ　ヒヨドリバナ オオジシバリ　ユウガギク　アキノノゲシ　※解熱剤・タムシ　フキ　※鎮 咳剤・健胃　コウゾリナ　アキノキリンソウ　エゾタンポポ セイヨウタンポポ　ヤクシソウ　（以上57科 167種）

4） まとめ

調査の結果、今まで不明であった大熊城址そのものの全貌が明らかになったばかりか、その周辺遺跡における中世遺構が、大熊城址と密接な関係を有することが明確になり、中世山城の研究に寄与すること大であった。ここでは大熊城址とそれに関連する周辺遺跡の遺構について述べ、簡単な所見を付しておきたい。

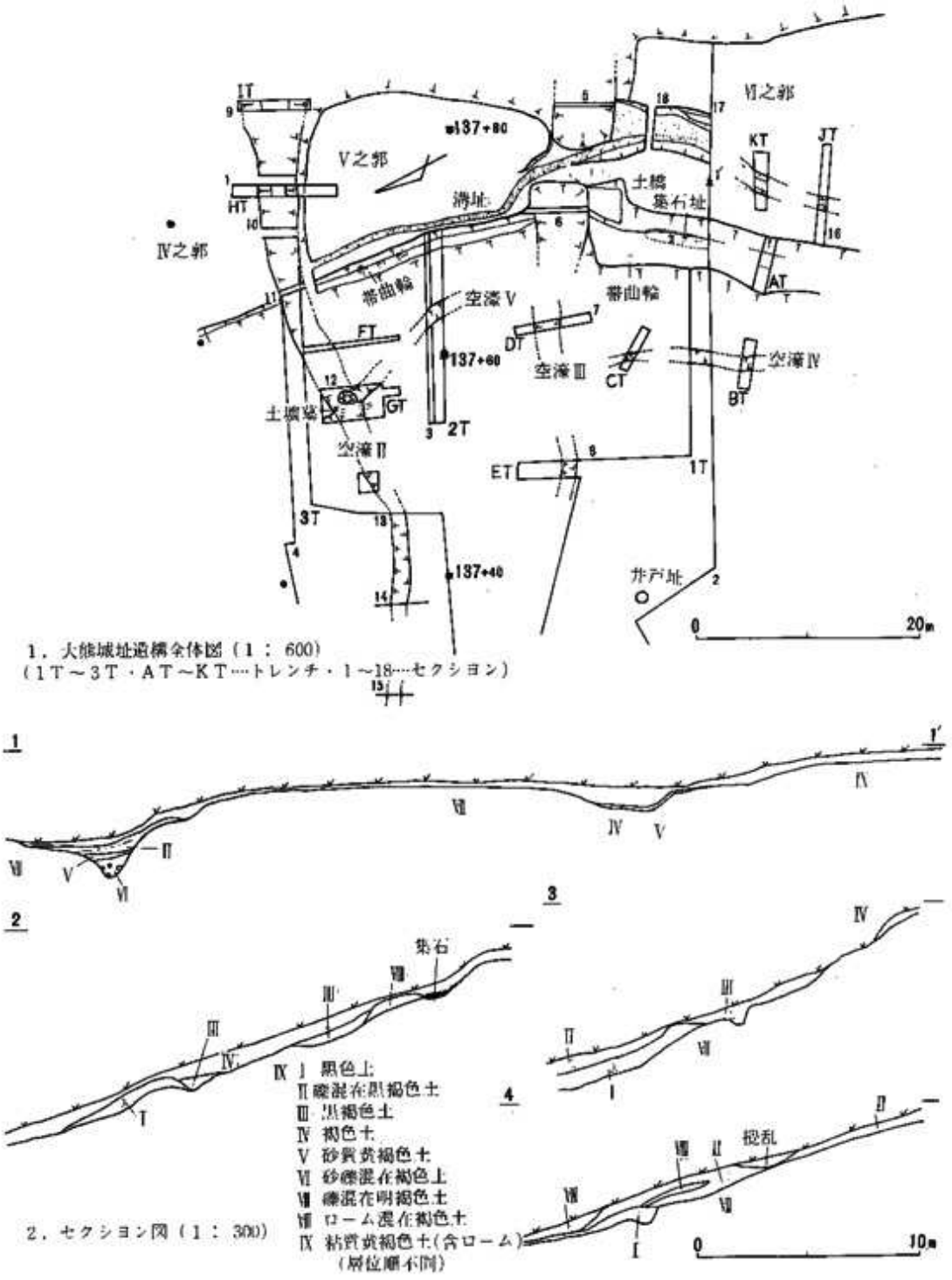
大熊城址は守屋山の一支脈の三日月状を呈する自然丘陵を利用した南北 200m 、東西40m 程の小規模な山城である。郭は主郭（第Ⅰ之郭）を中心に６の郭から構成され、空濠によってそれぞれ独立している。すなわち、主郭は空濠Ⅰによって囲繞され、その平坦部に柱間 1.8m の土台が長方形に並ぶ建物が存在し、その南側に土塁が構築されている。主郭の北西方向に一段と低くⅡ之郭とⅢ之郭があり、両者は空濠Ⅵによって分けられる。主郭の南側にはそれぞれ一段と高くⅣ・Ⅴ・Ⅵ之郭がみられる。Ⅳ之郭とⅤ之郭の間に空濠Ⅱが、Ⅴ之郭とⅥ之郭との間に土橋をはさんで空濠Ⅴが検出されているが、Ⅵ之郭と南側に隣接する自然の尾根との間には空濠はみあたらない。主郭を除いた他の郭はその平坦部面積からみても小さく、特記すべき遺構を残していないが、Ⅴ・Ⅵ之郭に検出された溝址は注意すべきである。市教委の調査結果によれば、南側の中央道用地外の尾根には、用地内と同様の水の流下した砂利層の痕跡が認められている。それもⅥ之郭との間の凹地には確認できず途中で消滅しているが、Ⅵ之郭内の溝址とのレベル差からみて、また、この地点周辺の小字名「樋口(トイクチ)」から推察して、先ず同一の溝址とみてさしつかえあるまい。ちなみに、この山城の伝承に「隠し水道」があり、今回の調査はそれを裏付けたことになる。しかし、この溝址の性格を単に飲料水確保のものだけとした場合、その遺構がⅥ之郭から土橋を経てⅤ之郭に至り、その最北端で消滅して空濠Ⅱに注ぎ込むなど比較的問題点が多いのである。しかも、Ⅵ之郭中央部には貯水的な性格をもつ遺構が残り、空濠Ⅱ及びⅢに多量の砂利層が堆積する事実は、主郭までの引水方法を樋乃至はサイフォン方式を用いたのか、あるいは主郭まで到達させる必要がなかったのかいずれであろう。郭以外の平坦地としては山城の東側斜面に段曲輪の痕跡がいくつか認められ、西側斜面に帯曲輪が検出されている。Ⅴ之郭直下の帯曲輪はその幅が狭く犬走り的なものであり、Ⅵ之郭の帯曲輪は幅員３m を計り、西側のみにあることを考慮すれば腰曲輪と言うべきものである。また、その付根の集石は土留石と言うより戦闘用の投石として用いられた公算がより濃厚である。特に帯曲輪が西側斜面にのみ設けられたことは、城址をとりまく地形に起因し、空濠Ⅳ・Ⅴと同様に外敵防禦をより効果ならしめるものと考えたい。本城址の空濠は６本検出されている。このうち空濠Ⅰ・Ⅱ・Ⅵは片二段の箱薬研掘であり、ⅣはⅤ字形を呈するいわゆる薬研掘である。また空濠Ⅲはその東側が片側垂直を呈する片薬研掘であるのに対し、土橋をはさんだ西側はⅣと同じ薬研掘である。この断面の相違はその構築の時間差を示すのか、あるいはその防禦位置によって異なるのか目下のところ不明である。

次に、本城址に関係する周辺の中世遺構について触れておきたい。中世におけるこの時期の山城は、常時人がそこで生活するのではなく、いざ合戦の場合に限って山城に入り戦闘するのであり、普通は山城の直下の平坦地に居館を建てて生活し、山城には見張り人を残すのが原則であった。大熊城址は千野氏の持

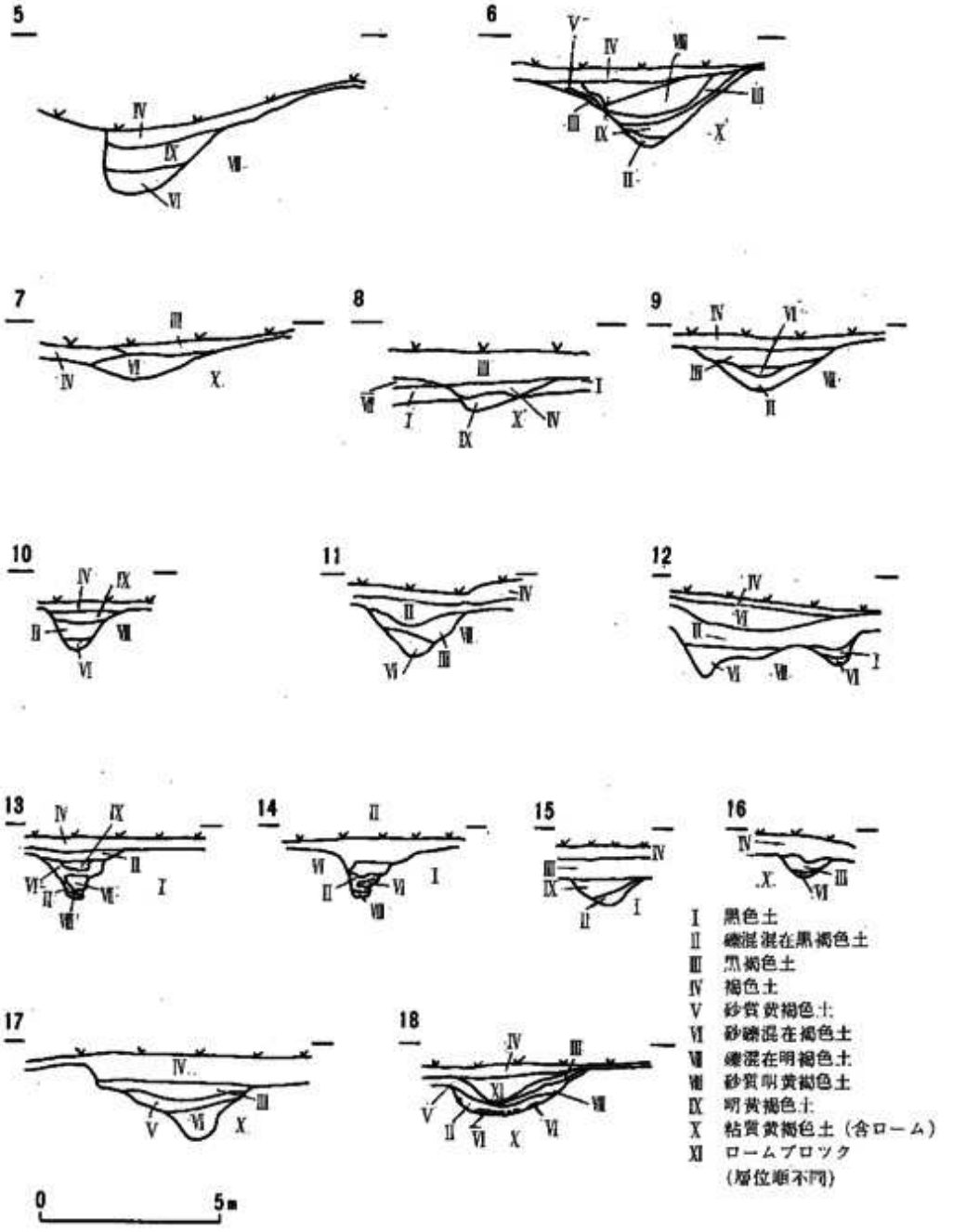
城と言われ、諏訪大社上社の勢力圏に所属するものであり、下社の動静を監視するのが当面の課題となっていた。その意味で郭頂部の建築址が諏訪湖畔を眼下にみる主郭のみにあることも納得でき、一連の上社方の山城のあり方もこれまた意味をなしていると言えるのである。本城址の居館は山を越えた西側に設けるより、上社寄りの東側平坦地のいずれかにあるものと推定したのであるが、予測した如く、大熊城址東側斜面下の荒神山遺跡において、南北 9.5m 、東西 6.5m の建築址が検出され、しかも、その遺物中には中国竜泉窯の青磁をはじめとし、黄瀬戸・古瀬戸の天目茶碗・小皿・内耳土器・カワラケなど良好な資料が発見されている。このため、建築址は室町時代の千野氏の居館址と想定し、山城に対する根小屋的性格を持つものと考えたのである。ちなみに、この周辺の中世住居址は、居館址付近には台石を有する高床住居が多く、小田井沢川の東側の大熊道上遺跡では竪穴住居址が検出されている。中世竪穴住居址例は県内でも最近相次いで発見され、飯田市小垣外遺跡・上金谷遺跡、下伊那松川町的場遺跡など、その構造・規模に近似性が認められる。おそらく、千野氏の居館を中心とした集落がこの周辺一帯に形成されていたものと推定して先ず間違いなかろう。さらに、大熊城址西側の平坦地城山遺跡にも中世建築址が検出され、その出土品中のカワラケは梵字が墨書されており、その書体から室町時代中期に比定されたのである。九字からなる梵字の内容によってこの遺構の性格が示唆され、注目すべき事実が判明している。すなわち、室町中期頃、大熊城主が合戦による死者を供養し、あわせて城址の八方守護の安鎮を天台系の密教僧に依頼し修した際、伴像として用いたのがこの土器であり、それはとりもなおさず、この建築址が信仰的意義を有するものと考えられ、草堂的な建物が想定されたのである。特に梵字墨書土器に示された安鎮法は、禁裡・親王・将軍・大名等が行なうもので、一般では修さない不動鎮宅法である。このことから推しても相当な有力氏族がこれにかかわっていることが理解されるのであり、当地方では諏訪氏かその一族をおいては外に考えられないのである。大熊城が文献に登場する最初は、上社の内訌として著名な文明15(1483)年の政変である。『神長官守矢満実書留』によれば、「文明十五年三月十九日上宮湯殿□□□上宮へ□討取遠江守クヒヲ大熊城ニ二夜懸置候」とあり、下社大祝金刺興春（遠江守）が諏訪統一の野心からこの政変に加担し、桑原城を守っていた矢崎肥前守たちと湯之上で戦い大敗し、さらに下社は焼かれ興春は殺され、その首が大熊城に二夜さらされたと記されている。この事変により大熊城が当時存在していたことは明確であり、また、「首洗い井戸」の伝承が今日まで残り、それと直接かかわりあるか否かは別としても、Ⅵ之郭西側斜面下の門地に中世井戸址が検出されている事実は非常に興味深いのである。井戸址の位置は城山地籍内ではあるが、山城との比高差及び山城での飲料水確保等々から推測すれば、大熊城址に密接な関係を持つことは先ず疑いないであろう。

さて、本城址の起源とその終末については、山城の発掘調査が全国的にもすくなく、資料の比較検討を要せねばならず、しかも文献資料が稀少のため、ここでは結論をさし控え、後日、多くの類例をまって考察を試みたいと考えている。ちなみに、終末問題の一資料として鉄砲の発見と、金子城築城（天正12年）の件を付記しておく。また、大熊城主千野氏及び中央道用地外の遺構詳細については、諏訪市教育委員会発行の報告書を参照して戴きたい。最後に、本調査のため多忙の中を視察されご指導下さった一志茂樹先生、用地外発掘担当者として調査に協力を惜しまれなかった宮坂光昭氏に衷心より感謝の意を表すとともに、この報文が今後の山城研究の一助となることを祈念したい。　　（岡　田）

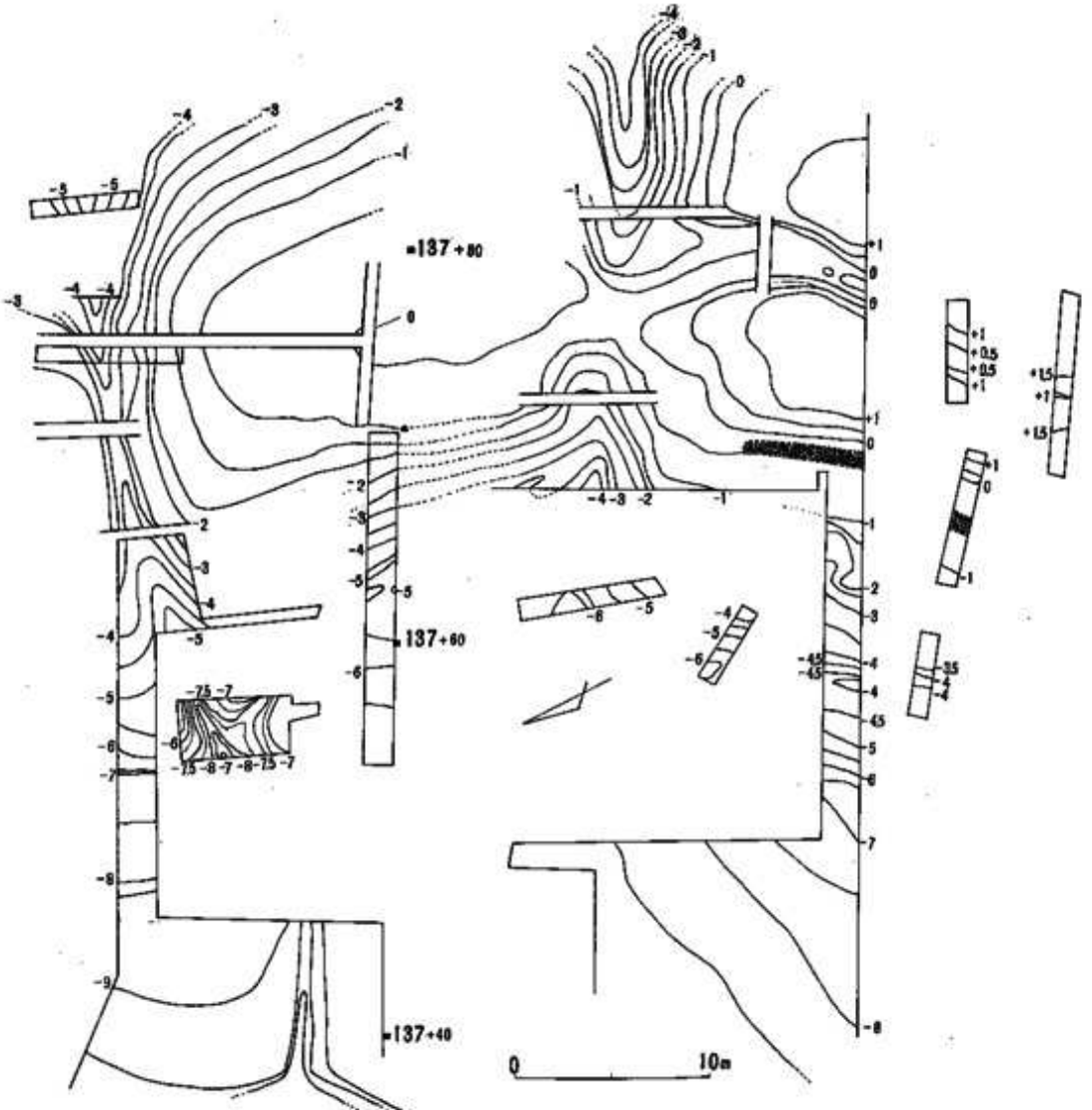
第27図　大隈城址地形図（1：80）（三角点－0.25mコンター）　0　20m



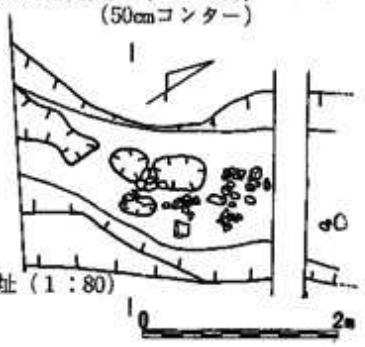
第28図　大熊城址遺構全体図及びセクション図



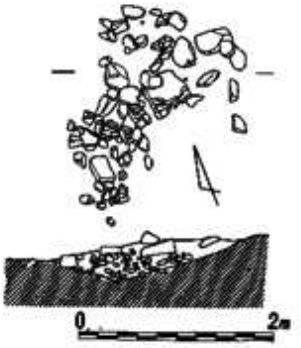
第29図　大熊城址セクション図（1：200）



1．大熊城址実測図（1：400）
（50cmコンター）

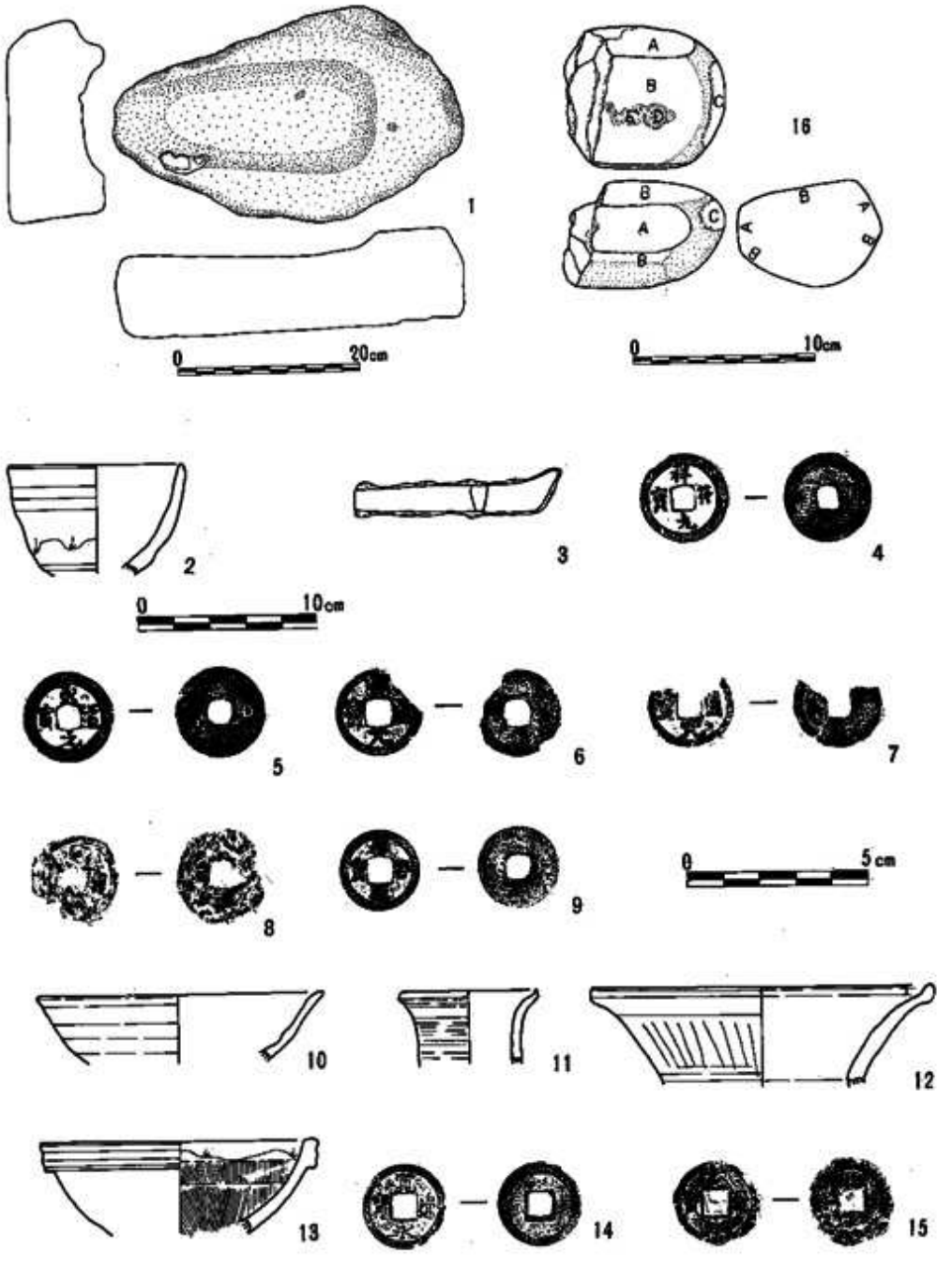


2．溝址（1：80）



3．土壙墓（1：80）×印古銭

第30図　大熊城址実測図・溝址及び土壙墓



第31図　大熊城址出土遺物（1：2但し1　1：8，2・10～13・16　1：4）
（1空濠Ⅲ東側，2～4　空濠Ⅱ西側，5～9　土壙墓，10～16　その他）

8 大熊道上遺跡

1） 位置

遺跡は諏訪市湖南字南大熊に所在する(図32の1、写21の86)。小田井沢川をはさみ荒神山遺跡の東側に位置する小台地で、台地の南側は急峻な山である。北側はわずかに低くなり、一段さがって北寄りに南方御社宮司社があり、東側は急斜面となっている。台地は45×30m位のひろがりがあり、標高は 792m である。台地上からは東に諏訪大社上社、さらに盆地を越えて八ケ岳・蓼科・霧ケ峰・和田峠・高ボッチ・美ケ原、その北西に北アルプスが一望のもとに見わたせる。

調査はセンター杭 139+60をＡＡとしてＡＱまで、35～56にグリッドを設定した。層序は台地中央から北西にかけて、耕作土・その下に礫混在砂質褐色土があるが、南側から山寄りにかけてはこの二層の間に1ｍをこす黒色土がみられた。この黒色土に3号住居址が構築されている。

2） 遺構と遺物

本遺跡の調査区では、平安時代の住居址3軒、中世の竪穴式住居址2軒、中世の建築址1軒とこれらに伴なう遺物が検出された(図32の2)。また、少量ではあるが縄文時代中期の遺物も発見されたが遺構は存在しなかった。

ア 住居址

ア） 1号住居址 (図32、写21)

遺構 台地中央西寄りで建築址に近接して礫混在砂質褐色土を掘り込んで検出された。プランは3.60×4.10m、深さ50cmの方形竪穴住居址であり、その主軸方向はN33°Wである(図32の3、写21の88)。床面は地山を掘り込んだままであり、床面付近に多量の石が並ぶ中世住居址に多くみられる特徴を持っている。覆土には全体的に少量の炭化物が散在する。壁はわずかに傾斜するが明確である。また、西隅の壁が他の3ケ処に比較してゆるやかな傾斜となっている。床面には石のほかに柱穴が4ケ所検出された。また壁外にも住居址の短辺にそって3ケ所ずつ6ケ所の柱穴が検出された。このことは上屋構造を知る手掛りとなるであろう。

遺物 本住居址出土の遺物は内耳土器片・天目茶碗片・カワラケ片・鉄滓・鉄片等である。これら遺物はすべて少片であり、住居址覆土のⅠ層下部・Ⅱ層上部からの出土であるが、地点的な集中性はみられず量もきわめて少なかった。

イ）　2号住居址　（図34・36・37、写21・22）

遺構　台地中央部に位置する。礫が多く、また黒色土層中の遺構のため検出は困難を極めた。しかし、北西半分が褐色土を切っていたので一応プランの確認ができた。形状は東西径4.05mのややゆがんだ方形竪穴住居址である(図34の1、写21の89)。覆土は黒色土で主軸方向はN35°Wをはかる。壁高は残存した高さで10cm内外であり、ほぼ垂直に立ち上がる。南東壁は確認できなかった。竈は北西壁中央部やや北寄りに位置し、その形状は石組粘土竈であり、煙道は壁外に出さず、壁にそって立ち上がらせてものである(図34の2、写21の90)。床面は竈周辺では硬い面がでたが、南東4分3程は床面らしき様子はほとんどなかった。本住居址の東隅に4号住居址の竈を破壊したと思われる焼土が残存していた。4号住居址との関係は一部貼床面もみられるので、本住居址が新しいと考えている。主柱穴は3ケ所確認できた。このうち2ケ所は住居址西側で、竈の両側に壁をやや切り込んで存在した。また他の1ケは東隅にあった。東隅の柱穴は南東壁の位置を推定する資料となるであろう。

遺物　本住居址出土遺物は土器の他に土製品と鉄製品がある。土器は土師器鍔釜（図36の1）・甕形土器片・坏形土器(図36の2～8)、須恵器甕形土器片・坏形土器片、灰釉陶器椀土器（図36の10）・皿形土器（図36の11～15）である。また墨書土器が2点みられた(図36の7・8、写22の92)。他に不明銅製品（図37の1）と鉄製品（図37の2）及び土錘8点（図37の3～10、写22の93）がある。

ウ）　3号住居址　（図33・36・37、写22）

遺構　台地南東隅に位置する。黒色土層中の遺構であるため検出は困難を極めた。形状は隅丸方形で、東西4.55m、南北3.70mを呈し、その主軸方向はN53°Wである（図33の1、写22の94)。壁高は南側で30cm、北側で15cmを計りほぼ垂直な壁である。床面は全体に硬く、北西側がロームの貼床となる。また北側隅は特に硬い。この隅は他の隅と異なり、やや大きく緩やかに曲っていることから、床面の硬いことも合わせて出入口であったことも考えられる。竈は南側隅にあり、石組粘土竈であるがほとんどくずれている(図33の2、写22の95)。竈東側の壁は石が積んであり、土留めの性格をもつものと考えられる。さらに、この付近の床には石が散在しており、こちら側の土が軟弱であったとも考えられる。竈の西側に隣接して40×60cm、深さ20cmの、底に平石を置いた長方形を呈する穴があり、貯蔵穴と推定された。住居址西隅にはピットがみられ、この上面に3～5cmの厚さで焼土が存在した。焼土の上面は床面と一致する。このことから竈の移築があったものと想定される。床面上に柱穴と思われるものも存在したが、黒色土の床の部分のため、すべてが確認できたとは言い難く、柱穴の配置状態は不明である。

遺物　土器と鉄製品がある。土器は土師器の坏形土器と皿形土器があり(図36の16～20)、また灰釉陶器の盞片・椀形土器片・段皿2点（図36の21・22、写22の96）がある。金属製品としては釘が発見されている（図37の11)。

エ）　4号住居址　（図34・36）

遺構　台地中央で2号住居址に切られて東側に存在する。形状は一辺が4.8mで他辺は不明であるが、隅丸方形を呈するものと思われる(図34の1)。壁高は15cm前後で北東壁のみ確認された。床面の状態は北

東半分が礫混在砂質褐色土で良好であるが、他は明確でない。主柱穴は3ケ所確認できた。これらの柱穴内に礫がわりあい多く入っており、根固めに用いられたものと思われる。竈は東壁の中央と推定される部分に焼土が残存しているが、2号住居址構築時に破壊されたため、痕跡しか認められない。

遺物　本住居址出土遺物は土器のみである。土師器の坏形土器(図36の23・24)と須恵器の坏形土器（図36の25）の破片である。

オ）　5号住居址　（図34・36・37、写23）

遺構　台地中央北寄り、建築址の東側に発見された中世の住居址である。形状は方形で規模4.20×6.10mを計る。主軸方向はN36°Wである（図34の3、写23の97・98)。壁高は50cm内外で、ややなだらかであり、北壁は硬く良好であるがその他は軟弱である。床面は硬く良好であるが、南東側半分は石が敷きつめてあり、住居址内の利用目的の差異をあらわしていると考えられる。竈も炉址もなく、また柱穴も明確に検出することはできなかった。

遺物　本住居址出土遺物は、内耳土器片・かわらけ片（図36の26）・陶器片（図36の27）と鉄製品である。鉄製品には釘（図37の12）・刀子（図37の13・14）・永楽通宝（図37の15、写23の99）がある。

イ　建築址　（図35・36、写23)

遺構　台地北寄りに検出された中世の建築址である。規模はおよそ9×13mであり、その主軸はN40°Wを示す(図35、写23の 101)。この中に長軸の方向に8条、短軸の方向にも数条のにぎり拳大乃至は人頭大の礫の帯状石列がみられる。これらは比較的浅いために、耕作の影響を受けており、その規模・形状の正確な把握はできなかった。ましてや、帯状石列内に柱跡と想定できる痕跡はなく、円形的配石も平石の柱台的なものも検出できなかった。

遺物　本建築址出土遺物は、中世のかわらけ片2点のみである(図36の29、写23の 100)。特に29は、配石址の上部にほぼ完形で発見され、その上部には土が盛ってあり、城山遺跡の2号建築址と類似する性格をもつものと考えられる。

ウ　その他の遺物　（図36・37)

包含層出土遺物には土器・石器・鉄製品がある。土器には土師器坏形土器(図36の30)、灰釉陶器椀形土器（図36の31）・皿形土器（図36の32)、中世以降の内耳土器片・かわらけ片・陶磁器片がある。また、縄文時代前期及び中期の土器片もある。石器は石鏃5点(図37の19～23)、ドリル1点(図37の24)、敲打器2点（図37の25)、凹石2点（図37の26)、磨石1点(図37の27)、砥石2点がある。また鉄製品として、鉄砲玉1点（図37の16)、刀子2点（図37の17・18)、釘2点、古銭（寛永通宝）1点、鉄滓等がある。

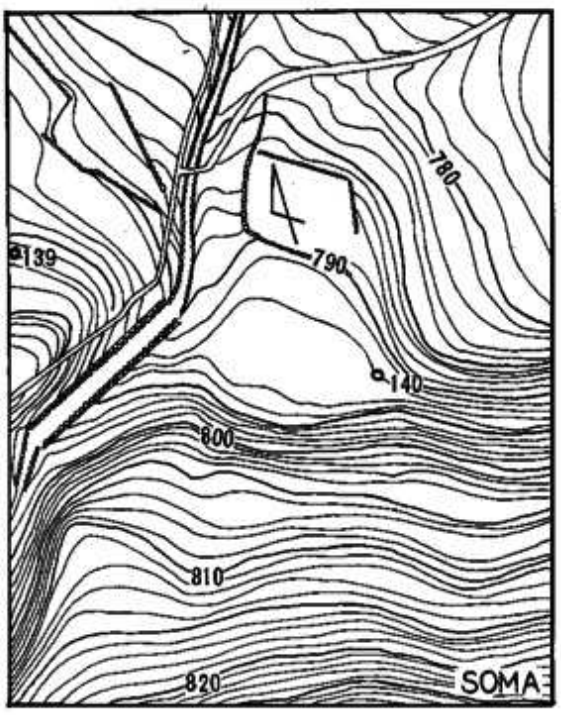
3） まとめ

大熊道上遺跡は小田井沢川の南側に位置する小台地である。中央道はこの台地全体をその用地としている。本遺跡の中心部は下方の扇状地にあるが、一台地の全体を掘り上げた点に意義がある。

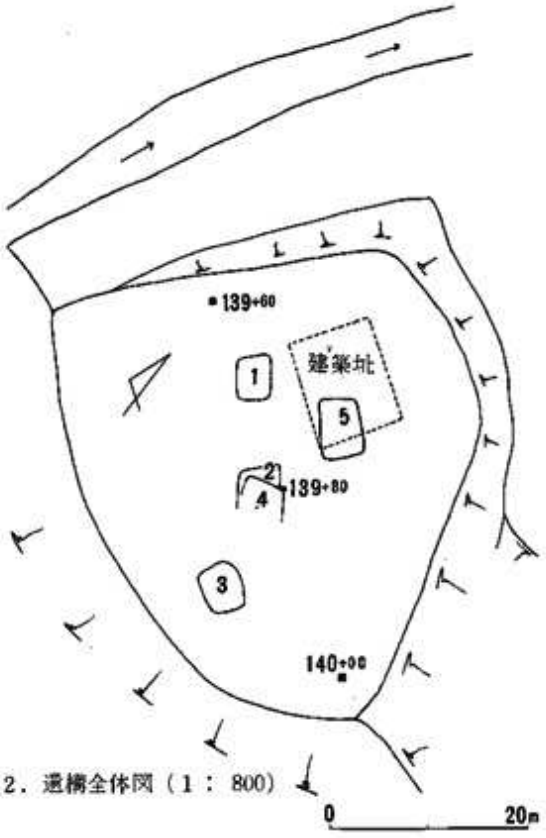
今回の調査によって判明した当台地上における時代相は、縄文時代前期・中期、平安時代、中世、近世であるが、検出された遺構は平安時代住居址3軒、中世住居址2軒、中世の建築址1軒である。このうち特に注目されるのは中世の遺構であろう。2軒の中世住居址はその形状からみて、飯田市伊賀良の小垣外遺跡検出の竪穴住居址と類似している。今後とも同種の遺構が増加すれば新知見が得られるものと思われる。建築址は城山遺跡2号址の建築遺構と類似し、その配石及び列石のあり方、遺物の出土状況など特に考慮する必要があろう。列石の性格については雨落し用のものと柱の土台置き用のものとの二説が考えられるが、先ず土台用と考えるのが妥当かと思われる。本遺構の検出された小台地そのものについてみても、南側、山寄りの斜面と東側の斜面を含む台地全体を削平したと推定でき、西に続く荒神山遺跡の中世遺構・居館址、大熊城址、城山遺跡の中世遺構と関連し、中世山城の一区画を構成するものと考えられる。これらのことから、中世山城は一般に考えられているよりも、かなり広範囲なものであることがうかがわれ、今後の城郭研究に問題を提起するものと言える。また、中世の竪穴住居址と建築址の時間的差異について少しくふれておきたい。5号住居址と建築址との関係をみると、5号住居址の3分2が建築址の下にあり、換言すれば、永楽通宝を床面より発見した5号住居址の上部に建築址が建立していたことになり、中世の遺構はともに室町時代と想定して先ずまちがいないであろう。最も建築址は場合によっては、江戸時代まで使用されていたかも知れないが、その建立は出土かわらけより室町後代末期と考えている。

平安時代の住居址は3軒検出されているが、小田井沢川西側の荒神山遺跡の同時期の住居址とも考え合わせ、両遺跡は川こそ間にあるものの非常に関連深いものと考えている。2号住居址出土の土錘8点は下諏訪町の殿村遺跡よりも多数の土錘がでており、諏訪湖周辺の平安時代の生産様相を知る一つの手がかりとして、貴重な資料を提供したと言えよう。また、縄文時代について言えば当遺跡を縄文時代の独立した遺跡と考えるよりは、荒神山遺跡の一部と理解すべきであり、それが遺物の散布のみであることから推察できるのである。

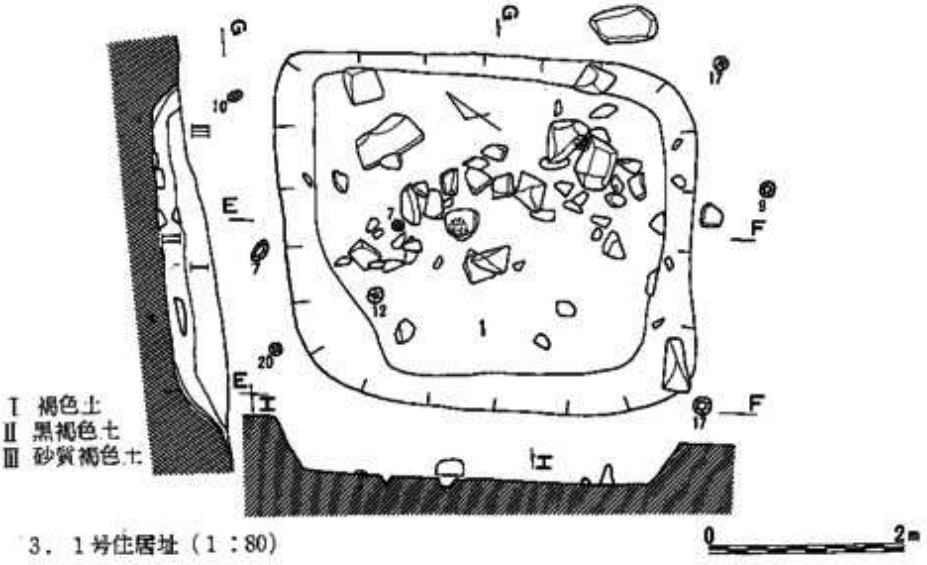
いずれにしても、本遺跡は中央道により頂部が確認されはしたが、その中心部が用地外北側にあり、この地域での開発には今後充分なる調査が必要かと思われるのである。　　（松　永）



1．大熊道上遺跡地形図（1：2000）

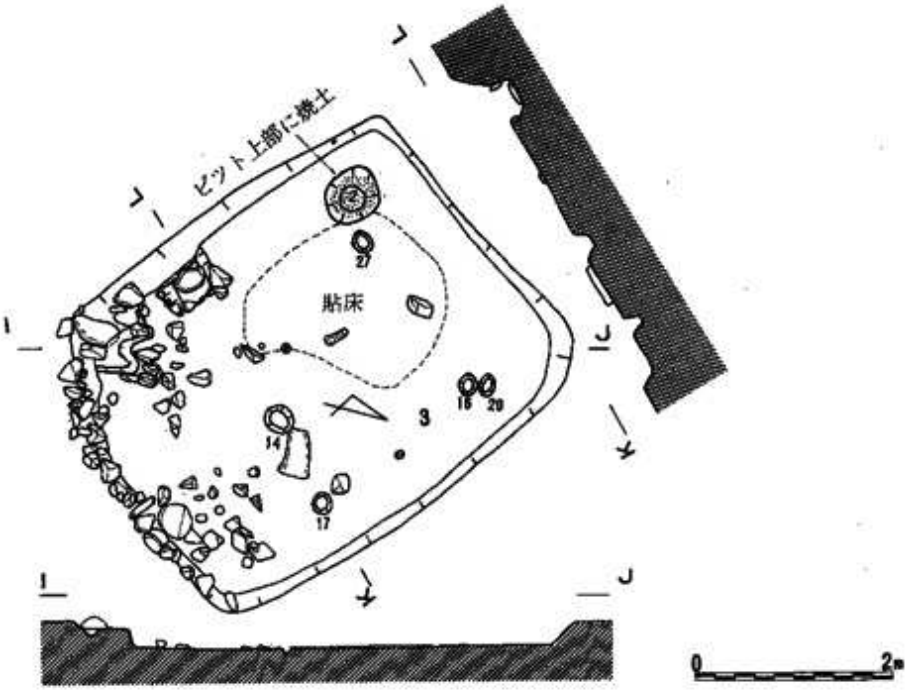


2．遺構全体図（1： 800）

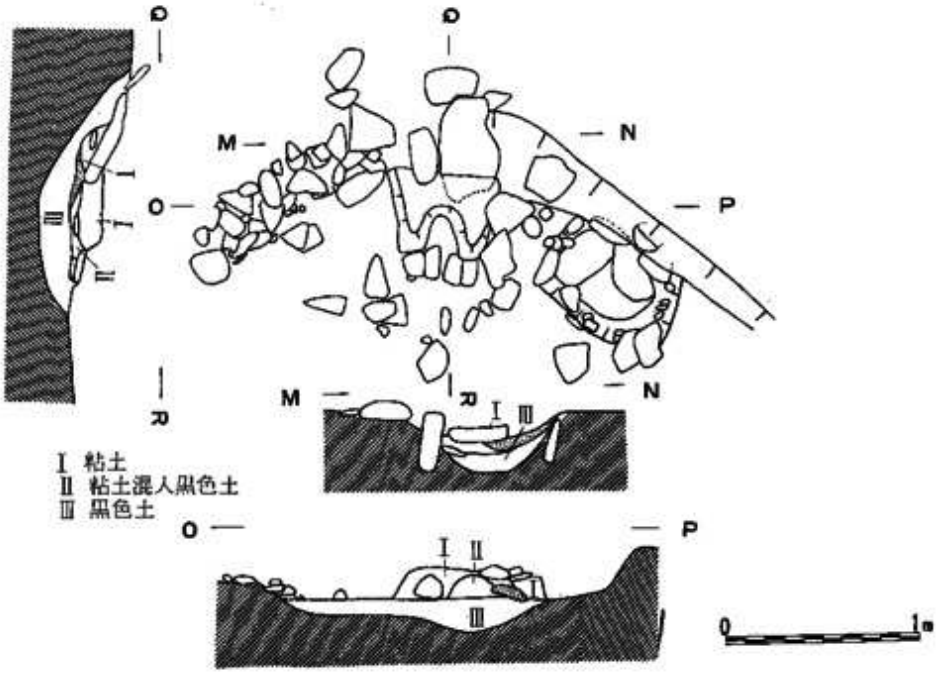


3．1号住居址（1：80）

第32図　大熊道上遺跡地形図遺構全体図及び1号住居址

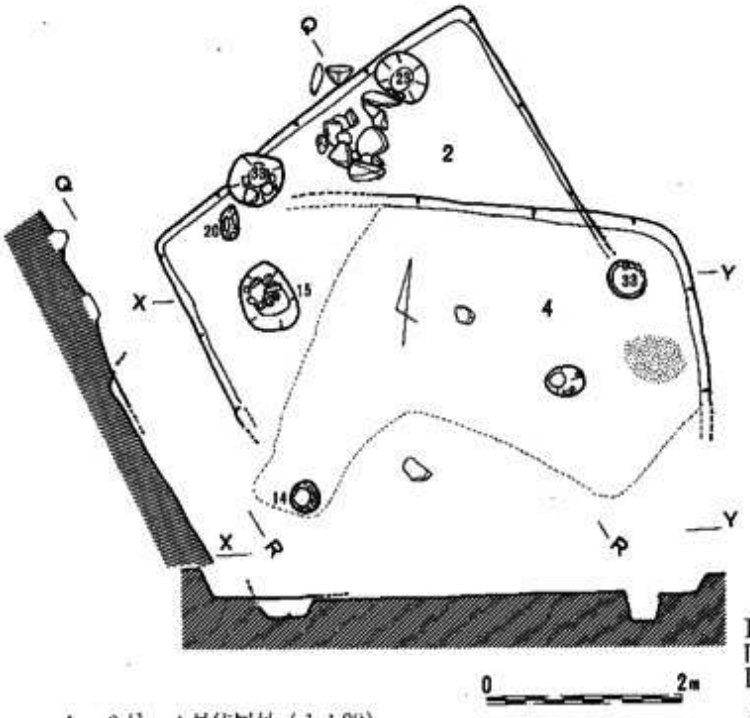


1．3号住居址（1：80）

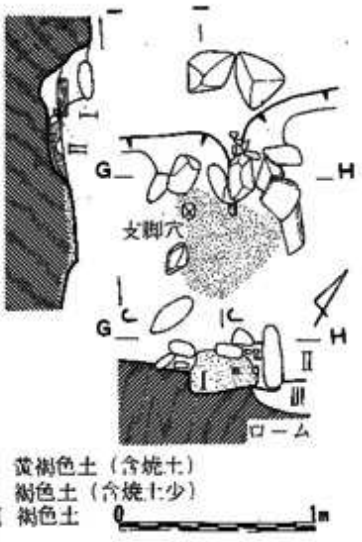


2．3号住居址カマド（1：40）

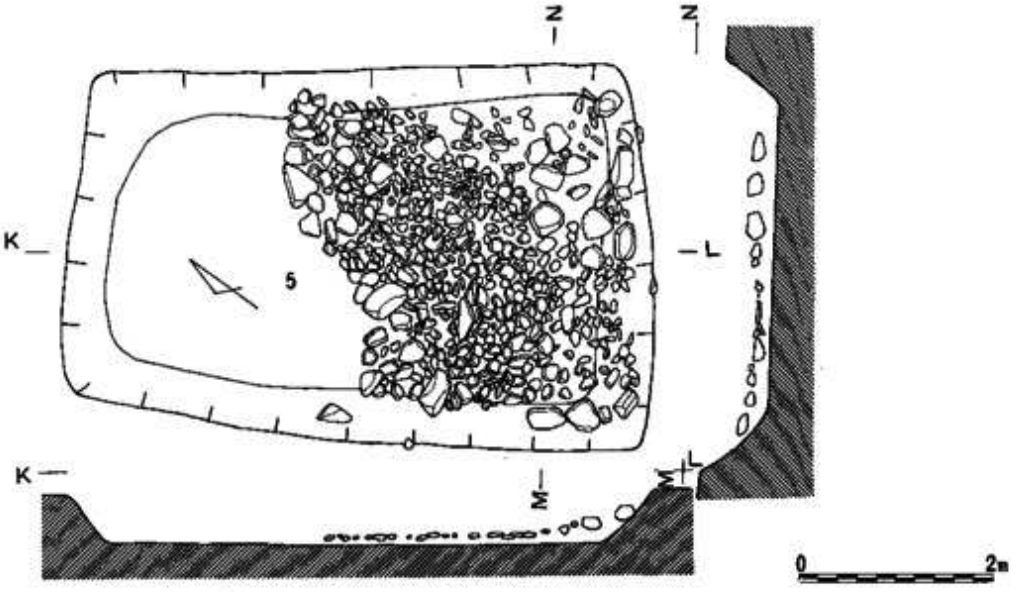
第33図　大熊道上遺跡3号住居址



1．2号・4号住居址（1：80）

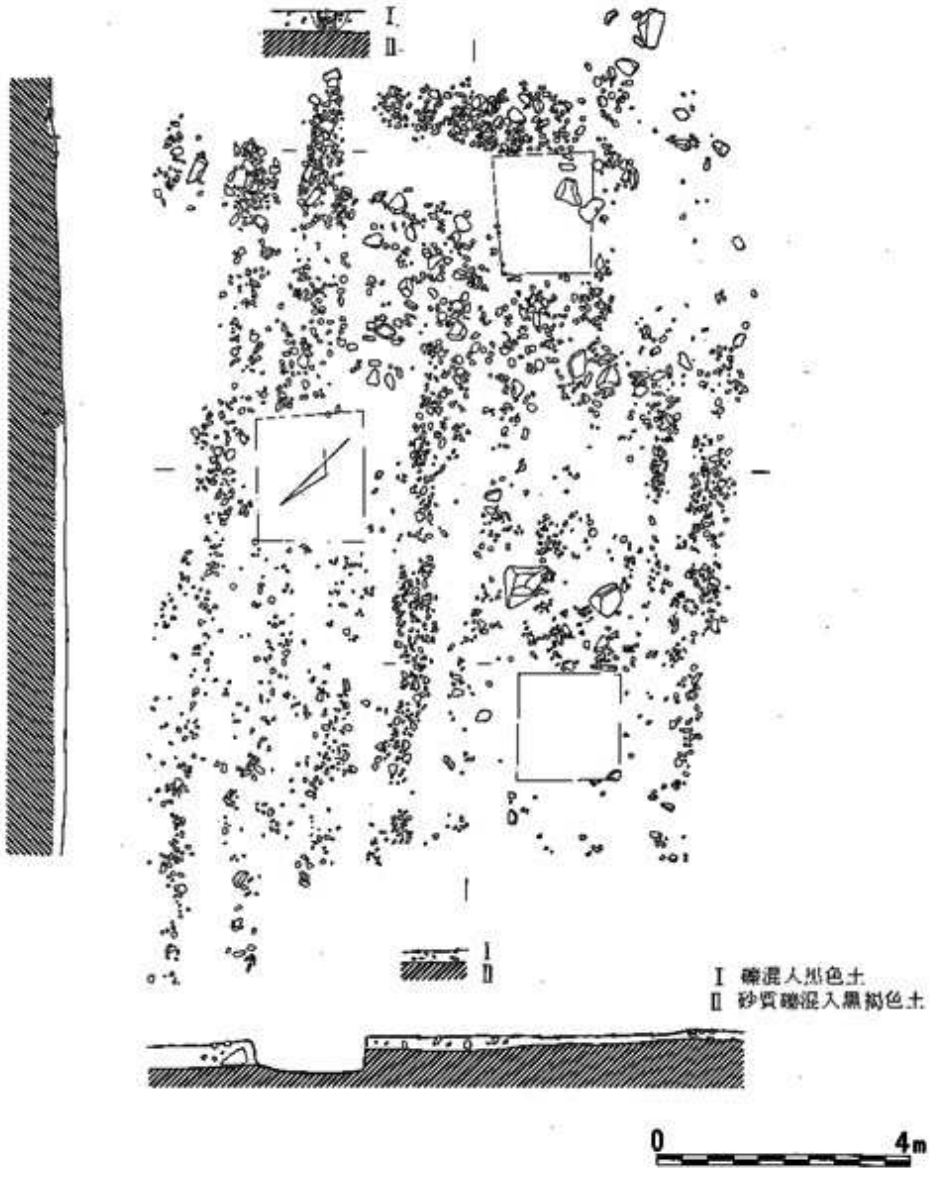


2．2号住居址カマド（1：40）

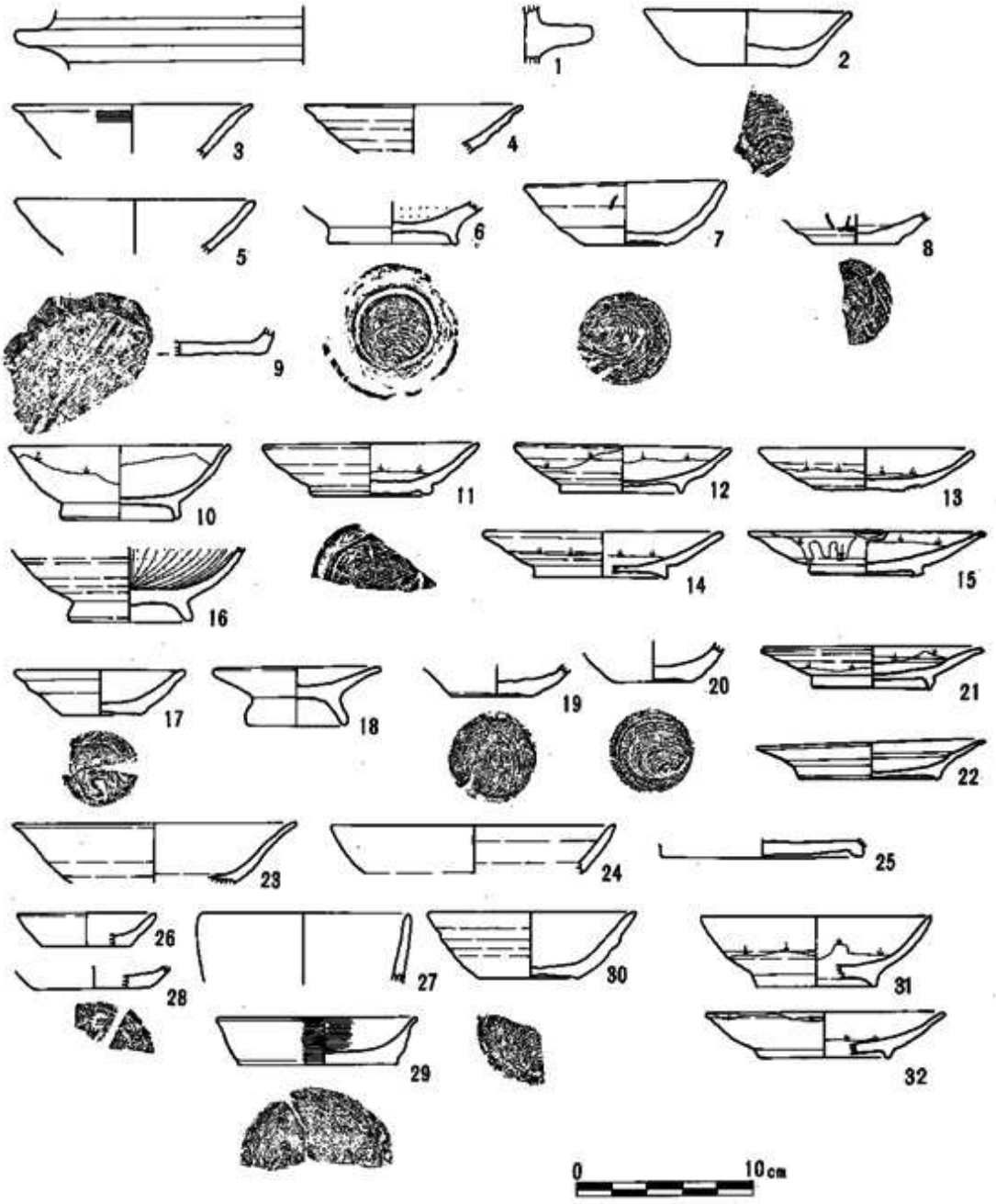


3．5号住居址（1：80）

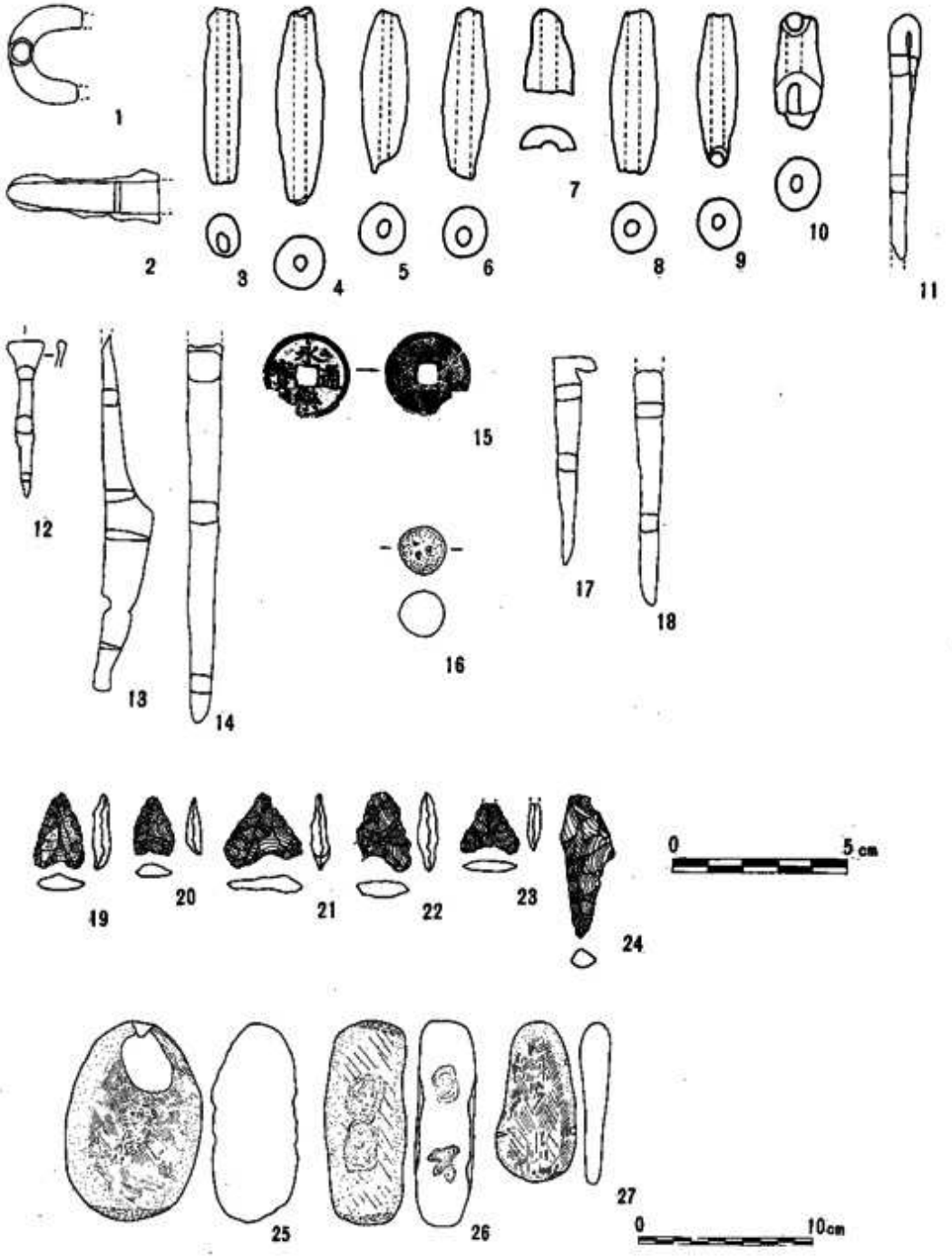
第34図　大熊道上遺跡2号・4号・5号住居址



第35図　大熊道上遺跡建築址（1：120）



第36図　大熊道上遺跡出土土器（1：4）
（1～15　2号住居址，16～22　3号住居址，23～25　4号住居址，26・27　5号住居址，28・29　建築址，30～32　その他）



第37図　大熊道上遺跡出土遺物（1：2但し25～27　1：4）
（1～10　2号住居址，11　3号住居址，12～15　5号住居址，16～27　その他）

9　荒神山遺跡

1）　位　置

遺跡は諏訪市湖南字南大熊小字荒神山2531、2537－41番地にある（図38、写24の102、103）。守屋山塊から諏訪湖へ北流する小田井沢川の西岸に立地し、大熊道上遺跡と相対する。小田井沢川の浸蝕谷は中央道用地南方で次第に谷幅を広め、下方では扇状の小扇状地を形成し、扇端部には南大熊部落が存在する。今回の調査地点は、その扇頂部に位置し、西は大熊城址となる舌状台地を背に、南は小規模な段丘崖を背にするか、それに続く斜面である。調査区西半は東への緩傾斜面、東半は北東への相当の傾斜を持つが、その上下に狭いテラス部が存在し遺構が集中する。標高は794～805m を示し、畑、桑園、果樹園となっていた。

第38図　荒神山遺跡地形図（1：2000）
（×印　1．荒神社祠跡　2．御頭畑　3．御射宮司社跡碑　4．大熊城址第Ⅵ之郭　5．鎌倉街道）

遺跡地地名の荒神山は調査区南東隅の急斜面に荒神社が祠られていた（38図Ｘ１）に由来するものと考えられ、北東の用地に接する畑は御頭畑（同図Ｘ２）と呼称され、北西用地外の 段 郭と考えられるテラスには御射宮司社跡の碑が建立されている(同図Ｘ３)。鎌倉街道と呼ばれる古道も存在する（（同図５)。荒神祠跡の南西用地外では十数年前耕作中に炉址を確認しているといわれ、調査区上段では縄文土器、青磁片等を表採している。従って、遺跡の範囲は上下に相当の広さを持つものと考えられる。

グリットはセンター抗 138+20を起点ＡＡとして、東西方向にＡＡ～ＡＹまで、それに直交する方向に34～54までのＡ区に設定した。Ａ区グリット南壁の層序は耕土層(15～35cm)、西では褐色土で東するに従い黒褐色土となる近世～中世遺物包含層(最大90cm)、御射宮司社跡碑のある段郭削平時に運ばれたかと推定される移動ローム土層をはさみ、黒土層が上層より平安時代、弥生時代遺物包含層、下層が縄文時代遺物包含層となる(57図１～３)。ローム層までは非常に深く、遺構の重複も多く、調査期間が限られているため、ブルトーザーによる表土はぎをした。排土量が多く何回も土を移動させねばならず、用地全体を調査することが出来なかった。また、ブルトーザによる排土が深すぎ、遺構を破壊しすぎてしまったものもある。記して、お詫びしておきたい。

2） 遺 構 と 遺 物

今回の調査（第一次）で検出された遺構は住居址66軒（縄文時代46軒、弥生時代３軒、平安時代８軒、中世９軒）、中世建築址１、溝址３、縄文時代～中世の土壙 174、縄文時代土器集中区１の多数にのぼる。遺構は黒土層及びローム層に掘り込んでいるが、黒土層中の遺構も多く、また、切り合いが多いため検出には苦心した。なお、周辺の地形、遺物の散布範囲からみて、調査区北方のテラスや上段の谷間一帯にまで広がる大遺跡の一部と考えられる。

本報文には、今回調査した遺構の内、住居址、中世建築址とその出土遺物のみを記載し、土壙及び土器集中区等は第二次調査報告書へまわすことにした。また、切り合う住居址では住居址番号の若いものが新しいとは限らない。いわゆる「平出第Ⅲ類Ａ」と呼ばれる土器は平出第Ⅲ類Ａと略記する。

ア 縄文時代の住居址

ア） １号住居址（図40・60・77・78・79・112・124・129、写26）

遺構 Ａ区の最西端、大熊城址第Ｖ之郭の東斜面テラス部で検出された。プランは半竪穴住居址で東側を欠くため、東西方向は把握できなかったが、南北5.85m のほゞ円形を呈するものと思われる。主軸方向は不明である(図40の１)。壁はロームでほぼ垂直に立ち上がり、西壁は55cmの高さを計る。床面は東へやゝ傾斜し、西壁下の柱穴周辺は硬いが他は軟弱である。周溝は存在しない。炉は中央やゝ南寄りに焼土が確認され、その周囲には石が散乱しているので炉址と推定した。この炉址と西壁に接して出土した深鉢の出土状況から、この面を一時期の生活面と考えてみたが、下層18号住居址との同心円上重複と考えられる。

本址は19号住居址（曽利Ⅲ古）に切られ、26号住居址(曽利Ⅱ古)、61号住居址(曽利Ⅱ)、54号住居址(

曽利Ⅰ）を切っている。

遺物　出土遺物はあまり多くない。土器は縄文中期後葉曽利Ⅱ式である。深鉢（図60の１～４・77・78・79の１～８、写26の106～108）の他・図示しなかったが有孔鍔付土器の小破片も出土している。石器は打製石斧５点(図 112の１・２)、粗製石匙２点(図 112の３・４)、凹石３点（図 112の５）があり、スクレイパー１点（図 124の１）は片面に自然面を残す両面加工で図下辺は鋸歯状加工をし刃部としている。

使用痕のある剥片（図 124の２）は縦長の剥片の一辺に刃つぶしを施し、鋭利な対辺を刃としている。他に、石鏃（同図３）がある。土製品では土器片使用の土錘（以下、土器片錘)(図 129の１）がある。

イ）　３号住居址（図40・60・79・80・113・124・129、写27）

遺構　Ｂ区南寄りの急斜面下に検出された。プランは東西4.25m、南北4.00mのほぼ円形を呈し、主軸方向はＮ49°Ｅを示す(図40の２、写27の 116)。黒土中に構築された竪穴住居址で、壁は軟弱であるがほぼ垂直に立ち上がり、壁高は西30cm、東20cmで、床面は黒土層に薄い平担な貼床となり、硬くたたかれ良好である。なお、埋甕から南東部は黒土の床面となり軟弱である。周構は幅20cm程で深さ20cmのものが全周する。柱穴は９コ検出されたが、Ｐ１～Ｐ５が主柱穴と考える。Ｐ２がや・浅い。炉は中央南寄りで、109 × 105cm、深さ42cmを計る方形切り炬燵状石囲炉である。埋甕は南東壁ぎわに正位で埋設され（図58の１・60の６・写27の113)、底部を欠いているが平板な蓋石を持っている。その内部に充満する黒土中には微量の骨片と炭化物が認められた。また、埋甕の西側床面直上には握り拳大から人頭大の礫集中部があり、その礫直上で深鉢（図60の７、写27の 114）が出土した。

遺物　出土遺物は多く、土器は縄文中期後葉曽利Ⅲ式でⅡ式的要素も残存する。深鉢（図60の５～10・79の９～17・80）と小形台付土器（図 129の22）があるが、後者は丹彩されている。なお、図示してないが、有孔鍔付土器片も出土している。石器は石鏃２点(図 124の４・５)、小形石匙２点（同図７）があり、異形石器（同図６）は台上で長軸方向より加撃し、鋭利な一辺に使用痕を残すコア様の石器である。他に、スクレイパー１点がある。土製品では土器片錘１点（図 129の２）がある。

ウ）　４号住居址（図42・60～62・81・82・112・124・129、写22・28・29）

遺構　Ｂ区上段のテラス部で検出された。プランは北側が５号住居址に切られているが、東西5.10mの楕円形を呈し、主軸方向はＳ78°Ｅを示す(図42の１、写28の119～122)。壁は傾斜し、良好な遺存状態の南壁は53cmで、北するに従い低くなり床面と一致する。東壁部には地山の巨石があり、床は炉より南がローム、北東部が黒土でともに軟弱である。黒土の床の多くは後世の攪乱を受けている。周溝は存在せず、柱穴はローム部で４コ検出したが、Ｐ１～Ｐ３が主柱穴と思われる。中央の方形石囲炉は45×55cmで、内部には完形に近い深鉢（図61の２）が出土した（写28の 121)。

遺物の出土状況は図60の13が床面より浮いているが、他は床面のものが多く井戸尻パターンの出土形態を示す。

本址は５号住居址(平安後期)、32号住居址（曽利Ⅱ）に切られ、55号住居址（藤内Ⅰ古）を切っている。

遺物　出土遺物は多い。土器は縄文中期中葉藤内Ⅰ式である。深鉢（60の11～13・61の１～10・62・81の１～13・15～17・82、写29の125～128）があり、図60の13・61の３・62の１は完形である。浅鉢（図

61の11・81の14）は2点ある。図61の1・82の14～21は平出第Ⅲ類Aであり、図60の11・12、61の2はその系統に入る土器であろう。石器は打製石斧12点（図 112の7～14）あるが、14は礫の一部を磨き刃部を作り出した部分磨製石斧である。他に、横刃形石器1点(図 112の15)、凹石3点(同図16～18)、自然面を多く残した縦形粗製石匙1点(図 124の11)、石鏃（同図8・9）があるが、8は刃部を鋸歯状に整形した。片面加工に近い雑な作りの有柄石鏃である。スクレイパー2点、使用痕ある剥片（図 124の10）がある。土製品では土器片錘2点（図 129の3～4）がある。

エ）　6号住居址（図44・63・83・124・129、写31）

遺構　B区上段のテラスで4号住居址の西に位置する(図39・写25の 104)。プランは東西3.40m、南北3.40mの円形を呈する半竪穴住居址であったと推定されるが、55号住居址検出中に本址の存在を気づいたため北部を破壊してしまった。従って、主軸方向は不明である（図44の1、写31の138)。南西壁はロームでほゞ垂直に立ち上がり、壁高55cmを計る。床面を後世の地形変化で生じたと思われる湧水が西壁にあり、ロームのタタキ床であるが軟弱となっている。また、北東部は55号住居址上に黒土の貼床しているが、この部分は沈下し傾斜が大きい。周溝は存在しない。柱穴はローム床面で4コ、黒土貼床部で1コ検出されている。焼土或いは炉址と断定できる部分は確認できなかったが、中央やゝ北寄りに集石があり、これが炉址であった可能性は大である。

本址は55号住居址（藤内Ⅰ古）を切り、その上に貼床している。

遺物　出土遺物は比較的多い。土器は縄文中期中葉藤内Ⅰ式で、深鉢（63の1～7・83、写31の 134・136・137）、浅鉢（図63の8）の他に図示しなかったが台付土器片がある。図63の1～3、83の9～14は平出第Ⅲ類Aである。なお、浅鉢は補修孔を両面からあけ始めているが貫通していない。石器では石錐1点（図 124の12、写31の 135）、スクレイパー1点があり、土製品では土器片錘2点(図 129の5・6)がある。

オ）　7号住居址（図44・63・84・113・129、写32・33）

遺構　B区上段のテラス部、6号住居址の北側に検出された（図39、写25の104)。プランは東西4.20mで、北半は傾斜地のため耕作により失われているが、円形を呈する半竪穴式住居であったと考えられる。主軸方向は不明であるが、ロームの壁はほゞ垂直に立ち上がり、西壁高は30cmを示す。南壁は不明瞭になるが25cmを計る。床面は南側でロームをたたいているが、他は黒土に多くの礫が混入し軟弱である。周溝は存在しない。柱穴はP1～P3が検出され主柱穴であろう(図44の1、写33の 145)。中央の方形石囲炉は60×60cmの規模で、底に10～15cmの礫を敷いているが、焼土は殆んど認められなかった（写32の 141)。

本址は55号住居址（藤内Ⅰ古）を切り、同址より新しい。

遺物　出土遺物は多くない。土器は縄文中期中葉藤内Ⅰ式である。深鉢（図63の9～13・84、写32の139・140）と図示していないが浅鉢小破片がある。図63の9・10は平出第Ⅲ類Aで、13には補修孔がみられる。石器では打製石斧10点(図 113の15～19)、磨製石斧1点(同図20)、凹石4点(同図21～23)、スクレイパー2点がある。土製品では切りこみが不明瞭なため土製円板と考えるもの（図 129の7・8）がある。

カ）　8号住居址（図43・58・64・65・85・86・114・125・129、写32～34）

遺構　B区下段のテラス部で検出された(図39、写25の105)。プランは東西5.65m 、南北5.85m で、東西壁は直線の方形に近い楕円形を呈し、主軸方向はS41° Eを示す(図43の1 、写33の 147)。壁はロームでほゞ垂直に立ち上がり良好な遺存状態で、壁高は東15cm、西34cm、南71cm、北29cmを計る。床面は平坦なロームのタタキ床で硬く良好である。周溝は全周し、周溝内の東壁下には小ピットが3コ並び、南壁下には5コ並んでいる。柱穴は四隅に4コの主柱穴と補助柱穴4コがある。また、東壁上には深さ39cmの柱穴2コが検出され、その柱穴間の壁高は低くなり入口施設であろうか。炉は中央西寄りに90× 100cm、深さ39cmの方形切り炬燵状石囲炉があり(写34の149)、西側の石以外は内部に落ち込むか抜き取られている。炉底部には厚さ5cm程の焼土があり、内部からは少量の骨片が認められた。埋甕は東南壁下に正位で埋設されているが、底部は欠かれ底には平石がしかれ、蓋石はやゝ北側にずれていた。

本址は土壙79に貼床している。従って土壙79は本址より古い。

遺物　出土遺物は多量で、土器は縄文中期後葉曽利Ⅲ式でⅡ式の要素も強く残す。深鉢の個体数は多く(図64・65の1～5・85・86、写32の142～144)、図64の1は北関東の加曽利E式に近い土器であり、関東との交流を知る上で重要な資料であろう。なお、本址出土土器は地文に縄文をもつものが多く、伊那谷の土器との近縁性も示している。他に小形土器（図 129の21）がある。

石器では打製石斧1点(図 114の1)、磨製石斧9点（同図2・3・10、 125の1・7・8・12・13、写33の 148）の内、小形磨石斧5点を数え、P2内とその西側周溝中より各2点が出土している。その形態には差があり用途に応じたセット化と小形磨石斧の出土状況が注意されよう。凹石8点(図 114の4～9)、敲打器1点（図 125の9）は自然石の両端に打撃が加えられており、全体に強い擦痕が認められる。小形石匙3点(同図4・5)、石鏃7点(同図2・3・10)、スクレイパー5点(同図14・15)、使用痕ある剥片1点（同図11）がある。

キ）　10号新住居址（図43・58・65・87・88・114・115・124、写34・35）

遺構　B区下段のテラス部、8号住居址の西側に検出された(図39、写25の 105)。プランは東西5.35m 、南北5.10m で壁の一部が直線となる不整円形を呈し、主軸方向はS15° Eを示す(図43の2 、写34の 151)。壁はロームでほゞ垂直に立ち上がり、壁高は東19cm、西21cm、南31cm、北28cmを計る。周溝は深さ10cm内外で全周している。床はほゞ平坦なロームのタタキ床で良好である。なお、10号旧住居址の周溝、柱穴及び埋甕にはロームの貼床をしている。主柱穴P1～P4と補助柱穴が検出された。西壁上に検出された2コの柱穴は本址の壁柱穴と推定される。中央北寄りの方形切り炬燵状石囲炉は120×120cm、深さ29cmの規模で石は抜き取られている。埋甕は東西壁下に正常で埋設され（図58の4－b・65の11、写34の 150・35の 152)、底部は欠損していて蓋石はない。

本址は63号(曽利Ⅲ)、64号住居址（曽利Ⅱ）に貼床されておりより古い。

遺物　出土遺物は多くない。土器は縄文中期後葉曽利Ⅱ式である。深鉢（図65の6～9・11・87・88）と有孔鍔付土器もしくは両耳付壺（図88の17）がある。石器では打石斧3点(図 114の14・15)、敲打器（同図11)、凹石4点（同図12・13・16)、磨石1点(図 115の1)、石棒欠品1点(同図2)、小形縦形石匙1点(図 124の13)、石鏃2点（同図14・15）がある。

ク）　10号旧住居址（図43・54・65、写34・35）

遺構　上記、10号新住居址と同心円上重複の住居址である。プランは東西4.00m、南北3.60m程の楕円形を呈する竪穴住居址であったと思われ、新住居址より小さい。主軸方向は同址と同じくS15°Eとなろう（図43の2、写34の151）。床面は新住居址より僅かに高かったようで、周溝は深さ3～4cmで3分の2程検出された。柱穴は新住居址に貼床されているが、検出洩れがあるためか不規則な配置である。本址の埋甕aはロームの貼床下に正位で埋設されていた（図54の4－a・65の10、写35の152、153）。

遺物　埋甕の深鉢1点だけであるが、口縁部を削られており網代底である。縄文中期後葉曽利Ⅱ式土器で新住居址との時間差はあまりない様である。

ケ）　12号住居址（図45・58・66・89・90・115・124・128、写35・36）

遺構　B区下段のテラス部で8号居址の南側に検出された（図39、写25の105）。プランは東部を中世25号住居址に破壊されているが、南北4.80mの円形を呈する竪穴住居址で主軸方向はN83°Eを示す（図45の1、写35の156）。西壁は含礫ロームで高さ48cm、北壁高は19cmである。床面は平坦なタタキ床で硬い。周溝も残存部に深さ3～7cmで検出されているため、構築時には全周していたものと推定される。柱穴は床残存部で2コ、25号住居址内で2コ検出されたため4柱となる。中央西寄りの方形切り炬燵状石囲炉は62×72cm、深さ50cmで、石は抜きとられている。内部には焼土が厚く堆積し、この下層から獣骨と思われる小量の骨片が検出された。東壁ぎわと推定される25号住居址貼床下からは底を欠いた埋甕が正位で埋設されていた。25住床面は本址より10cm程低くなるため上部を削られている（図58の5・66の6、写36の160）。炉址北東隅外床面直上には深鉢が伏せられていた（図66の4、写36の159、161）。

遺物　出土遺物は多い。土器は縄文中期後葉曽利Ⅱ式である。深鉢（図66の1～4・6・89・90の1～11、写36の161）と補修孔のある浅鉢（図66の5）、有孔鍔付土器の退化し始めたもので鍔に孔があけられたもの（図89の9）がある。石器では打石斧1点、磨石斧1点（図115の3）、凹石6点（同図4～9）、石皿3点（同図10～12）がある。11・12はP3出土の小形品で、12には凹穴が多数あり凹石としての機能も持つ。スクレイパー2点（図124の16・17、写36の162）の内、16は黒曜石の転石の一部に片刃をつけたものである。土製品では板状土偶胸部（図128の1、写36の158）がある。

コ）　16号住居址（図47・58・66・90・91・116・124、写38）

遺構　A区にある中世建築址の下層で検出され、3号住居址の東にある（図39）。プランは東西4.30m、南北4.30mの方形に近い下整円形を呈し、主軸方向はN60°Eを示す（図47の1、写38の174）。ロームの壁は良好で垂直に立ち上がり、西壁高は62cmで東は低くなるが東壁はブルトーザーで破壊されている。床面はロームのタタキ床で硬く、その1～3cm下層に古い床面があり、土壙80上にも二重の貼床が認められた。周溝は全周していたと思われるが、南壁下の一部は二重の周溝となっている。主柱穴P1～P4の深さは一定しない。中央やゝ西寄りの方形切り炬燵状石囲炉は100×110cm、深さ36cmで、石は抜き取られている。炉址内部には木炭片を含む焼土が厚く残存し、土器片が出土している。埋甕は東壁ぎわに正位で埋設されているが蓋石はない（図58の6・66の13、写38の172・173）。この内部には黒土が充満し、石器1点と礫が検出された。なお、本址は上記の発掘所見に加え、補助柱穴の多い事からして改築が行われている

様である。

遺物　出土は遺物は多い。土器は縄文中期後葉曽利Ⅲ式でⅡ式の要素を残す。深鉢（図66の７～11、90の12～15・91、写38の172）、内外面に朱塗りする浅鉢（図66の12）がある。図91の18は曽利Ⅴ式土器片で混入遺物である。石器は打石斧17点（図 116の２～９）、磨石２点（同図10・11）、凹石５点（同図 116の12～15）、粗製石匙１点（同図16）、石鏃８点(図 124の18～20)、スクレイパー１点（同図 124の21、写38の 170）は両刃加工の自然面を残すものである。

サ）　17号住居址（図47・67・92・116・125・128、写39）

遺構　Ａ・Ｂ両区にかけて位置し、16号住居址の東側に検出された(図39)。プランは遺構の大部分が排土盛土の下にあり一部調査のみのため、詳細は二次調査に待ちたい。検出した西壁は傾斜しているが壁高65cmを計り、床面はロームのタタキ床で硬く周溝がめぐらされている（図47の２、写39の 117)。

本址は41号住居址（曽利Ⅱ古）を切っていてより新しい。

遺物　出土遺物は多いが全て覆土遺物である。深鉢(図67の１・２、92の１・４～７)、は曽利Ⅱ式、深鉢(図67の３、92の２・３)、蓋１点（図 128の６、写39の 175）は曽利Ⅴ式に入るものと考えられ、両式の遺構が重複している可能性が強い。石器は打石斧１点(図 116の17)、スクレイパー１点（図 125の16）がある。

シ）　18号住居址（図47・58・67・92・116、写39・40）

遺構　調査区の最西端、大熊城址第Ⅴ之郭の東斜面テラス部に位置し、配石１、１号住居址の下層になる。プランは傾斜地で半竪穴式住居となるため東壁部が明確でないが、南北5.60m のほゞ円形を呈し主軸方向はＳ55°Ｅを示す(図47の３、写39の 180)。壁はロームで固く良好、壁高は東が低く、西89cmを計る。床面は東へ４°傾斜し、ロームのタタキ床で硬い。なお、東壁附近は貼床となり床が落ち込み荒れている。周溝は５cm内外で全周したものと思われる。主柱穴６コの内、南側の４コは重複しており、１号住居址の検出洩れのものと考えられる。中央西寄りの方形切り炬燵状石囲炉は 120cm方、深さ40cmで、大きな平石を使用し、内部からは土器片が出土している(写39の 179)。炉址より60cm程北西寄りに内外面朱塗りし底部穿孔された壺形土器が逆位で埋設され、口縁部は地山の石と土圧で破損しているが、ほゞ完形である、(図58の７・67、４・写40の 181～２)。伏壺の形態であるが、どのような意味を持つものであろうか。

本址は１号住居址と同心円上重複で、同址の床面より本址床面は30cm程低く、19号住居址（曽利Ⅲ古）に切られ、61号（曽利Ⅱ）、54号住居址（曽利Ⅰ）を切っている。

遺物　出土遺物は少ない。土器は曽利Ⅱ式で深鉢(図67の５、92の８～22、写39の 178)、壺（図67の４）の他に図示していないが、浅鉢小破片がある。石器は凹石１点（図 116の18）のみである。伏壺は肩部の低く細い隆帯を半載竹管で上下交互の連続刺突し、胴部は篦の刺突文で埋めている。

ス）　19号住居址（図39・48・67・93・94・116・125、写40）

遺構　調査区最西端、大熊城址第Ⅴ之郭の東斜面のテラス部にある配石の下層に検出された(図39)。東部は傾斜地で表土が浅く耕作により撹乱され、南部は18号住居址に貼床するのが部分的に認められた。西

壁も僅かに数cm残るだけであるが、床面残存部には部分的に硬い箇所が認められた。

本址は1号・61号住居址を切り、18号住居址に貼床し曽利Ⅱ式期の3軒より新しい。

遺物　出土遺物はやゝ多い。土器は縄文中期後葉曽利Ⅲ式でⅡ的要素が残る。深鉢（図67の6・7・93・94の1～4）片があるが、図93の15は勝坂期、図93の2・12・14は明らかに曽利Ⅴ式で混入遺物である。石器は打石斧3点（図 116の19・20）は破損品である。凹石4点(図 116の21・22)、スクレーパー2点（図 125の17、写40の 184）がある。

セ）　21号住居址（図39・48・67、写40の 185）

遺構　B区下段のテラスにあり用地北境に検出された(図39)。黒土層中の住居址で、プランは38号住居址（曽利Ⅱ）及びピット78に攪乱されていて壁部を把握できなかった（図48の3）。

床面は黒土で軟弱であるが、炉石2コを残す石囲炉があり浅い火床には薄い焼土が認められ深鉢（図67の8）が出土した。

遺物　出土遺物は極めて少なく、炉内出土の深鉢1点である(図67の8)。縄文中期中葉勝坂期の土器である。

ソ）　22号住居址（図50・67・117、写25・41）

遺構　B区下段のテラス部で、8号住居址の東側に検出された(図39、写25の 105)。プランは曽利Ⅱ式期の31号・35号住居址に切られ残存部は3分の1程であるが、ほゞ円形になるものと推測される。規模、主軸方向は不明である(図50、写41の 186)。壁は北西部が残存するだけで礫混入ロームで傾斜を持ち壁高は10～30cmである。床面はロームのタタキで硬い。なお、31号住居址の床面とのレベル差はない。周溝は存在しない。主柱穴と考えられるもの2コとその間に小ピット3コが確認された。北壁下の礫の多かったピットは柱穴か貯蔵穴か判定できなかった。炉はほゞ中央に埋甕炉があり(写41の 187)、内部には焼土が充満し、その南側には焼土塊が認められた。

遺物　出土量は少ない。土器は埋甕炉に使用された深鉢（図67の9）のみで、縄文中期中葉藤沢式である。石器は打石斧4点（図 117の1）があるが、図示したもの以外は小破片である。

タ）　26号住居址（図39・48・67・120）

遺構　調査区の最西端、大熊城址第Ⅴ之郭の東斜面テラス部で18号住居址北側に検出された。プランは表土が浅く耕作により攪乱され、南側は19号(曽利Ⅲ古)、61号住居址（曽利Ⅱ）に切られているため、西壁と僅かな床面が残存するのみである。円形を呈する竪穴住居址になると思われるが、規模等は不明である(図48の1)。壁はロームで20cmの高さを持ち、床面はロームの軟弱な床である。周溝は存在しないが柱穴1コが確認された。

本址は19号(曽利Ⅲ古)、1号・18号・61号（曽利Ⅱ）住居址に切られ、57号住居址（新道）を切る。

遺物　出土遺物は少ない。土器は縄文中期後葉曽利Ⅱ式でも古い様相を示す。小形円筒形土器（図67の10)、深鉢（同図11・12）がある。土製品では土器片錘1点（同 129の10）がある。

チ）　31号新住居址（図50・59・68・95・96・117・126、写43・44）

遺構　B区下段のテラス部にあり、8号住居址の東側に位置している(図39、写25の 105)。プランは東西6.10m、南北6.00mで、壁の一部が直線的となる大形の円形を呈する竪穴住居址である。主軸方向はS88°Eを示す(図50、写44の 199)。壁はロームでほゞ垂直に立ち上り良好である。壁高は南11cm、西74cmを計る。床面西半はロームのタタキ床で硬いが、東半は33号住居址上にロームの薄い貼床をしている。この貼床部はその後の沈下で10～20cm低くなり、西側床面とは30～40cmのレベル差が見られる。周溝は南壁下で途切れるが、深さ5cm程でほゞ全周するようである。柱穴は旧住居址のものと明確に区分できたものはP1～P3・P5であるが、配置からみてP1～P7を主柱穴として把握できよう。中心西寄りの方形切り炬燵状石囲炉（図50F1）は1m方、深さ54cmで、一部の石を残し他は抜き取られている。埋甕は東壁ぎわに正位で埋設され(図59の2・68の9、写43の 194—右・193)、土器底部は欠かれ蓋石はない。

本址は31号旧住居址と同心円上重複でより新しいが、やゝ西へずらして建て直された公算が強い。22号住居址（貉沢式）を切り、33号住居址（曽利Ⅱ）に貼床し、これらより古い。

遺物　出土遺物は多い。土器は曽利Ⅱ式である。深鉢（図68・94の5～16・95・96の1～2、写43の193・196～7）と両耳壺（図68の6）、有孔鍔付土器の退化した無孔のもの（同図7）がある。図96の1は曽利Ⅲ式、同図2は中葉井戸尻式と考えられ、ともにP2出土である。石器は打石斧(図 117の3)、乳棒状磨石斧1点(同図2)、凹石3点、敲打器2点、石鏃1点(図 126の1)、スクレイパー1点（同図2）があり、P2からは使用痕ある剥片1点（図 126の3）が出土した。

ツ）　31号旧住居址（図50・59・68、写43・44）

遺構　31号新住居址と同心円上重複で、遺構の殆んどは破壊されている。プランは柱穴配置からみて新住居址とほゞ同大であったと思われる。主軸方向はS88°Eである(図50、写44の 199)。床面は新住居址西床面下5～10cmに部分的に残存したが、周溝はない。柱穴はP8～P14が本址のものと考えられる。炉F2はほゞ中央にあり、新住居址炉F1に切られているがロームの貼床が上にある。95cm×95cm、深さ30cmの方形切り炬燵状石囲炉であるが、一部の石を残して抜き取られている。埋甕aは正位で埋設され、上部に新住居址の貼床がされていた(図59の1・68の8、写43の193—左・195)。本址は新住居に建て直されたもので、切り合いは新住居址同様である。

遺物　埋甕として使用された深鉢のみであるが、口縁部を欠失する(図68の8)。縄文中期後葉曽利Ⅱ式の土器である。

テ）　32号住居址（図42・67・96・117、写44）

遺構　B区上段の北へ傾斜するテラスで、4号住居址に隣接して検出された(図39、写25の 104)。プランは東西4.40m、南北4.25mで、方形に近い楕円形を呈し、その主軸方向はS57°Wを示す(図42の1)。壁はロームで東と南が良好であるが北は低くなる。壁高は東33cm、南40cmで、南部床面はロームの硬いタタキ床であるが北側は黒土層に貼床する。周溝はない。柱穴は4、炉は中央北西よりで120×120cm、深さ28cmの方形切り炬燵状石囲炉であるが石は抜き取られている。南壁隅には壁外へ延びる横穴があり、遺物は出土しないが貯蔵穴かも知れない。

本址は4号住居址（藤内Ⅰ）を切っており、同址より古い。

遺物　出土遺物は少ない。土器は縄文中期後葉曽利Ⅱ式で深鉢（図67の13・96の3～19）がある。なお、96図3・4・6は本址より新しい遺物で混入したものであろう。石器（図 117）は打石斧7点（4～6）、台石として使用され、ダメージ痕のある定角石斧1（9）、乳棒状石斧（10）の他に凹石1（7）がある。

ト）　33号住居址（図39・49・59・69・97・117・126、写25・45・46）

遺構　B区下段のテラスにあり、一部31号住居址の貼床の下になっていた(図39、写25の 105)。プランは東西4.95m、南北5.80mのほゞ楕円形を呈し、主軸方向はS80°Eである(図49の2、写46の 205)。壁はロームで良好な遺存状態、壁高は東24cm、南36cm、西は31号住居址に切られない部分で49cmを計る。床面は一部48号住居址への貼床となるが、硬いロームのタタキ床である。周溝は北側が不明瞭であるが、深さ10cm程で全周していると考えられる。P1～P6が主柱穴、P9、P10は補助柱穴、P7、P8は入口施設の柱穴であろう。中央西寄りの方形切り炬燵状石囲炉は120×120cm、深さ43cmで、焚口部は薬石の上に大きな平石が置かれ(写45の201・202)、内部の焼土は多く多数の骨片が認められた。東入口部の埋甕は正位で埋設され蓋石を持ち、内部には黒土が充満していた（図59の3・69の10、写45の201・203)。

本址は31号・35号住居址（曽利Ⅱ）に貼床され、48号住居址（藤内Ⅱ新）を切っている。

遺物　出土遺物は多い。土器は縄文中期後葉曽利Ⅱ式で、深鉢（図69の1～10・97、写45の203・204）がある。なお、図69の4・5は曽利Ⅲの要素を持ち、69の9・97の3は曽利Ⅰ式である。覆土出土の97の14～17は井戸尻式の縄文と思われる。石器は打石斧6点(図 117の11～13)、定角形磨石斧1点(同図14)、凹石5点（同図15～18)、凹石としても使用された小石皿1点（同図19)、石鏃2点（図 126の4・5）がある。住居址は曽利Ⅱ式期の新しい方に所属するものであろう。

ナ）　35号住居址（図39・50・69・98・117・写25・46・47）

遺　構　B区下段のテラス部の31・33号住居址に隣接して検出された(図39、写25の 105)。プランは中世20号住居址に遺構中心部を破壊され、西壁部が残存するのみである(図50、写46の 207)。壁高は20cm程である。床面に地山の大きな石が張り出しているが、ローム及び黒土のタタキ床が部分的に残るだけで全般に軟弱である。

本址は20号住居址に切られ、33号住居址（曽利Ⅱ）に貼床し、22号住居址（駒沢式）を切っている。

遺物　出土遺物は極めて少ない。土器は縄文中期後葉曽利Ⅱ式で、深鉢（図69の11・12、98の1～4、写47の 209）がある。石器は凹石1点（図 117の20)、磨石1点（同図21）がある。

ニ）　37号住居址（図39・51・59・67・98・118・126、写25・47）

遺構　B区を上段のテラス、調査区東端小田井沢川に臨む低い崖上に検出された（図39、写25の 104)。プランは北半部を耕作で攪乱しているが、東西4.45mの不整円形を呈し主軸方向はS61°Eを示す（図51の1、写47の212)。壁は含礫ロームで南17cm、西15cmの残存高である。床面は含礫ロームのタタキ床であるが、あまり硬くなり、周溝はない。柱穴は南に2コ検出されたが、本来は4柱であったと思われる。中央西寄りの方形切り炬燵状石囲炉は80×90cm、深さ22cmで、北側の石は抜き取られている（写47の 212)。

埋甕は東壁下に底部穿孔され正位で埋められ、石蓋として平板な石が使われていた（図59の4・67の16、写47の37）。

本址は同時期の39号住居址（曽利Ⅱ）を切っており、同址より新しい。

遺物　出土遺物はあまり多くない。土器は縄文中期後葉曽利Ⅱ式が本址に伴うもので、深鉢（図67の14～16・98の5～14）がある。図67の14は35号住出土（図69の12）に類似し、東海地方からの影響を受けたものである。98の6・11は曽利Ⅴ式で耕作時混入したものであろう。石器は打石斧1点（図118の1）、磨石斧1点（同図2）、凹石3点（同図3・4）、石鏃1点（図126の6）がある。

ヌ）　38号住居址（図39・51・75・99・118、写25・47）

遺構　B区下段テラス部の21・35号住居址の間に位置している（図39、写25の 105）。プランは東西5.35mで楕円形を呈し、主軸方向はN63°Eを示す（図51の2、写47の 216）。壁はロームでほゞ垂直に立ち上がり、北壁と壁上部はブルトーザーにより破壊されているが、残存高東17cm、南22cmとなる。床面は西へやゝ傾斜し、炉西寄りには3～5cmの段差がみられ、炉周辺はロームの硬いタタキ床であるが、東壁よりは軟弱である。周溝は3～5cmの深さで全周していたと考えられ、柱穴は3コ検出された。中央西寄りの方形切り炬燵状石囲炉は70×70cm、深さ17cmで、石は一部抜き取られていた（写47の 214）。

本址は21号住居址（勝坂期）を切っていたものと推定される。

遺物　出土量は多いがブルトーザーによる混入遺物もあると考えられる。本址に伴う土器は縄文中期後葉曽利Ⅱ式である。深鉢（図75の1～3、写47の 215）のうち、図75の1は南壁に落ち込んだ状態（写47の 213）で出土したもので藤内Ⅱ式である。石器は打石斧3点（図 118の5～7）、凹石3点（同図8～10）がある。

ネ）　39号住居址（図39・51・99、写25・47）

遺構　B区上段のテラス、調査区東端の小田井沢川に臨む低い崖上にある（図39、写25の104）。37号住居址（曽利Ⅱ）にプランの北寄りの主要部を切られているが、東西4.85mの壁に直線部を持つ不整円形になると思われる（図51の1、写47の 212）。壁は含礫ロームで南は50cmの壁高を持つが北は低い。床面も含礫ロームのタタキ床で軟弱である。周溝はない。柱穴は3コあり、中央西よりに焼土が認められているので炉址部をここに考えたい。

遺物　極めて少量の土器片があるが、縄文中期後葉曽利Ⅱ式の深鉢である（図99の1～9）。

ノ）　40号住居址（図39・51・99・100・118・126、写48）

遺構　B区、中世建築址の東に検出された（図39）。プランは北部を41号住居址に切られ、東半は未調査であるが、壁の一部に直線部を持つ不整円形になると思われる（図51の3、写48の 217）。壁は傾斜し南壁は65cmである。床はロームで軟弱である。周溝は北壁下に幅20～25cm、深さ10cm程のがあるが部分的に存在するものの様である。柱穴は3コ。中央西寄りに95×70cmの浅い方形石囲炉がある（写48の 218）。

本址は41号住居址（曽利Ⅱ古）に切られており、同址より古い。

遺物　本址に伴う土器は縄文中期後葉曽利Ⅱ式でも古い様相を持っている。土器では深鉢（図99の10～

21、100の1～7）がある。石器では打石斧6点（図 118の11・12）、凹石3点（同図13・14）、石鏃1点、（図 126の7）がある。

ナ）　41号住居址（図39・51・70・100・101・118・119・123・126、写48・49）

遺構　B区で17・40号住居址と重複して検出された(図39)。プランは東側を17号住居址（曽利Ⅱ）に切られているが、東西5.10m、南北5.15mの円形を呈し主軸方向はS63°Eを示す(図51の3、写49の 223)。壁はロームでほゞ垂直に立ち上がり、壁高は南54cm、北24cm、西39cmを計る。床面はロームの硬いタタキ床で、周溝が一部途切れるが深さ8cm程でほゞ全周したものと思われる。柱穴は17号住居址との重複部の1コが本址のもので、等間隔に6本の柱をたてたと考える。中央西寄りの方形切り炬燵状石囲炉は 170×110cm、深さ35cmで、炉石の一部を残して他は炉内に落込むか抜き取られていた(写48の 222)。なお、覆土中には炭化物が多く火災に会っていることも考えられる。遺物の出土も多い（写48の 220)。

本址は17号住居址(曽利Ⅱ)、土壙 122、123に切られ、40号住居址（曽利Ⅱ古）を切り土壙 132～135、139～143、168上に貼床する。

遺物　本址に伴出する土器は縄文中期後葉曽利Ⅱ式の古い様相を示す。深鉢（図70・100の8～20・101の1～7、写48の219・221）のうち、図70の14は藤内Ⅱ式の混入覆土遺物である。石器は打石斧5点（図 118の15～17）であるが、17には凹石的なダメージ痕がある。磨石斧5点（図 118の18・119の5・7・126の15）あるが、18は破損品を敲打器に転用したものである。凹石15点（図 118の19～22・119の1～3・8～11）があり、19は磨石斧破損品を敲打器及び凹石として再利用している。磨石1点（図 119の7)、石皿3点（同図4・12、123の10)があり、4は裏面を台石として使用したものか凹石より少し大きい穴が多数あり蜂の巣石ともいえる。また、この石皿4の一方は壁ぎわの覆土中、他方は炉南側床面直上出土で、そのレベル差は30cmあり、興味ある出土状態であった。小形石匙1点（図 126の18、写49の 225)、石鏃15点（同図8～14・16・17)、石錘1点（図 119の6）と石器の豊富さが注目される。

ニ）　42号住居址（図39・52・59・75・101・102・119・120・126・128・129、写49・50）

遺構　A区の中世建築址の下層から検出された(図39)。プランは東西4.55m、南北4.70mで、壁の一部部に直線部を持つ不整円形を呈し、主軸方向はN59°Eを示す(図52の1、写50の 232)。壁はロームで荒れており、壁高は南西55cmと高く北東が36cmと低くなる。床面は凹凸があり中心部は硬いが周辺は軟弱である。周溝は深さ5cm程で全周する。4柱で炉は中央西寄りに70×75cm、深さ29cmの方形切り炬燵状石囲炉があり、一部の炉石を残すが他は抜き取られている。底部を欠いた埋甕が東壁下に正位で埋設され、内部10cm程が中空となり平石を蓋としていた(図59の5・75の8、写49の 229)。南壁隅には平石の上に深鉢（75図6）が横になり、台石に密着し硬玉製垂玉（図 128の4・写50の 230）が置かれていた。西壁下には浅い凹穴があり貯蔵穴と考える。

本址は火災を受けている。覆土は床面に炭化丸太材とカヤかススキと思われる木本科植物茎の炭化物があり、床面直上5～10cmは炭化物を多量に含む黒土、その上層は焼土で特に南北壁ぎわは厚さ20～30cmの層となり多量な焼土は単なる火災とは思えない程であった。

壁から床面にかけて土壙 145、146、149、162、164が検出され、本址の貼床が上部に認められた。

遺物　本址に伴う遺物は意外に少なく、土器は深鉢で縄文中期後葉曽利Ⅱ式である（図75の4～8・101の8～16、102の1～12、写49の 206～7）。石器は打石斧2点(図 119の16)、磨石斧(同図17)、凹石11点(同図18、120の1～5)、磨石（図 120の6）、石皿（同図7）、使用痕ある剥片(図 126の19）がある。他に土器片錘1点（図 129の11）と前記の垂玉がある。

ヌ）　43号住居址（図39・52・102・119・126）

遺構　A区の中世建築址南部の下層に検出された(図39)。プランはブルトーザーで破壊され痕跡を残すのみである。漸移層中に残る周溝からみて南北4.80m 程の円形を呈する竪穴住居址であったと思われる。床は黒土及び漸移層上にあり部分的にタタキ床が残る。柱穴は4コあるが不規則な配置である。炉は中央北寄りに礫2つに囲まれた焼土部が確認されており、径50cmの石囲炉か地床炉と思われる（図52の2）。

遺物　出土遺物は極めて少ない。深鉢は縄文中期中葉藤内Ⅰ式である(図 102の13～16)。石器は打石斧（図 119の13)、凹石（同図14)、石鏃（図 126の20）各1点がある。

ネ）　45号住居址（図39・52・75・103・119、写50）

遺構　A区の中世建築址北西隅下層で検出された(図39)。プランは東西4.15m の円形を呈する竪穴住居址であるが、南側はブルトーザーで破壊している。北壁の現存高は11cm、床面は黒土中にあり炉址の北は一部貼床しており全般に軟弱である。周溝はない。柱穴は2コ検出されている(図52の4、写50の234)。炉は中央西寄りに60×74cmの方形石囲炉があり、一部の石は抜き取られている(写50の 223)。この東側貼床下に焼土が認められたが、本址に伴なうものかは把握できなかった。

本址は土壙 167に切られ、53号住居址（藤内Ⅰ）を切っている。

遺物　出土遺物は少ない。深鉢は縄文中期後葉曽利Ⅱ式である(図75の10・103の1～11)。他には凹石1点（図 119の15）がある。

ノ）　48号住居址（図39・53・71・72・103・104・120・126・129、写51）

遺構　B区下段のテラス部で33号住居址に隣接して検出された(図39)。プランは黒土層中にあり検出には苦心したが、南北4.80m のほゞ円形を呈し主軸方向はS 9° Eを示す(図53の2、写51の 241)。南から西壁が残存するが、西壁で20cmの高さがある。床面はほゞ平坦であるが漸移層及び黒土で軟弱である。なお、東側は49号住居址上に貼床する。周溝はない。柱穴は6コ検出されたがP 1～P 4 が主柱穴と考えられる。炉は中央北西寄りに径80cmの円形石囲炉があり、底には礫が並べられていた(写51の 240)。また、炉南側及び南壁下の柱穴間には焼土が認められ、炉南側から炭化材も出土している。

本址は33号住居址（曽利Ⅱ）に貼床され、49号住居址（藤内Ⅰ）に貼床している。

遺物　出土遺物は大変多く、特に炉址南側周辺に集中した。出土状態はいわゆる井戸尻パターンの様相を示している(写50の 236・51の 239)。ほゞ完形の深鉢7点を含め深鉢片は多い（図71、72の1～5・7～10、103の12～18、104の1～13、写51の 237～8）。71の1はブル表七剝ぎでミミズク把手を破損している。71の2は3種類の縄文を使い分け変化をつけている優品である。104の9～12は平出第Ⅲ類Aである。他に台付土器台部（72の11）と有孔鍔付土器片（同図6）がある。

石器は打石斧11点（図 120の８・14・15）、横刃形石器３点（同図９～11）、粗製石匙１点（同図16）は撮みを作るためトリミングが加えた雑な剥片、凹石３点（同図12・13）、石鏃３点（図 126の21～23）、石錐１点（同図24、写51の 242）、三角柱状剥片に撮みを作りだした異形石器１点（同図25、写51の 242）がある。土製品では土製円板（図 129の12）がある。

本址の所属時期は図71の２、72の１は井戸尻Ⅰ式であるが、他は藤内Ⅱ式であることから縄文中期中葉藤内Ⅱ式の新しい時期である。

ハ）　49号住居址（図39・53・73・104～106・121・126、写52）

遺構　Ｂ区下段のテラスで48号住居址に切られて検出された(図39)。プランは未調査部もあり規模、主軸方向は不明である(図53の３、写52の 243)。壁は軟弱で壁高は西36cm、北37cmを計る。床面はローム混入の黒土層にロームの貼床をしているがあまり硬くない。周溝はない。柱穴はＰ１～Ｐ３があるがＰ１は中心部へ傾斜を持っている。Ｐ５も配置から考えて本址のものであろう。従って、主柱穴はＰ２・Ｐ３・Ｐ５と考えられる。他は補助柱穴か65号住居址の壁外柱穴となるものであろう。西壁寄りに50×80cmの方形石囲炉址があり石は抜き取られている。壁に近接しすぎる点で疑問は残るが本址の炉と考えたい。覆土には焼土が多く火災にあった住居址である。

本址は48号住居址（藤内Ⅱ新）に切られ、65号住居址（新道式）に貼床する。

遺物　出土遺物は非常に多い。土器は縄文中期中葉藤内Ⅰ式である。深鉢（図73の１～４・６～８・104の14～17・105・106の１～13、写52の 244）には図73の１～３の平出第Ⅲ類Ａに属する土器が含まれる。他に浅鉢片(図 105の10)、両耳鉢（図73の５）がある。石器では打製石斧23点（図 121の１～９・15～17）と多く、横刃形石器２点（図 121の10）、乳棒状磨石斧５点（同図８・９・19）、粗製石匙１点（同図11）、凹石３点（同図12～14）、敲打器１点（同図18）、石鏃４点（図 126の26～28）、スクレイパー１点（同図30）、石錐１点（同図31）がある。

ヒ）　50号住居址（図39・54・74・107・122・127・129、写52）

遺構　Ｂ区下段のテラスの調査区最東端に検出された(図39)。プランは傾斜地で北東部は不明であるが、南北5.30m の円形を呈する黒土中の貯穴住居址である(図54の１)。壁は傾斜し軟弱、西壁最高部で37cmをを示すが東は低い。北西壁部には地山の巨石がある。床面は壁ぎわはやゝ硬いが、他は礫混入黒土で軟弱である。周溝と柱穴は確認できなかった。中央やゝ南東寄りに埋甕炉（図74の２）があるが、焼土は比較的少ない。

本址は60号住居址（藤内Ⅰ）を切り、62号住居址（新道）に貼床をしている。

遺物　出土遺物は多い。土器は縄文中期中葉の新道式の要素を残す藤内Ⅰ式である。深鉢（図74の１～10・13～15、107)があり、74の３～５、107の１～３は新道式、74の６・107の18は平出第Ⅲ類Ａである。有孔鍔付土器（図74の11・12)、浅鉢（同図16）もある。石器は打石斧18点（図 122の１～７）、横刃形石器11点（同図８～14)、磨石斧５点（同図15・16・127の５）、凹石９点（図 122の17～20)、石匙１点（図127の６、写52の 246)、石鏃４点（同図１～４）、横刃形石器ともみれる異形石器（同図７、写52の 247）と多い。土製品では土器片錘４点（図129 の13～16）がある。

ヲ）　51号住居址（図39・53）

遺構　A区の中世建築址の下層で検出された(図39)。プランはブルトーザーによる排土の際削りすぎ詳細は不明である。床面は黒土から漸移層にかけてで、炉址周辺が硬い。柱穴は5コ検出され、炉址は55×50cm、深さ28cmの地床炉で、内部より焼土と土器片が検出された（図53の4）。

遺物　深鉢（図 106の14～21）は縄文前期末葉である。浅鉢（図75の11）は縄文中期中葉で排土の際の混入遺物と考えられる。住居址は縄文前期末葉に属する。

ヘ）　52号住居址（図39・53・75）

遺構　B区下段のテラスの東部にある(図39)。プランはブルトーザーによる排土で攪乱され、東側は中世土壙54に切られ不明である。ローム層直上の住居址で床は軟弱だが平坦である。柱穴は小さいものが多数検出されたが、表土が浅いため一部耕作による攪乱も含まれていると思われる。埋甕炉が検出されたが焼土は多くなかった（図53の5）。

遺物　出土遺物は埋甕炉として使われた深鉢口縁部（図75の12）のみで、縄文中期中葉藤内Ⅰ式である。

ホ）　53号住居址（図39・44・108・122・127、写52）

遺構　A区の中世建築址北西隅の下層で検出された(図39)。プランは黒土中の住居址で45・47号住居址に攪乱されていて、炉を中心に床面2.50m程を確認出来ただけである。床は平坦であるが軟弱である。炉は40×55cmの方形石囲炉で深さ12cm、焼土が認められた(写52の 248)。

本址は47号（弥生中期）、45号住居址（曽利Ⅱ）に貼床されており、これらより古い。

遺物　出土遺物は少ない。土器は縄文中期中葉藤内Ⅰ式である。深鉢（図 108の1～5）のうち、3は平出第Ⅲ類A系統の土器である。石器は打石斧2点（図 122の21)、凹石4点（同図22～25)、小形石匙1点（図 127の8、写52の 249）がある。

マ）　54号住居址（図39・48・108）

遺構　A区の西端、大熊城址第Ⅴ之郭の東斜面テラス部にある(図39)。住居址の重複が多く残存するのは西壁と僅かな床面だけである。ほゞ円形の竪穴住居址となると思われ、壁はロームでほゞ垂直に立ち上り壁高は40cmである。床面はロームの硬いタタキ床で、周溝は西壁下に認められた。柱穴は1コ検出した（図48の1）。

本址は1号、58号、61号住居址（曽利Ⅱ）に切られ、57号住居址（新道式）に貼床している。

遺物　出土遺物は少ない。土器は縄文中期後葉曽利Ⅰ式で深鉢（図 108の7～12）がある。同図6は曽利Ⅱ式で重複する住居の多い所であるため混入したものであろう。

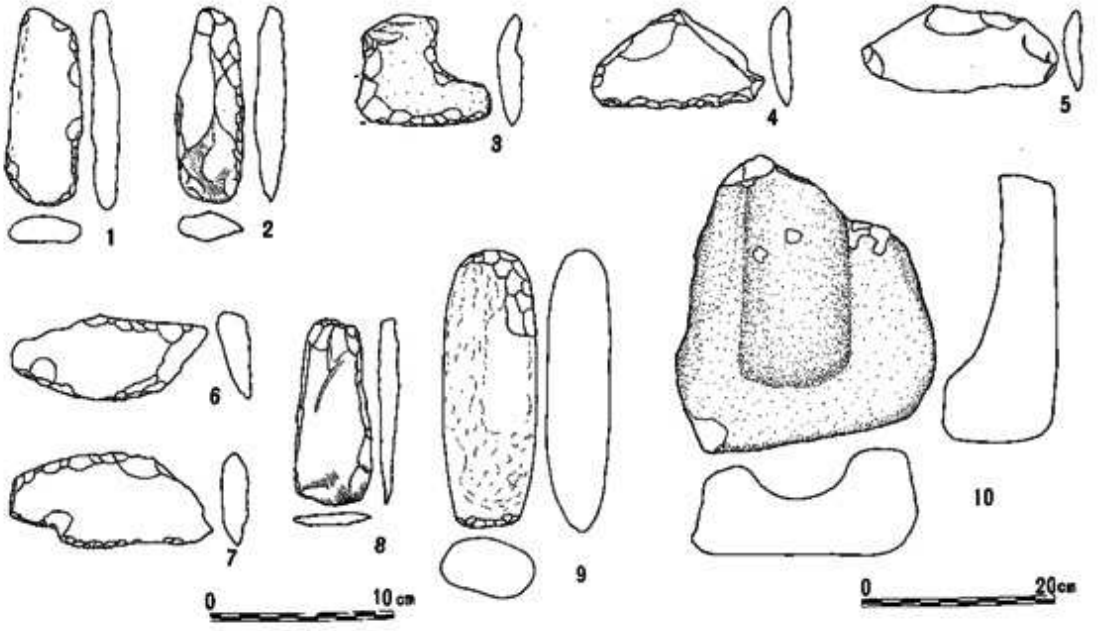
ミ）　55号住居址（図39・44・75・109・123、写52・53）

遺構　B区上段のテラスにある(図39)。プランは東西5.60mの円形を呈する竪穴住居址で、東半は表土が浅いため耕作で攪乱されたり5号・7号住居址に切り取られている(図44の1、写52の250)。切られていない西壁最高部は59cmである。本址床面は6号住居址貼床より18cm低く、南側はロームのタタキ床で硬いが北側は黒土で軟弱である。周溝はない。柱穴は建て直しされたものか多く検出された。炉は中央部にあり、60×35cm、深さ5cmと浅い地床炉に近いものであろう。この周囲は広範囲に焼けていた。本址は6号住居址（藤内Ⅰ）に貼床され、5号（平安後期）、4号、7号住居址（藤内Ⅰ）に切られている。

遺物　出土遺物は多い。土器は縄文中期中葉の新道式の要素を残す藤内Ⅰ式である。深鉢（図109の1～17）には平出第Ⅲ類A系統（同図6）のものもある。有孔鍔付土器2片（図75の13・14）がある。石器では打石斧4点（図123の1・8、写53の251）、先端に使用痕を残す局部磨石斧（同図2）、乳棒状磨石斧（同図9）、粗製石匙（同図3）各1点、横刃形石器（同図4～7）がある。

ム）　56号住居址（図39・53・108・121）

遺構　B区下段のテラスにある。用地内ではあるが未買収の果樹園との境に遺構が存在するため一部を調査したのみである(図39)。境には石垣がありこの造成時に遺構の一部は破壊されていると思われる。円形プランになると思われ、黒土中の住居址で調査区の壁には住居址の断面が観察された。床面は細礫混入褐色土のタタキ床で硬い。



第123図　荒神山遺跡41号・55号住居址出土石器（1：4　但し10は1：8）
1～7　55号住居址覆土，8・9　55号住居址床面，10　41号住居址床面

本址は49号（藤内Ⅰ）、65号住居址（新道式）上に貼床しており、これらより新しい。

遺物　出土遺物は少ない。深鉢（図 108の13～18）は縄文中期後葉曽利Ⅱ式である。石器は打石斧１点（図 121の20）だけである。

メ）　57号住居址（図39・48・109・121）

遺構　Ａ区西端、大熊城址第Ⅴ之郭の東斜面テラスにある(図39)。プランは円形になると思われるが、26号住居址に切られ西壁部を残すのみで詳細は不明である。残存壁は54号住居址床面より４cmあるだけ、床面はロームの硬いタタキ床で周溝が検出されている（図48の１）。

本址は19号(曽利Ⅲ古)、26号住居址（曽利Ⅱ古）に切られ、54号住居址（曽利Ⅰ）に貼床されていた。

遺物　出土遺物は僅少である。土器は深鉢（図 109の18・20～24）と浅鉢（同19）があるが、21と24は藤内式の混入であろう。石器は磨石斧１点（図 121の21）、石錘１点（同22）がある。新道期住居である。

モ）　58号住居址（図39・48・110）

遺構　Ａ区西端、大熊城址第Ⅴ之郭の東斜面テラスの段郭部で検出された(図39)。傾斜面であることと表土が浅いため、西の一部を残すのみである。プランは円形を呈する竪穴住居址で、北壁はロームでほゞ垂直に立ち上がり壁高は30cmを計る。床面残存部は少ないがロームの硬いタタキ床である。浅い周溝がある。柱穴Ｐ１～Ｐ３はローム、炭粒混入褐色土が落ち込んでいた。なお、覆土の黒褐色土には炭化物、焼土が多く、本址が火災に会っていることを示すものであろう。

本址は54号（曽利Ⅰ）、57号住居址（新道式）に貼床し、これらより新しい。

遺物　出土遺物は極めて少ない。深鉢（図 110の１～５）は縄文中期後葉曽利Ⅱ式である。

ヤ）　59号住居址（図39・40）

遺構　Ａ区西端、大熊城址第Ⅴ之郭の東斜面テラス（段郭）部で検出された(図39)。プランは農道（鎌倉街道といわれる）の下になるため、周溝と荒れた床面の一部を調査したにすぎないが、ほゞ円形の竪穴住居址になると思われる（図40の１）。周溝は幅15～20cmで深さ４cmと浅く、北壁下に認められた。

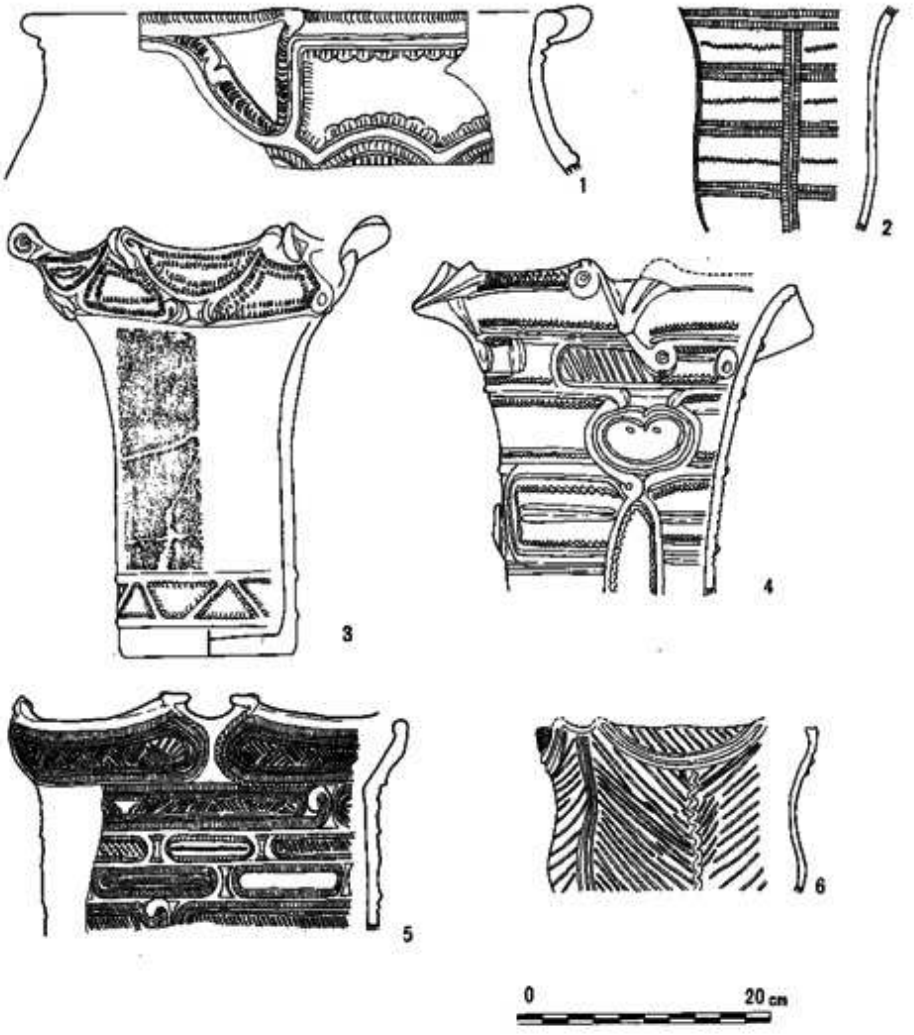
遺物　出土遺物は皆無である。第二次調査の結果を待ちたい。

イ）　60号住居址（図39・54・76・110）

遺構　Ｂ区下段のテラス部で、50号住居址の貼床の下に検出された(図39)。円形を呈する竪穴住居址と思われるが、詳細は破壊され不明である。本址は黒土中の住居址であるが、覆土は焼土混入赤褐色土で判別できた。壁はほゞ垂直で西壁は23cmある。床は平坦であるが軟弱、62号住居址への貼床部も軟弱である。壁ぎわの柱穴１コが検出され、薄い焼土部が認められたが炉址とは断定できなかった（図54の１）。

本址は50号住居址（藤内Ⅰ）に貼床され、62号住居址（新道式）上に貼床する。

遺物　出土遺物は極めて少ない。深鉢（図76の１、110の６・７）は縄文中期中葉藤内Ⅰ式である。



第76図　荒神山遺跡60号・62号・66号住居址出土土器（1：6）
1　60号住居址，2～5　62号住居址，6　66号住居址

ユ）　61号住居址（図39・48・110）

遺構　A区西端、大熊城址第V之郭の東斜面テラス部にある（図39）。プランは19号住居址（曽利Ⅲ古）に殆んど切られ破壊されている。西壁部を残すのみであるが、残存高は13cmの円形を呈する竪穴住居址であったと思われる（図48の1）。覆土は茶褐色土である。床面は軟弱である。本址は調査最終日に存在を確認し細部にわたる調査が行われていない。詳細は二次調査の結果に待ちたい。

本址は19号（曽利Ⅲ古）、1号（曽利Ⅱ）に切られ、26号住居址（曽利Ⅱ古）に貼床する。

遺物　少量の土器片が出土している。深鉢片（図110の8～10）は縄文中期後葉曽利Ⅱ式である。

エ）　62号住居址（図39・54・76・110・127・129、写53）

遺構　B区下段のテラスにある60号住居址の貼床下に検出された（図39）。プランは残存床面から径4m程の円形を呈する竪穴住居址と推定される（図54の1）。黒土中の住居址で壁は西が高く36cm、東は低くなる。床面は小石の混入した黒土でやゝ硬いが東部は不明瞭である。周溝及び柱穴は確認できなかった。中央南寄りに薄い焼土が確認されたが地床炉の痕跡と思われる。

本址は50号・60号住居址（藤内Ⅰ）に貼床され、これらより古い。

遺物　出土遺物は多い。本址に伴う土器は縄文中期中葉新道式である。深鉢（図76の２～５、110の11～18、写53の 253）には胴部に人体文を表わしているもの（図76の４、写53の 254）がある。なお、110図13・14は藤内期のもので混入したものと思われる。石器は小形石匙１点（図 127の９、写53の 252）だけである。土製品は土器片錘１点（図 129の17）と土製円板３点（同図18～20）があり、18・19は同一個体の土器片を用いたかと思われる。

ヨ）　63号住居址（図39・54・111・121、写34）

遺構　Ａ・Ｂ両区にまたがり一部10号住居址上部にかかっている(図39)。プランは西部が確認されたのみで詳細は不明であるが、円形の竪穴住居址となる(図54の２、写34の 151)。西壁残存高は５cmで、壁から床面にかけて土壙 173が検出され、本址の貼床がされていた。床面はほゞ平坦であるが、西壁下のローム床は軟弱である。10号・64号住居址への貼床はローム混入黒土でやはり軟弱であった。周溝はない。柱穴は１コ検出された。中央北寄りに石囲炉の痕跡が認められ、焼土は径170cm程あり附近に石が散乱していた。

本址は10号（曽利Ⅱ）、64号住居址（曽利Ⅱ）に貼床しており、これらより新しい。

遺物　出土遺物は少ないが焼土中のものである。深鉢（図 111の１～３）は縄文中期末葉曽利Ⅲ式である。石器は凹石１点（図 121の23）だけである。

ラ）　64号住居址（図39・54・111、写34・53）

遺構　Ａ・Ｂ両区にまたがり、前記63号住居址の貼床の下に検出された(図39)。プランは径4.70m 程の円形を呈する竪穴住居址である(図54の３、写34の 151)。壁はロームでほゞ垂直に立ち上がり、残存壁高は20cmを計る。床面はロームの硬いタタキ床で、10号住居址上の黒土の貼床も硬く良好である。周溝は全周するものと思われる。柱穴は３コあり、ほゞ中央に 120cm四方、深さ30cmの方形切り炬燵状石囲炉が検出されている（写53の 255)。未調査部分は第二次調査する予定である。

本址は63号（曽利Ⅲ）　66号住居址（曽利Ⅱ）に貼床され、10号住居址（曽利Ⅱ）に貼床する。

遺物　出土遺物は少ない。深鉢片（図 111の４～11）があるが縄文中期後葉曽利Ⅱ式である。

リ）　65号住居址（図39・53・111）

遺構　Ｂ区下段のテラスで48号住居址に隣接して検出された。用地内の未買収地との境に近いため遺構の半分しか調査できなかった。プランは径５m 強の円形を呈する竪穴住居址となると推定される（図53の３）。黒土中の住居址で西壁高は48cmを計るが東は低い。床面は平坦で硬い。周溝はない。柱穴は壁下に検出されたＰ４・Ｐ６が本址のものである。炉は土壙 156に破壊され、中央北西寄りに少量の焼土と礫を残しているだけである。

本址は56号（曽利Ⅱ）　49号住居址（藤内Ⅰ）に貼床されており、これらより古い。

遺物　出土遺物は少ない。深鉢片（図 111の12～14）３点は同一個体片であるが、縄文中期中葉新道式のものである。

ル）　66号住居址（図39・54・76・111）

遺構　A・B両区にまたがっている(図39)。遺構の大部分は大量の排土下になっており、一部を調査したのみである。円形の竪穴住居址になると思われるが、詳細は二次調査の結果に待ちたい。床面はロームの固いタタキ床である（図54の３）。本址は64号住居址に貼床するので同址より新しい。

遺物　出土遺物は少ない。深鉢（図76の６、111の15～20）は縄文中期後葉曽利Ⅱ式である。

イ　弥生時代の住居址

ア）　44号住居址（図39・52・130）

遺構　B区西端に位置する(図39)。プランは排土作業の際荒らされてしまい、南壁及び床面の一部を確認したにすぎない。東西4.30m の隅丸方形竪穴住居址で、主軸方向は不明である(図52の３)。黒土層中の住居址で、残存壁高は11cmを計る。床面は黒土であるが大変硬い。

本址は10号・66号住居址（曽利Ⅱ）に一部かかり、上部に貼床している。従って、これらより新しい。

遺物　壺頸部片と思われるもの１片（図 130の１）と甕小破片が若干出土している。丹彩され、櫛状文を有するが、弥生中期末葉の海戸式から後期岡屋式にみられる施文である。住居址の所属時期は、遺物が少ないため問題はあるが、弥生後期と考えたい。

イ）　46号住居址（図39・45・130）

遺構　B区下段のテラス部で、44号住居址の東に検出された(図39)。プランは排土作業で削ってしまい、床面の一部を確認したにすぎない。床残存部は１× 3.5m 程で、ロームの硬いタタキ床を残す。床面残存部北寄りに径50cm程の焼土が認められた（図45の２、写36の 163)。

本址床面は、13号住居址より４cm程高く、同址に切られている。

遺物　出土遺物は少ない。床面から甕小破片（130 図２～11）を出土している。櫛状具による斜走条痕が施文されている。本址は出土遺物からみて弥生中期後半の住居址と考えられる。

ウ）　47号住居址（図39・53・130、写50）

遺構　A区の中世建築址北西隅の下層に検出された(図39)。黒土層中の遺構で検出には苦心したが、東西3.35m の隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN42° Eを示す(図53の１、写50の 235)。壁はほぼ垂直で壁高は西24cmを計る。床面は褐色土でやゝ硬い。柱穴は４コ検出されている。

本址は45号（曽利Ⅱ）、53号住居址（藤内Ⅰ）の上層に検出され、これらより新しい。

遺物　床面からは壺片（図 130の12・13)、甕片（14～19)、覆土からは口唇に縄文の施文された壺片（20・21)、条痕のある壺片（22)、条痕のある甕片（23～27)、丹彩された高坏片（28)、甕底部（29)、櫛描波状文のある甕片（30・31）を出土している。28～32は床面より35cm程上部にあった集石部で出土している。本址に伴う遺物は弥生中期末葉海戸式と思われる。集石部は後出の後期岡屋式期の遺構であった可能性もある。

ウ　平安時代の住居跡

ア）　5号住居址（図39・42・112・127・131、写25・30）

遺構　B区上段のテラス部で、北東への緩傾斜面に位置している（図39、写25の 105）。プランは東西5.10m の隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN50° Wを示す（図42の2、写30の 133）。北東壁は耕作により失われているが、東・西壁は25cmの高さで、黒土からロームまで堀り込んだ壁は良好である。床面は北東部が黒土で撹乱されているが、他はロームのタタキ床で硬い。主柱穴P1～P3とカマド両側に対をなす補助柱穴がある。南隅には石組粘土カマドがあり、規模は1.5×1.2m、火床から煙道までの立ち上がりが大きく、燃焼効率を高める工夫がこらされている（図42の3、写30の 132）。なお、カマド周辺のピットは何れも灰が充満していた。

本址は4号（藤内Ⅰ）、55号住居址（藤内Ⅰ古）を切っており、これらより新しい。

遺物　床面より土師坏（図 131の1～4）、灰釉碗（同5～9）以外に、図示してないが土師鍋釜、須恵甕の小破片が出土した。砥石1点（図 112の19、写30の 131）は西壁下ピットから、刀子1点（図 127の10、写30の 129、130）は西壁ぎわより、鉄滓5点はカマド右手前のピットから出土した。

本址は遺物からみて平安時代後期の住居址である。

イ）　9号住居址（図39・44・131、写34）

遺構　B区下段のテラス部で、44号住居址の東側に検出された（図39）。プランは西隅が残るだけで、23号住居址に切り取られている。東西2.50m の隅丸方形の竪穴住居址で、西壁残存高は12cmである。床面は土壙27・50に貼床しているが、部分的にタタキ床が残る（図44の2、写34の 149）。

本址は23号住居址（平安後期）に切られ、同址より古い。

遺物　出土遺物は少ない。床面からは篦調整の土師甕（図 131の10）が、覆土からは土師坏（同11）、灰釉碗（同12～13）が出土した。本址は平安時代後期に属する。

ウ）　13号住居址（図39・45・127・131、写37）

遺構　B区下段のテラス、44号住居址の東に検出された（図39）。南側が排土盛土の下になり調査できなかった。プランは東西5.70m の隅丸方形を呈する竪穴住居址と思われるが、詳細は二次調査の結果を待ちたい（図45の2）。西壁残存部最高17cm、床面中央部はロームのタタキ床で硬く周辺は軟弱である。柱穴4コは不規則な配置であるが、覆土と同じ黒土が充満していた。焼土部も認められた。

本址は46号住居址（弥生中期）を切っている。土壙91～93は本址を切っている。

遺物　床面からは土師杯2点（図 131の15～16）が出土したが、中世カワラケの祖形となるものである。覆土からは土師杯（同14）が出土した。刀子（図 127 の11、写37の 164）1点は床面出土である。住居址は遺物からみて平安時代後期に属する。

エ）　23号住居址（図39・44、写34）

遺構　B区下段のテラス、9号住居址と一部重複して検出された(図39)。プランは南北3.80mの隅丸方形を呈する竪穴住居址である(図44の2、写34の149)。西壁残存部は最高14cm、北壁11cmである。床中央部はロームのタタキで硬い。

本址は土壙55、9号住居址を切り、北部を14号住居址（中世）に切られ、27号住居址（平安後期）に貼床する。

遺物　床面で灰釉陶器片が若干出土したが、小破片で図示し得ない。本址は平安時代後期に属する。

オ）　27号住居址（図39・48・131、写42）

遺構　B区下段のテラスにあり、23号住居址に隣接して検出された(図39)。プランは周溝から推定して隅丸方形を呈する竪穴住居址と考えられる(図48の4、写42の191)。壁はブルトーザーで破壊してしまっている。床面はロームのタタキ床で良好であるが、土壙43・44上にはロームの貼床されていた。周溝は幅20cm、深さ8cm程で部分的に検出された。

本址は14号（中世）、23号住居址（平安後期）に貼床されており、これらより古い。

遺物　覆土遺物として図示されているが、本址に伴うものに土師坏(図131の17)、灰釉碗（同18）の小破片がある。少量の遺物ではあるが、本址は平安時代後期に属すると考えたい。

カ）　29号住居址（図39・49・131）

遺構　B区下段のテラス部で、13号住居址東側に検出された(図39)。遺構は黒土層中にあり検出には苦心した。残存する床面からプランを推定すると隅丸方形の竪穴住居址となる。床面はたたきしめられ、やや良好である。西壁中央右寄りに厚い焼土が認められ、カマドの火床と考えた（図49の1）。

本址は28号住居址（中世)に切られる。30号住居址が上にあった可能性が強く、同址レベルより本址床は数cm低い。

遺物　覆土遺物であるが、土師坏（図131の19）がある。図示してないが、内耳土器片、カワラケ皿片がある。後者は28号・30号住居址からの混入遺物と思われ、カマドの存在から本址は平安時代後半の住居址と考えたい。

キ）　34号住居址（図39・49）

遺構　B区下段のテラス部で、15号住居址の貼床の下から検出された(図39)。プランは東半を11号住居址に切り取られているが、南北4.05mの方形竪穴住居址で主軸方向はN21°Wを示す(図49の3、写35の155)。壁高は西壁残存部で12cmを計る。床はロームのタタキ床で堅緻である。北西隅寄りに48×40cm、深さ4cmの凹穴があり、内部には焼土が認められ、地床炉の可能性が強い。11号住居址のローム貼床の4cmドが本址床面となるが、その間に炭粒を含む黒土が残される。

本址は11号・15号住居址（中世）に貼床されている。

遺物　出土遺物は極めて少量である。極細のカキ目のある土師甕、須恵甕、灰釉碗の小破片があるが図示し得ない。本址は出土遺物から平安時代後期に属すると考えたい。

ク）　36号住居址（図39・40・131）

遺構　B区下段のテラス部で、34号住居址の東側に隣接して検出された(図39)。プランは南部が残存するだけであるが、南北5.30mの隅丸方形を呈する竪穴住居址と思われ、主軸方向はN12°W（？）を示す(図40の4)。残存壁高は西壁で11cmを計る。床面はロームでやゝ硬い程度である。P1は11号住居址貼床の下から検出されたが、同址北西隅の浅いピットと組む可能性も考えられる。なお、壁沿いに数cmの深さの小ピットが並んで検出されている。

本址北部床面上に11号住居址（中世）の貼床があり、同址より古い。

遺物　土師坏（図 131の20）2点は床面、灰釉碗（同21・22）3点は覆土からの出土である。小破片は図示してない。出土遺物が少なく、カマドも未確認で問題はあるが、本址は平安時代後期に属すると考えたい。

エ　中世の住居址

ア）　2号住居址（図39・41・128・132、写26・27）

遺構　中世建築址と考える配石遺構の北東に位置し、原地形では石塡を境にして、同址のある緩傾斜の畑地より一段低い平坦な畑で検出された(図39、写24の 103—中央)。本遺構はローム層直上の黒土が踏み固められたか、たたき固められており、広い面積を持つ。当初、掘建住居址を想定して柱穴を検出したが、不規則な配列となり掘建住居址との考え方を放棄せざるを得なかった。北側に土台石ともみれる平石（S1～S4）が発見され、更に拡張した。S1—S2の距離は3.30m、S2—S3は3.60m、S4がこれに伴うものとすればS2—S4は4.35mになり、石の間隔は不規則である。この上に建築物があった可能性も考えられるが、根拠は薄い。また西側に長さ1.50mの配石があるが、性格不明である（図41の1、写27の 112)。

南東隅にはロームを掘り込んだ方形の石組遺構が検出されている(図41の2、写同 111)。その大きさは内のりで125×130cm、深さ 110cmを計り、南と東壁は良い遺存状態であるが、北壁は内部へ崩落している。遺構は石積部より大きな穴を掘り(図同1点線)、石積み後、裏に栗石をつめている。なお、コーナー部は大平石を積んで強化している。この覆土は最上尽が炭混入褐色土で、底部の隅には赤褐色の砂質土が認められた。また、壁際には鉄分を含んだ黒青色泥が付着していた。石組上端部と2号住居址たたき面とのレベル差は殆んどない。

この方形石組遺構の性格については、焼土がないことから炉址でないことはほゞ確実である。中世建築址下層をロームまで掘り下げて遺構検出終了後、雨の降った日から数日間は本遺構の方向に湧水が流れているのをみている。排水溝とみられるものがないことから、速断はできないが、井戸としての可能性が強いと考えている。

上段の中世建築址との間にある後世の石垣をはずして、本址との関係を調査する時間的余裕を持たなかったが、中世建築址の前に設けられた広場としての機能を持つものではないかと考えている。

遺構　2号住居址タタキ面ではカワラケ皿3点(図 132の1～3)、古銭2点（皇宋通宝—1039年— 128図8、治平元宝？—1064～1067年—同図9、写26の110)、図示してないが内耳土器片、古瀬戸陶器片、砥

石１点、縄文時代の石皿が出土した。方形石組遺構からは古銭１点(永楽通宝―1411年―同図11)、古瀬戸陶器片、銅製鉸金具が出土した。遺構は遺物からみて室町時代の可能性が強い。

イ）　11号住居址（図39・40、写35）

遺構　Ｂ区下段のテラス部で、34号住居址東側に一部重複して検出された(図39)。方形の竪穴住居址であるが、残存部は南北 5.1m で棟方向はＮ12°Ｗに近いものであったと推定される(図40の3、写35の155)。残存壁高は西壁で14cm程である。床面は西側で34号住居址（平安後期）上に、南部で36号住居址（平安後期）上に、薄い覆土を残して、１cm程のロームの貼床をしている。堅緻な床である。周溝は３～４cmの深さでめぐる。柱穴はＰ１～Ｐ６で、主柱穴はＰ３～Ｐ５で柱間間隔は２間とも1.75m である。

本址は上記の切り合いの他、15号住居址（中世）の床が本址上層にあり、24号住居址との切り合い関係は不明である。

遺物　図示できないが、内耳土器片が少量出土している。本址は中世のものであろう。

ウ）　14号住居址（図39・46・132、写37）

遺構　Ａ・Ｂ両区にまたがっている遺構で、23号住居址に一部重複して検出された(図39)。緩傾斜面を削平し、屋敷地としたと見られる遺構である。北西隅ではロームを40cm程削り取った平坦地に、平石を土台として等間隔に並べた建物遺構で、桁行４間半、梁行３間となる(図46の１、写37の 166)。Ｓ１～Ｓ４、Ｓ５～Ｓ７の芯々間隔は1.8m、Ｓ４－Ｓ５は0.9m、Ｓ７－Ｓ８は 3.6m であるが、Ｓ７－Ｓ８の間では土台石１コが抜かれていると思われ、極めて規則正しく配列する。本址北東部は後に下の畑を削平する際削り取られ、そこに石垣が構築されたようで破壊されている。床面は軟弱であり、板張りの建物であったかかと思われる。覆土は南側で木炭片の入る黒土、北部では赤斑の入る暗褐色であるが、東への緩傾斜面にあるため、その埋没過程を示すと思われる。

本址は23号・27号住居址（平安後期）を切り、24号住居址（中世）に部分的に貼床している。

遺物　出土遺物は少ない。カワラケ２点（図 132の６・７）、内耳鍋２点（同図４・５）、鉄釉小坏１点（同図８、写37の 165）がある。図示してないが黄瀬戸片、フイゴ口がある。中世の住居址である。

エ）　15号住居址（図39・46・132、写37）

遺構　Ｂ区西寄りで、14号住居址東側に位置する(図39)。プランは東西3.70m、南北4.05m の方形竪穴住居址で、主軸方向はＮ28°Ｅを示す（図46の２、写37の 169)。東半の壁はすでに破壊されているが、残存する西壁は20cmの高さである。南部の床面はロームの堅緻な床で、北部は34号住居址上に３～８cmの貼床をする。中央西寄りに55×80cmの方形の炉（Ｆ１）があり、灰、焼土が認められた。西寄り中央部に土壙57があり、これは本址の貼床の下から相出された24号住居址の炉（Ｆ２）にも切られていた。

本址は24号住居址（中世）を切り、11号（中世)、34号住居址（平安後期）に貼床しており、これらより新しい。

遺物　出土遺物は比較的多い。カワラケ皿５点（図 132の12～16)、内耳鍋２点（同図10・11)、図示できなかったが古瀬戸片、黄瀬戸片、鉄片がある。本址は中世の住居址である。

オ）　20号住居址（図39・48、写40）

遺構　B区下段のテラス部で、13号住居址東側に検出された(図39)。プランは東西3.10m、南北3.80mの隅丸方形を呈する竪穴住居址で、主軸方向はN28°Wを示す(図48の2、写40の 183)。壁はほゞ垂直に立ち上がり、壁高は西39cm、東15cmを計る。なお、西壁隅には地山の大きな石がある。床面はほゞ平坦で中央部は硬く良好である。なお、東壁近くに黒土及び黄褐色土の貼床とみられる部分がある。炉は南西寄りに径57cm、深さ11cmの地床炉があり、内部には灰、焼土が若干認められた。柱穴は住居址内では検出できなかった。本址は35号住居址（曽利Ⅱ）を切っている。

遺物　覆土中からは縄文土器片が多く出土したが、中世遺物は少ない。図示してないが西壁中央より刀子1点、北東隅床面から中世陶器片が出土し、内耳土器片、カワラケもある。

カ）　24号住居址（図39・46、写35）

遺構　B区下段のテラス部で、14号住居址の東側に検出された(図39、写25の 105)。プランは南北7.10mの隅丸方形を呈する竪穴住居址である(図46の2、写35の 155)。西壁は良好な遺存状況で、壁高61cm、壁の2／3の高さまでたたき固められている。数cmの厚さの貼床状の床面上昇があるが、下にはロームの堅緻な床が認められた。15号住居址の貼床の下から、本址の炉と推定されるもの(F2)が検出され、105×110cmの方形を呈し、本址床面のレベルからの深さは44cmである。内部には厚さ2cm程の炭層があり灰も認められた。内耳鍋片が床面、西壁斜面にはりついて出土した。

本址は14号住居址に一部貼床され、15号住居址に切られており、中世のこれらより古い。

遺物　小破片で図示してないが、内耳土器片が出土している。本址は中世の住居址である。

キ）　25号住居址（図39・45、写42）

遺構　B区下段のテラス部で、13号住居址の東側に検出された(図39)。遺構の確認した範囲は南北6m、東西 3.7m 程である。14号住居址と同様に緩傾斜地を削平して屋敷地としたものかと思われ、西部はローム層を削り、東部は黒土層中にある。土台石となり得る平石S1～S5が検出された（図45の1、写42の190)。S1－S2、S4－S5の距離は1.8m、S2－S3は3.1mで配列はやゝ乱れている。床面はブルトーザーによる排土で撹乱された部分もあるが、12号住居址（曽利Ⅱ）を切る西側は非常に硬い。土間の可能性が強い。北側で角釘、カワラケが出土した。本址は30号住居址に切られている可能性がある。

遺物　小破片で図示してないが、角釘、カワラケが出土している。

ク）　28号住居址（図39・48・127）

遺構　B区下段のテラス部で、25号住居址の東に位置する(図39)。南北3.50mの方形竪穴住居址の一部と推定される(図48の5)。西壁部が残存するだけだが、床は礫混入のため不明確である。広い焼土部が認められている。本址は29号住居址（平安後期）を切っており、同址より新しい。

遺物　用途不明鉄製品2点（図 127の14・15）がある。中世住居址と思われるが、証明する遺物がないのが残念である。

ケ）　30号住居址（図39・49・132、写42）

遺構　B区下段のテラス部で、25号住居址の東側に検出された(図39)。プランの北西部 3.7×2m が遺存するのみである。隅丸方形の竪穴住居址とも思われるが、14号住居址同様、屋敷地として削平した土台石を持つ建物遺構とも考えられる(図49の1、写42の 192)。S1～S6の平石の配置は桁行 4.2m（14尺)、梁行 2.7m（9尺）であり、S1－S2、S3－S4は1.8m、S4－S5は0.9m の距離で曲尺の整数倍となり土台石の可能性が強い。なお、床はタタキ床であったと思われ、部分的に良好な部分が残る。

本址は25号住居址（中世）を切り、29号住居址（平安後期）の上にのっている。

遺物　出土遺物は極めて少ない。内耳鍋1点（図 132の17）がある。本址は中世の遺構である。

オ　中世建築址（図39・55・127・128、写53・54)

遺構　A区東部にある(図39)。大熊城址第V・VI之郭の東斜面の裾部黒土層を削り、平坦な敷地を造成したものである。遺構全体の規模は南北19m、東西12.5m 程ある。東西方向に並ぶ石垣状遺構部で現地表下 1.2m、南西部では 0.8m 下になる(図55、写53の 256、54の257～261、55の 262)。敷地の南西部には径50～80cmの平石が列をなしており、このような礎石を用いる以上、相当大きな木造建築物があったと考えられる。

グリット掘りで石垣状配石遺構の範囲を確認し、ブルトーザーで排土したが、北東部の礎石はその際とばしてしまったのではないかと懸念している。以下、礎石の芯々間の距離を列記すると、S1－S2は3.30m、S2－S3は3.10m、S3－S4は2.45m、S4－S5は3.70m、S5－栗石S′1は2.60m、栗石S′1－S′2は2.80m、S6－S7は2.60m、S7－S′3は2.90m、S′3－S′4は2.30m である。数値をみる限りばらつきが大きい。

この遺構の北端部から北部は黒土層上にロームが客土され貼られており、北側石垣部で20cmの厚さを持つ。このロームは礫を混入せず純良なもので、同質ロームがあるのは御射宮司社碑のある帯郭と思われるテラス附近か第VI之郭である。帯郭は配石1・2まで続いていたと思われるので、この削平工事の際運ばれたのではないかと考えている。この遺構部は後に西から褐色土が流れ込み厚くかぶっている。

本址南西部は廃棄後西方より相当量の礫混入ローム（褐色土）がかぶり、更に上層が茶褐色土となっている(図57の3)。この礫混入ローム土は第V・VI之郭間の空濠IIIの排土が流れ込んだものではないかと考えている。本址西に未調査部を残しているので、詳細については二次調査の結果を待って検討したい。

遺物　古銭2点（図 128の7－開元通宝－ 621年、同図10－聖宋元宝－1101年）がAM40グリット、北側の石垣状配石の西端部で検出された。本址南東隅からは古瀬戸陶器片が出土している。鉄製品では角釘2点（図 127の16・17）が南西部で出土した。以上、本址に伴う遺物からみて、本址は大熊城址と同時に存在した建築址である可能性が強いと考える。

カ　溝状遺構

ア）　溝１（図39・56・57、写55）

遺構　中世建築址の西、大熊城址第Ⅴ之郭の東斜面に南北に走る(図39・56の１)。幅1.40～1.60m、深さ30cm程の断面U字形を呈する浅い溝である。この溝は中世建築址床面に続く客土ローム層を掘り込んでおり、溝底には茶褐色土の下に僅かな砂層が認められた。この溝は中世建築址に付属する施設で、西方の斜面から雨水が流れこむのを防ぐ排水溝ではないかと考えられる。出土遺物はない。

イ）　溝２（図39・56、写55）

遺構　大熊城址空濠Ⅲから東の方向へ走る(図39・56の１)。表土下15cmに検出され、空濠Ⅲの壁と同質の礫混入褐色土が充満する。幅70～1.2m、深さ20cmで黒土層を掘り込んでいる。配石遺構の上部にあり、城が廃棄された後の流水路となった部分と考えられる。

ウ）　溝３（図39）

遺構　B区下段テラス部にある(図39)。30号住居址の東に小砂利を含む砂層が幅30cm、厚さ３cm程で続くのが観察された。人為的なものではないと思われる。近世以降のものであろう。

キ　配石遺構（図39・56、写55）

遺構　大熊城址第Ⅴ・Ⅵ之郭の東斜面にある(図39)。便宜上、配石１、２と区分したが一連の遺構と考えられる。原地形では御射宮司社跡のある帯郭とみれるテラスの延長部とみれる緩傾斜面にある（図38)。表土をはぐと、配石１の西部と北側には緩傾斜の平坦面があり(図56の１・２、写55の 265)、この平担部は南の配石２（同図１・３）の部分では消滅する。配石は平坦部の肩部から相当の傾斜を持つ下の斜面にかけて、人頭大から径80cm程の石が散乱、或いは一部集中する。配石１の北側、縄文時代の住居址の集中した部分の上部にも、石が散見され、多くのものは耕作時に抜き取られている可能性が強い。配石１部では石は黒土層上にあり、斜面下方では移動されたロームブロック混入褐色土をかぶる。西上方の平坦部では褐色土をかぶっていた（図57の２)。

なお、この褐色土中から鉛の鉄砲玉、カワラケ皿２点が出土している。

本遺構は北方の御射宮司社跡のある帯郭の延長部で、配石は土留石と考えたい。大熊城址の一部を構成するものである。

3）　ま　と　め

荒神山遺跡第一次調査で発見された住居址は、縄文時代46軒、弥生時代３軒、平安時代８軒、中世９軒、計66軒の多数を数える。その他、縄文時代前期末～中葉の多量な遺物が累積する土器集中区、縄文～中世の土壙 174基、中世の大熊城址に関連する遺構等を検出し、複雑多岐にわたる問題を投げかけた。

まず、湖南地区は半日村ともいわれる程、日照時間が短かく、湖北のような大遺跡はないとされて来た。

本遺跡は今回の調査から、上下に相当の範囲を持つ大遺跡であることが判明し、この考え方を改めさせた。

縄文時代の住居址は前期末１軒、中期中葉駒沢式期１軒、新道式期３軒、藤内Ⅰ式期10軒、同Ⅱ式期１軒、勝坂期１軒、中期後葉曽利Ⅰ式期１軒、Ⅱ式期22軒、Ⅲ式期５軒、不明１軒という内訳である。縄文時代を通観すると、前期末葉諸磯Ｃ期に始った集落は藤内Ⅰ式期に栄え、曽利Ⅱ式期に最盛期を迎える。後晩期には移動してしまっているようで遺物はない。遺物の良好なセットを残すのは新道式期の62号住居址、藤内Ⅰ式期の４号住居址、藤内Ⅱ式期の48号住居址、曽利Ⅱ式期の31号・41号住居址、曽利Ⅲ式期の８号住居址があげられる。なお、８号住居址の土器は伊那谷南部との共通性の非常に強いものである。

弥生時代の住居址は中期２軒、後期１軒である。次の報告書に記載される深鉢の上に壺が重ねられて出土した仲浜町式期の土壙18は貴重な収穫であった。北方の湿地帯が弥生～中世人の生活基盤となったものであろう。平安時代住居址はカワラケの組形となる土師杯を伴っている場合が多く、平安末の中道Ⅳ期に属するものが多いのではないかと思う。この時期に大熊道上、城山両遺跡の住居址などと集落を構成したものであろう。

中世では住居址の時期区分はできないが、相当の長期にわたって集落が存在したようで、重複が激しい。住居址の形態変化としてうかがえることは、24号住居址のような隅丸方形を呈し、摺り鉢形の壁を持つものが古く、20号住居址のような方形で壁がほゞ垂直となる小形住居址となり、30号住居址、14号住居址のような土台石を持ち、掘建住居の方式を捨てる型へと発展して来たのではないかと考えるが、これはあくまで予察である。大熊城址関係としては、中世建築址は居館址としての可能性を持ち、２号住居址部が付属したと考えたい。配石１、２は帯郭と考えている。

第二次調査の結果を待って、より充分な考察をしたいと考える。　　（伴・平出・木下）

第2表　発掘調査経過一覧表

遺跡名＼月	7	8	9	10	11	12	1～3	主な遺構	主な遺物
清水	発掘諸準備		29	1			遺物整理・図面作成・原稿執筆	なし	縄文前期土器片 土師器片
小丸山古墳			17	1				玄室・羨道 周溝	小札・鉄鏃 玉類
平林					2			なし	縄文中期土器片 縄文中期石器
本城					2　28			縄文中期住居址　15 〃　土壙　35 平安時代住居址　2 中世　配石址　1	縄文早期・前期・中期土器 縄文中期石器 土師器片・須恵器・灰釉陶器片 青磁片
金山北					1			なし	なし
城山		30	22	2 5				縄文中期住居址　1 平安住居址　1 上層　3 中世建築址　1 井戸址　1 近世不詳建築址　1 現代暗渠排水路址　3	縄文前期・中期・後期土器片 弥生中期土器片 土師器・須恵器・灰釉陶器 つぼがま　焙烙　かわらけ 黒書土器21・鉄鏃
大熊城址			3　22	2　19				郭・空濠・土橋 帯曲輪・曲輪・溝址 土壙墓	内耳ナベ片 天目茶碗片 古銭
荒神山				2		14		縄文時代住居址　46 弥生時代住居址　3 平安時代住居址　8 中世住居址　9 土壙 174（縄文・弥生・中世） 建築址 1 溝址 3 土器集中区　1	縄文前期・中期土器・石器 弥生中期土器 土師器・灰釉陶器・かわらけ 須恵器・黒書土器片・内耳ナベ片 古銭 鉄鏃・石臼
大熊道上				20	8			平安時代住居址　3 中世住居址　2 中世建築址　1	縄文中期土器片 土師器・須恵器・灰釉陶器 内耳ナベ片・古銭・石臼・古銭

第 3 表　遺跡別遺構一覧表

遺跡名＼時期	縄文時代 早	縄文時代 前	縄文時代 中	縄文時代 後	縄文時代 晩	弥生時代 中	弥生時代 後	古墳時代	奈良時代	平安時代	鎌倉・室町時代	江戸時代	明治～昭和	時代不詳	備考
清水															なし
小丸山古墳								玄室 羨道 周溝							
平林															なし
本城			住居址 15 土壙 35							住居址 2	配石址 1				
金山北															なし
城山			住居址 1							住居址 1 土壙 3 土器集中区 1	建築址 1 井戸址 1		暗渠排水路址 3	建築址 1	
大熊城址											郭 6 溝 1 空濠 7 土橋 1 折曲輪 2 曲輪 1 土橋幕 1				
荒神山		住居址 1 土壙	住居址 45 土壙 土器集中区 1			住居址 2 土壙	住居址 1			住居址 8	住居址 9 建築址 1 土壙 配石址 1 溝 1			溝址 2	土壙は総計 174 その内訳は遺物整理中のため不明
大熊道上										住居址 3	住居址 2 建築址 1				

第 4 表　遺跡別出土遺物一覧表

遺跡＼遺物	土器・陶器 縄文時代 早	前	中	後	晩	弥生時代 中	後	土師器 古	新	須恵器 古	新	灰釉陶器	中世陶器	土製品	石器 打石斧	磨石斧	敲打器	横刃	石鏃	石匙	石皿	凹石	その他	石製品	鉄製品	備考
清水		○	○								○		○	土錘 3												
小丸山古墳	○		○						○	○	○													玉類 9	小札片 790 鉄鏃片 18 馬具類片 17	
平林			○													1			1							
本城	○	○	○	○			○		○		○	○	○	土錘 8 土板 1 耳栓 1	42	13	2	2	20	10	3	21	砥石 1 磨石 3 敲石 3 ドリル 2 ポイント 2 スクレイパー 3 不定形 11	耳環 1	鉄鏃 1 鉄釘 1	骨片
金山北																										なし
城山	○	○	○	○		○	○		○		○	○	○	土錘 5 フィゴロ 1	12	2	1	1	12		3	6	砥石 3 石錘 1 海浜石 2 ドリル 2 スクレイパー 1		鉄製ヤス 1 鉄釘 8 きせる 3 古銭 6 火打金具 1 鉄滓	カワラケに荒子墨書あり、他に墨書土器 3
大熊城址		○	○			○	○		○		○	○	○								1	1	特殊磨石 1		古銭 8 鉄片	墨書土器 1 人骨片
荒神山		○	○	○		○	○		○		○	○	○	土錘 17 土板 20 土隅 2 フィゴロ 1 硯片 1	362	55	5	46	91	27	18	228	磨石 4 敲石 5 磨石 12 石棒 3 石皿 2 ドリル 3 ポイント 1 スクレイパー 21	硬玉製 1 蛋玉	鉄鏃 2 鉄釘 3 刀子 2 古銭 4 鉄滓	墨書土器 1 骨片
大熊道上		○	○						○		○	○	○	土錘 7			2		5			2	砥石 2 磨石 1 ドリル 1		刀子 2 鉄釘 5 古銭 2 鉄玉 1 鉄滓	焼米あり 墨書土器 2

第 5 表　住居址一覧表 (No.1)

遺跡名	本城												
遺構	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	9号	10号	11号	12号	13号
時期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	平安後期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	縄文中期	平安後期	縄文中期
遺構 東西南北プラン	4.00×4.30円形	5.30×5.90円形	?×5.95円形	?×4.45方形	4.20×4.70円形	?×?円形	?×3.95円形	?×??	4.75×4.80円形	?×4.95円形	3.65×3.60円形	?×?方形	?×?円形
遺構 柱穴	4	6	5以上	?	4	?	6	?	5	?	4	?	?
遺構 炉かまど	石囲炉(石抜き)	石囲炉	石囲炉	?	石囲炉	石囲炉(石抜き)	石囲炉(石抜き)	石囲炉	石囲炉	石囲炉(石抜き)	石囲炉(石抜き)	?	?
遺構 主軸	S54°E	S27°E	S60°W	?	S46°E	?	?	?	S37°E	?	S35°E	?	?
遺構 備考	2住の上部に貼床している	1住の下部にあり 3、16住を切る 周溝あり	2住に切られ 6住を切る	3住の上部に貼床している 北西側大半攪乱	7・9・10・13・15住を切る 周溝あり	3住に切られる 北西壁一部残存	5・10・17住に切られる。周溝あり	4住に切られる 炉址と床面のみ検出	11住に切られ13・14住を切る	5・15住に切られ7住を切る。周溝あり	12住に切られる 周溝あり	11住を切る 硬い床面のみ検出	1・5・9住に切られる 西壁側一部残存
遺物 土器 完形土器													
遺物 土器 国上復元の土器													
遺物 土器 土器の内訳	深鉢	深鉢 有孔鍔付	深鉢 浅鉢 有孔鍔付	H甕・壺 S甕・壺	深鉢	深鉢	深鉢	深鉢	深鉢 浅鉢	深鉢	深鉢 浅鉢 皿	H 坏 S 甕	
遺物 土器 土製品	土錘 1				耳栓 1		土錘 1						
遺物 石器 打石斧	1	2	8		2	2	1		2				
遺物 石器 磨石斧		2	4		1				2		1		
遺物 石器 敲打器					1								
遺物 石器 横刃			1										
遺物 石器 石鏃			7		2						1		
遺物 石器 石匙		1	4						2		1		
遺物 石器 石皿									1		1		
遺物 石器 凹石		2	4		2	1			2	1			
遺物 石器 その他		不定形4	石錘1		磨石 1 ポイント 1 スクレイパー 1	磨石 1 石錘 1		不定形1 ポイント 1			スクレイパー 1		
遺物 鉄製品													
遺物 その他		鉄片(炉内)	鉄片(炉内)			鉄片(炉内)							
備考													

第 5 表　住居址一覧表　(No.2)

遺跡名		本城				城山		荒神山						
遺構		14号	15号	16号	17号	1号	2号	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号
時期		縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	平後安期	縄中文期	中世	縄中文期	縄中文期	平後安期	縄中文期	縄中文期
遺構	東西 南北 プラン	? × ? ?	? × ?円形	4.65 × ?円形	? × ?円形	3.75 × ?円形	5.20 × 4.65方形	? × 5.85円形	? × ?方形	4.25 × 4.00円形	5.10 × ?円形	5.10 × ?方形	3.40 × 3.40円形	4.20 × ?円形
遺構	柱穴	?	?	?	?	?	?	?	?	5	3以上	?	6	?
遺構	炉 かまど	石囲(一部石破壊)炉	石囲炉(石抜き)	石囲炉(石抜き)	?	石囲炉	石組粘土竈(東壁部および右袖のにつこ)	石囲炉(石抜き)	無	石囲炉(石抜き)	石囲炉	石組粘土竈(東西壁にあり)	?	石囲炉
遺構	主軸	?	?	?	?	N54°W	S73°W	?	?	N49°E	S78°E	N50°W	?	?
遺構	備考	2・9・11住に切られる	9住下部にあり10住を切り11住に切られる	2住の下にある	一部未調査 7号住を切る。周溝あり	空濠Ⅱにより北東側を切られる	工房地的性格の住居址か?	19・26・54・61住を切る	南側に石組遺構あり 硬いたたき床あり	周溝・埋甕あり	5・32住に切られ55住を切る	周溝あり 4・55住を切る	55住を貼床して上部にある	北半分傾斜のため不明 55住を切る
遺物 土器	完形土器							1	1		3	2	1	
遺物 土器	図上復元の土器							3	2	6	16	7	7	6
遺物 土器	土器の内訳	深鉢 浅鉢				深鉢	H壺鉢 埦 坏 器台 S壺 K壺・瓶 坏・皿	深鉢 浅鉢 有孔鍔付	古瀬ヶ内耳土器 カワラケ	深鉢 浅鉢 有孔鍔付	深鉢 浅鉢 台付	H坏・皿 鉢 S壺 K鉢・坏	深鉢 浅鉢	深鉢
遺物 土器	土製品						上錘 1 フイゴ 3	上錘 1		土錘 1	土板 1		上錘 2	土板 2
遺物 石器	打石斧					3		5		10	12			10
遺物 石器	磨石斧										1			1
遺物 石器	敲打器													
遺物 石器	横刃	1									1			
遺物 石器	石鏃									1	3			
遺物 石器	石匙		1					2		2	1			
遺物 石器	石皿													
遺物 石器	凹石							3		9	3			4
遺物 石器	その他						石錘 1 砥石 1	ポイント 1 スクレイパー 1	砥石 1	スクレイパー 2 磨石 2	スクレイパー 2 ドリル 1	砥石 1	スクレイパー 1	スクレイパー 2
遺物	鉄製品						ヤス1.ナイフ 鉄滓		石鏃(凹基無茎 有茎無茎不明) 3・鉄滓			刀子片2 鉄滓		
遺物	その他						骨片			骨片(埋甕内)				
備考														

第 5 表　住居址一覧表 (No.3)

遺跡名		荒神山												
遺構		8号	9号	10号新	10号旧	11号	12号	13号	14号	15号	16号	17号	18号	19号
時期		縄中文期	平安期	縄中文期	縄中文期	中世	縄中文期	平安期	中世	中世	縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期
遺構	東西 南北 プラン	5.65×5.85円形	2.50×?方形	5.35×5.10円形	4.00×3.60円形	?×?方形	?×4.80円形	5.70×?方形	?×?方形	3.70×4.05方形	4.30×4.30円形	?×?円形	?×5.60円形	?×?円形
	柱穴	4	?	?	?	3以上	4(?)	?	?	?	?	?	6	?
	炉 かまど	石囲炉	?	石囲炉(石抜き)	?	?	石囲炉(石抜き)	?	?	無	石囲炉(石抜き)	?	石囲炉	?
	主軸	S41°E	?	S15°E	S15°E?	?	N83°E			N28°E	N60°E	?	S55°E	?
	備考	周溝・埋甕あり	23住に切られる	周溝・埋甕各2あり 上部に63・64住あり	埋甕あり	15住に切られる 34住を切り36住を貼床し	周溝・埋甕あり 25住に切られる	中央部に焼土あり 46住を切る	台石が等間隔に並ぶ 23・27住を切る	24住を切る	周溝・埋甕あり	41住を切る	伏焼(丹彩)あり 周溝あり	1住に切られ61住に貼床 し上部にある
遺物 土器	完形土器	3			1			1					2	
	図上復元の土器	14	4	6			6	2	5	7	7	3		2
	土器の内訳	深鉢	甕・壺	深鉢 浅鉢		内耳土器	深鉢	土師器 無釉	古瀬戸 黄瀬戸 内耳上器 カワラケ	古瀬戸 黄瀬戸 内耳土器 カワラケ	深鉢 浅鉢	深鉢	深鉢 浅鉢 有孔鍔付	深鉢 浅鉢
	土製品			土板 1			土錘 1		フイゴ口 1					
遺物 石器	打石斧	1		3			1				17	1		3
	磨石斧	9					1							
	敲打器			1										
	横刃													
	石鏃	7		2							8			
	石匙	1		1							1			
	石皿						2				2			
	凹石	8		4			6				5		1	4
	その他	スクレイパー 5 不定形4		石棒 1 磨石 1 はちの巣石 1			スクレイパー 2 はちの巣石 1				敲石 1 磨石 1	スクレイパー 1		スクレイパー 2 石錘 1
	鉄製品							鉄鏃 1		刀 1 鉄片				
	その他	丹(かい内)片		骨片										
備考														

第 5 表 住居址一覧表 (No.4)

遺跡名		荒神山												
遺構		20号	21号	22号	23号	24号	25号	26号	27号	28号	29号	30号	31号新	31号旧
時期		中世	縄中文期	縄中文期	平後安期	中世	中世	縄中文期	平後安期	中世	平後安期	中世	縄中文期	縄中文期
遺構	東西 南北 プラン	3.10×3.80方形	?×??	?×?円形	?×3.80方形	?×7.10方形	?×?方形	?×?円形	?×?方形	?×3.50方形	?×?方形	?×?方形	6.10×6.00円形	左とほゞ同大
	柱穴	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	6	7
	炉 かまど	無	石囲(一部石抜き)炉	埋甕炉	?	?	?	?	?	?	?	?	石囲(一部石破壊)炉	石囲(石抜き)炉
	主軸	N28°W	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	S88°E	S88°E
	備考	35住を切る	炉址のみ検出	周溝あり 31・35住に切られる	切られる 9・27住を切り14住に	14・15住に切られる	30住に切られる	切られる 1・18・19・61住に	周溝あり 14・23住の下にある	29住を切る	28住に切られる	25・29住を切る	22住を切り33住の上にある。周溝・埋甕あり	重複・埋甕あり 31住と同心円上
遺物 土器	完形土器							1						
	復元の土器		1	1				2	2		1	1	8	1
	土器の内訳	内耳土器 カワラケ	深鉢	深鉢	灰釉陶器片	内耳土器		深鉢	H坏 K坏		内耳土器 カワラケ 灰釉	内耳土器	深鉢	
	土製品							土錘 1						
石器	打石斧			4									2	
	磨石斧													
	敲打器												2	
	横刃													
	石鏃												1	
	石匙													
	石皿													
	凹石												3	
	その他												不定形7	
鉄製品										鉄鏃 1				
その他														
備考														

第 5 表　住居址一覧表 (No.5)

遺跡名		荒神山												
遺構		32号	33号	34号	35号	36号	37号	38号	39号	40号	41号	42号	43号	44号
時期		縄中文期	縄中文期	平後安期	縄中文期	平後安期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	弥後生期
遺構	東西南北プラン	4.40×4.25円形	4.95×5.80円形	?×4.05方形	?×?円形	?×5.30方形	4.45×?円形	5.35×?円形	4.85×?円形	?×?円形	5.10×5.15円形	4.55×4.70円形	?×?円形	4.30×?方形
遺構	柱穴	4	6	?	?	?	?	?	?	?	6	4	?	?
遺構	炉かまど	石囲炉(石抜き)	石囲炉	?	?	?	石囲炉	石囲炉	石囲炉(石抜き)	石囲炉	石囲炉	石囲炉(石抜き)	石囲炉(石抜き)	?
遺構	主軸	S57°W	S80°E	N21°W	?	?	S61°E	N63°E	?	?	S63°E	N59°E	?	?
遺構	備考	4住を切る	31・35住を切る。周溝・堤壁あり 31・35住が上にあり48住	11・15住が上にある	20住に切られ22住を切る	11住が上にある	堤壁あり 39住を切る	21住を切る 周溝あり	37住に切られる	周溝あり 41住に切られる	40住を切り17住に切られる。周溝あり	火災にあう 周溝・堤壁あり	周溝あり	10・66住に貼床する 大半が検出不可能
遺物 土器	完形土器										1			
遺物 土器	復元の土器	1	10		2	3	3	3			13	5	1	
遺物 土器	土器の内訳	深鉢	深鉢 浅鉢	H坏 壺 S K坏	深鉢	H小壺 K坏	深鉢 浅鉢	深鉢		深鉢 浅鉢	深鉢 浅鉢 有孔鍔付	深鉢	深鉢	壺
遺物 土器	土製品										土錘 1			
遺物 石器	打石斧	7	6				1	3		6	5	2	1	
遺物 石器	磨石斧	2	1				1				6	1		
遺物 石器	敲打器													
遺物 石器	横刃													
遺物 石器	石鏃		2				1			1	15		1	
遺物 石器	石匙										1			
遺物 石器	石皿		1								2	1		
遺物 石器	凹石	1	5		1		3	3		3	15	11	1	
遺物 石器	その他	不定形1	磨石 1		磨石 1		不定形2			不定形4	磨石 1 石錘 1	磨石 1 台形石器 1 硬玉製 垂飾 1		
遺物	鉄製品													
遺物	その他													
備考														

第 5 表　住居址一覧表 (No.6)

遺跡名			荒神山											
遺構		45号	46号	47号	48号	49号	50号	51号	52号	53号	54号	55号	56号	57号
時期		縄中文期	弥中生期	弥中生期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄前文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期
遺構	東西 南北 プラン	4.15×?円形	?×?方形	3.35×?方形	?×4.80円形	?×?円形	?×5.30円形	?×?円形	?×??	?×??	?×?円形	5.60×?円形	?×?円形	?×?円形
遺構	柱穴	?	?	?	5	?	?	?	?	?	?	?	?	?
遺構	炉 かまど	石囲(一部石抜き)炉	?	?	石囲炉	?	埋甕炉(?)	石囲(一部石抜き)炉	埋甕炉	石囲(一部石抜き)炉	?	?	?	?
遺構	主軸	?	?	N42°E	S9°E	?	?	?	?	?	?	?	?	?
遺構	備考	南側53住を切る撹乱	13住に切られる焼土あり炉址か?	45・53住の上にあり	33住に切られ49住を切る	48住に切られ65住に貼床する	6062住に貼床する住を切る	炉址を中心とした検出	炉址と柱穴のみ検出	47住の下部にある炉址と床面のみ検出	1住に切られる周溝あり	中央部焼土あり炉址か? 4・5・6・7住に切られる	49・65住の上にあり	19・26・54住に切られる周溝を一部検出
遺物 土器	完形土器				5	2								
遺物 土器	図上復元の土器	1		2	8	6	16	1	1			2		
遺物 土器	土器の内訳	深鉢	甕・壺	甕・壺 高坏	深鉢 有孔鍔付 台付	深鉢 浅鉢	深鉢 浅鉢 有孔鍔付	深鉢	深鉢	深鉢	深鉢 有孔鍔付	深鉢 有孔鍔付	深鉢	深鉢 浅鉢
遺物 土器	土製品				土板 1		土板 2 土錘 3							
遺物 石器	打石斧				11	23	18			2		4	1	
遺物 石器	磨石斧					5	5					1		1
遺物 石器	敲打器					1								
遺物 石器	横刃				3	2	11					4		
遺物 石器	石鏃				3	4	4							
遺物 石器	石匙				1	1	1			1		1		
遺物 石器	石皿													
遺物 石器	凹石	1			3	3	9		1	3				
遺物 石器	その他				ドリル1 不定形1	ドリル1 不定形2	磨石 2 不定形3					不定形1		石錐 1
遺物	鉄製品													
遺物	その他													
備考														

第 5 表　住居址一覧表 (No.7)

遺跡名		荒神山									大熊道上				
遺構		58号	59号	60号	61号	62号	63号	64号	65号	66号	1号	2号	3号	4号	5号
時期		縄中文期	縄文	縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	縄中文期	中世	平安後期	平安後期	平安中期	中世
遺構	東西 南北 プラン	?×?円形	?×?円形	?×?円形	?×?円形	?×?円形	?×?円形	?×?円形	?×?円形	?×?円形	3.60×4.10方形	4.05×?方形	4.55×3.70方形	4.80?)×?方形	4.20×6.10方形
遺構	柱穴	?	?	?	?	?	?	?	?	?	7	?	?	?	?
遺構	炉 かまど	?	?	?	?	?	石囲炉(石抜き)	石囲炉	?	?	無	石組粘土竈(北壁石寄り)	石組粘土竈(東南壁角)	?	無
遺構	主軸	?	?	?	?	?	?	?	?	?	N33°W	S35°W	N53°W	?	N36°W
遺構	備考	54・57住に貼床する 周溝あり	周溝あり	50 62住に貼床する 住に切られる	1・19住に切られ 26住に貼床する	50・60住に切られる	10・64住上部に 貼床してある	10住上部にあり63・66住 に切られる。周溝あり	49・56住に切られる	64住に貼床する		4住を切る		東壁に焼土あり	床全面に敷石あり
遺物 土器	完形土器					1									
遺物 土器	図上復元の土器			1		3				1					
遺物 土器	土器の内訳	深鉢		深鉢	深鉢	深鉢	深鉢	深鉢	深鉢	深鉢	火口形土器 内耳土器 カワラケ 陶器	H壺・坏 鍋釜 S壺・坏 K坏・皿	H坏・鉢 K壺・坏 白皿	H坏 S坏	内耳土器 カワラケ 陶器
遺物 土器	土製品					上板 3 上錘 1						土錘 7			
遺物 石器	打石斧														
遺物 石器	磨石斧														
遺物 石器	敲打器														
遺物 石器	横刃														
遺物 石器	石鏃														
遺物 石器	石匙					1									
遺物 石器	石皿														
遺物 石器	円石						1								
遺物 石器	その他														
遺物	鉄製品										鉄滓	石斧片 鉄製品片	釘 1		刀子 1 鉄製品
遺物	その他											焼土塊			
備考															

第6表　荒神山遺跡埋甕一覧表

番号	住居	時期	主軸方向	埋甕方向	ズレ	距離(cm)		姿勢	石蓋	器形	形状	口径・器高	位置	炉の形状	炉の位置	備考
						炉から	壁から									
1	3	加曽利E	N49° E	N49° E	0	230	45	正	有	深鉢形	G	30・28	前	方形石囲(石抜)	西寄り	土器内骨片・炭化物・黒曜石2
2	8	〃	S41° E	S41° E	0	290	90	正	有	〃	G	32・26	前	〃	北寄り	
3	10a	〃	S15° E	S15° E	0	250	(110)	正	なし	〃	D	21・27	前	方形石囲(石抜)	〃	貼床の下に検出
	10b	〃				290	70	正	なし	〃	G	35・40	前			土器内炭化物
4	12	〃	N83° E	N75° E	+8°	265		正	なし	〃	H	27・16	前右	方形石囲(石抜)	西寄り	
5	16	〃	N60° E	N68° E	−8°	250	(45)	正	なし	〃	G	34・33	前左	〃	〃	黒曜石片1
6	18	〃	S55° E	S137° E	−82°	120	170	逆	なし	壺形(丹彩)	C	15・21	右	方形石囲	北西寄り	
7	31a	〃	S88° E	S94° E	−6°	240	(160)	正	なし	深鉢形	A	37・46	前左	コの字石囲(奥だけ残)	〃	
	31b	〃				360	(40)	正	なし	〃	G	34・40	〃			
8	33	〃	S80° E	S72° E	+8°	280	50	正	有	〃	B	31・52	前右	方形石囲	北西寄り	土器内炭化物・黒曜石1・土器下に石敷
9	37	〃	S61° E	S63° E	−2°	250	50	正	有	〃	E	25・31	前	コの字石囲	〃	
10	42	〃	N59° E	N60° E	+1°	270	45	正	有	〃	G	34・34	前	方形石囲(石抜)	西寄り	

※　aは旧住居址、bは新住居址の埋甕である。

※　距離で（　）内に示したものは、その方向のプランが不明の場合で、推定値を示した。

第7表　荒神山遺跡出土石器一覧表　(No.1)

※　U・Fはユーティライズド・フレイク(使用痕のある剝片)の略

遺構	図番号	石器名	石質
1住	112－1	打石斧	黒雲母ホルンフェルス
	112－2	打石斧	安山岩
	112－3	石匙	玄武岩
	112－4	石匙	凝灰質粘板岩
	112－5	凹石	安山岩
覆土	124－1	スクレイパー	黒耀石
覆土	124－2	U・F	黒耀石
床面	124－3	石鏃	黒耀石
2住	112－6	砥石	砂岩
3住覆土	113－1	打石斧	砂岩
覆土	113－2	打石斧	凝灰岩
覆土	113－3	打石斧	黒雲母ホルンフェルス
覆土	113－4	横刃	硬砂岩
覆土	113－5	横刃	砂岩
覆土	113－6	凹石	安山岩
覆土	113－7	凹石	安山岩
覆土	113－8	凹石	安山岩
覆土	113－9	凹石	安山岩
覆土	124－4	石鏃	黒耀石
覆土	124－5	石鏃	黒耀石
覆土	124－6	スクレイパー	黒耀石
覆土	124－7	石匙	凝灰質粘板岩
床面	113－10	凹石	安山岩
床面	113－11	凹石	安山岩
床面	113－12	凹石	安山岩
床面	113－13	凹石	安山岩
床面	113－14	凹石	安山岩
4住覆土	112－7	打石斧	硬砂岩
覆土	112－8	打石斧	砂岩
覆土	112－9	打石斧	硬砂岩
覆土	112－10	打石斧	凝灰岩
覆土	112－11	打石斧	凝灰質粘板岩
覆土	112－12	打石斧	砂岩
覆土	112－13	打石斧	硬砂岩
覆土	112－14	局部磨石斧	砂岩
覆土	112－15	横刃	硬砂岩
覆土	112－16	凹石	安山岩
覆土	112－17	凹石	安山岩
4住覆土	112－18	凹石	安山岩
覆土	124－8	石鏃	黒耀石
覆土	124－9	石鏃	黒耀石
覆土	124－10	U・F	チャート
覆土	124－11	石匙	砂岩
5住床面	112－19	砥石	砂岩
6住覆土	124－12	石錐	黒耀石
7住覆土	113－15	打石斧	ホルンフェルス
覆土	113－16	打石斧	硬砂岩
覆土	113－17	打石斧	凝灰質粘板岩
覆土	113－18	打石斧	凝灰質粘板岩
覆土	113－19	打石斧	砂岩
覆土	113－20	磨石斧	蛇紋岩
覆土	113－21	凹石	安山岩
覆土	113－22	凹石	安山岩
覆土	113－23	凹石	安山岩
8住覆土	114－1	打石斧	頁岩
覆土	114－2	磨石斧	緑泥片岩
覆土	114－3	磨石斧	緑泥片岩
覆土	114－4	凹石	安山岩
覆土	114－5	凹石	安山岩
覆土	114－6	凹石	安山岩
覆土	114－7	凹石	安山岩
覆土	114－8	凹石	安山岩
覆土	125－1	小形磨石斧	砂岩
覆土	125－2	石鏃	黒耀石
覆土	125－3	石鏃	黒耀石
覆土	125－4	石匙	チャート
覆土	125－5	スクレイパー	黒耀石
覆土	125－6	スクレイパー	黒耀石
床面	114－9	凹石	緑泥片岩
床面	114－10	磨石斧	砂質ホルンフェルス
床面	125－7	小形磨石斧	蛇紋岩
床面	125－8	小形磨石斧	泥岩
床面	125－9	敲打器？	泥岩
床面	125－10	石鏃	黒耀石
床面	125－11	スクレイパー	黒耀石
P2	125－12	小形磨石斧	凝灰岩

第7表　荒神山遺跡出土石器一覧表　(No.2)

遺構	図番号	石器名	石質
8住P2	125—13	小形磨石斧	蛇紋岩
P2	125—14	スクレイパー	黒曜石
P2	125—15	スクレイパー	黒曜石
10住覆土	114—11	敲打器	玄武岩
覆土	114—12	凹石	安山岩
覆土	114—13	凹石	安山岩
覆土	124—13	石匙	黒曜石
床面	114—14	打石斧	砂岩
床面	114—15	打石斧	硬砂岩
床面	114—16	凹石	安山岩
床面	124—14	石鏃	黒曜石
床面	124—15	石鏃	黒曜石
	115—1	磨石	安山岩
	115—2	石棒	安山岩
12住覆土	115—3	磨石斧	凝灰質粘板岩
覆土	115—4	凹石	安山岩
覆土	115—5	凹石	安山岩
覆土	115—6	凹石	安山岩
覆土	115—7	凹石	安山岩
覆土	115—8	凹石	安山岩
覆土	115—9	凹石	安山岩
覆土	115—10	石皿	安山岩
床面	124—16	スクレイパー	黒曜石
床面	124—17	スクレイパー?	黒曜石
P3	115—11	石皿	安山岩
P3	115—12	石皿	安山岩
15住	116—1	茶臼	安山岩
16住覆土	116—2	打石斧	硬砂岩
覆土	116—3	打石斧	硬砂岩
覆土	116—4	打石斧	泥質ホルンフェルス
覆土	116—5	打石斧	泥質片岩
覆土	116—6	打石斧	凝灰質粘板岩
覆土	116—7	打石斧	砂岩
覆土	116—8	打石斧	凝灰質粘板岩
覆土	116—9	打石斧	砂岩
覆土	116—10		砂岩
覆土	116—11	磨石	安山岩
覆土	116—12	凹石	安山岩

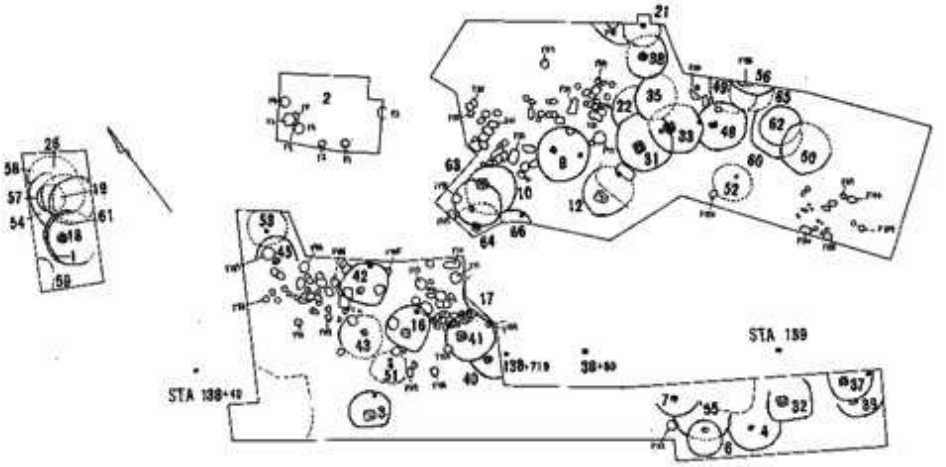
遺構	図番号	石器名	石質
16住覆土	116—13	凹石	安山岩
覆土	116—14	凹石	安山岩
覆土	116—15	凹石	安山岩
覆土	116—16	横刃	安山岩
覆土	124—18	石鏃	黒曜石
覆土	124—19	石鏃	黒曜石
覆土	124—20	石鏃	黒曜石
覆土	124—21	スクレイパー	黒曜石
17住覆土	116—17	打石斧	砂岩
覆土	125—16	スクレイパー	硅質岩
18住覆土	116—18	凹石	安山岩
19住覆土	116—19	打石斧	凝灰質粘板岩
覆土	116—20	打石斧	泥質片岩
覆土	116—21	凹石	安山岩
覆土	116—22	凹石	安山岩
覆土	125—17	スクレイパー	黒曜石
22住	117—1	打石斧	砂岩
31住覆土	117—2	磨石斧	砂岩
覆土	117—3	打石斧	砂岩
覆土	126—1	石鏃	黒曜石
覆土	126—2	U・F	黒曜石
P2	126—3	スクレイパー	黒曜石
32住覆土	117—4	打石斧	硬砂岩
覆土	117—5	打石斧	凝灰岩
覆土	117—6	打石斧	砂岩
覆土	117—7	凹石	安山岩
床面	117—8	打石斧	凝灰岩
床面	117—9	定角磨石斧	砂岩
床面	117—10	乳棒状磨石斧	砂岩
33住床面	117—11	打石斧	黒雲母ホルンフェルス
床面	117—12	打石斧	泥質片岩
床面	117—13	打石斧	玄武岩
床面	117—14	定角磨石斧	緑泥片岩
床面	117—15	凹石	安山岩
床面	117—16	凹石	安山岩
床面	117—17	凹石	砂岩
床面	117—18	凹石	安山岩
床面	117—19	石皿	安山岩

第7表　荒神山遺跡出土石器一覧表　(No.5)

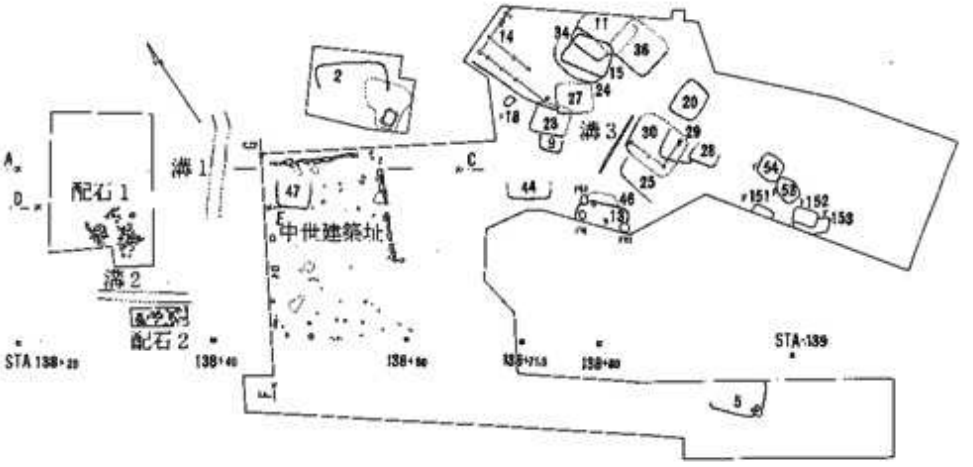
遺構	図番号	石器名	石質
33住床面	126—4	石鏃	黒曜石
床面	126—5	石鏃	黒曜石
35住	117—20	凹石	安山岩
	117—21	磨石	安山岩
37住	118—1	打石斧	泥質ホルンフェルス
	118—2	磨石斧	緑泥片岩
	118—3	凹石	安山岩
	118—4	凹石	安山岩
	126—6	石鏃	黒曜石
38住覆土	118—5	打石斧	硬砂岩
床面	118—6	打石斧	凝灰岩
床面	118—7	打石斧	凝灰質粘板岩
床面	118—8	凹石	安山岩
床面	118—9	凹石	安山岩
床面	118—10	凹石	安山岩
40住床面	118—11	打石斧	凝灰岩
覆土	118—12	打石斧	凝灰岩
覆土	118—13	凹石	安山岩
覆土	118—14	凹石	安山岩
床面	126—7	石鏃	黒曜石
41住覆土	118—15	打石斧	硬砂岩
覆土	118—16	打石斧	砂岩
覆土	118—17	打石斧	砂岩
覆土	118—18	磨石斧	砂岩
覆土	118—19	凹石	緑泥片岩
覆土	118—20	凹石	安山岩
覆土	118—21	凹石	安山岩
覆土	118—22	凹石	安山岩
覆土	119—1	凹石	安山岩
覆土	119—2	凹石	安山岩
覆土	119—3	凹石	安山岩
覆土	119—4	石皿	安山岩
覆土	126—8	石鏃	黒曜石
覆土	126—9	石鏃	黒曜石
覆土	126—10	石鏃	黒曜石
覆土	126—11	石鏃	黒曜石
覆土	126—12	石鏃	黒曜石
覆土	126—13	石鏃	黒曜石
41住覆土	126—14	石鏃	黒曜石
床面	119—5	磨石斧	砂岩
床面	119—6	石錘	安山岩
床面	119—7	磨石	安山岩
床面	119—8	凹石	安山岩
床面	119—9	凹石	安山岩
床面	119—10	凹石	安山岩
床面	119—11	凹石	安山岩
床面	119—12	石皿	安山岩
床面	126—15	小形磨石斧	蛇紋岩
床面	126—16	石鏃	黒曜石
床面	126—17	石鏃	黒曜石
床面	126—18	石匙	チャート
床面	123—10	石皿	安山岩
42住覆土	119—16	打石斧	砂岩
覆土	119—17	磨石斧	凝灰質粘板岩
覆土	119—18	凹石	安山岩
床面	120—1	凹石	安山岩
床面	120—2	凹石	安山岩
床面	120—3	凹石	安山岩
床面	120—4	凹石	安山岩
床面	120—5	凹石	安山岩
床面	120—6	磨石	安山岩
床面	120—7	石皿	安山岩
床面	126—19	U・F	黒曜石
43住炉内	119—13	打石斧	黒雲母ホルンフェルス
炉内	119—14	凹石	安山岩
炉内	126—20	石鏃	黒曜石
45住床面	119—15	凹石	安山岩
48住覆土	120—8	打石斧	黒雲母ホルンフェルス
覆土	120—9	横刃	硬砂岩
覆土	120—10	横刃	硬砂岩
覆土	120—11	横刃	硬砂岩
覆土	120—12	凹石	安山岩
覆土	120—13	凹石	安山岩
床面	120—14	打石斧	硬砂岩
床面	120—15	打石斧	硬砂岩
床面	120—16	石匙	硬砂岩

第7表　荒神山遺跡出土石器一覧表　(No.4)

遺構	図番号	石器名	石質
48住床面	126—21	石鏃	黒曜石
床面	126—22	石鏃	黒曜石
床面	126—23	石鏃	黒曜石
床面	126—24	石錐	黒曜石
床面	126—25	異形石器	黒曜石
49住覆上	121— 1	打石斧	砂岩
覆土	121— 2	打石斧	硬砂岩
覆上	121— 3	打石斧	砂岩
覆土	121— 4	打石斧	硬砂岩
覆土	121— 5	打石斧	ホルンフェルス
覆土	121— 6	打石斧	凝灰質粘板岩
覆土	121— 7	打石斧	黒雲母ホルンフェルス
覆土	121— 8	磨石斧	砂岩
覆土	121— 9	磨石斧	砂岩
覆土	121—10	横刃	凝灰質粘板岩
覆土	121—11	石匙	硬砂岩
覆土	121—12	凹石	安山岩
覆土	121—13	凹石	安山岩
覆土	121—14	凹石	安山岩
覆土	126—26	石鏃	黒曜石
覆土	126—27	石鏃	黒曜石
覆土	126—27	石鏃	黒曜石
覆土	126—29		黒曜石
覆土	126—30	スクレイパー	砂岩
床面	121—15	打石斧	砂岩
床面	121—16	打石斧	砂岩
床面	121—17	打石斧	砂岩
床面	121—18	敲打器	砂岩
床面	121—19	磨石斧	砂岩
床面	126—31	石錐	黒曜石
50住	122— 1	打石斧	凝灰質粘板岩
	122— 2	打石斧	硬砂岩
	122— 3	打石斧	砂岩
	122— 4	打石斧	砂岩
	122— 5	打石斧	凝灰質粘板岩
	122— 6	打石斧	砂岩
	122— 7	打石斧	粘板岩
	122— 8	横刃	硬砂岩
50住	122— 9	横刃	硬砂岩
	122—10	横刃	砂岩
	122—11	横刃	砂岩
	122—12	横刃	凝灰質千枚岩
	122—13	横刃	硬砂岩
	122—14	横刃	凝灰岩
	122—15	磨石斧	砂岩
	122—16	磨石斧	緑泥片岩
	122—17	凹石	安山岩
	122—18	凹石	安山岩
	122—19	凹石	安山岩
	122—20	凹石	安山岩
	127— 1	石鏃	黒曜石
	127— 2	石鏃	黒曜石
	127— 3	石鏃	黒曜石
	127— 4	石鏃	黒曜石
	127— 5	小形磨石斧	蛇紋岩
	127— 6	石匙	凝灰質粘板岩
	127— 7	横刃	硬砂岩
53住覆上	122—21	打石斧	凝灰質粘板岩
覆土	122—22	凹石	安山岩
覆土	122—23	凹石	安山岩
覆土	122—24	凹石	砂岩
覆土	127— 8	石匙	チャート
炉内	122—25	凹石	安山岩
55住覆土	123— 1	打石斧	安山岩
覆土	123— 2	局部磨石斧	砂岩
覆上	123— 3	石匙	砂岩
覆土	123— 4	横刃	硬砂岩
覆土	123— 5	横刃	凝灰質粘板岩
覆土	123— 6	横刃	硬砂岩
覆土	123— 7	横刃	硬砂岩
床面	123— 8	打石斧	凝灰質粘板岩
床面	123— 9	磨石斧	砂岩
56住床面	121—20	打石斧	砂岩
57住覆土	121—21	磨石斧	砂岩
覆土	121—22	石錐	黒雲母ホルンフェルス
62住	127— 9	石匙	黒曜石
63住炉内	121—23	凹石	安山岩



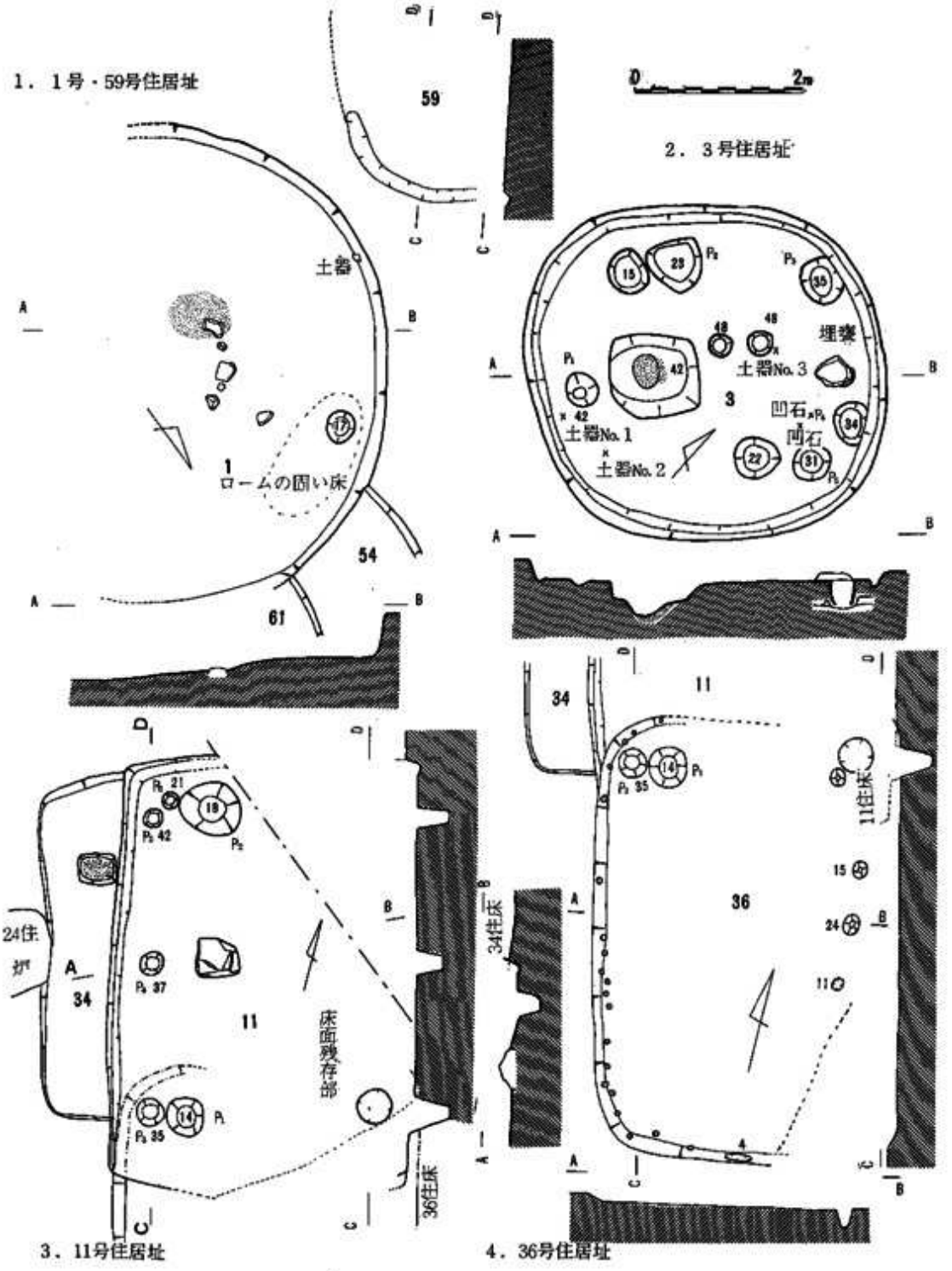
1．縄文時代遺構配置図



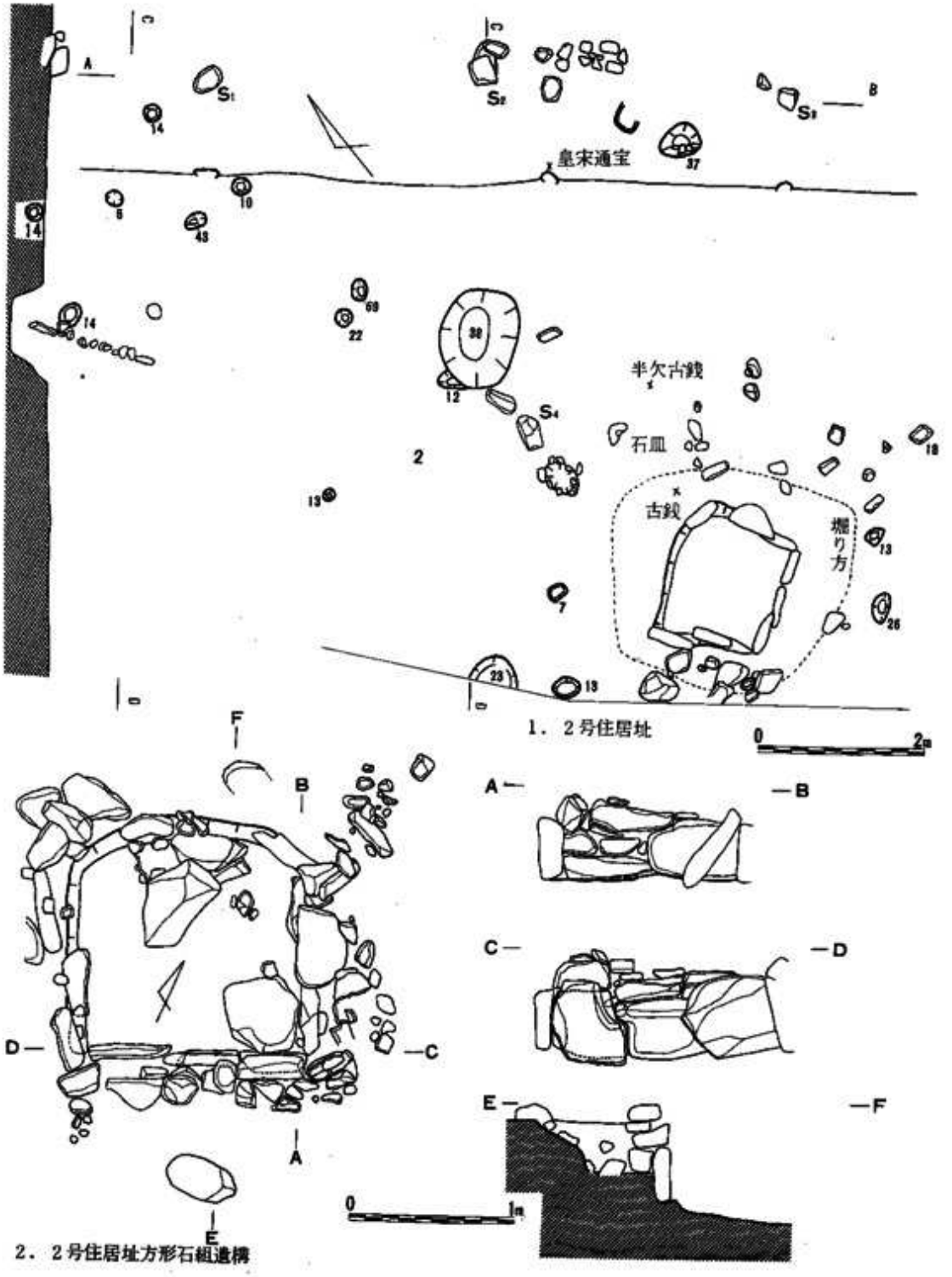
2．弥生時代以降遺構配置図

0 20m

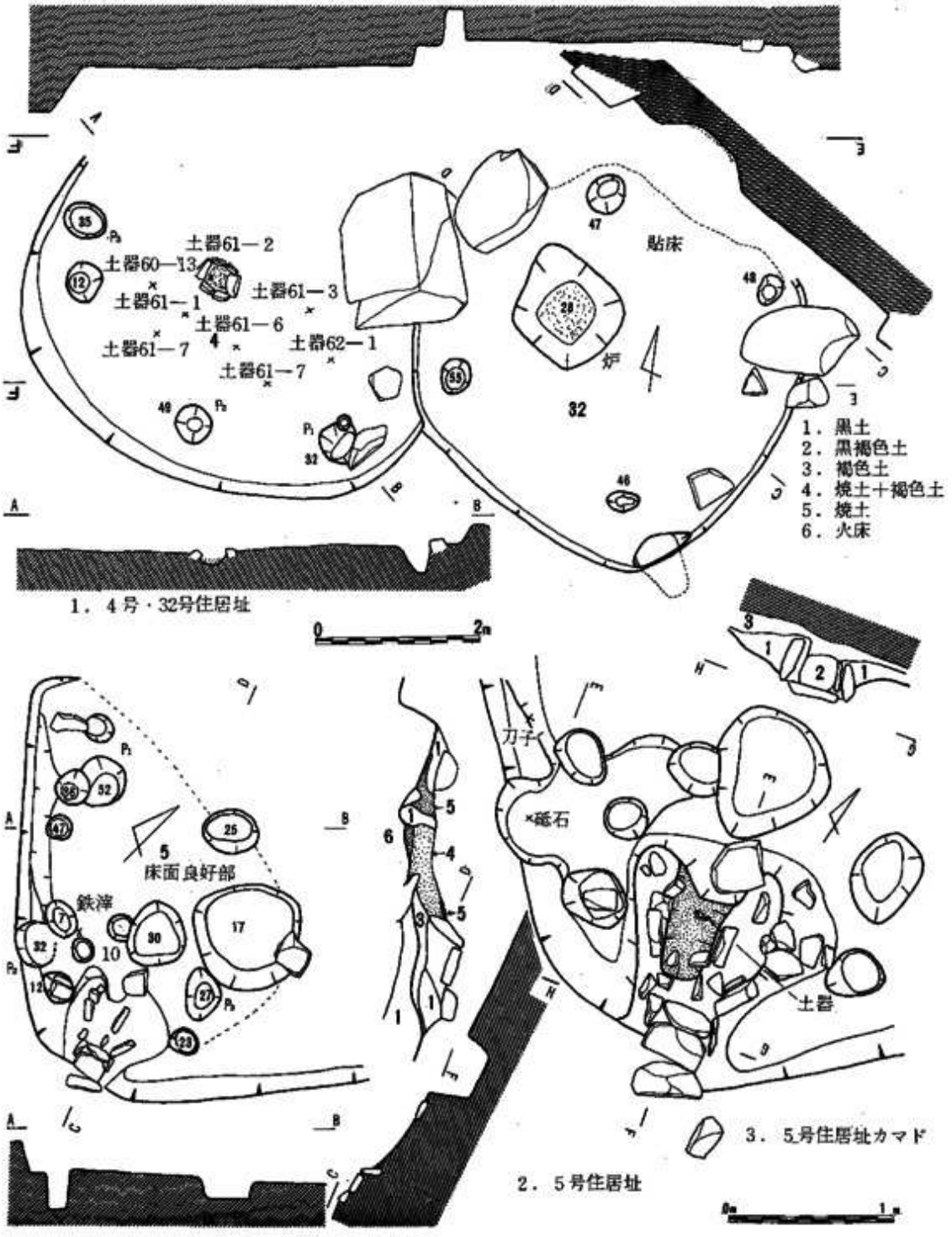
第39図　荒神山遺跡遺構配置図（1：800）



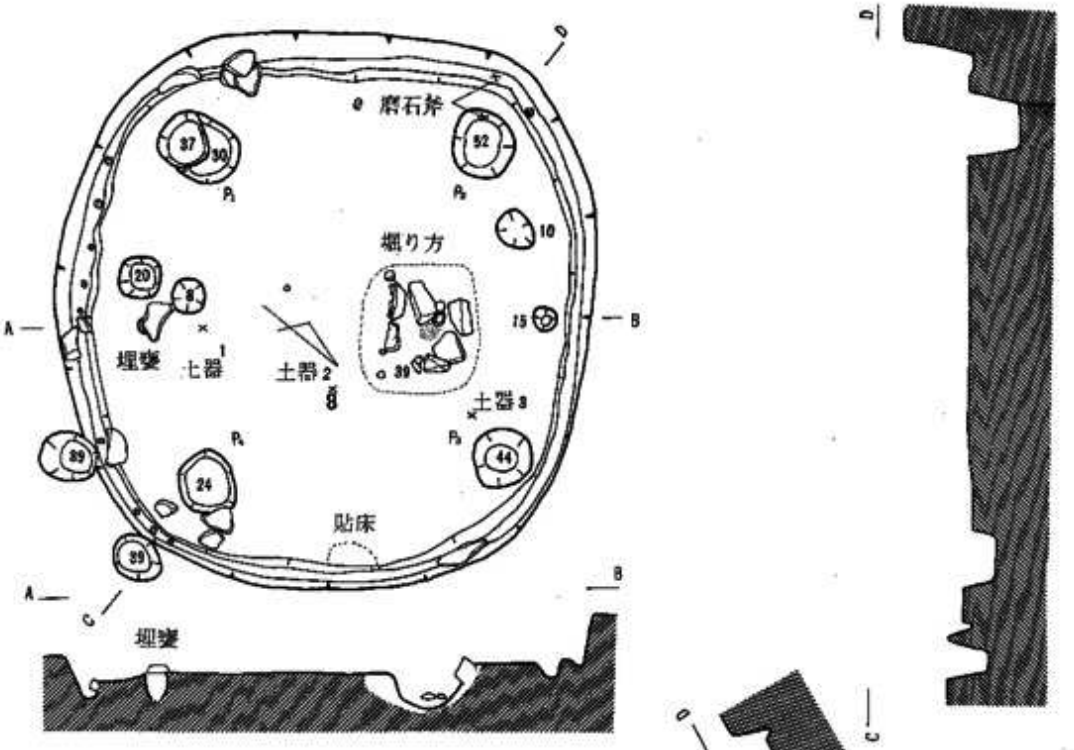
第40図　荒神山遺跡1号・3号・11号・36号・59号住居址（1：80）



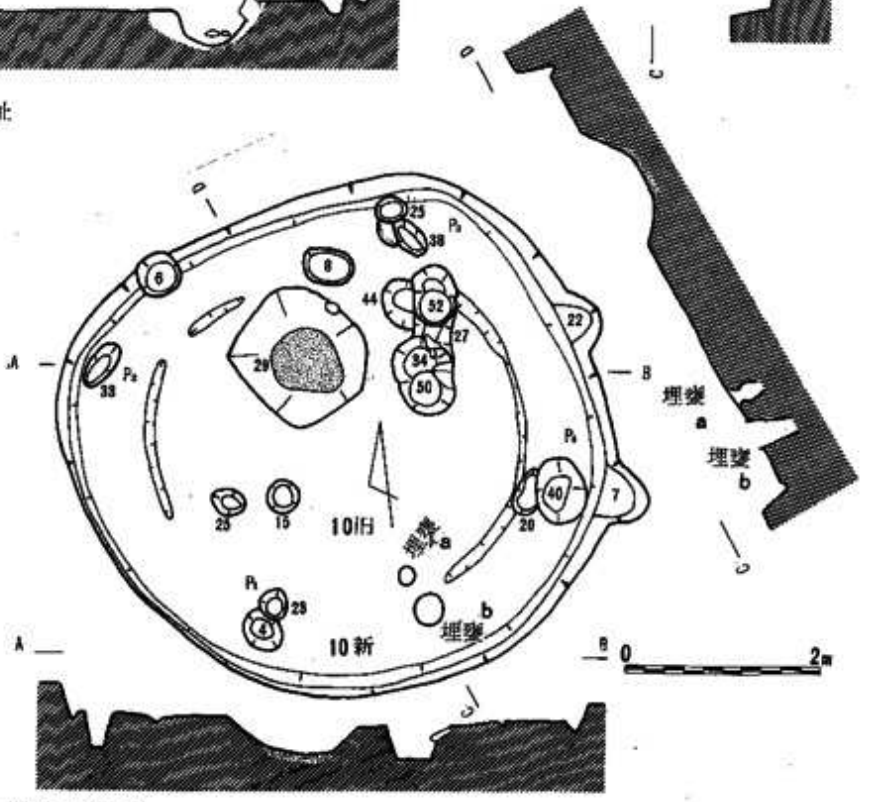
第41図　荒神山遺跡2号住居址(1：8　但し2は1：40)



第42図　荒神山遺跡4号・5号・32号住居址（1：80　但し3は1：40）

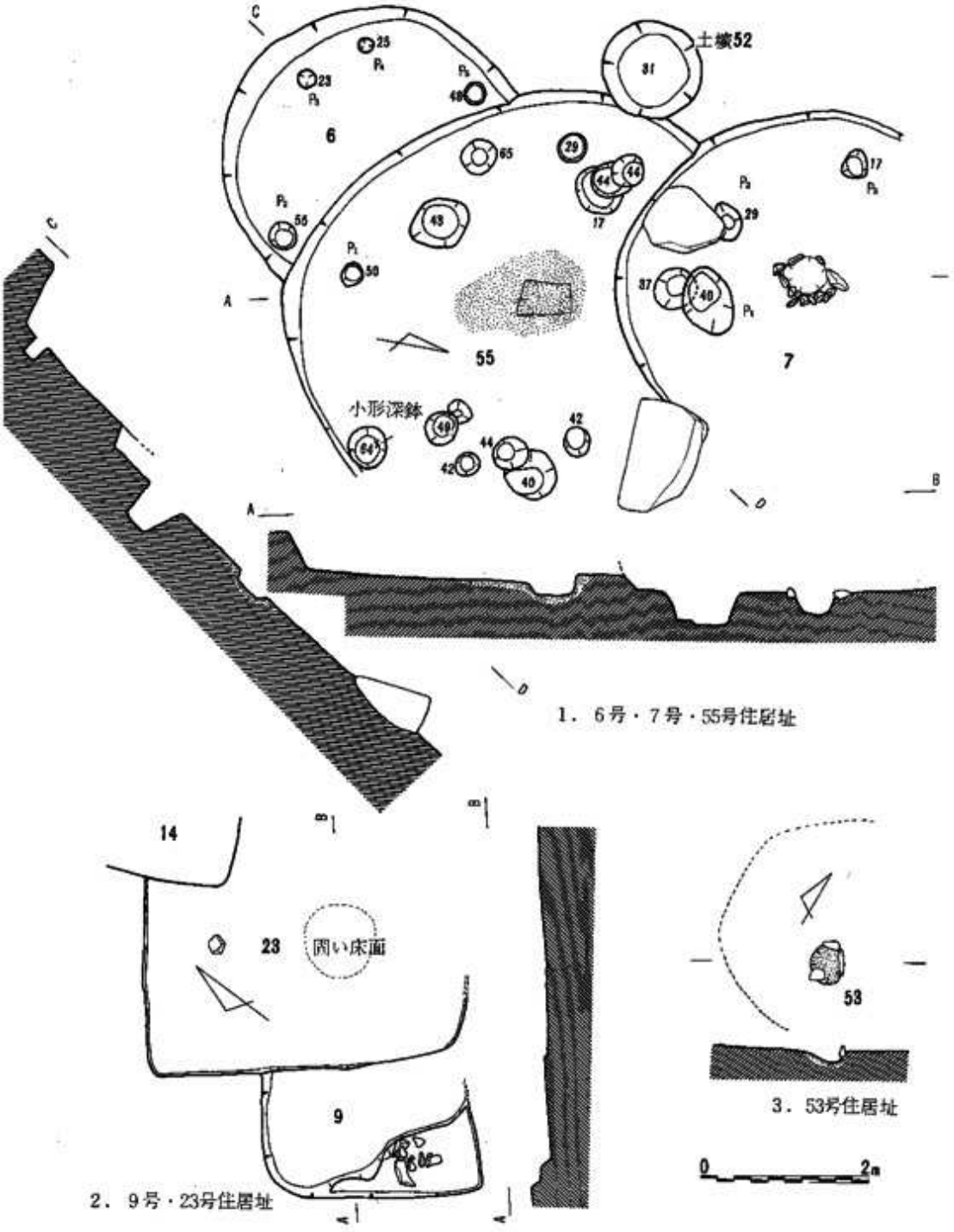


1．8号住居址

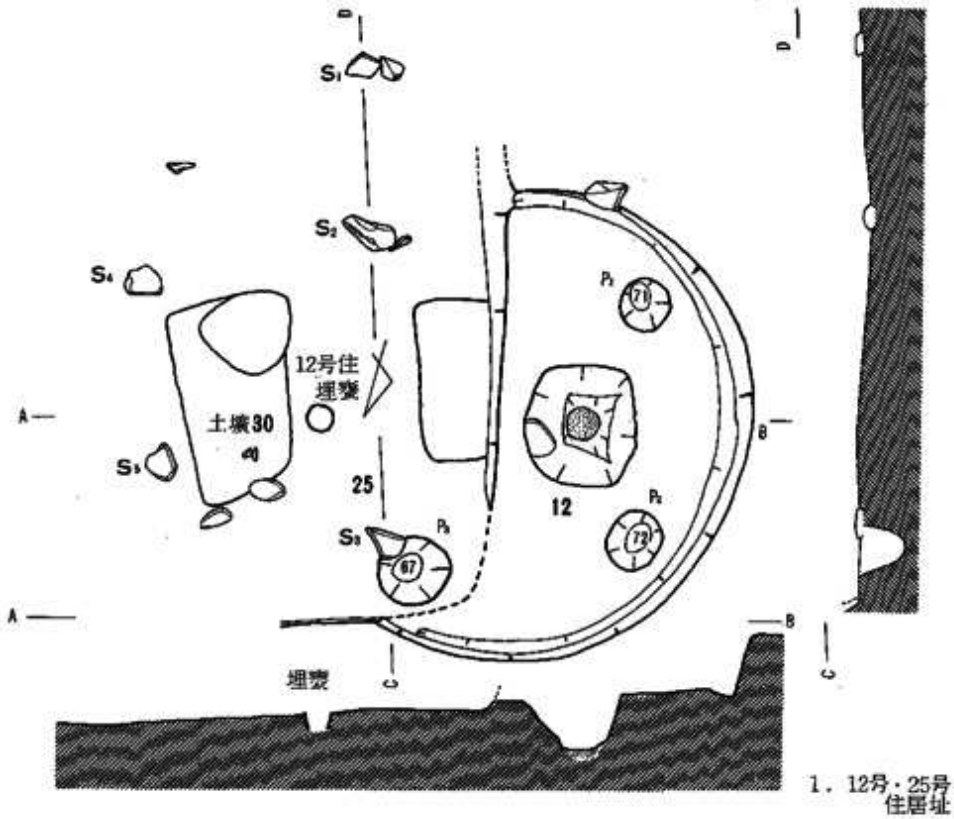


2．10号新旧住居址

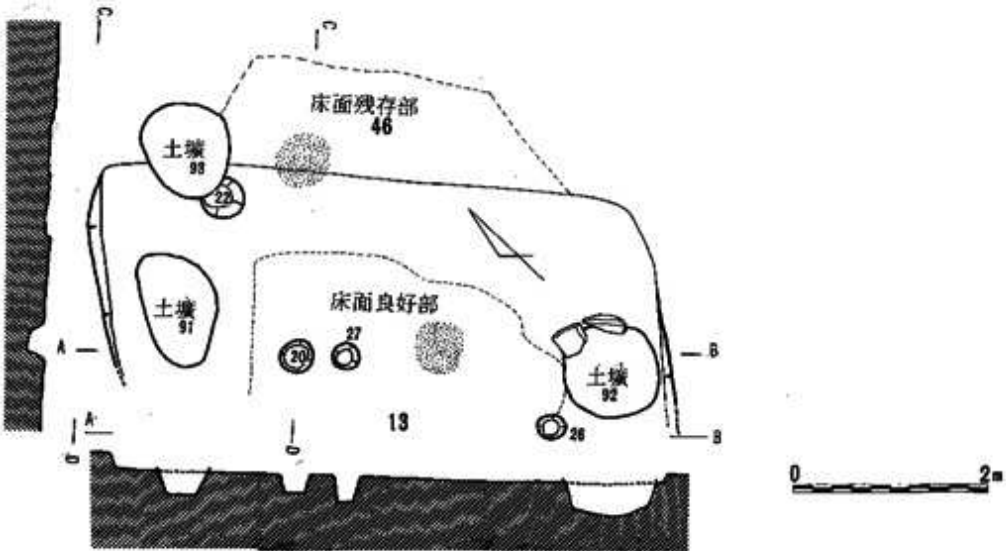
第43図　荒神山遺跡8号・10号新旧住居址(1：80)



第44図　荒神山遺跡6号・7号・9号・23号・53号・55号住居址（1：80）

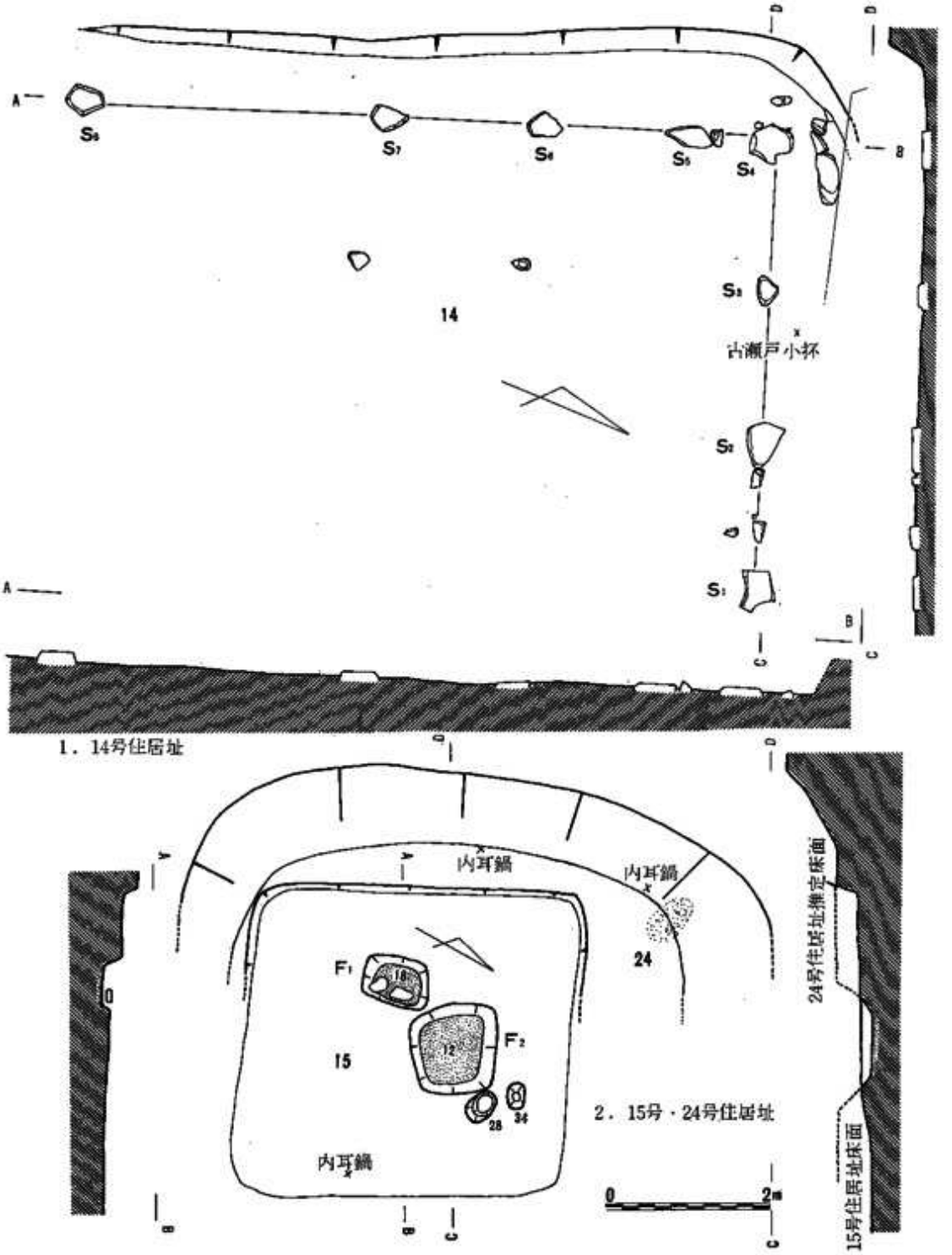


1．12号・25号住居址

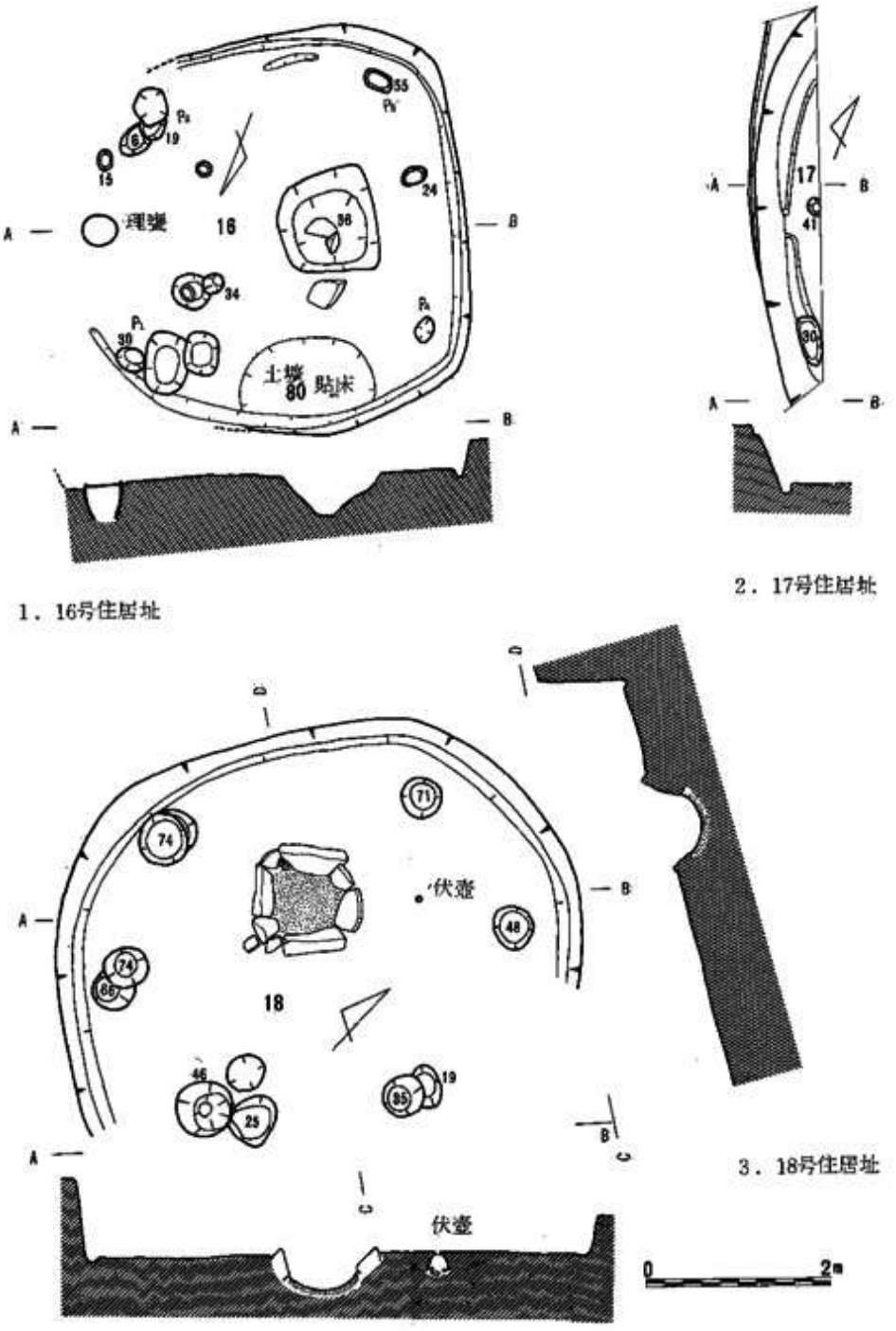


2．13号・46号住居址

第45図　荒神山遺跡12号・13号・25号・46号住居址（1：80）



第46図　荒神山遺跡14号・15号・24号住居址（1：80）

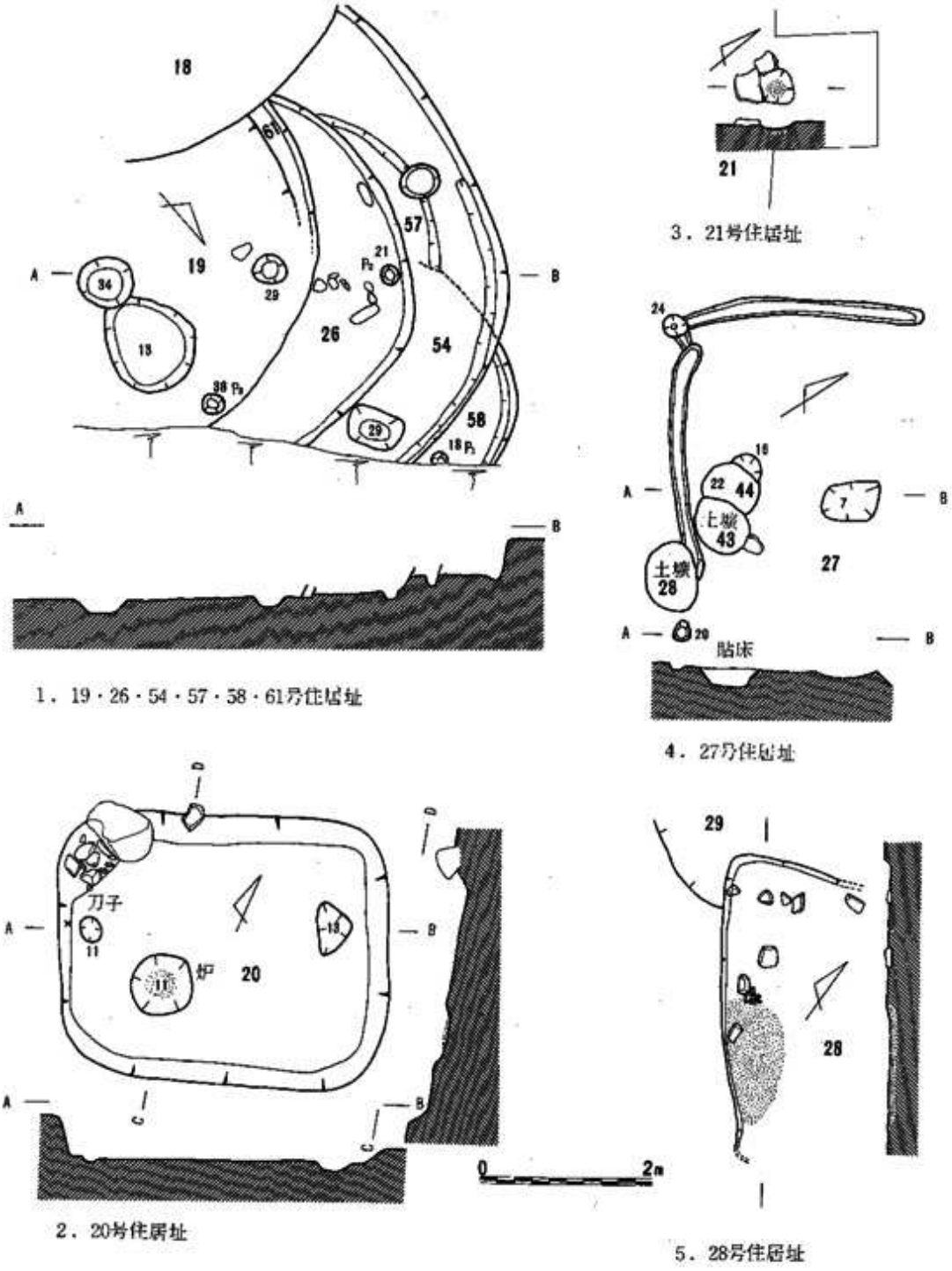


1．16号住居址

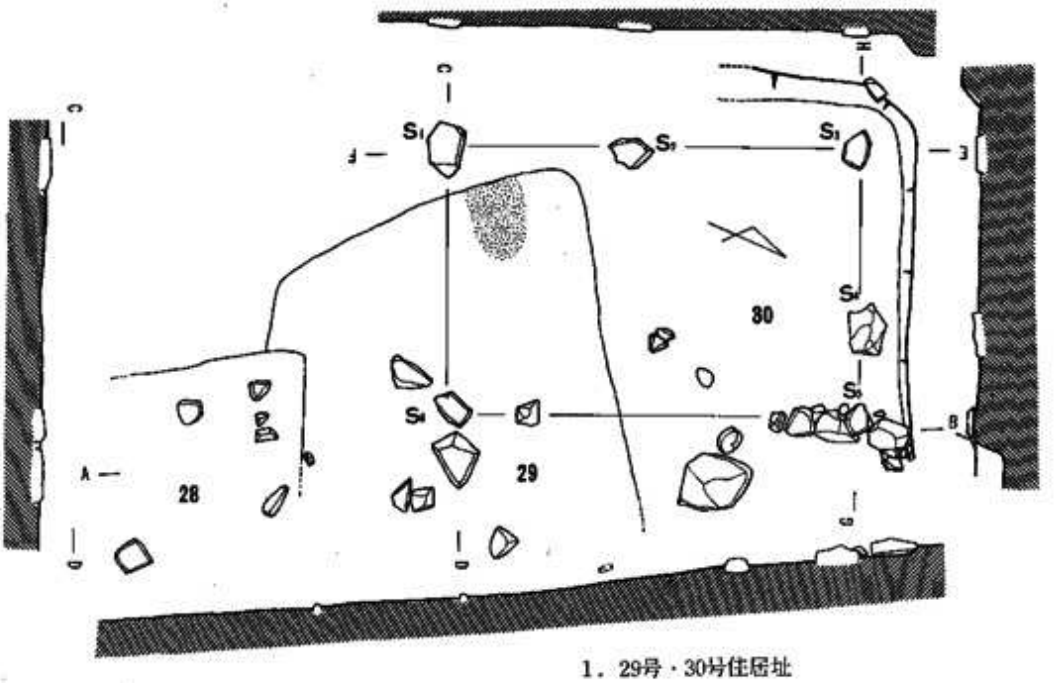
2．17号住居址

3．18号住居址

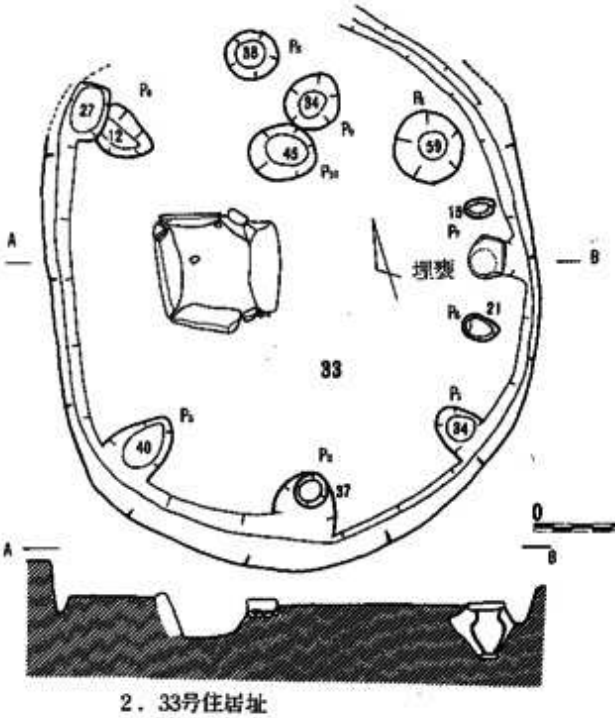
第47図　荒神山遺跡16号・17号・18号住居址（1：80）



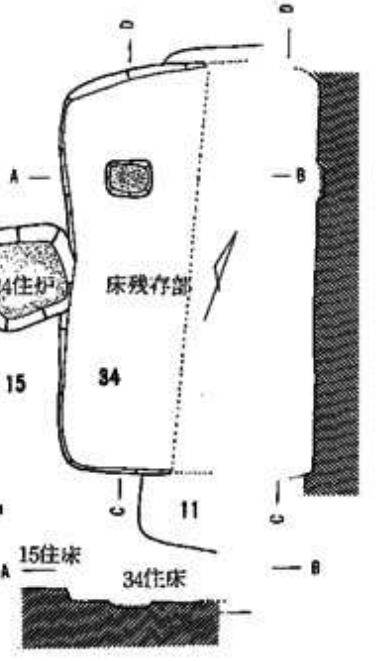
第48図　荒神山遺跡19号・20号・21号・26号・27号・28号・54号・57号・58号・61号住居址（1：80）



1．29号・30号住居址

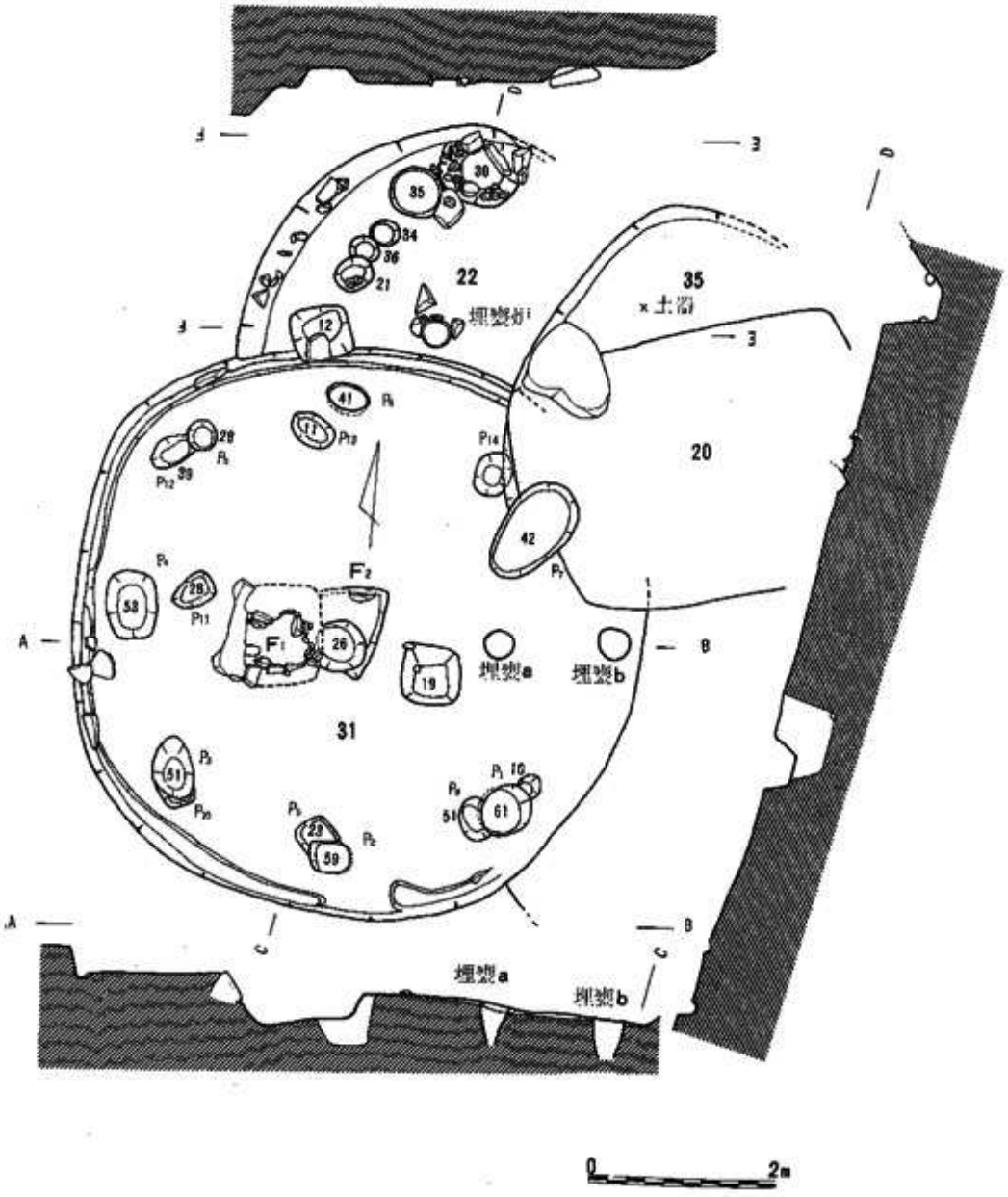


2．33号住居址

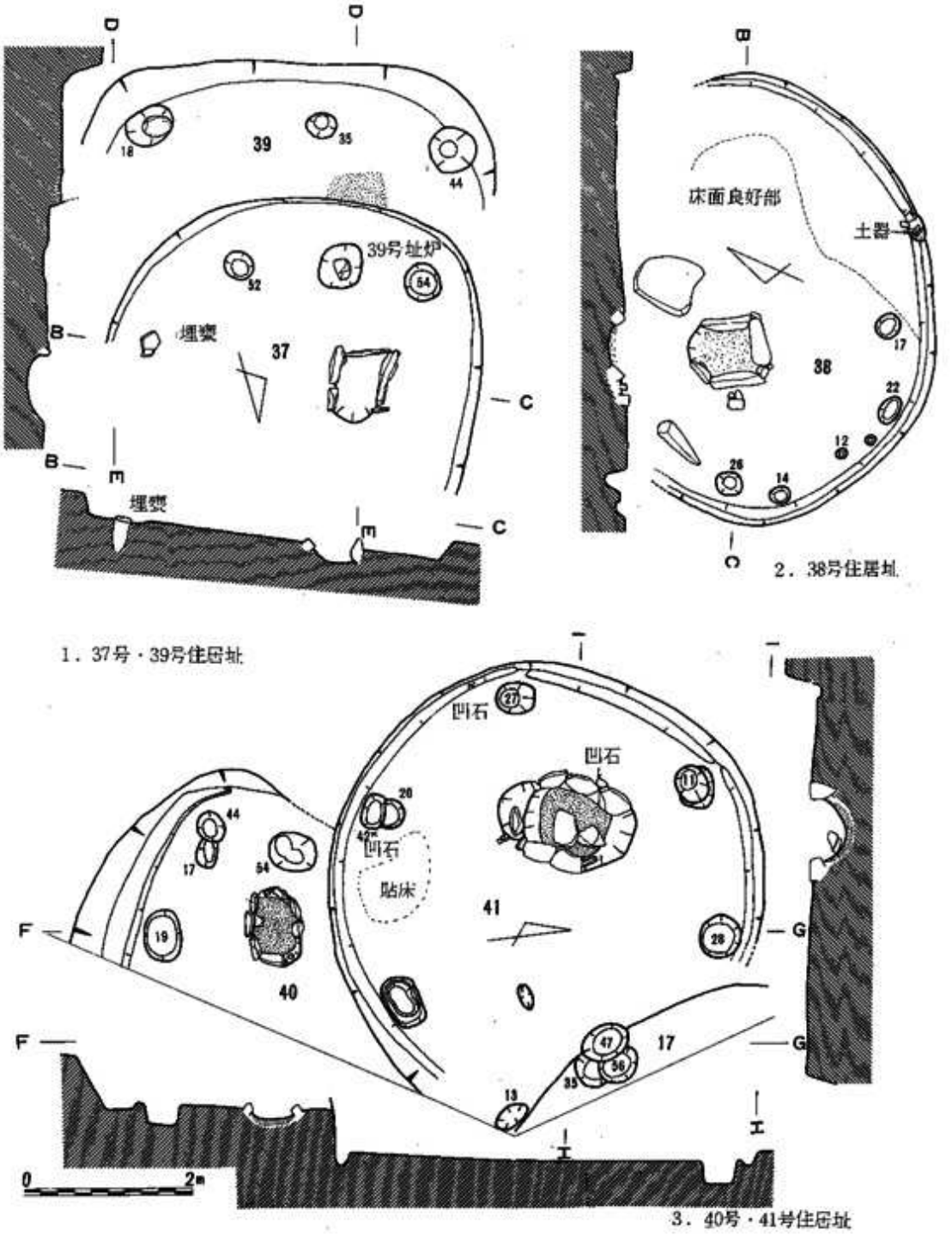


3．34号住居址

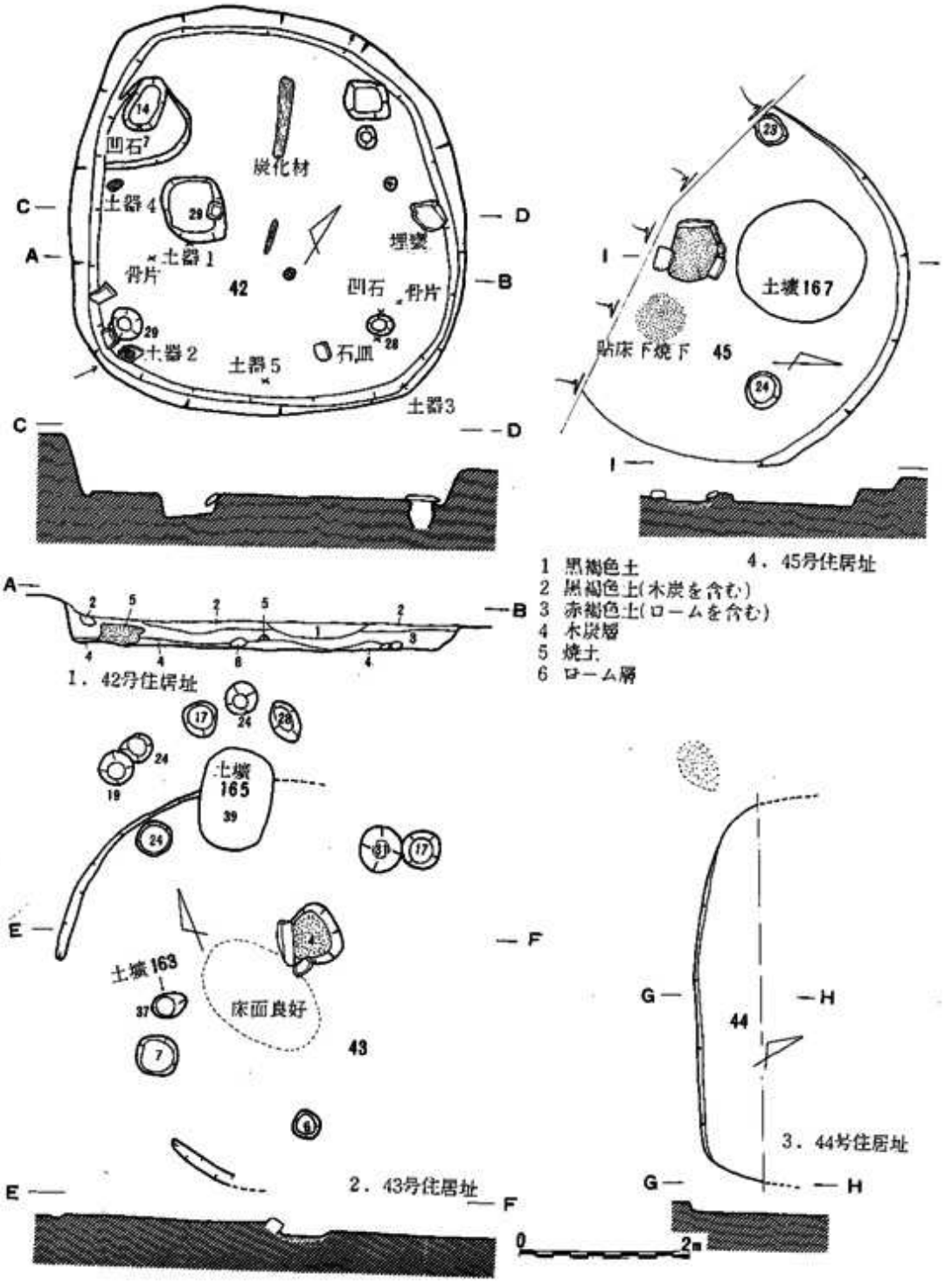
第49図　荒神山遺跡29号・30号・33号・34号住居址（1：80）



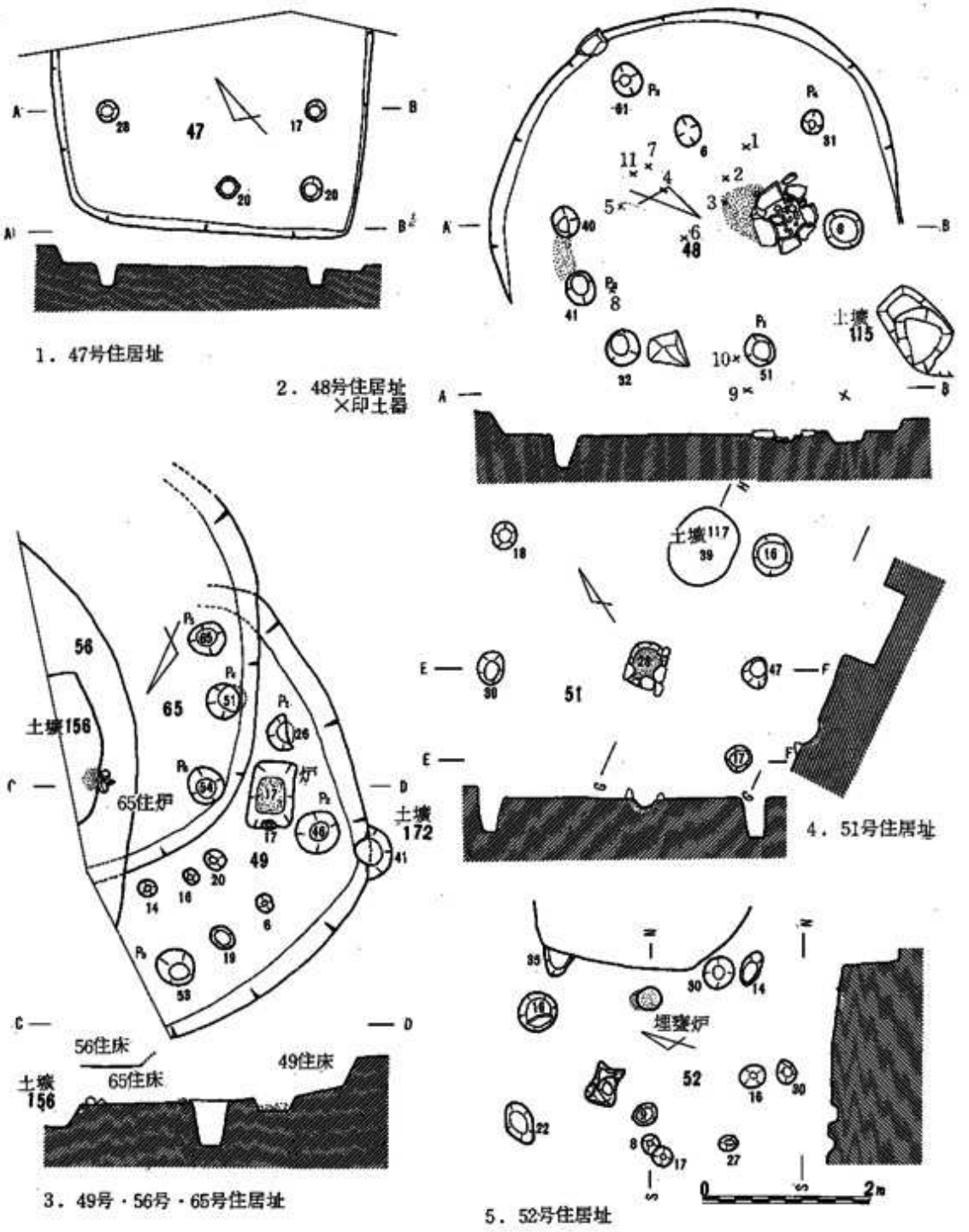
第50図　荒神山遺跡22号・31号・35号住居址（1：80）



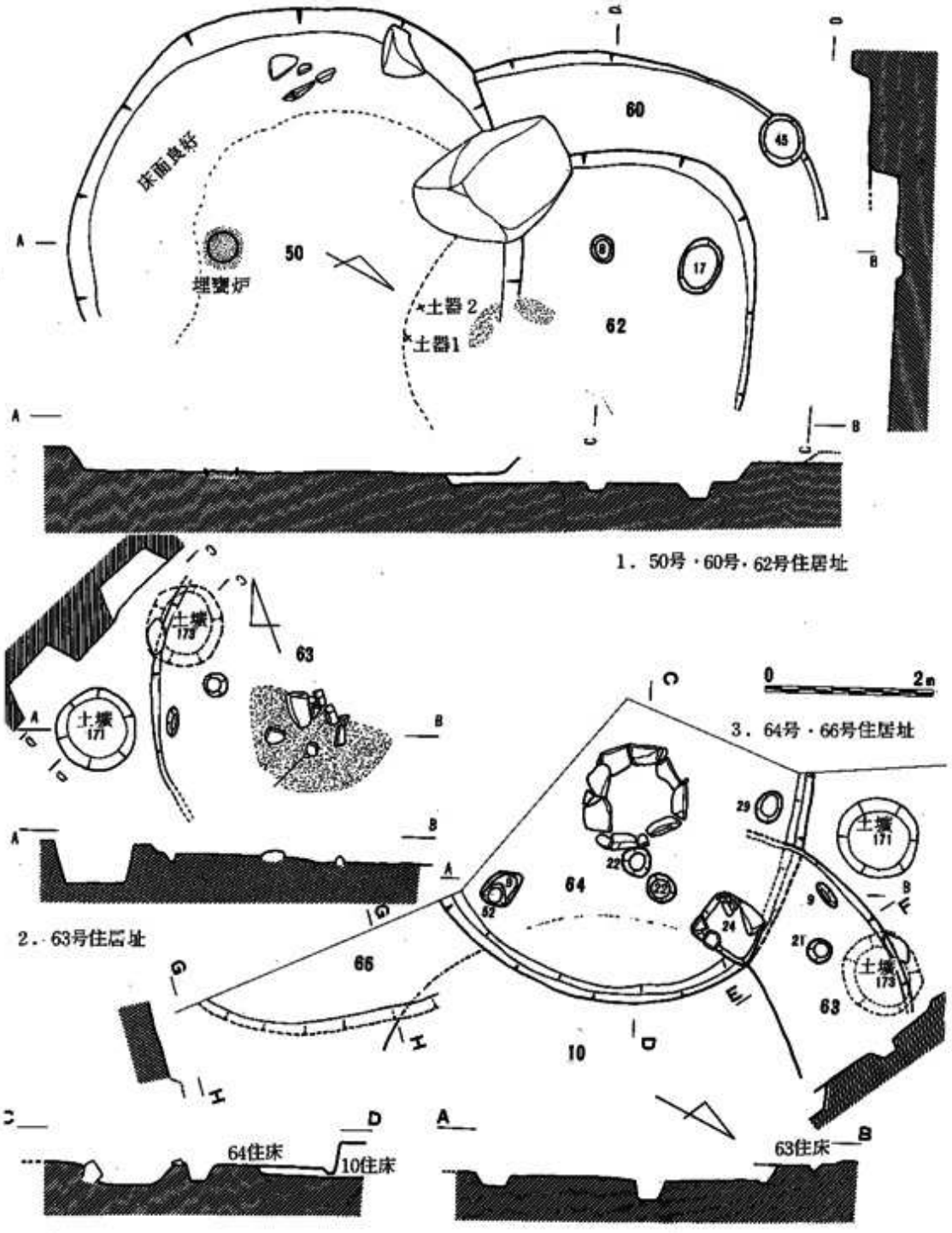
第51図　荒神山遺跡37号・38号・39号・40号・41号住居址（1：80）



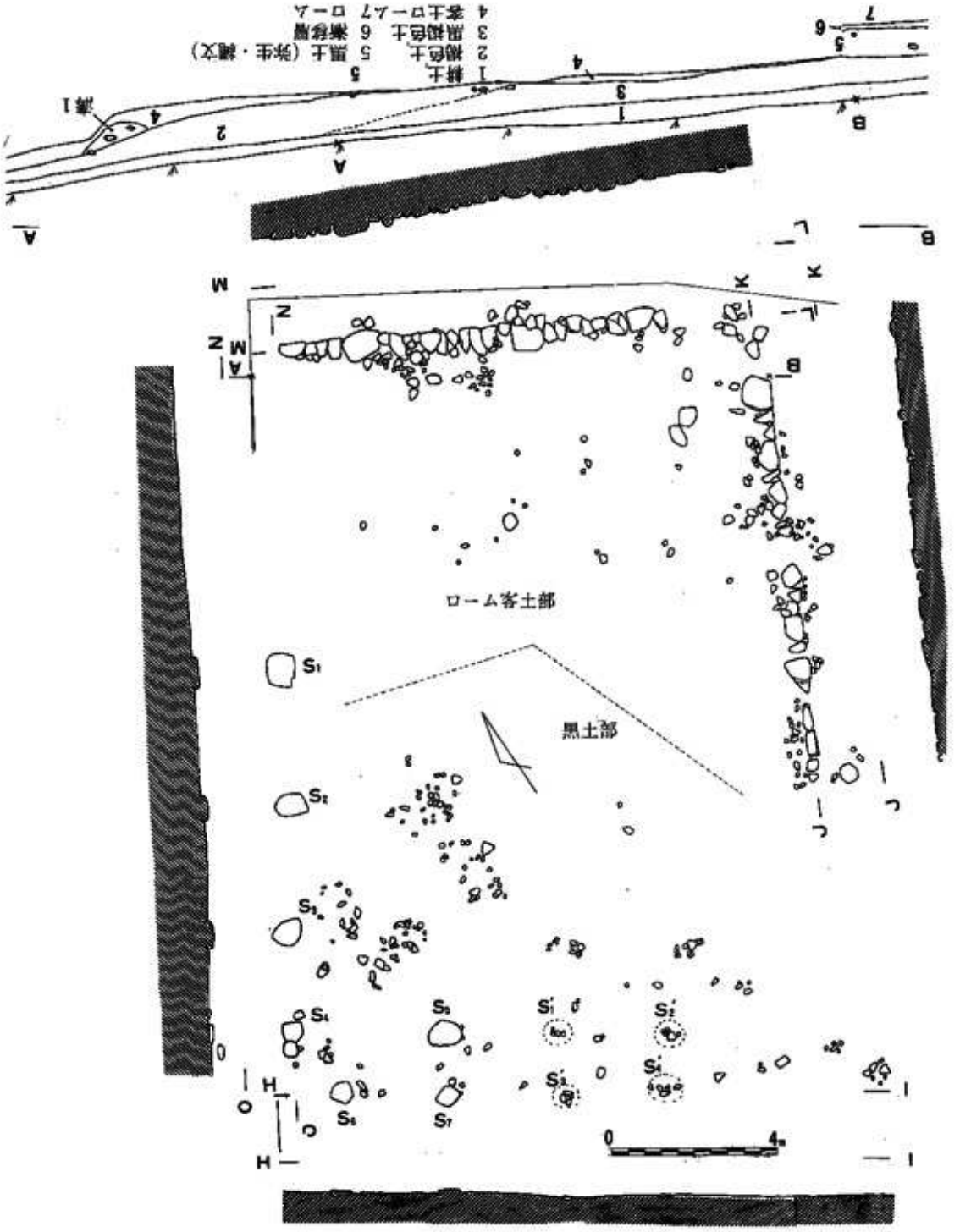
第52図　荒神山遺跡42号・43号・44号・45号住居址（1：80）



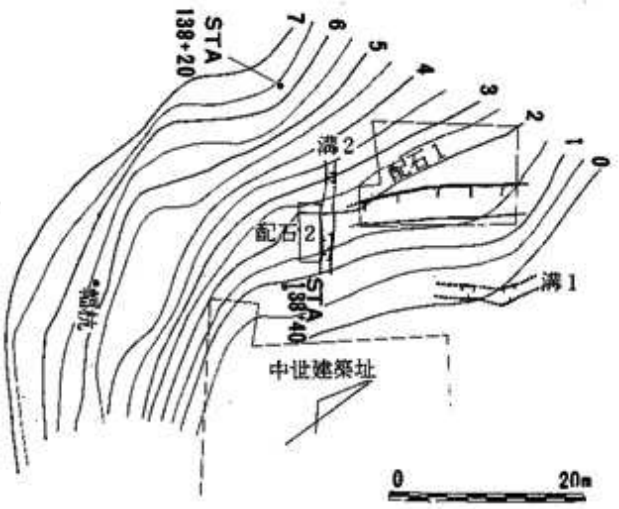
第53図　荒神山遺跡47号・48号・49号・51号・52号・56号・65号住居址（1：80）



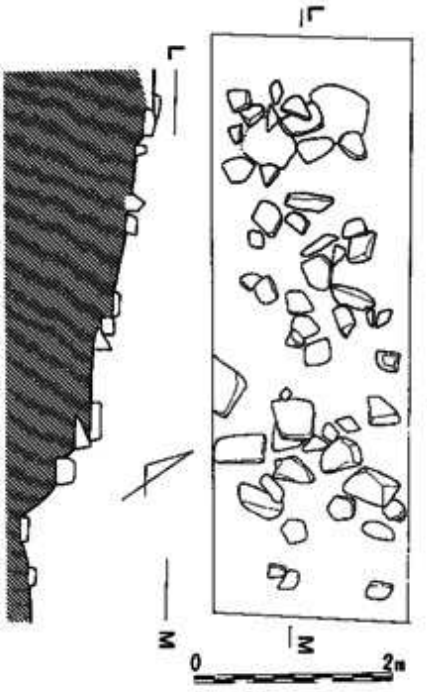
第54図　荒神山遺跡50号・60号・62号・63号・64号・66号住居址（1：80）



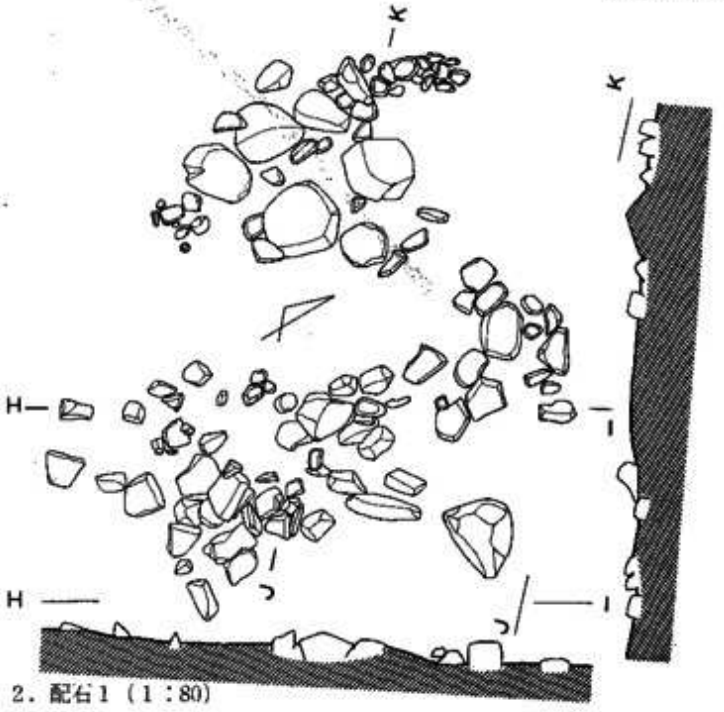
第55図　荒神山遺跡中世建築址（1： 160)(但しレベル基準線の高さは同一にしてある)



1．A区大熊城址第Ⅵ之郭東斜面部遺構配置図（1：800）

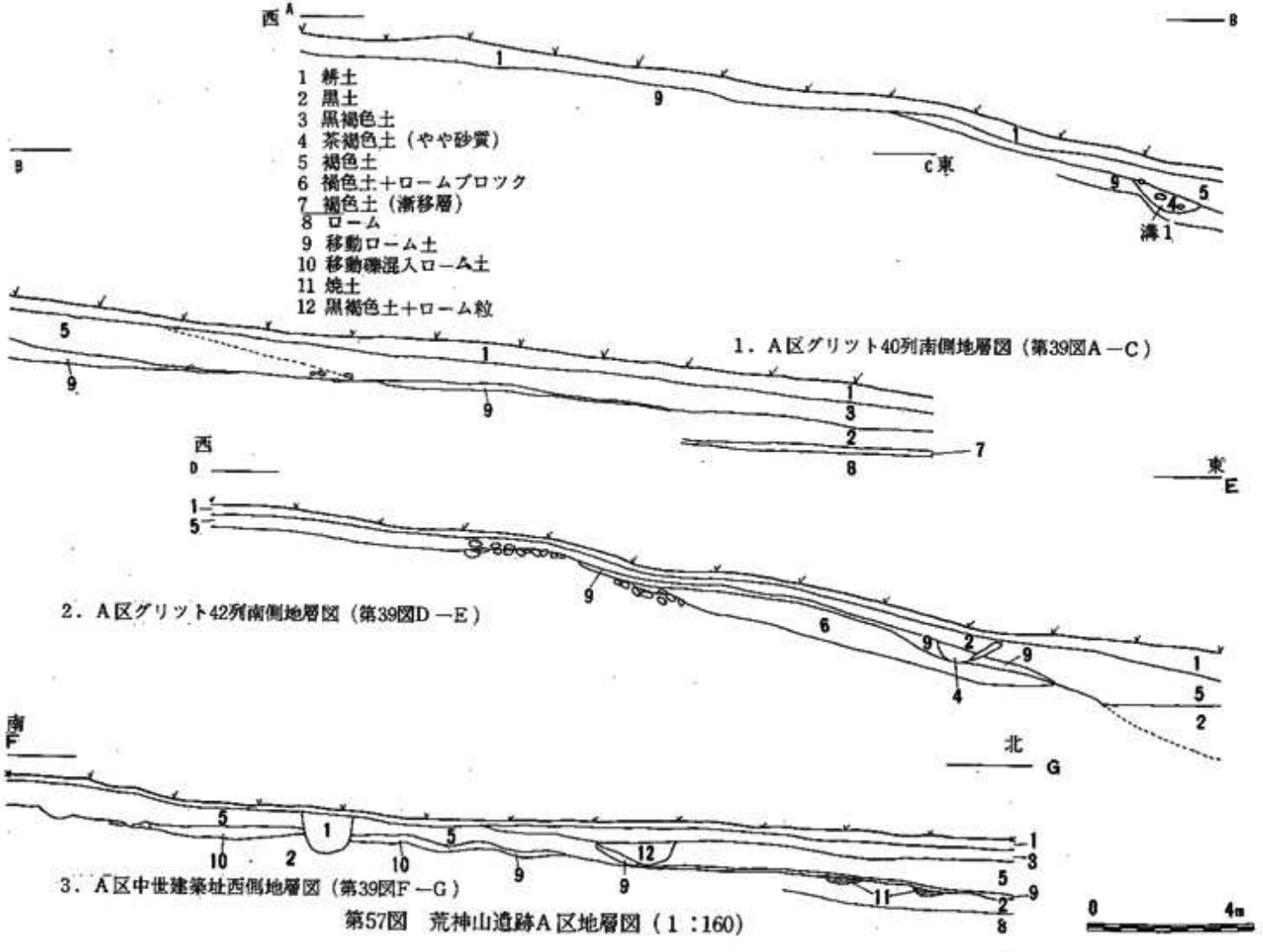


3．配石2（1：80）

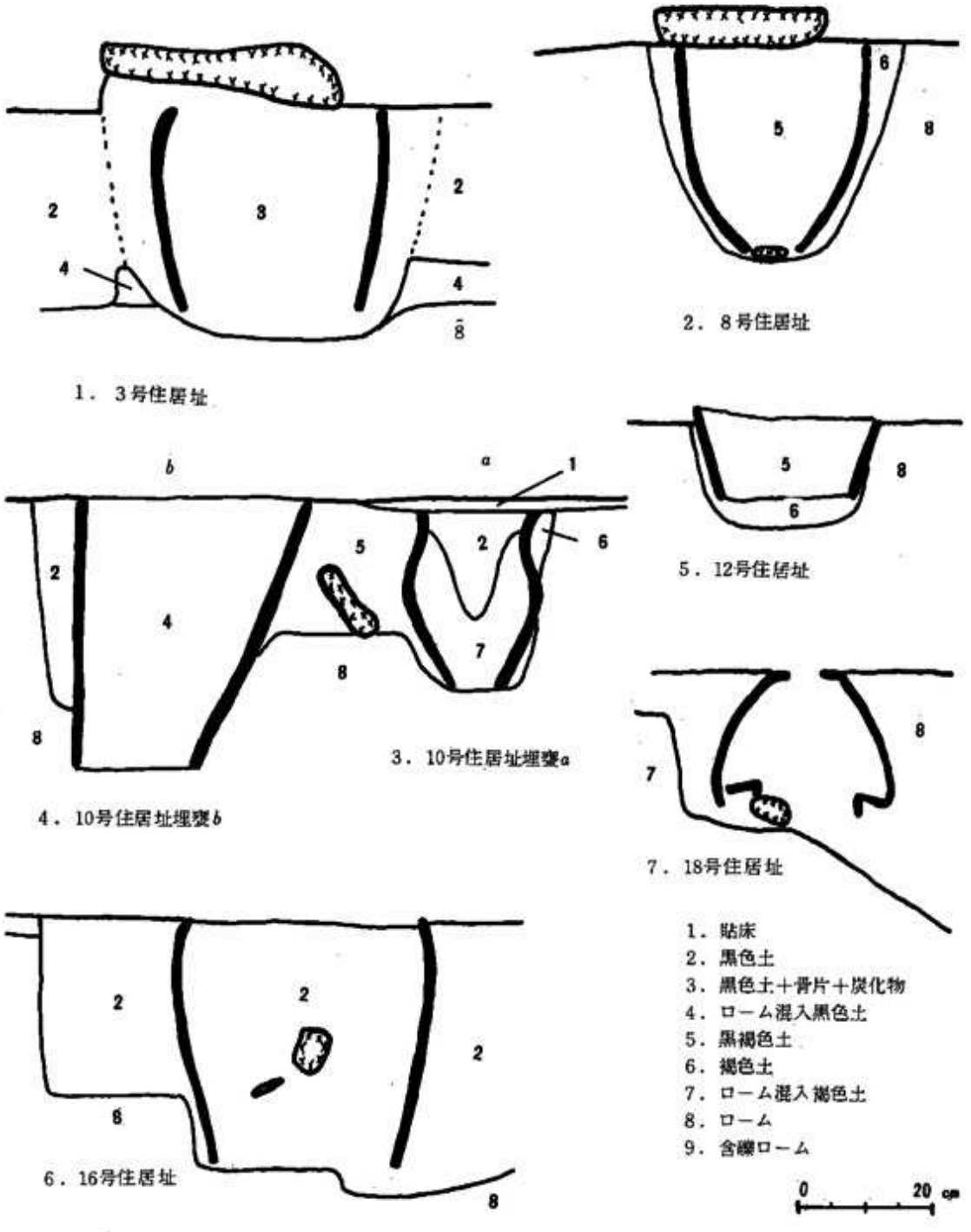


2．配石1（1：80）

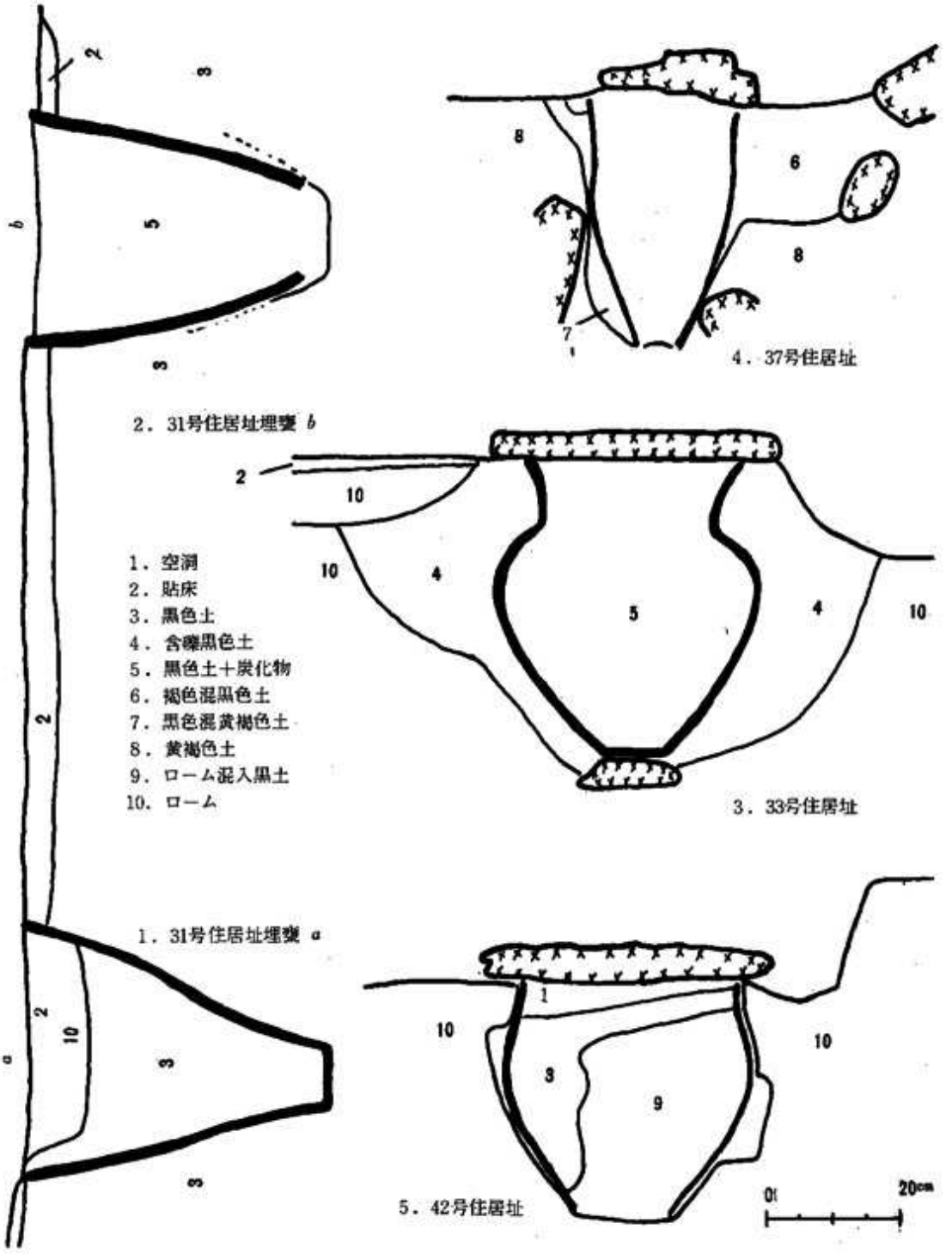
第56図　荒神山遺跡配石遺構



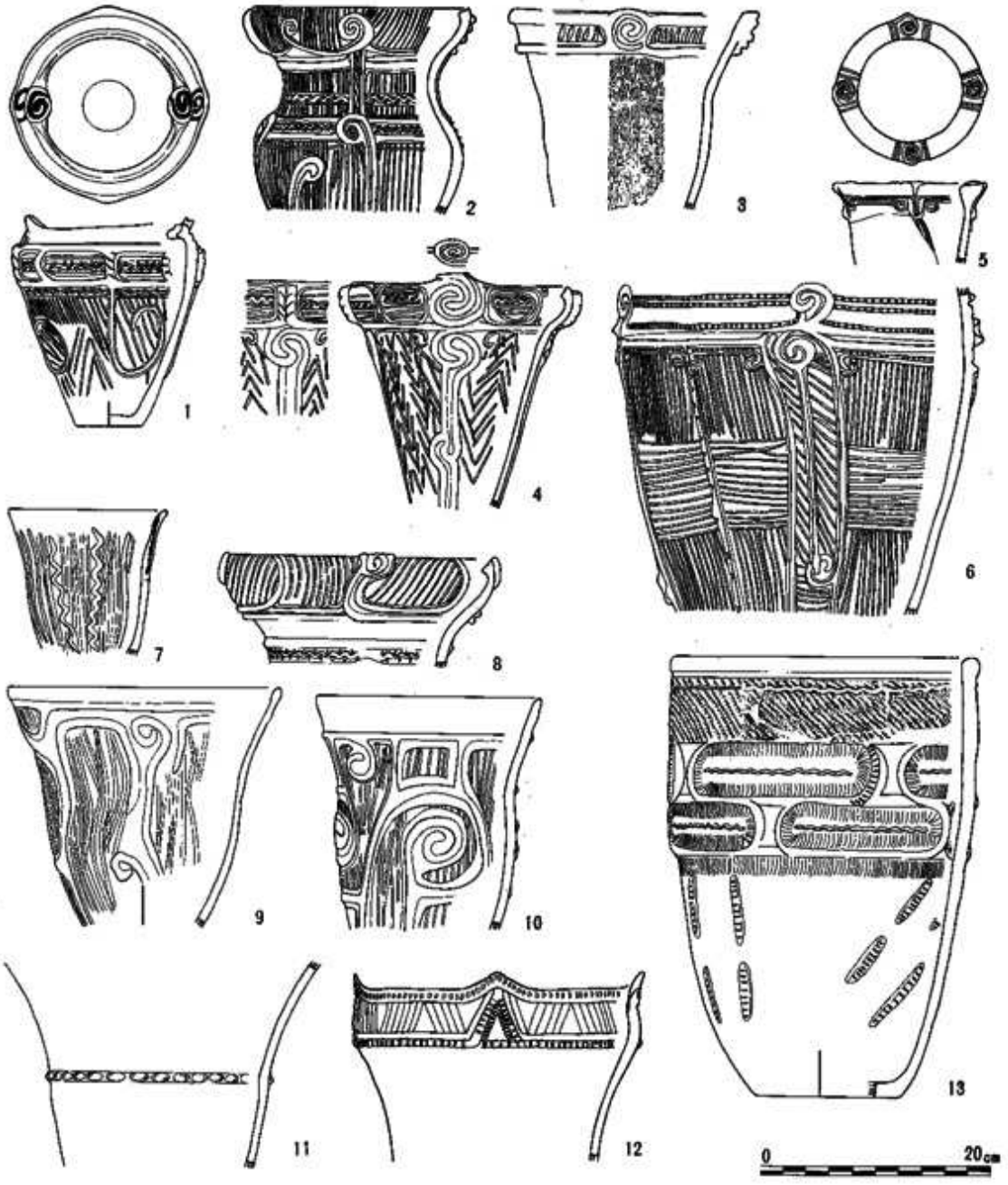
第57図　荒神山遺跡A区地層図（1：160）



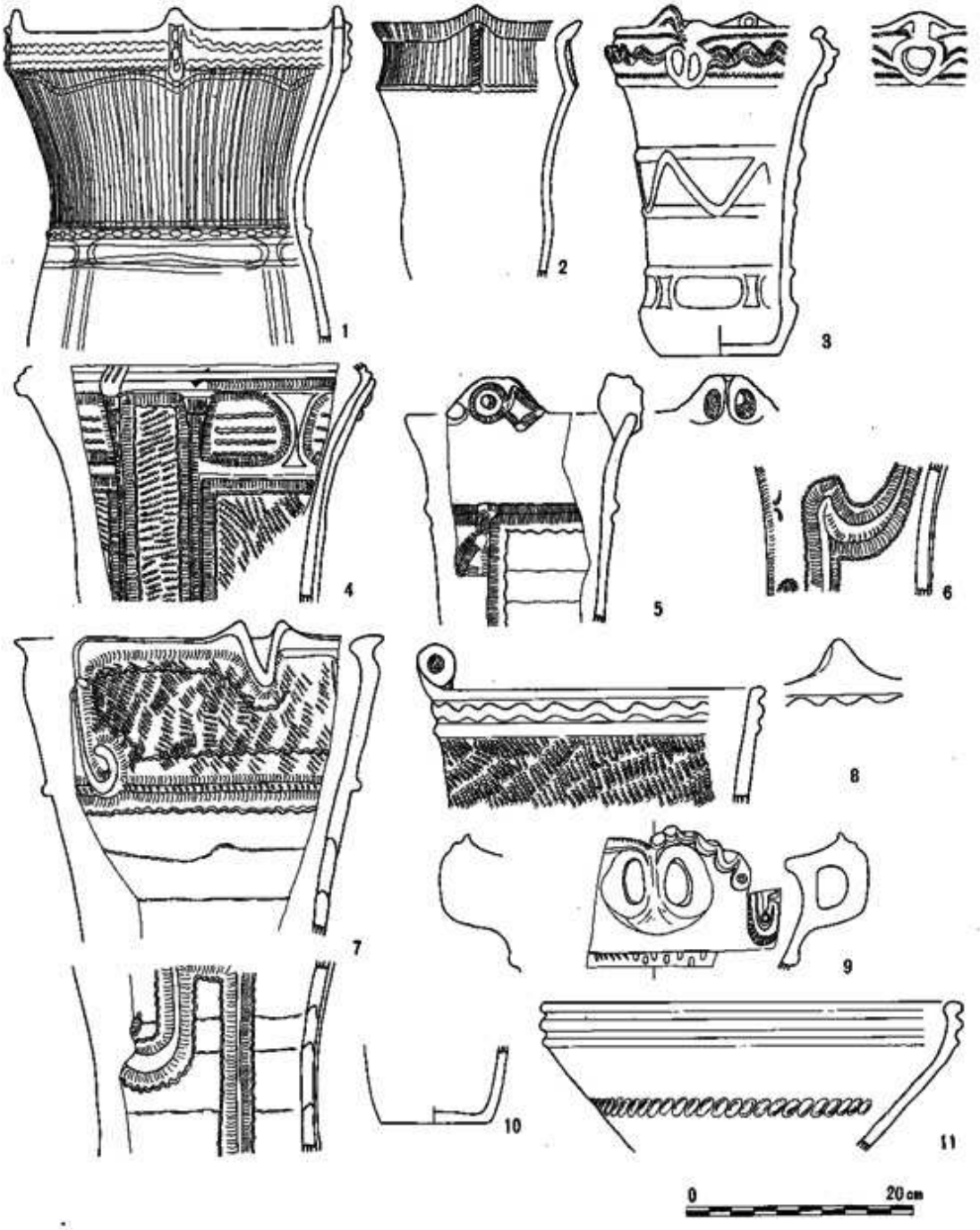
第58図　荒神山遺跡埋甕出土状況断面図（1：10）



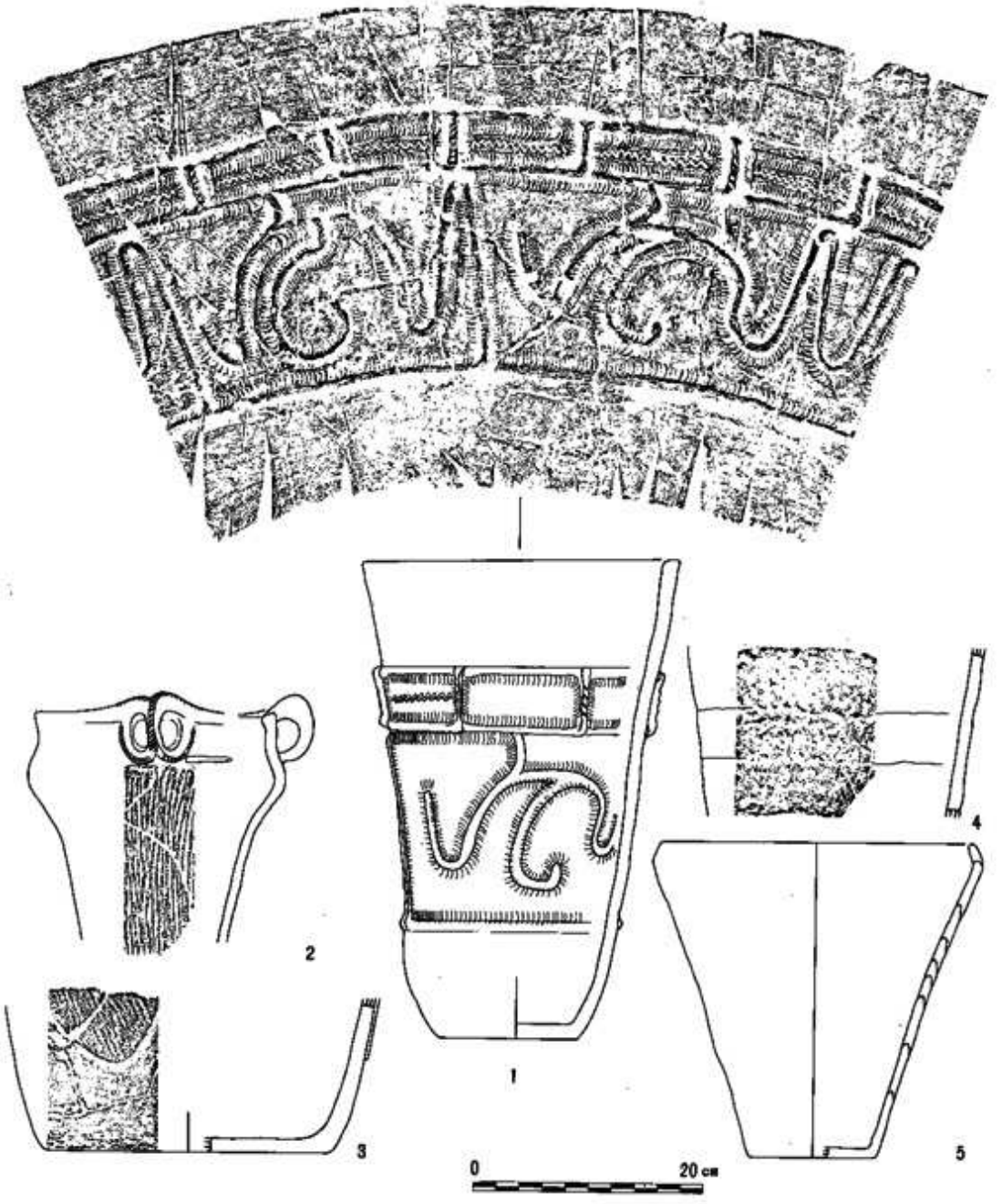
第59図　荒神山遺跡埋甕出土状況断面図２（１：10）



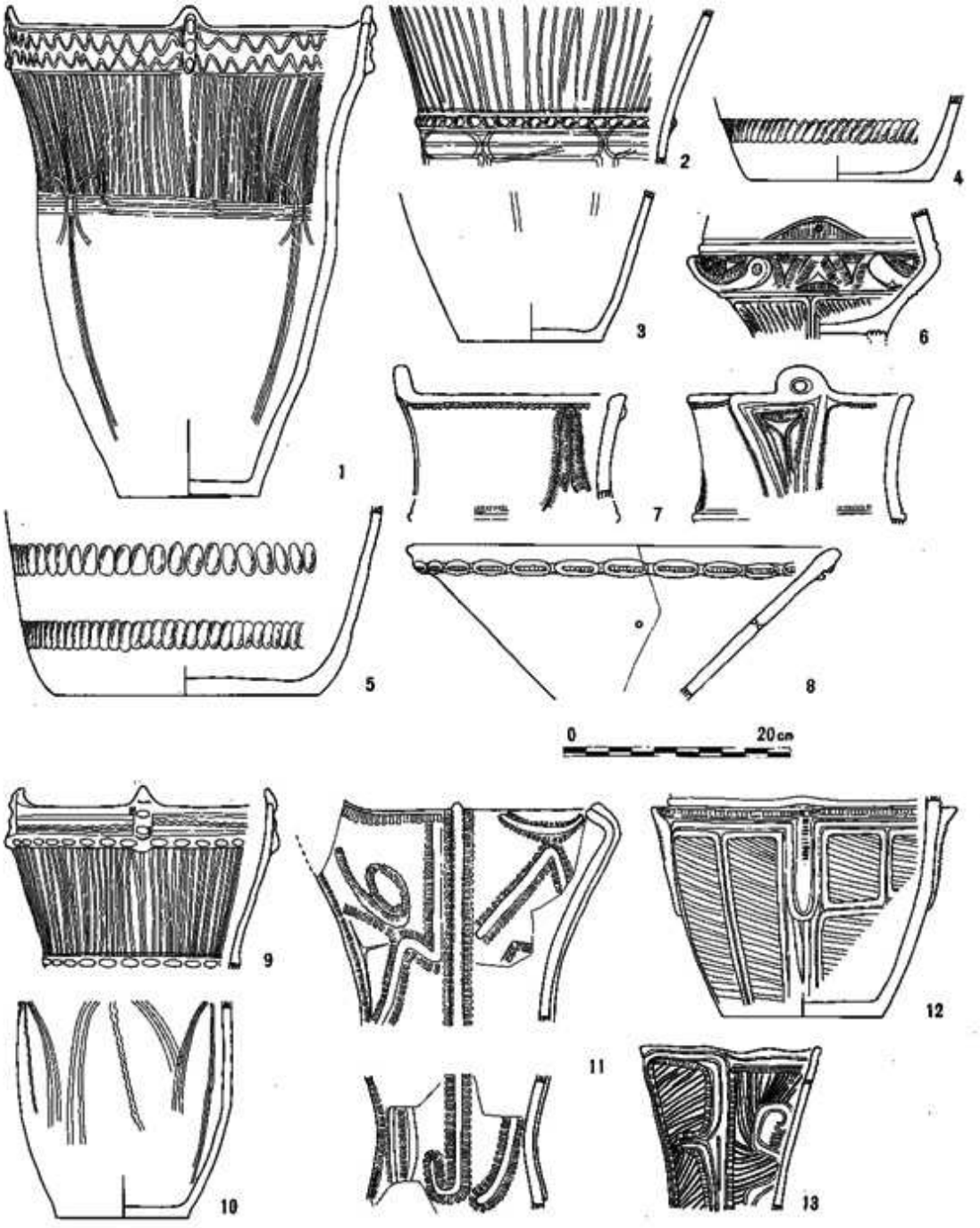
第60図　荒神山遺跡1号・3号・4号住居址出土土器（1：6）
1～4　1号住居址，5～10　3号住居址，11～13　4号住居址



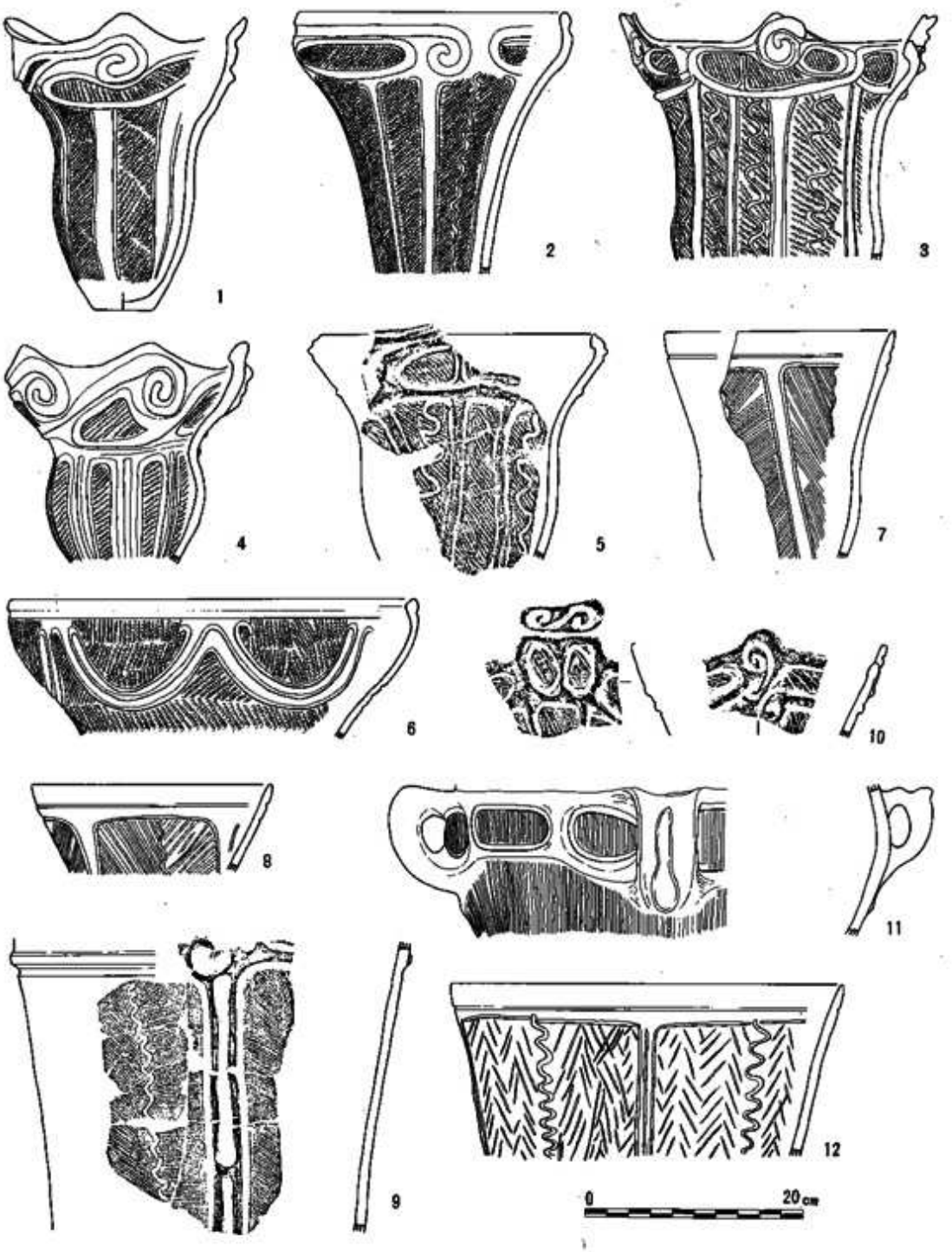
第61図　荒神山遺跡４号住居址出土土器（１：６）



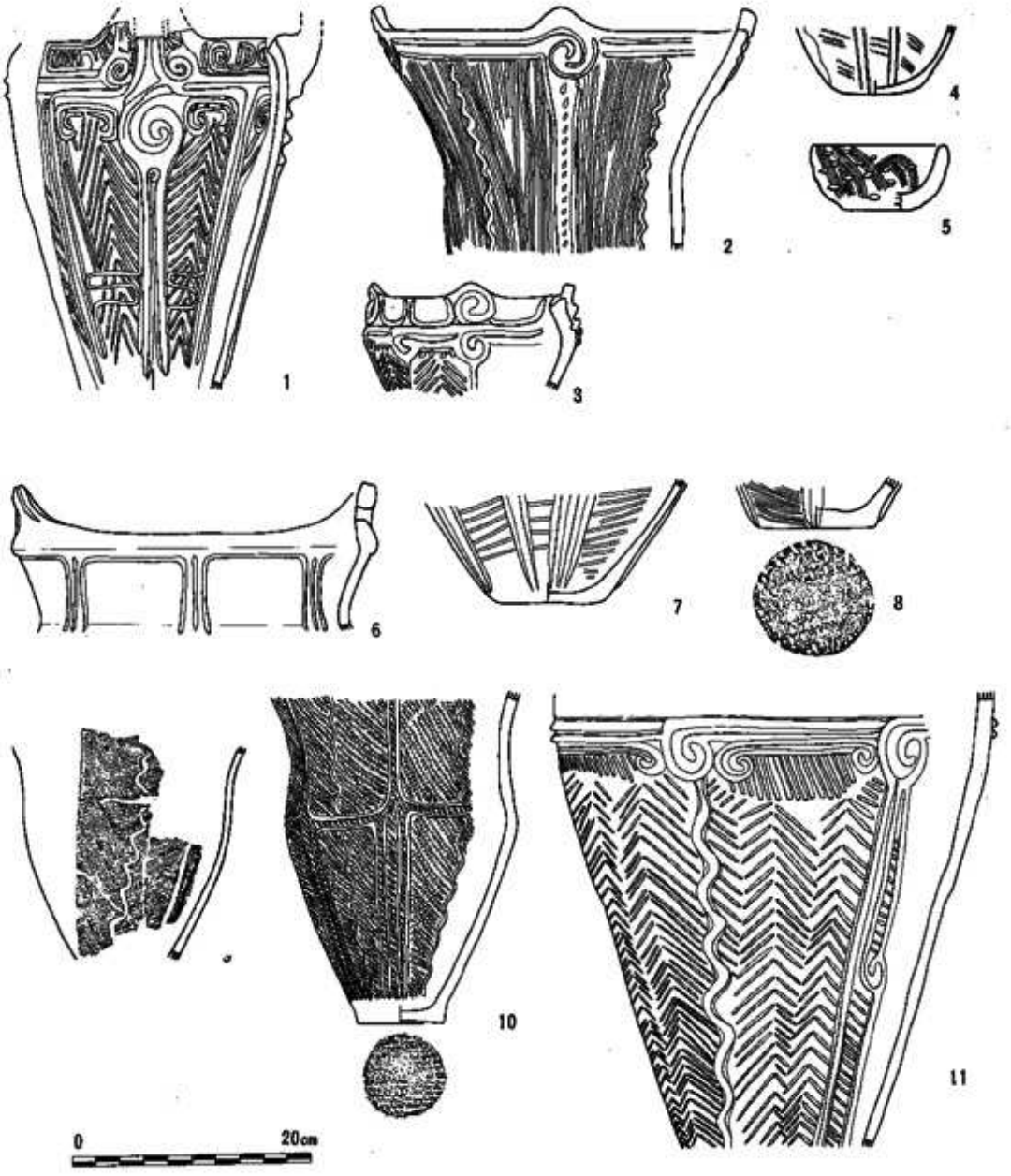
第62図　荒神山遺跡4号住居址出土土器（1：6）



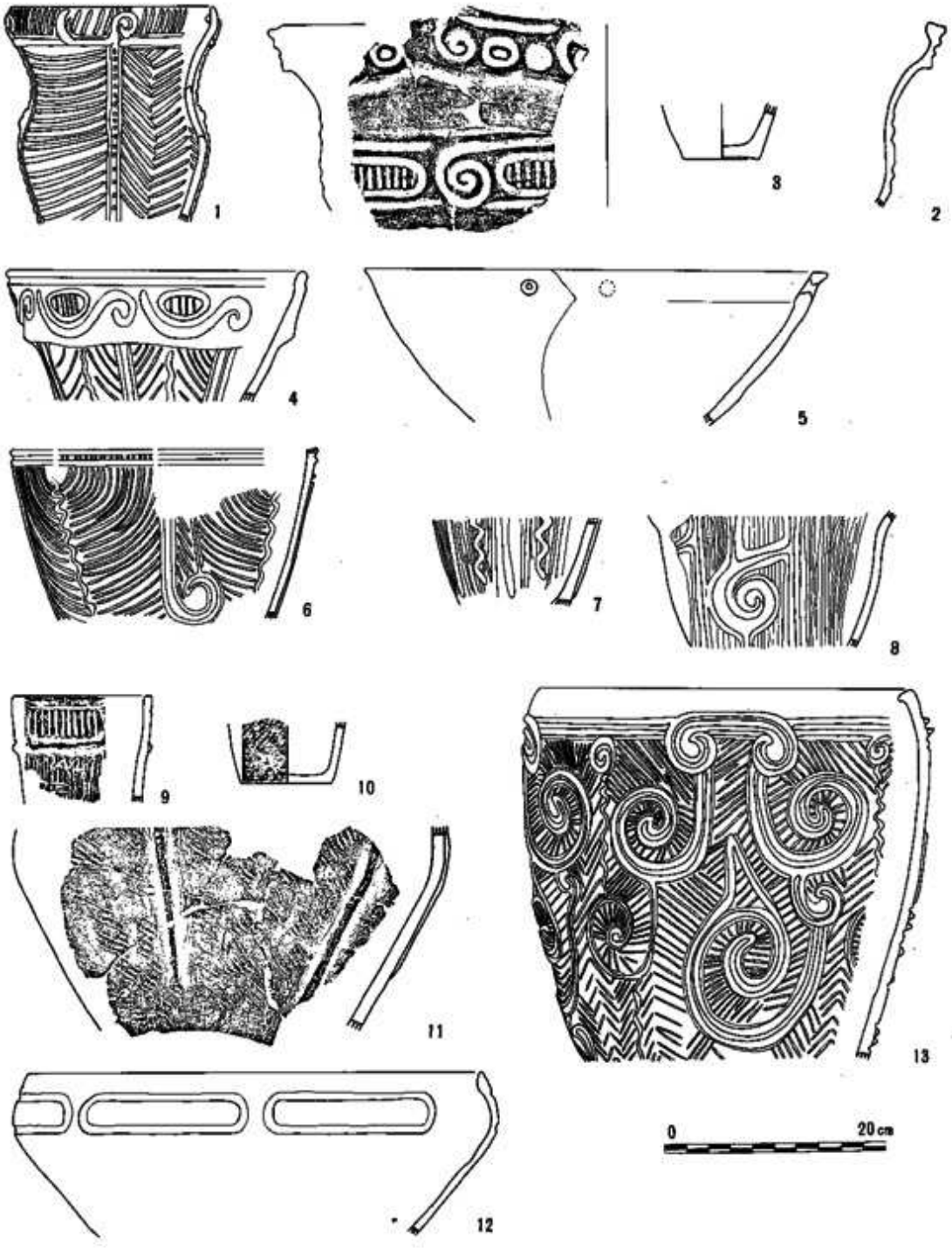
第63図　荒神山遺跡６号・７号住居址出土土器（１：６）
１～８　６号住居址，９～13　７号住居址



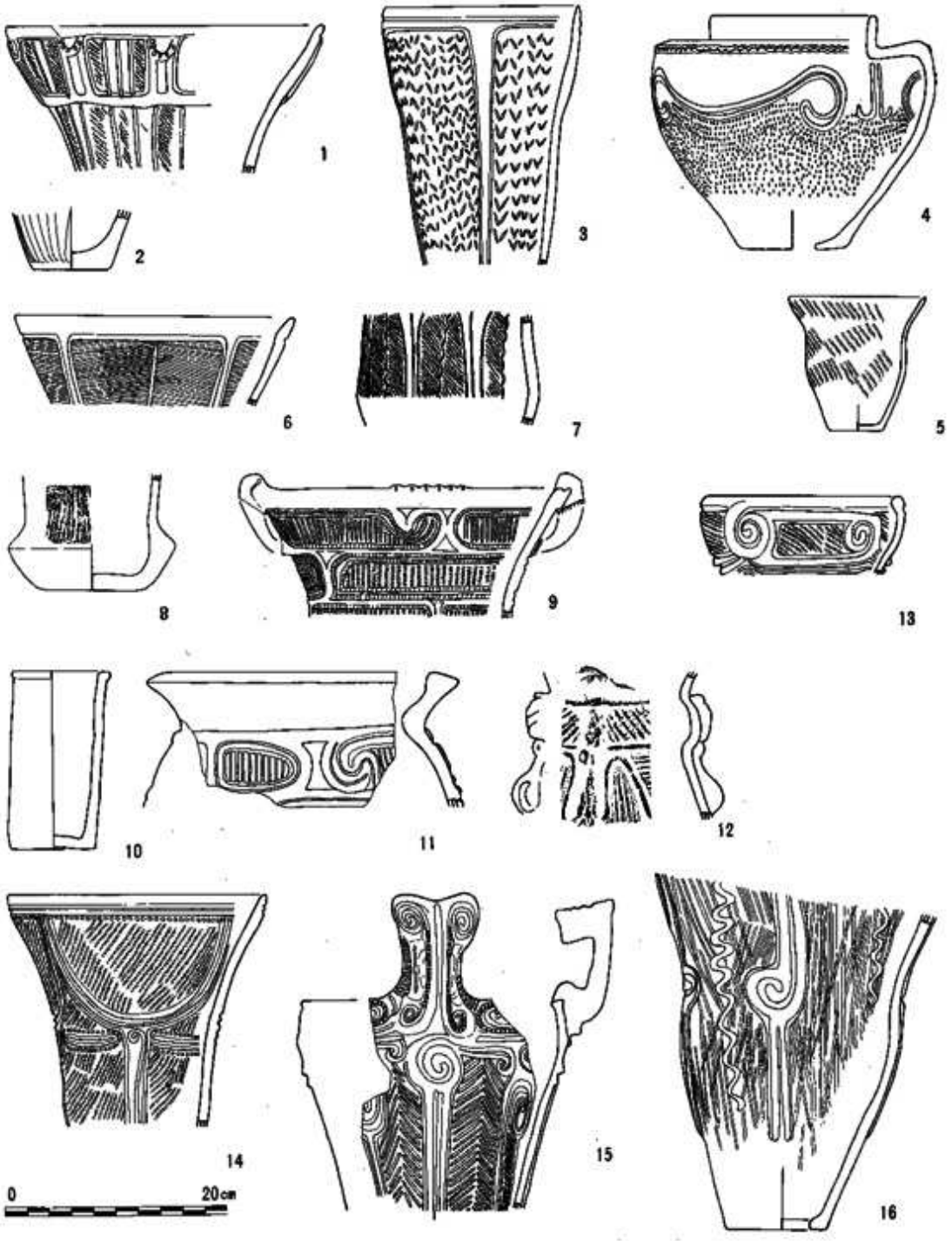
第64図　荒神山遺跡８号住居址出土土器（１：６）



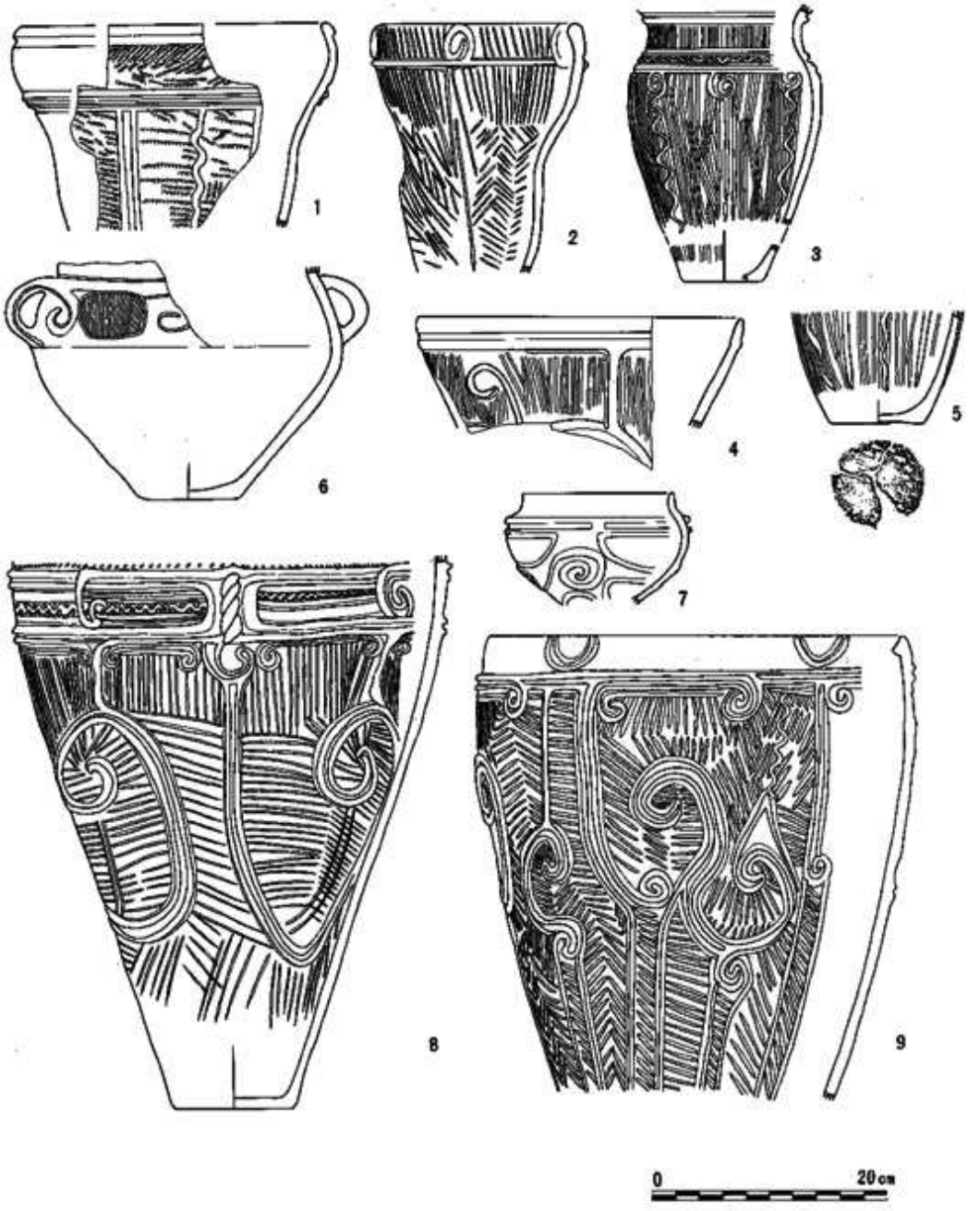
第65図　荒神山遺跡８号・10号住居址出土土器（１：６）
１～５　８号住居址，６～11　10号住居址



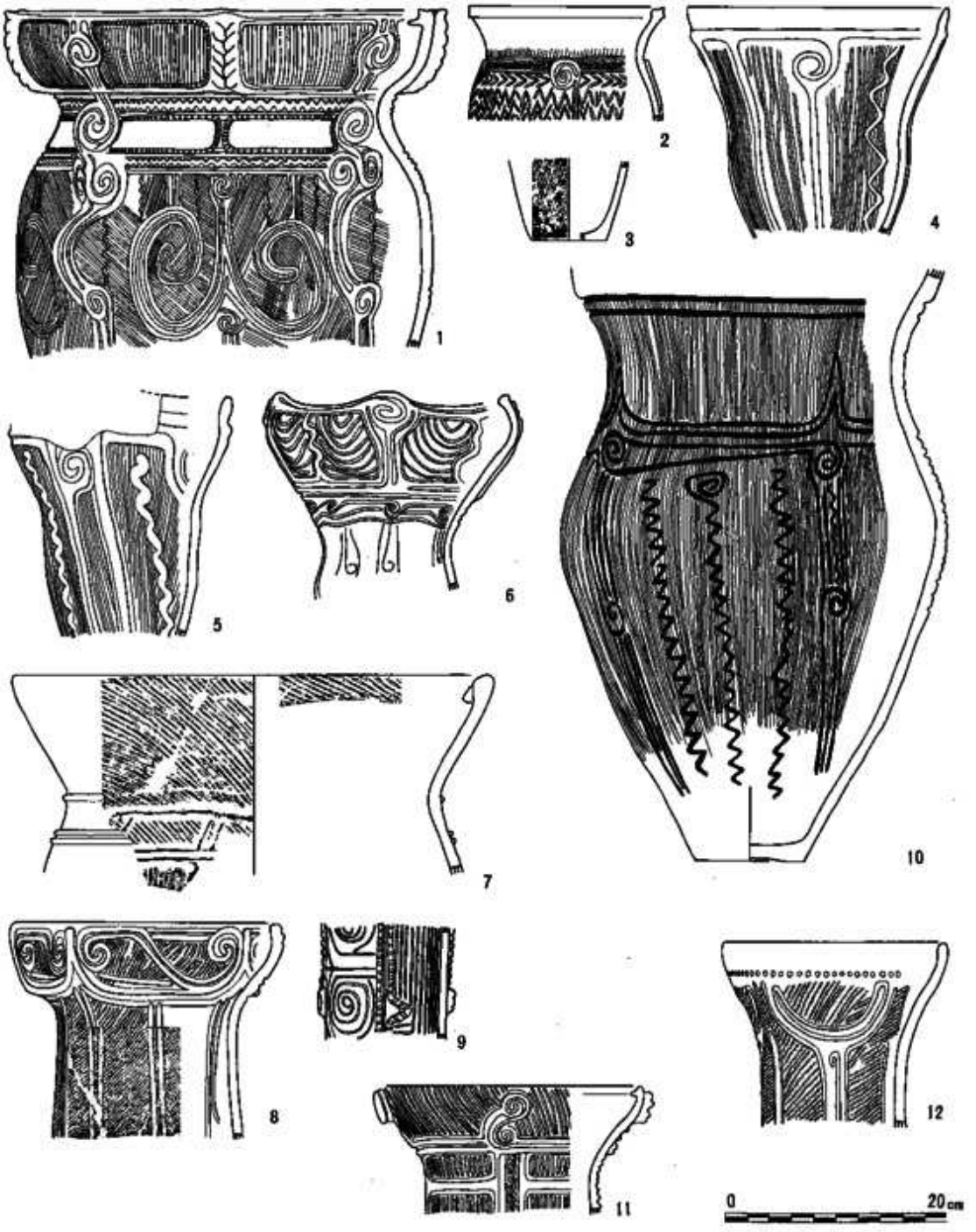
第66図　荒神山遺跡12号・16号住居址出土土器（１：６）
１～６　12号住居址，７～13　16号住居址



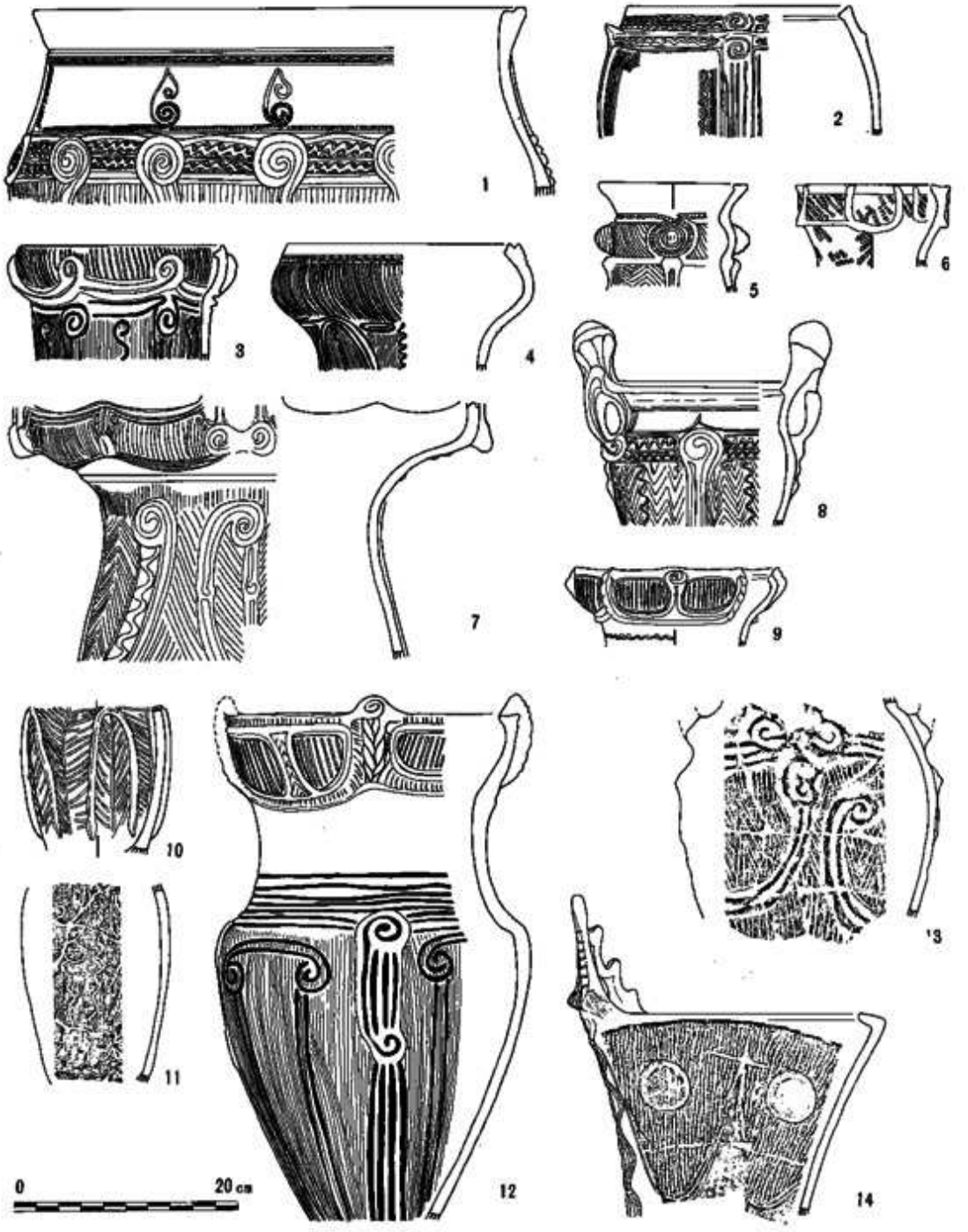
第67図　荒神山遺跡17号・18号・19号・21号・22号・26号・32号・37号住居址出土土器（1：6）
1～3　17号住居址，4～5　18号住居址，，6～7　19号住居址，8　21号住居址，9　22号住居址，10～12　26号住居址，13　32号住居址，14～16　37号住居址



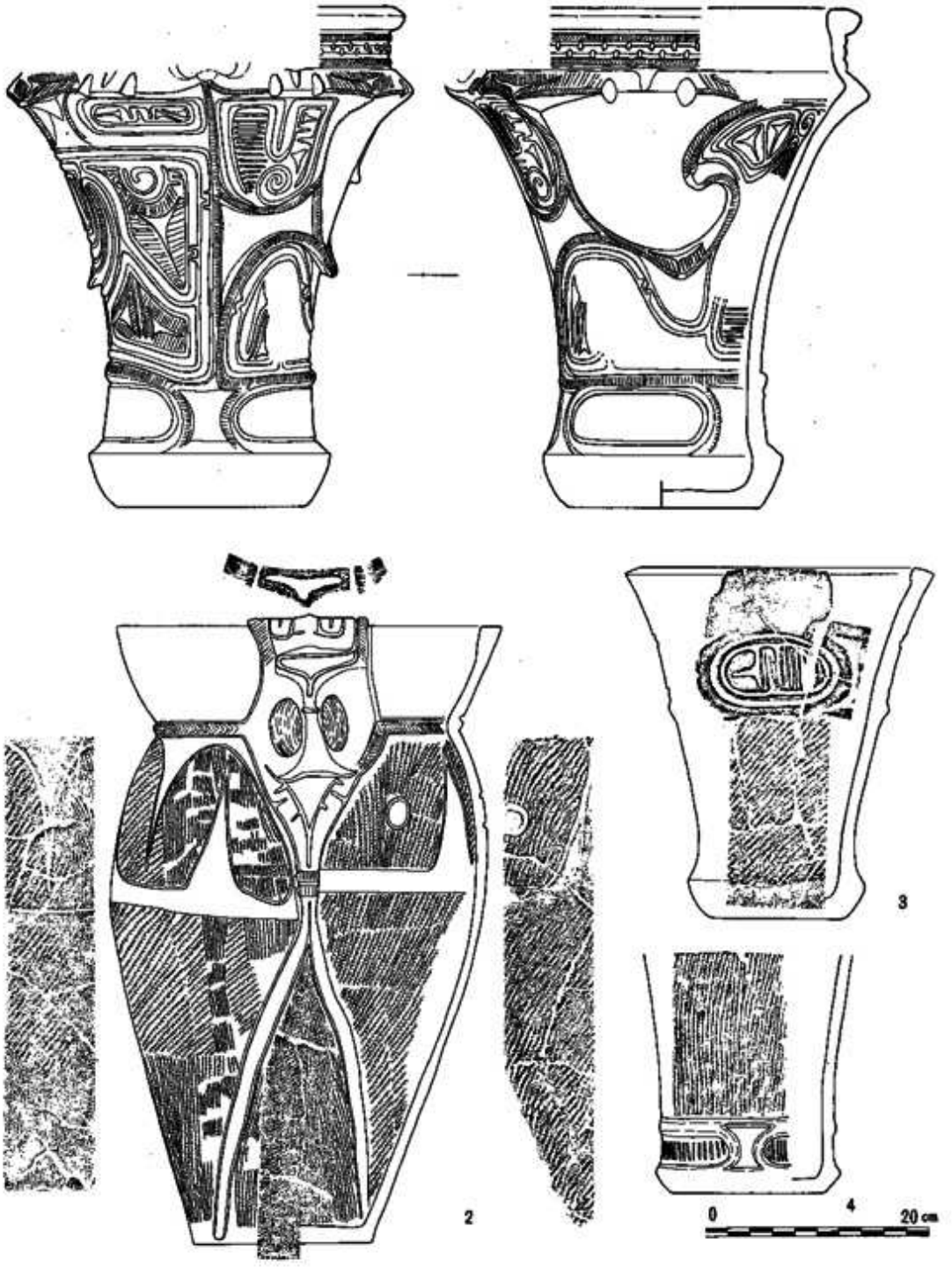
第68図　荒神山遺跡31号住居址出土土器（1：6）



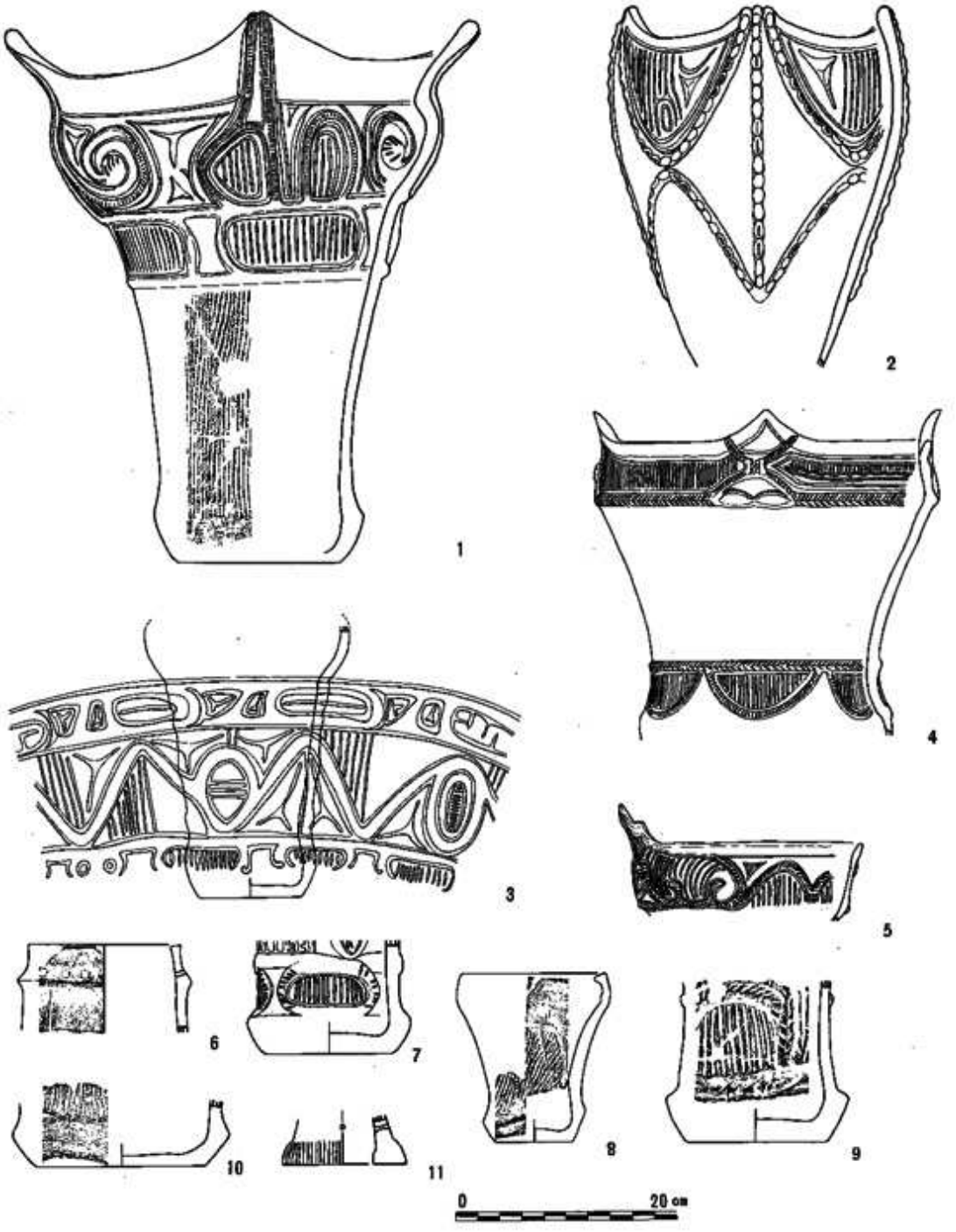
第69図　荒神山遺跡33号・35号住居址出土土器（1：6）
1～10　33号住居址，11、12　35号住居址



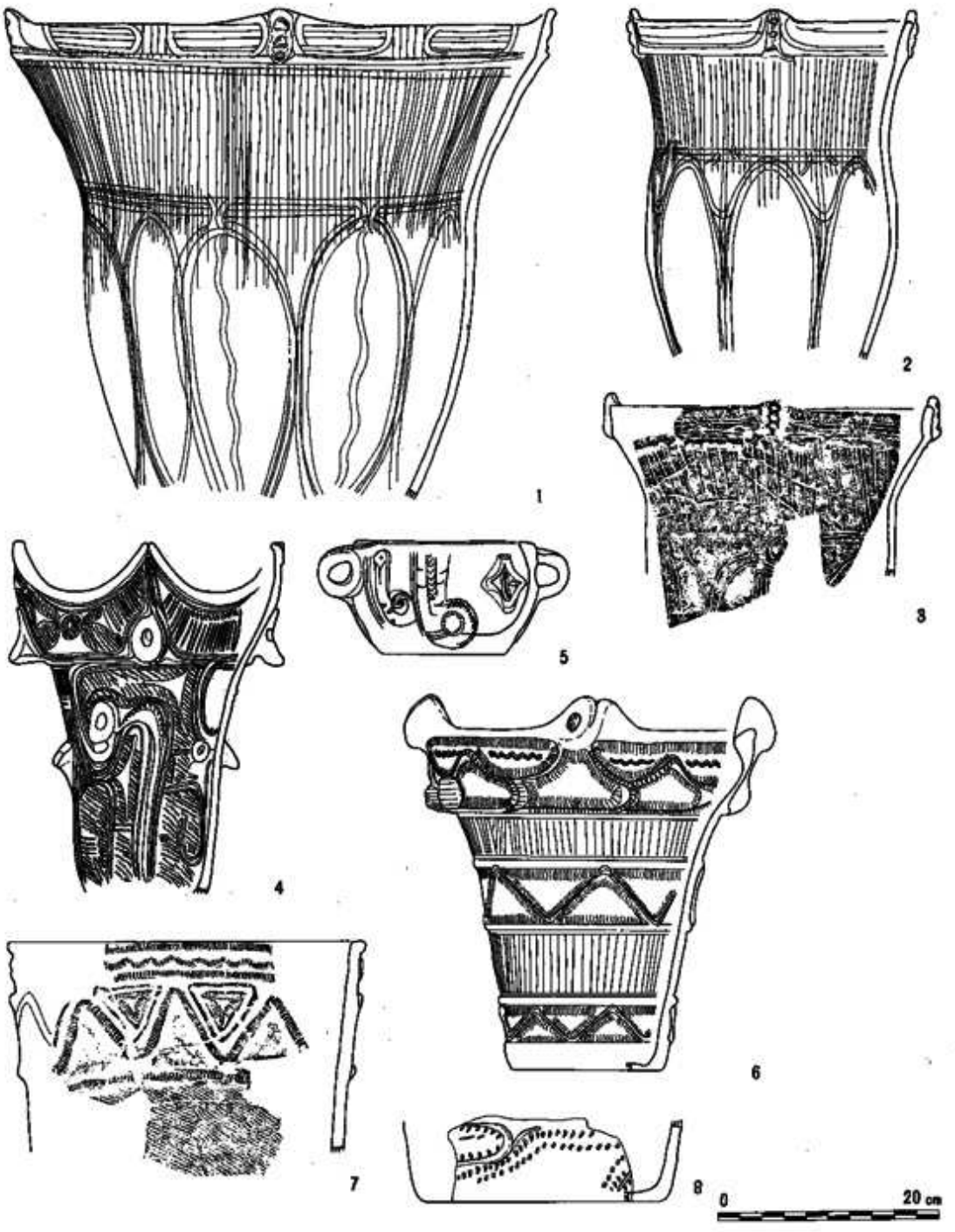
第70図　荒神山遺跡41号住居址出土土器（1：6）



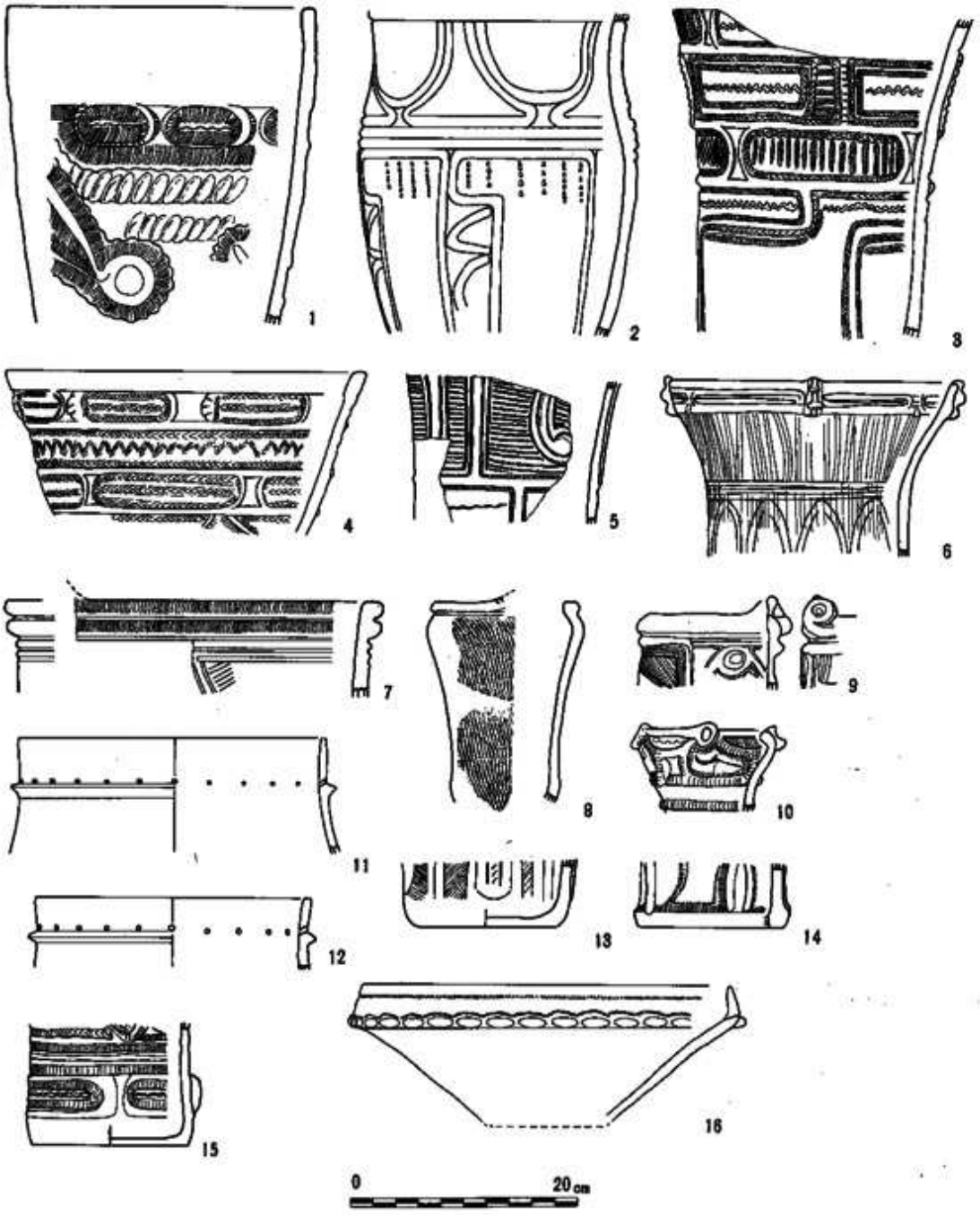
第71図　荒神山遺跡48号住居址出土土器（1：6）



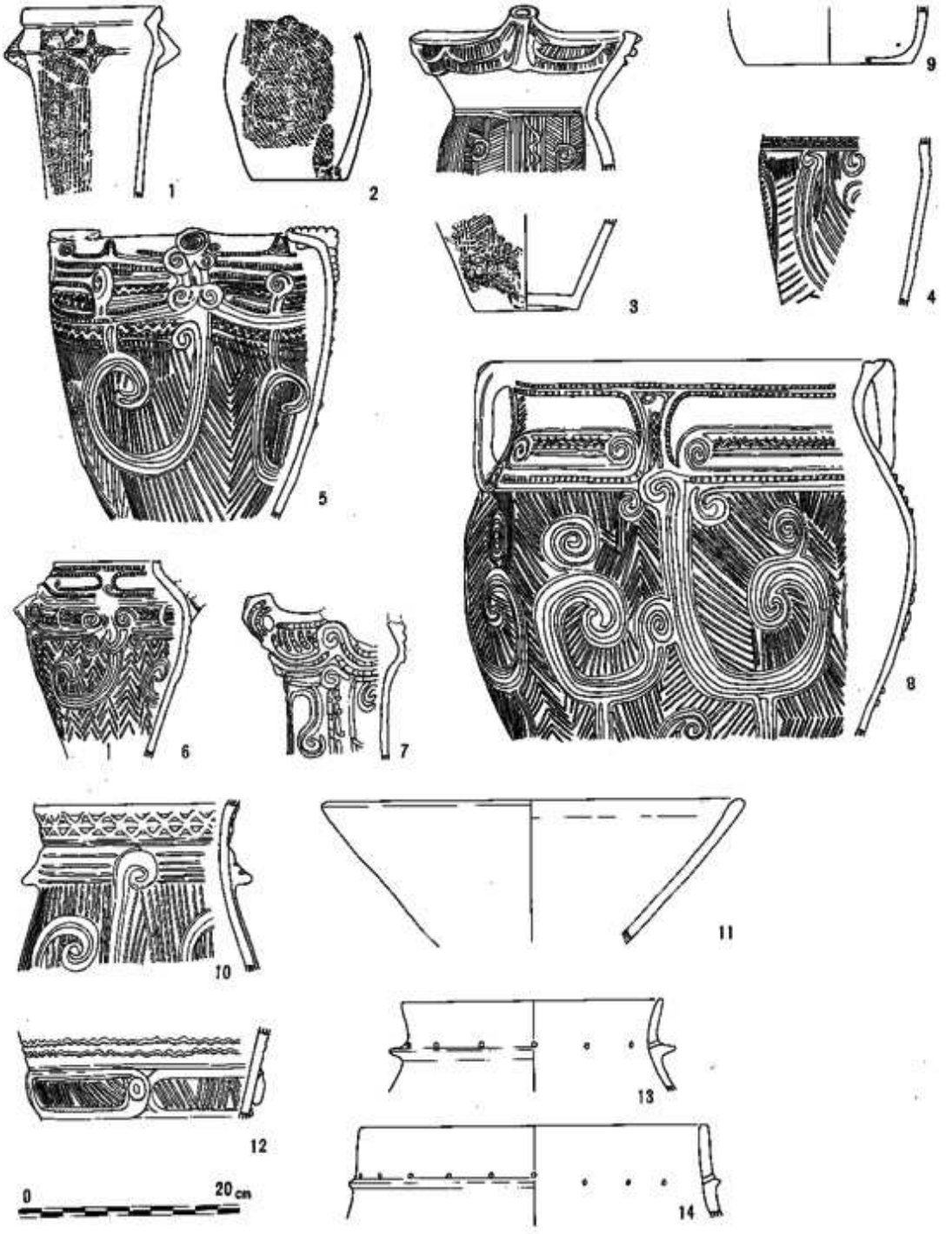
第72図　荒神山遺跡48号住居址出土土器（1：6）



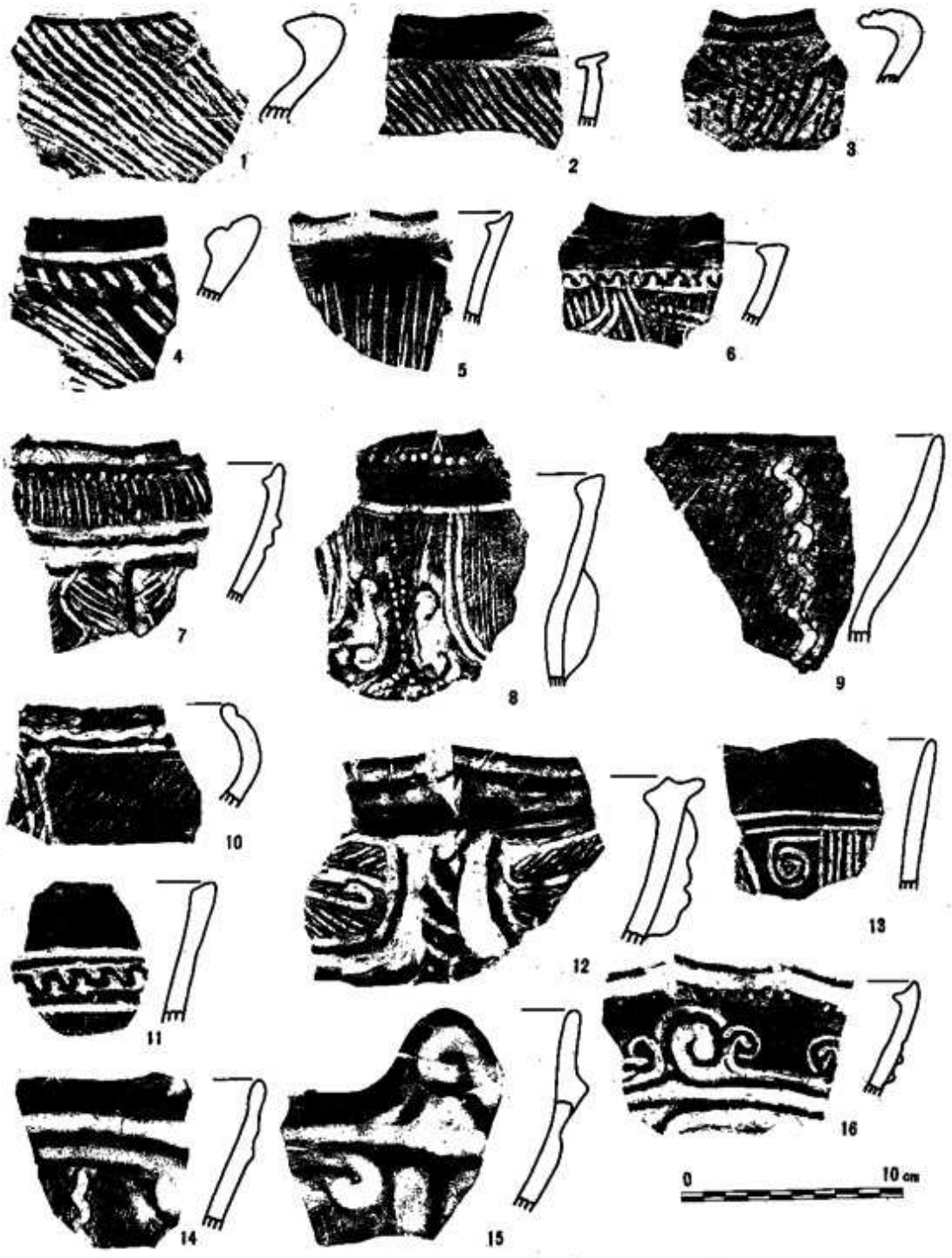
第73図　荒神山遺跡49号住居址出土土器（1：6）



第74図　荒神山遺跡50号住居址出土土器（1：6）

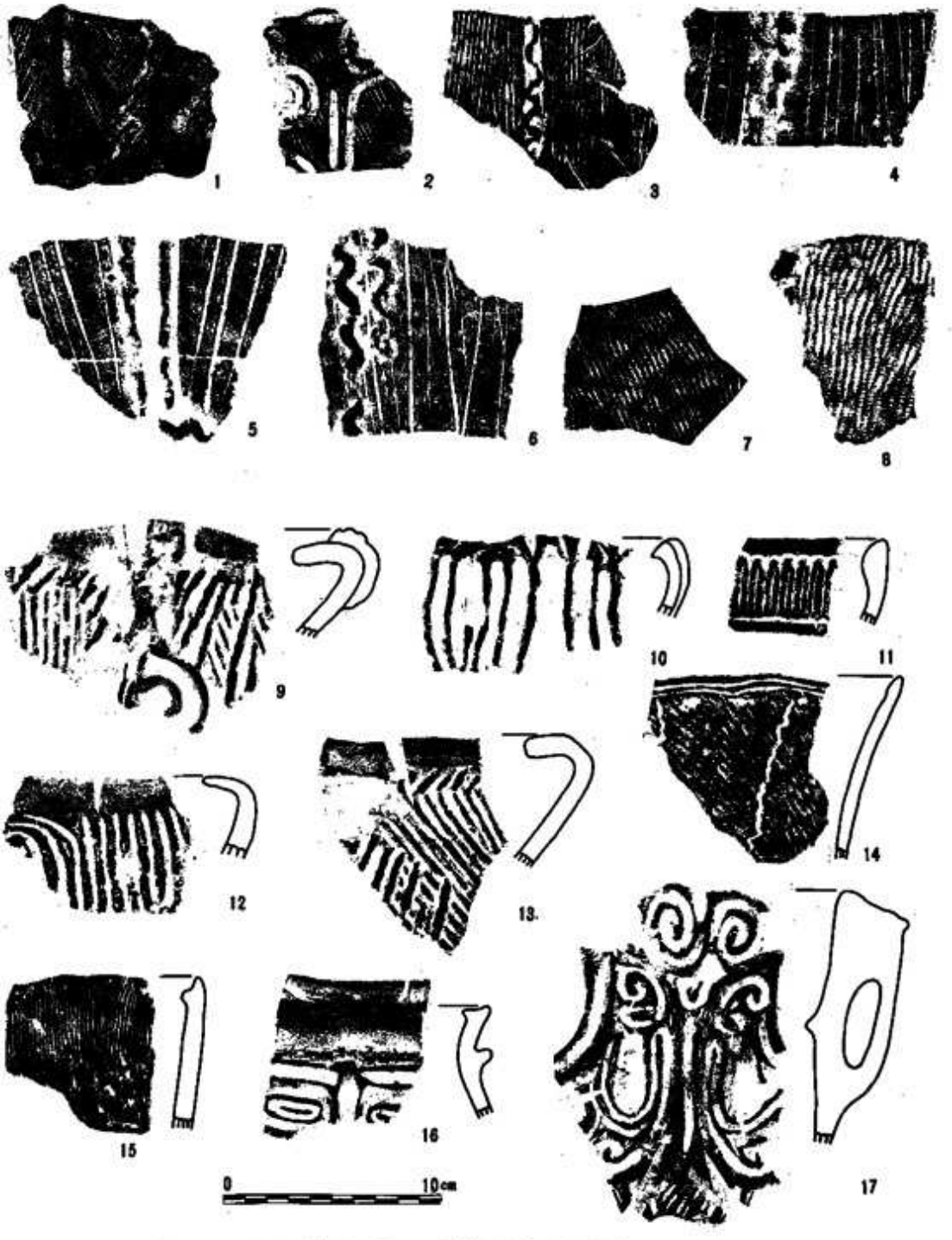


第75図　荒神山遺跡38号・42号・43号・45号・51号・・52号・55号・住居址出土土器（1：6）
1～3　38号住居址，4～8　42号住居址，9　43号住居址10　45号住居址，11　51号住居址，12　52号住居址，13～14　55号住居址



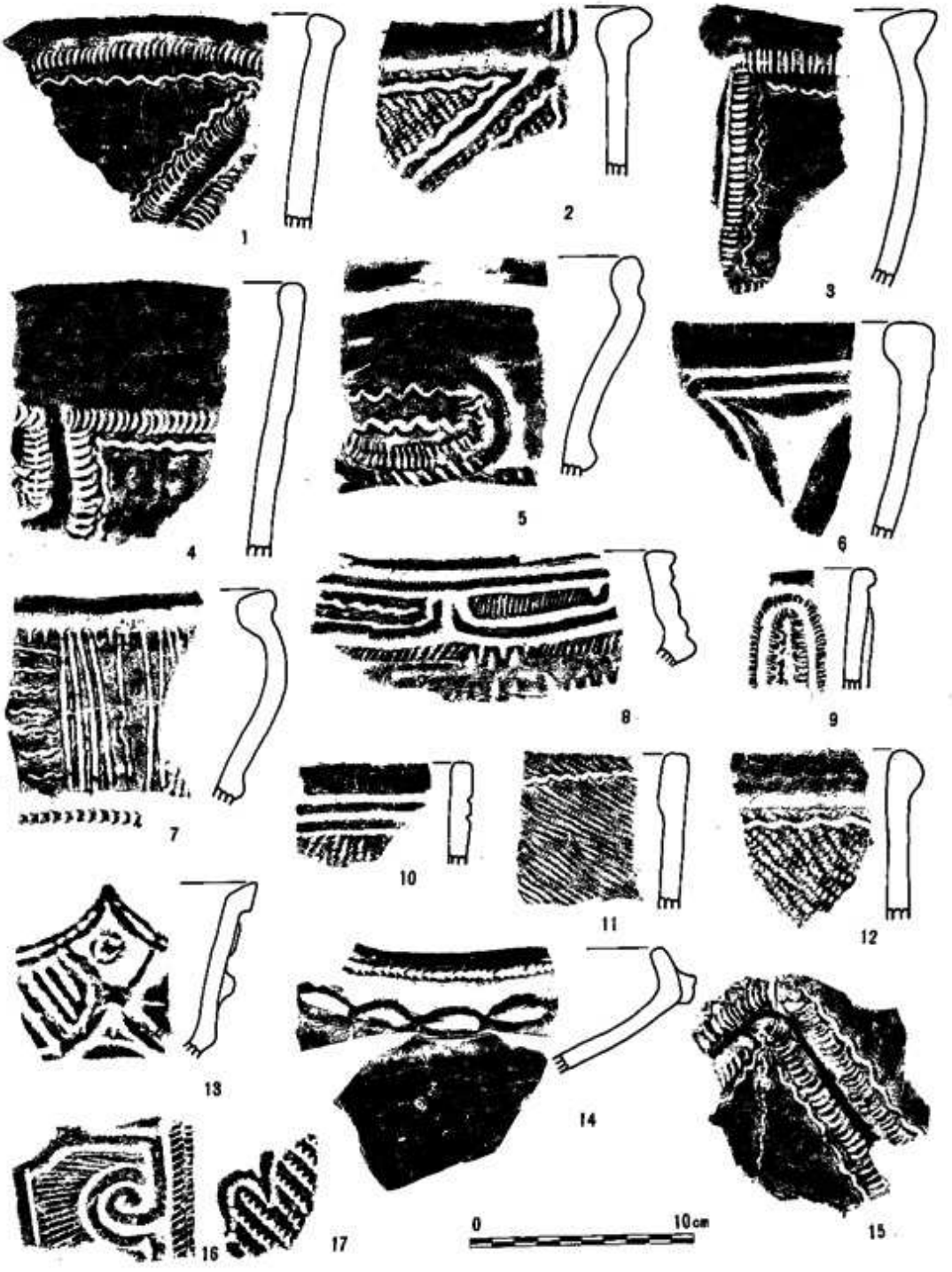
第77図　荒神山遺跡１号住居址出土土器（１：３）

第78図　荒神山遺跡１号住居址出土土器（１：３）

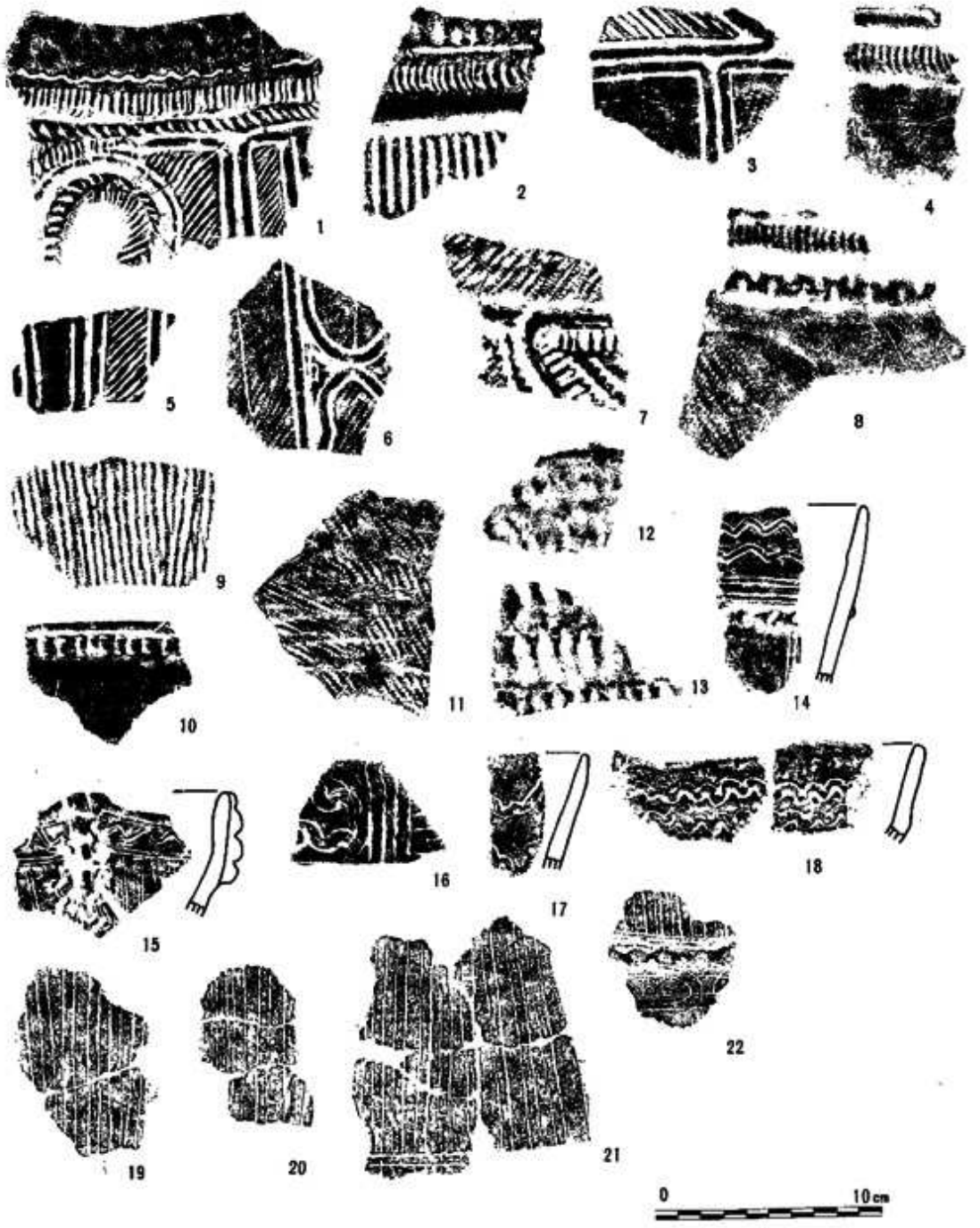


第79図　荒神山遺跡１号・３号住居址出土土器（１：３）
１～８　１号住居址，９～17　３号住居址

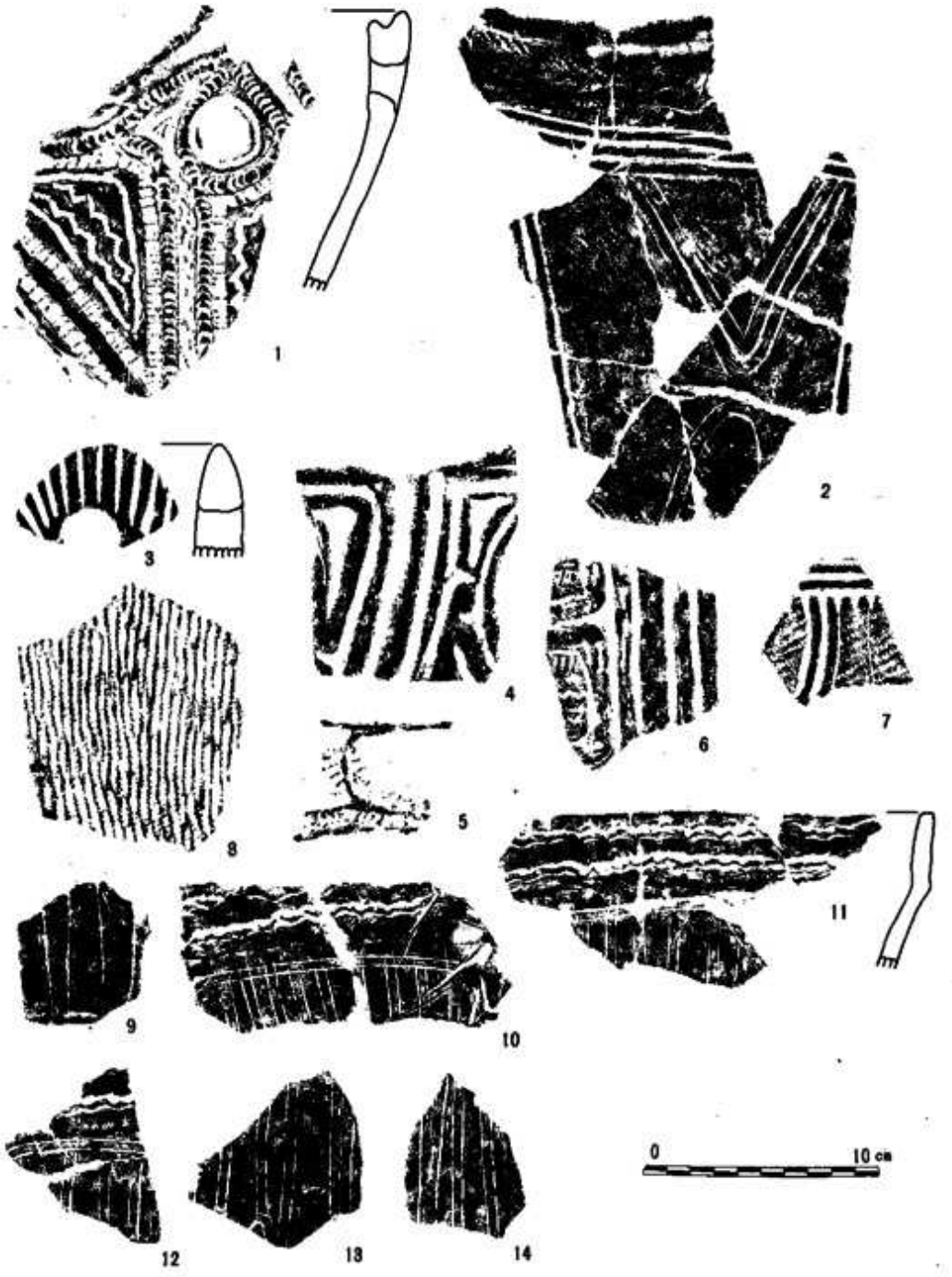
第80図　荒神山遺跡３号住居址出土土器（１：３）



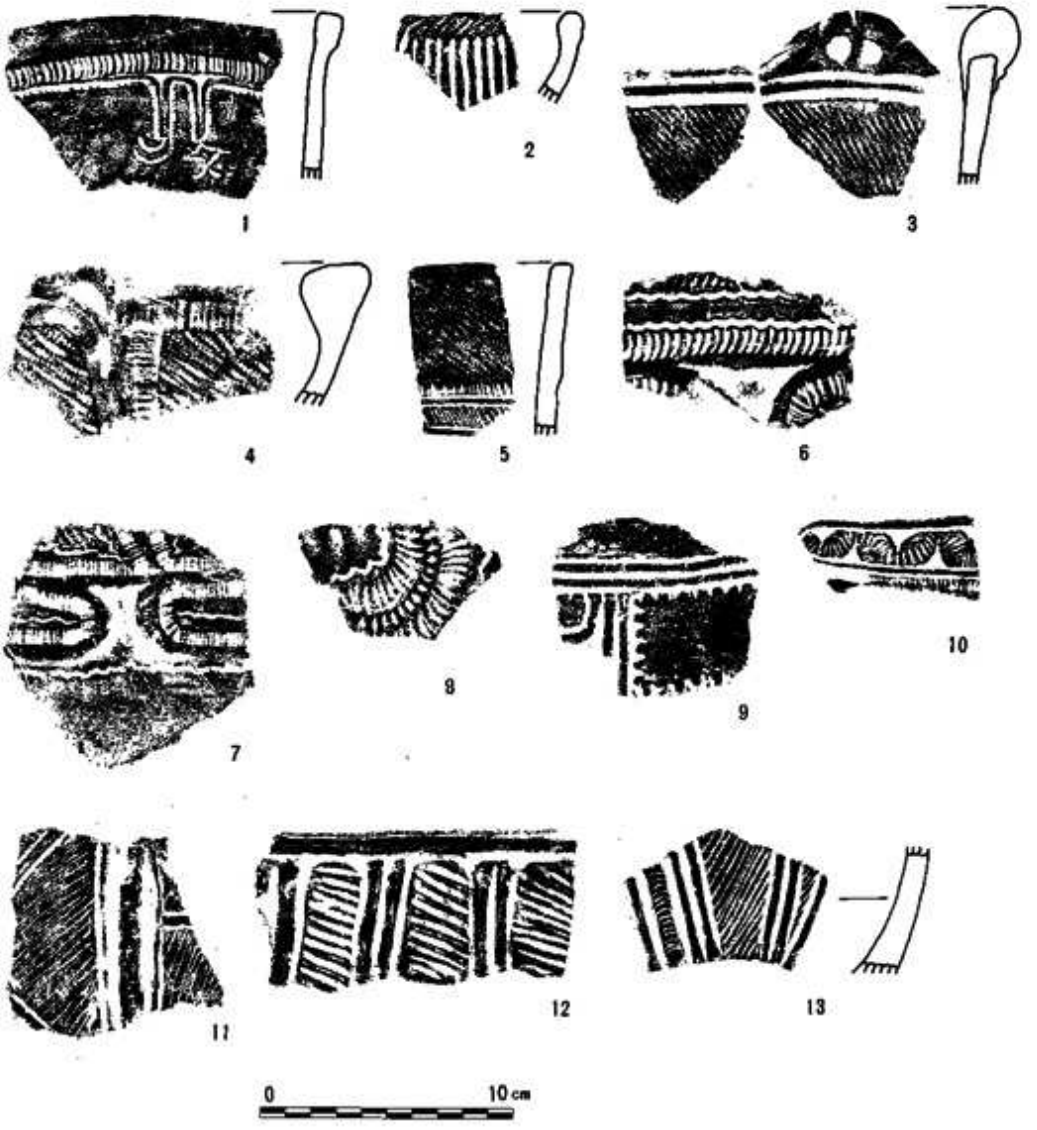
第81図　荒神山遺跡４分住居址出土土器（１：３）



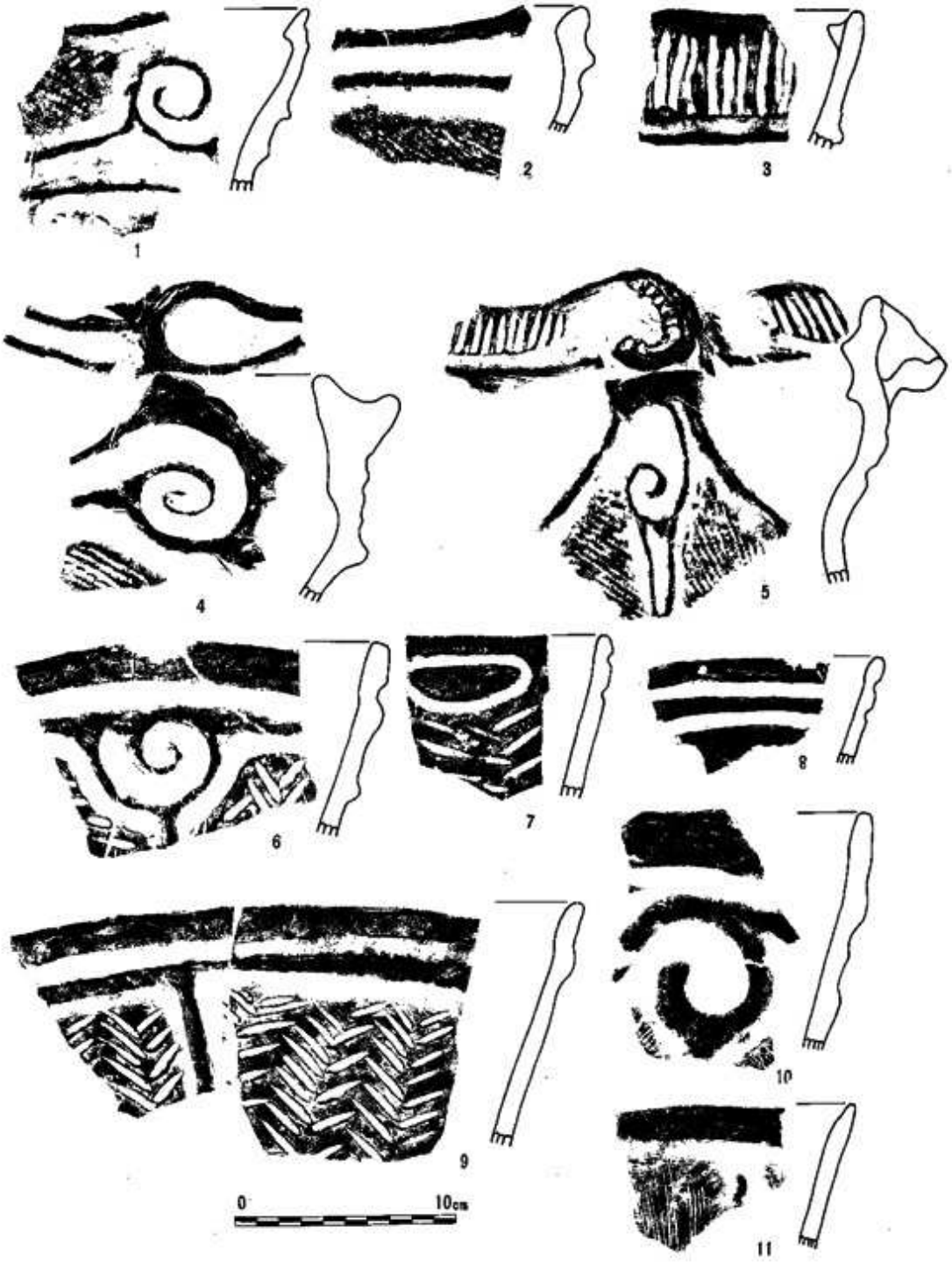
第82図　荒神山遺跡4号住居址出土土器（1：3）



第83図　荒神山遺跡６号住居址出土土器（１：３）



第84図　荒神山遺跡7号住居址出土土器（1：3）



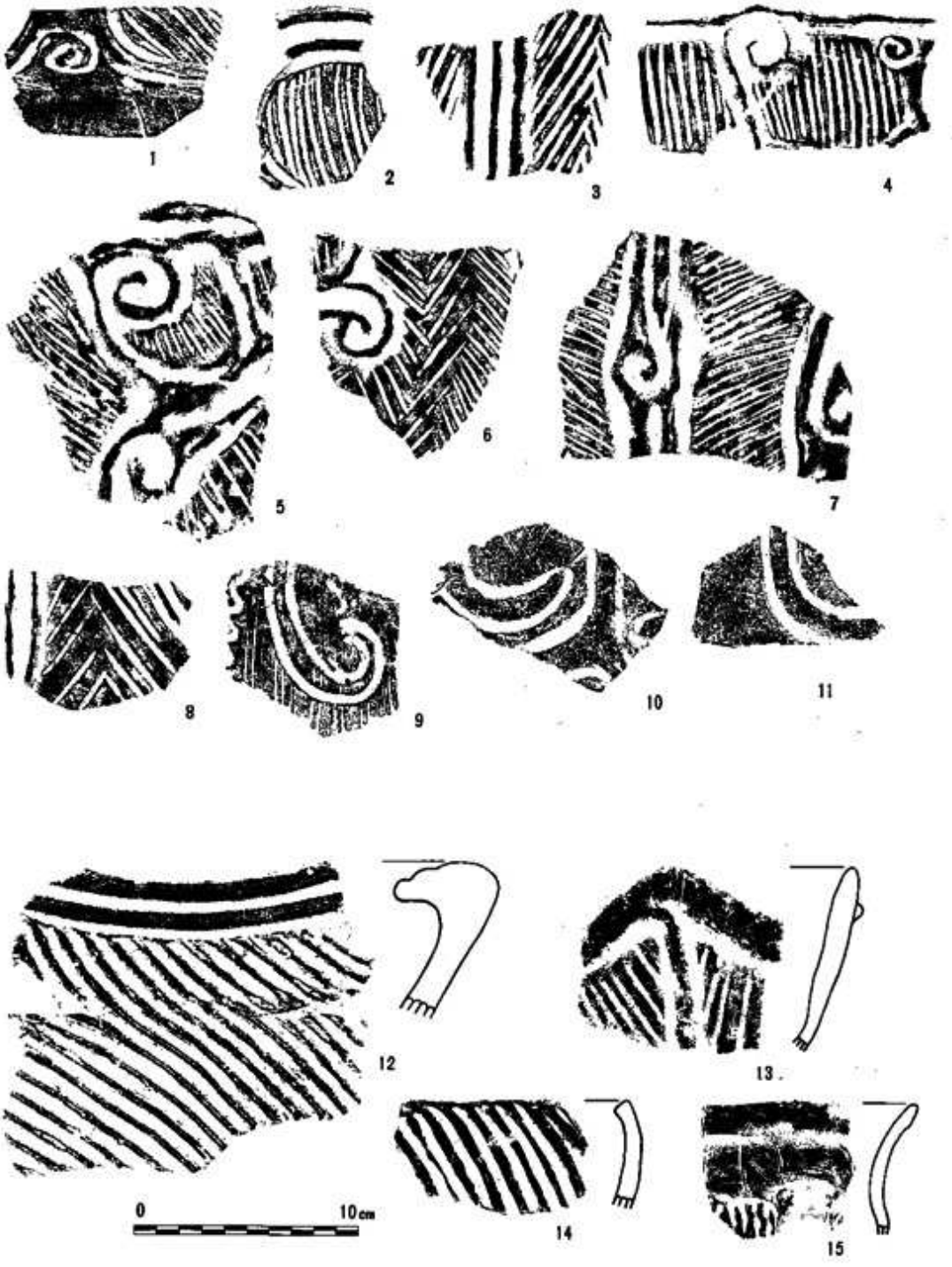
第85図　荒神山遺跡８号住居址出土土器（１：３）

第86図　荒神山遺跡８号住居址出土土器（１：３）

第87図　荒神山遺跡10号住居址出土土器（1：3）

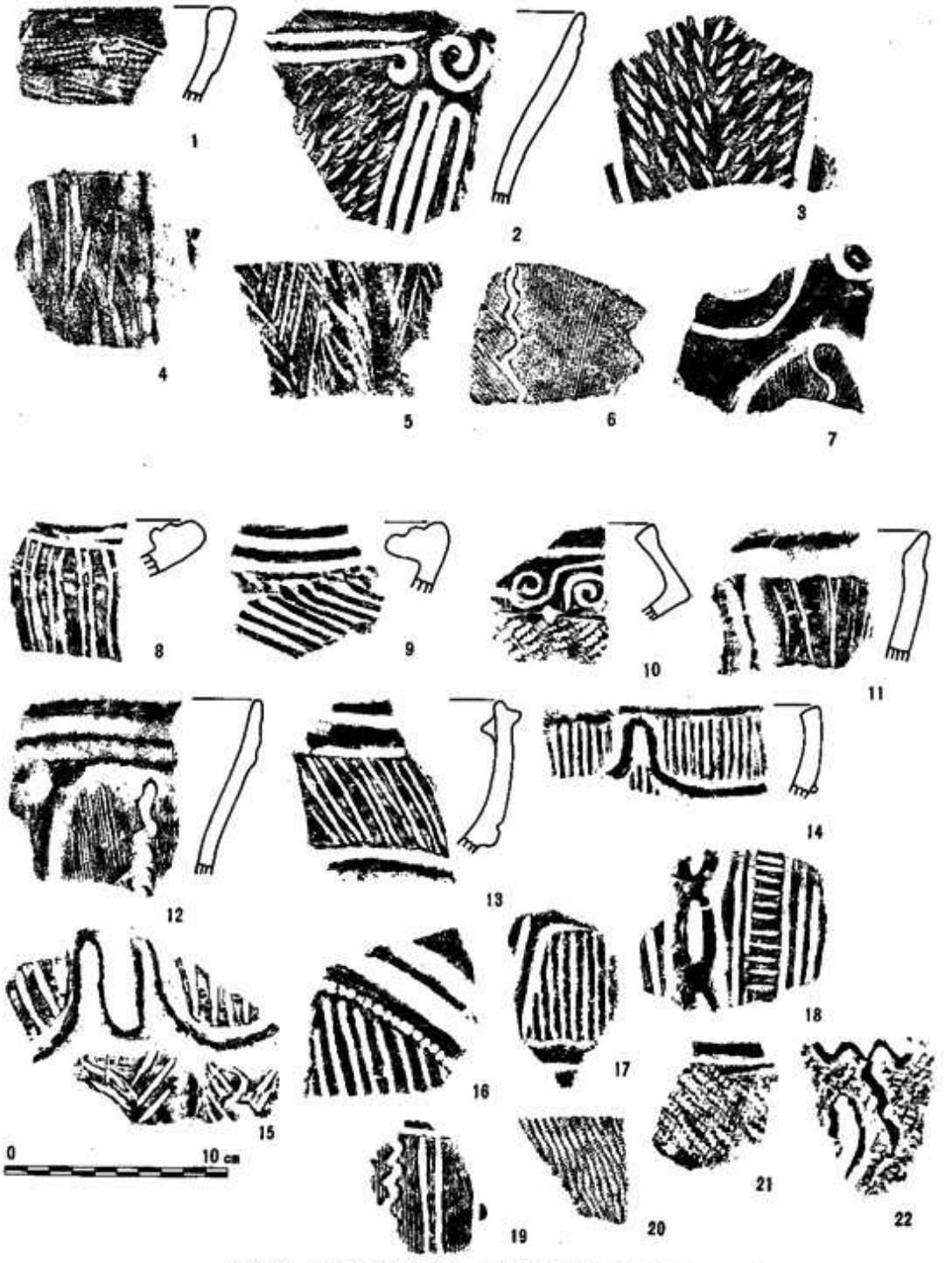
第88図　荒神山遺跡10号住居址出土土器（1：3）

第89図荒神山遺跡12号住居址出土土器（1：3）

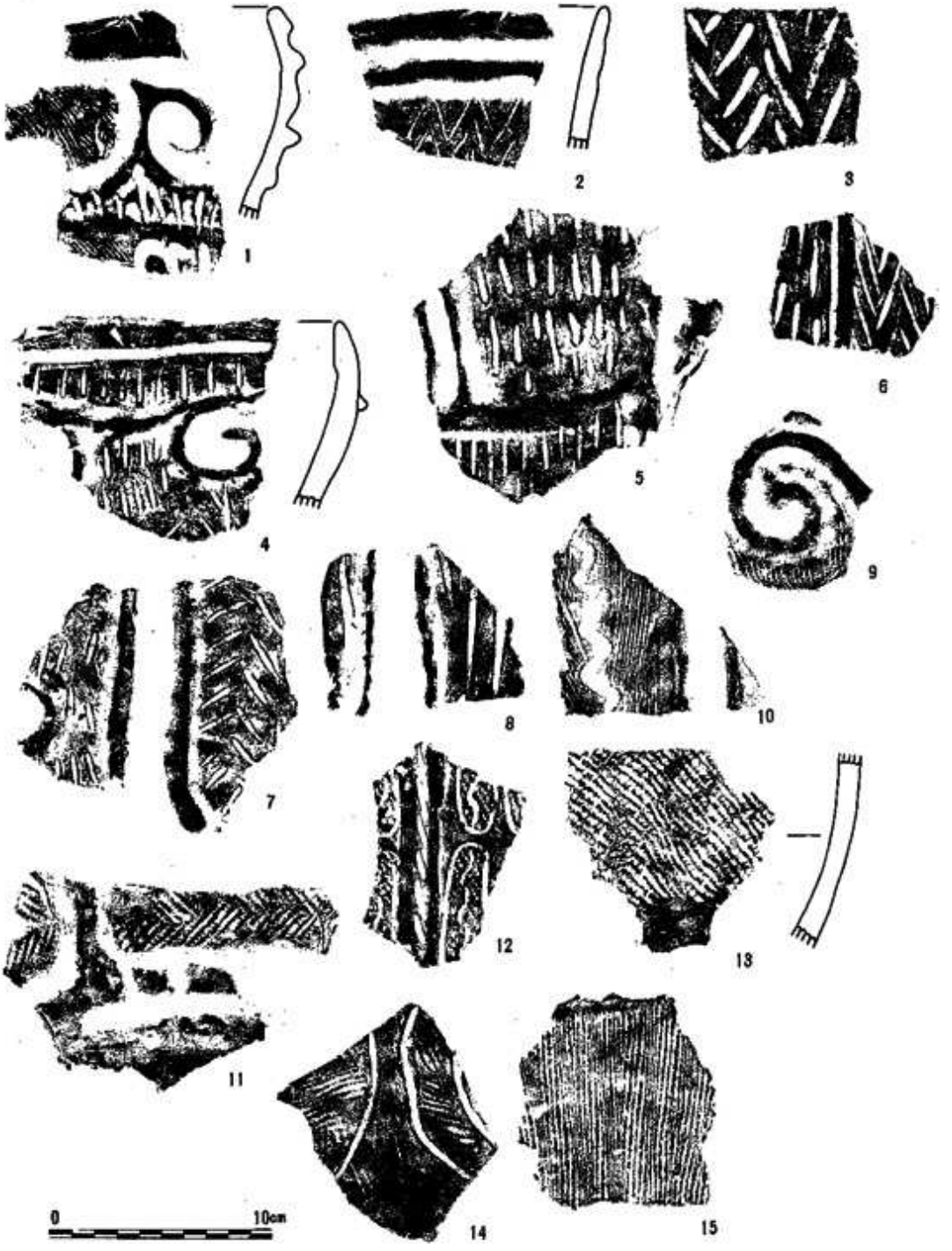


第90図　荒神山遺跡12号・16号住居址出土土器（1：3）
1～11　12号住居址，12～15　16号住居址

第91図　荒神山遺跡16号住居址出土土器（1：3）



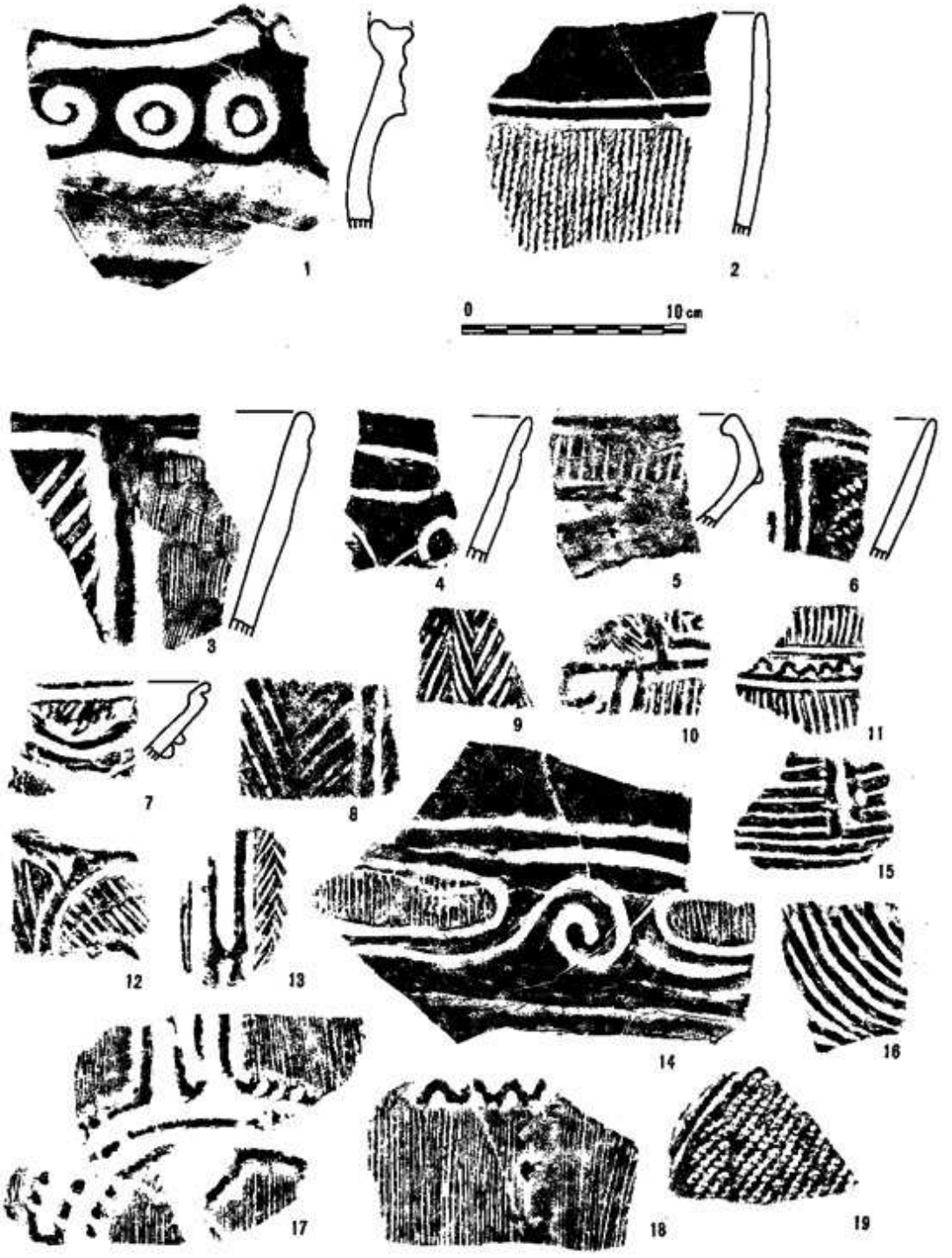
第92図　荒神山遺跡17号・18号住居址出土土器（1：3）
1～7　17号住居址，8～22　18号住居址



第93図　荒神山遺跡19号住居址出土土器（1：3）

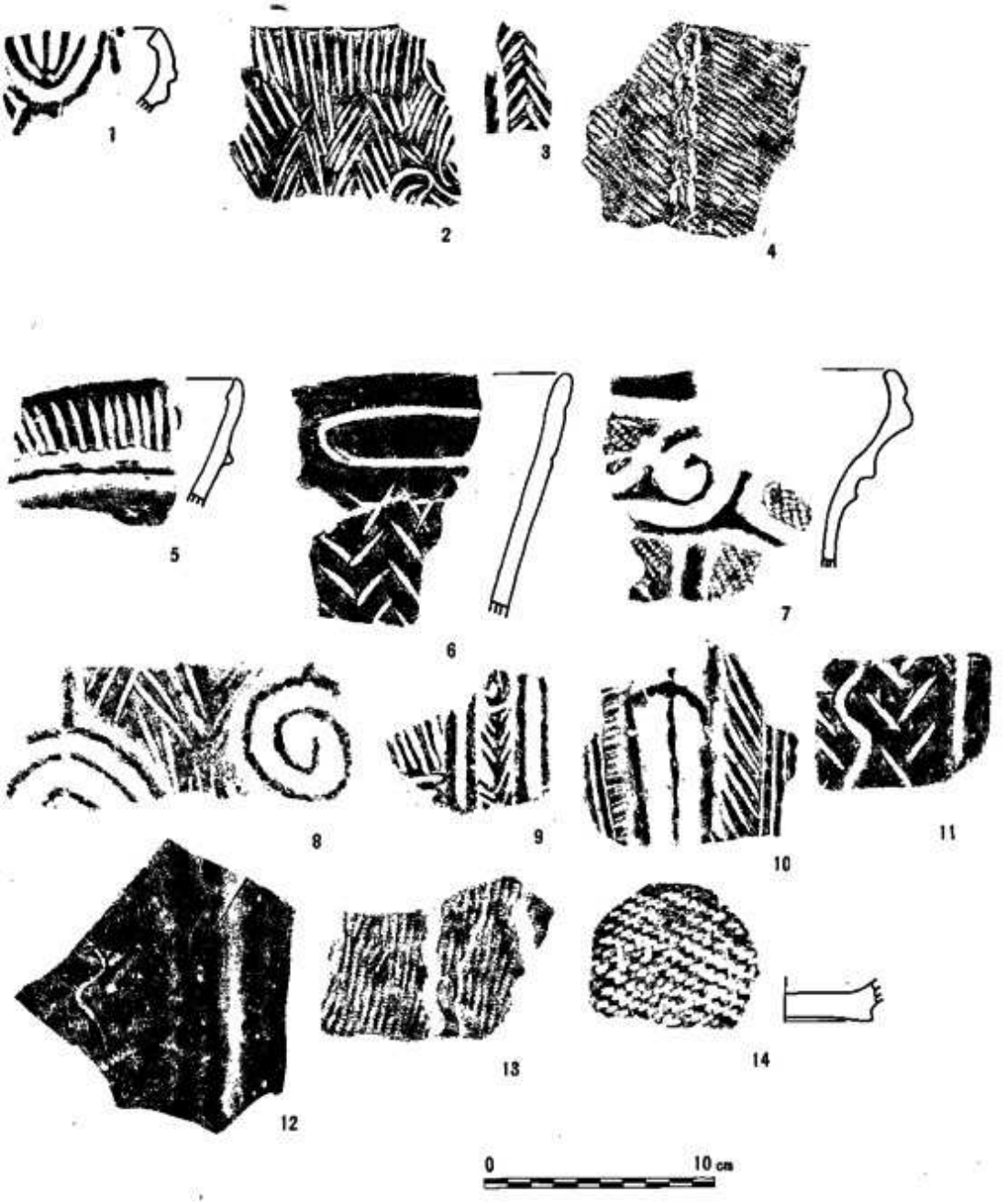
第94図　荒神山遺跡19号・31号住居址出土土器（1：3）
1～4　19号住居址，5～16　31号住居址

第95図　荒神山遺跡31号住居址出土土器（1：3）



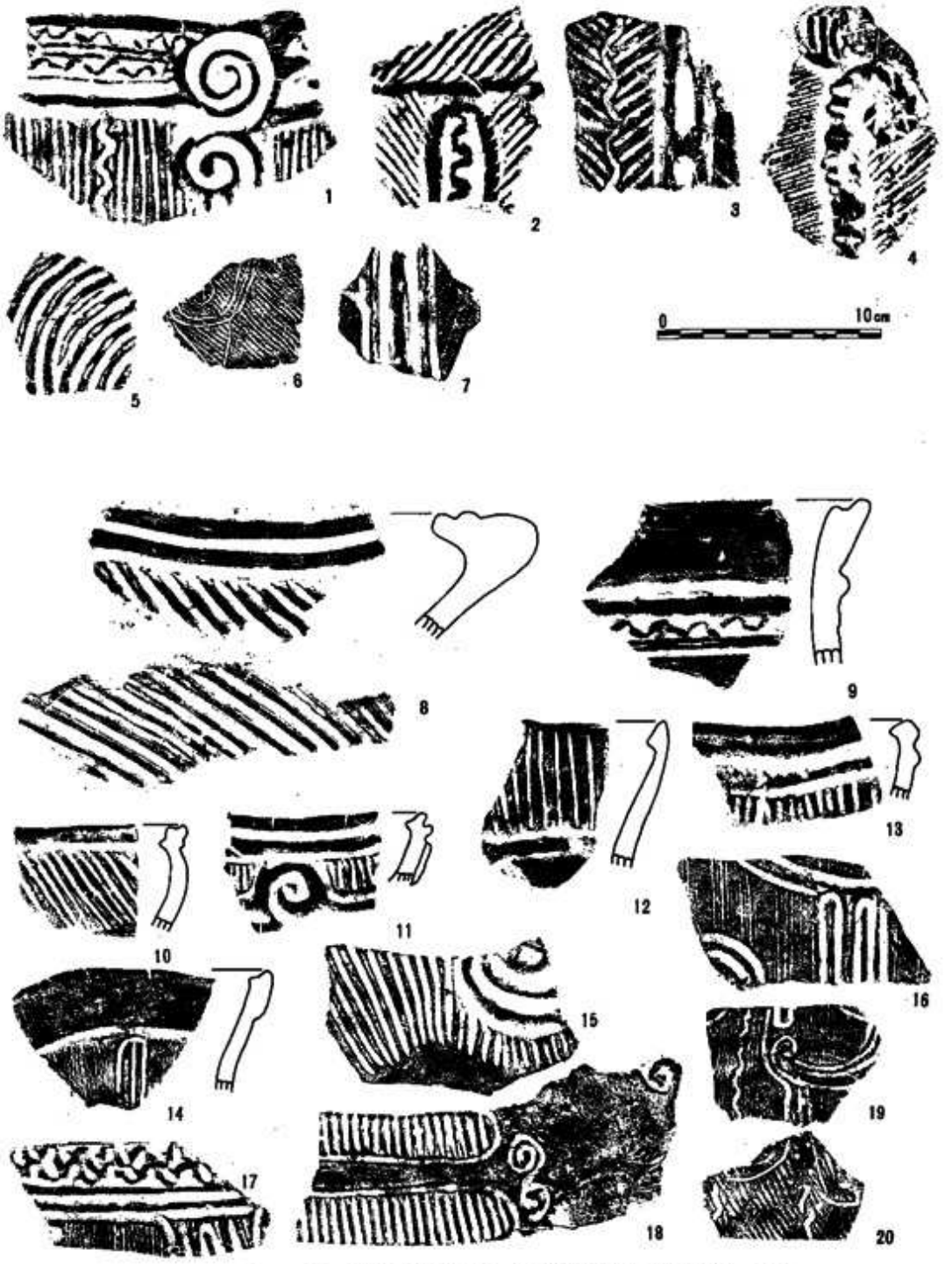
第96図　荒神山遺跡31号・32号住居址出土土器拓址（1：3）
1～2　31号住居址P9 内，3～19　32号住居址

第第97図　荒神山遺跡33号住居址出土土器（1：3）



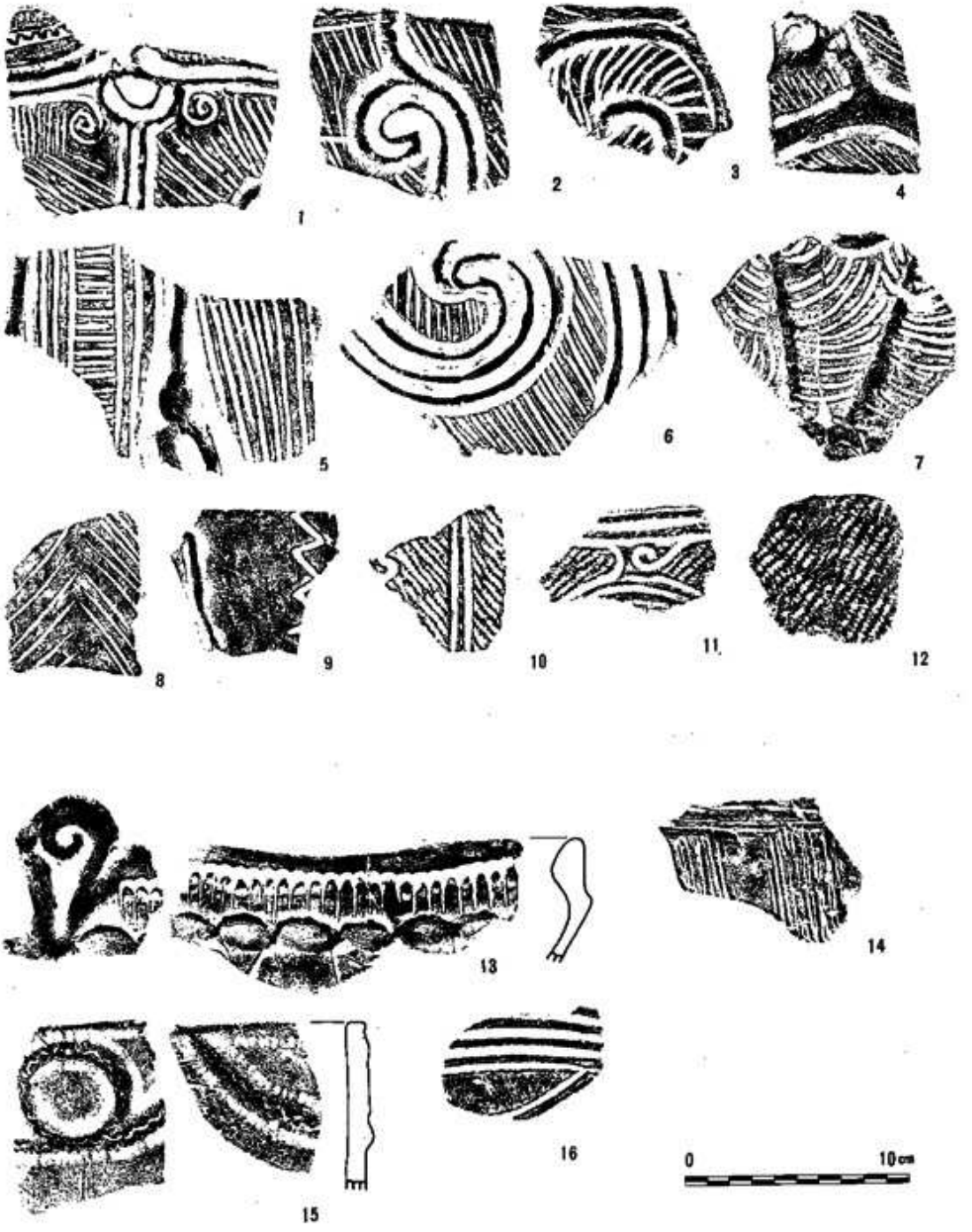
第98図　荒神山遺跡35号・37号住居址出土土器（1：3）
1～4　35号住居址，5～14　37号住居址

第99図　荒神山遺跡39号・40号住居址出土土器（1：3）
1～9　39号住居址，10～21　40号住居址

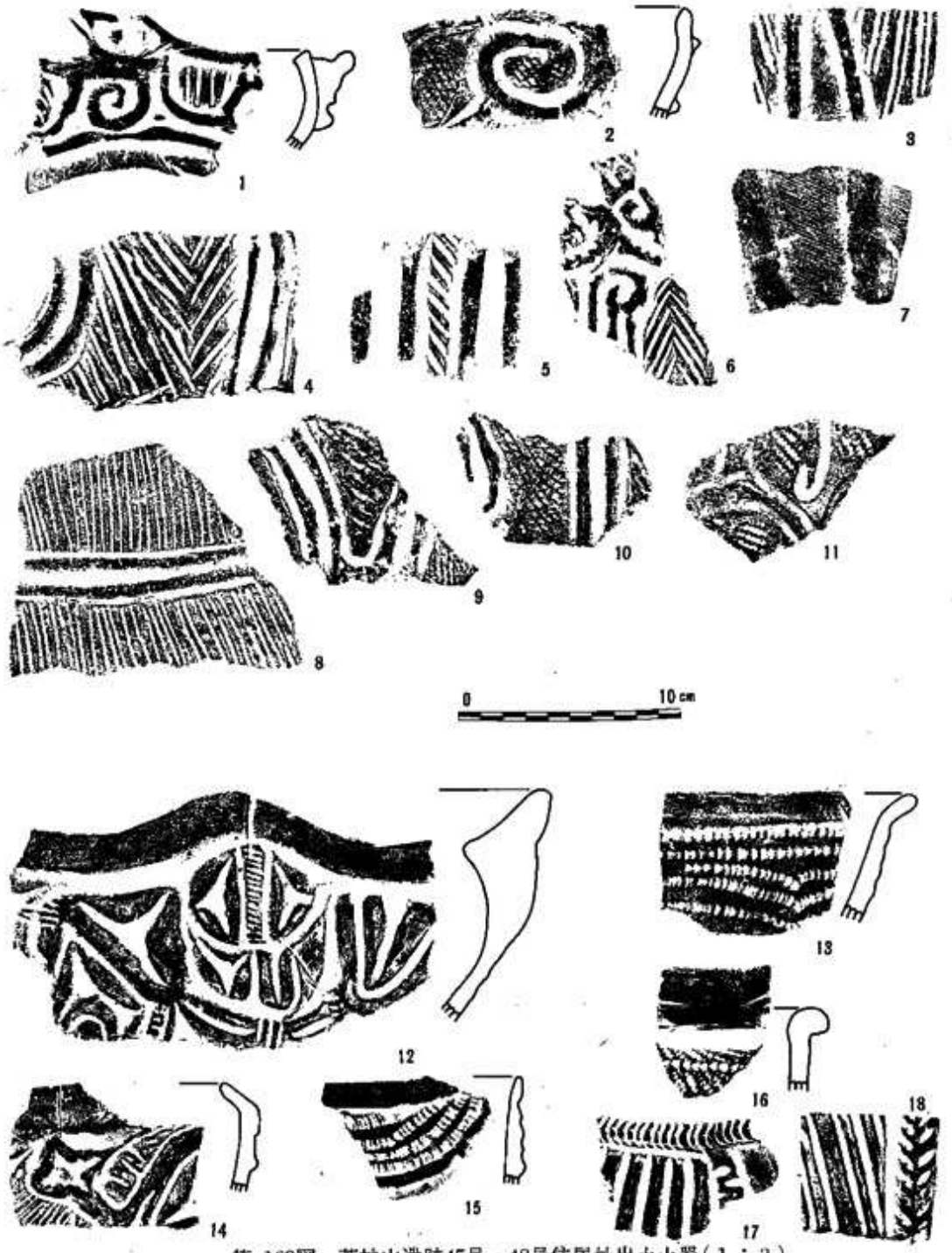


第 100図　荒神山遺跡40号・41号住居址出土土器（1：3）
1～7　40号住居址，8～20　41号住居址

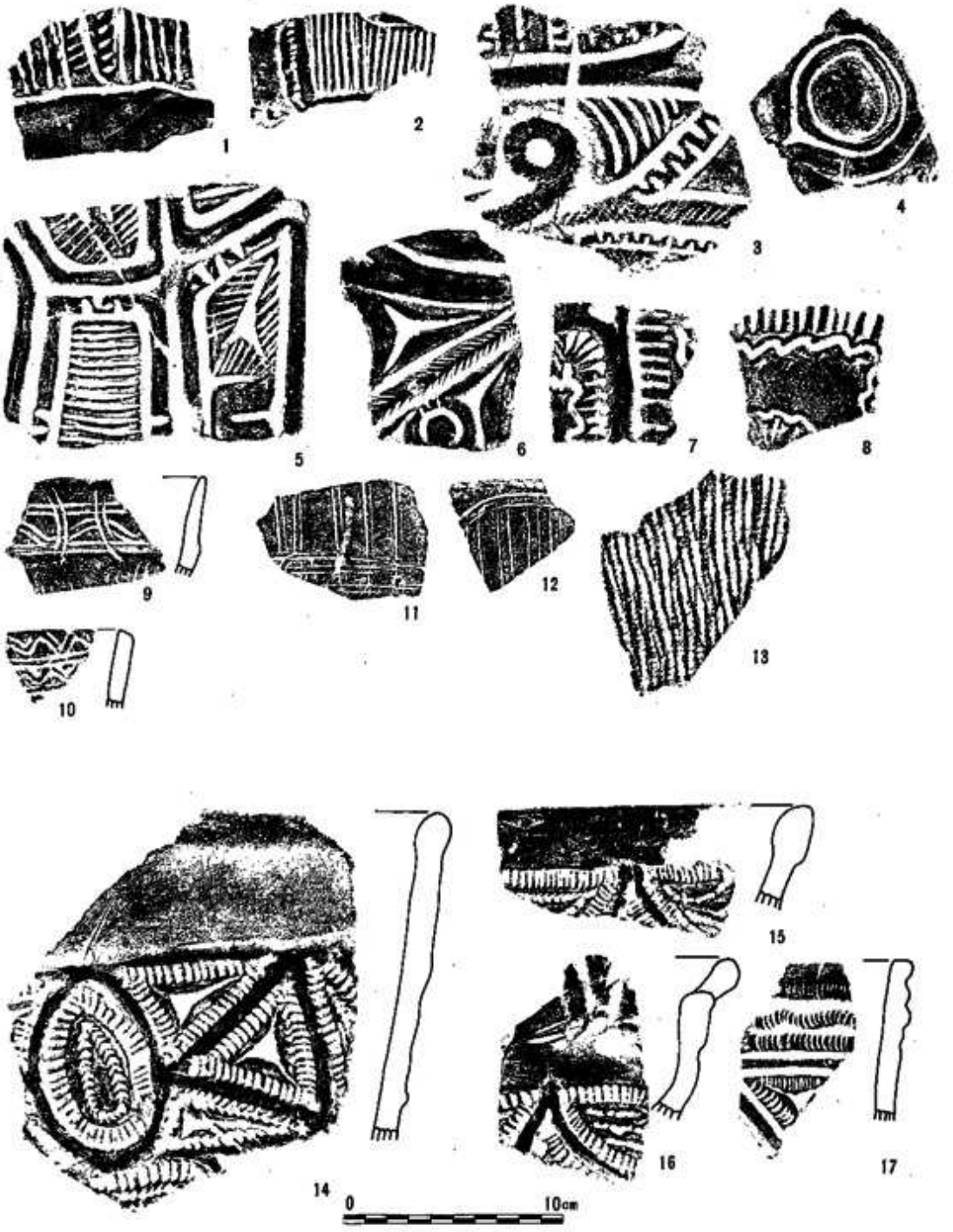
第 101号図荒神山遺跡41号・42号住居址出土土器（1：3）
1～7　41号住居址，8～16　42右住居址



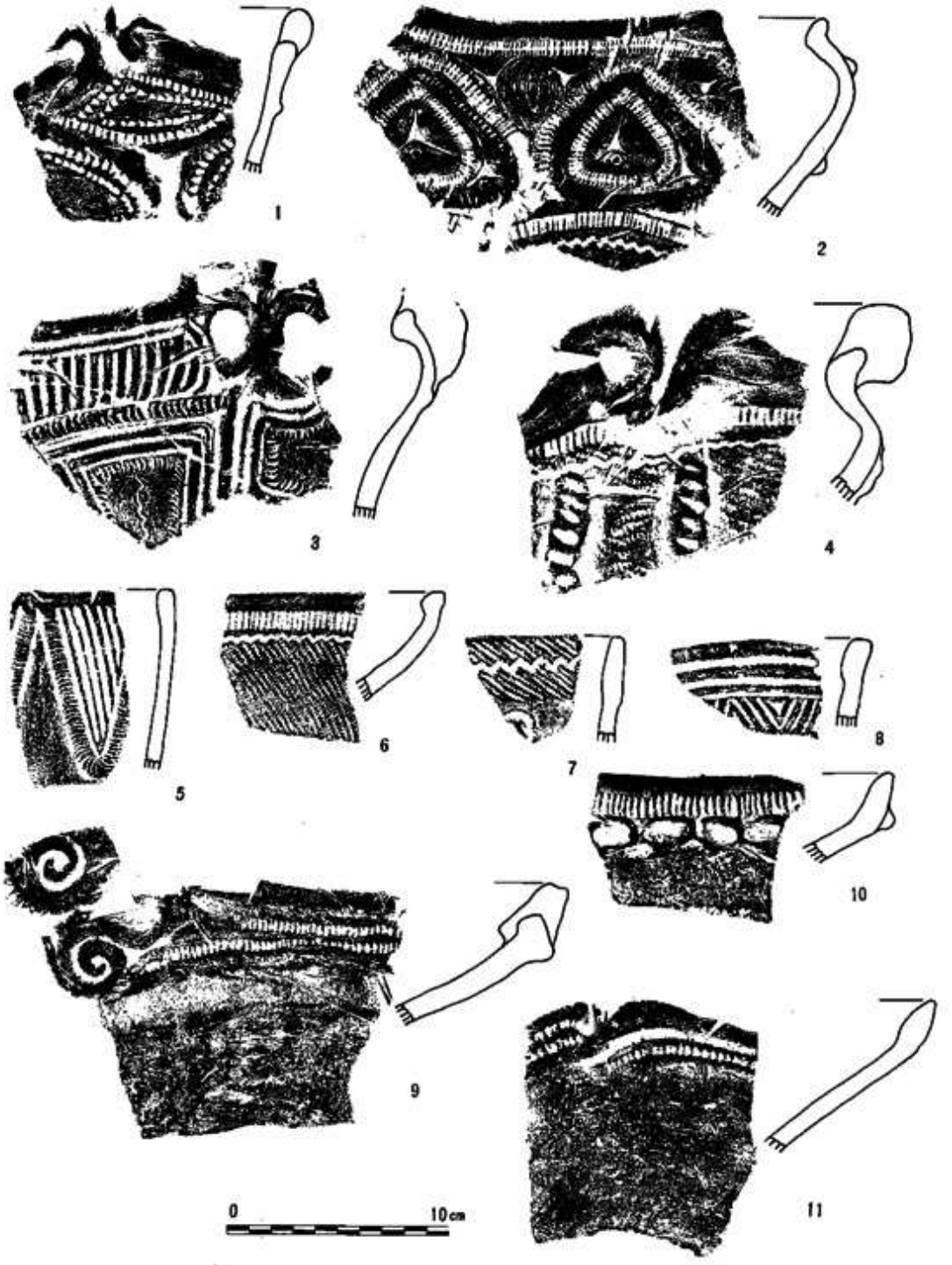
第 102図　荒神山遺跡42号・43号住居址出土土器（1・3）
1～12　42号住居址，13～16　43号住居址



第 103図　荒神山遺跡45号・48号住居址出土土器（1：3）
1～11　45号住居址，12～18　48号住居址

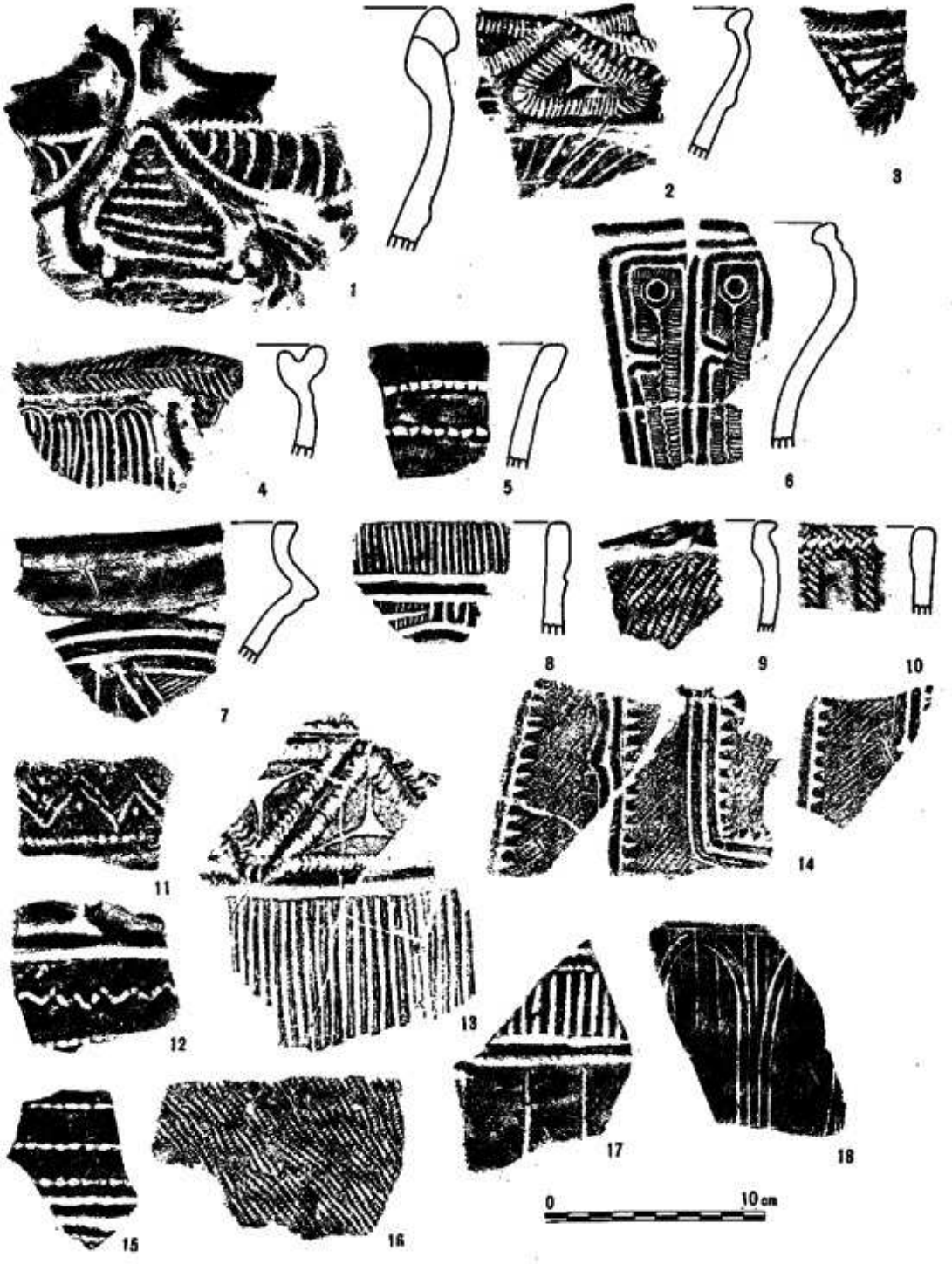


第104図　荒神山遺跡48号・49号住居址出土土器（1：3）
1～13　48号住居址，14～17　49号住居址

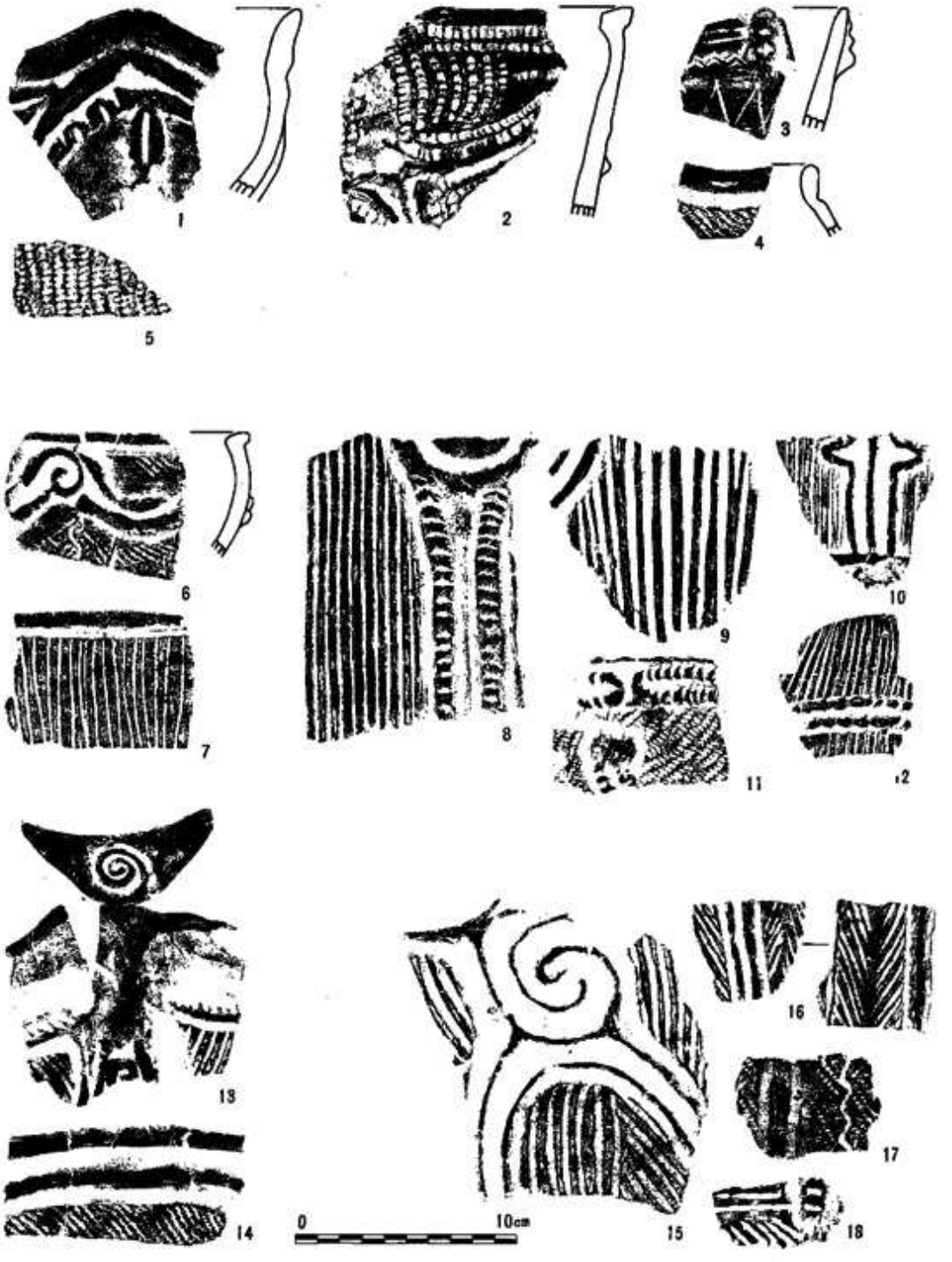


第 105図　荒神山遺跡49号住居址出土土器（1：3）

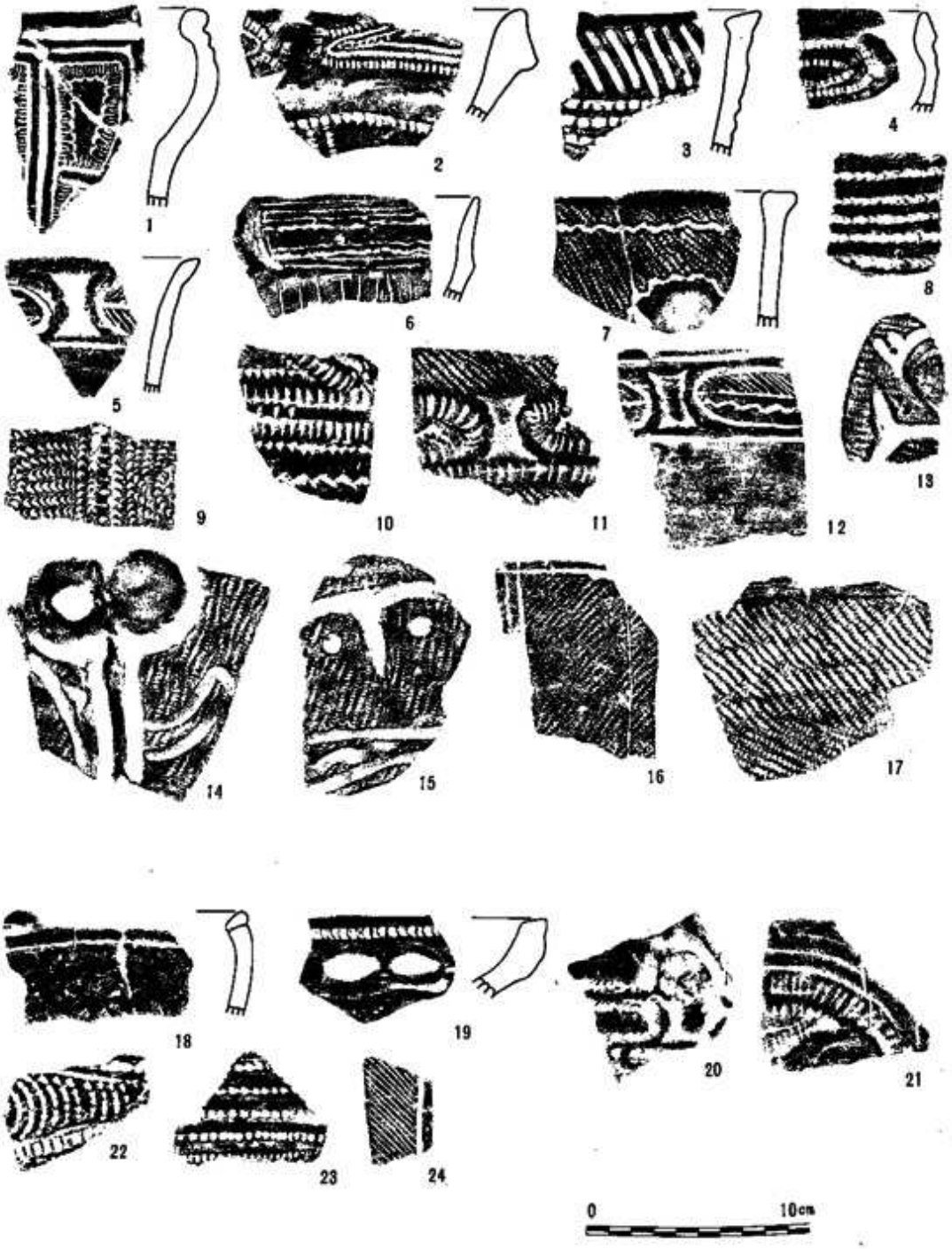
第 106図　荒神山遺跡49号・51号住居址出土土器（１：３）
1～13　49号住居址，14～21，51号住居址



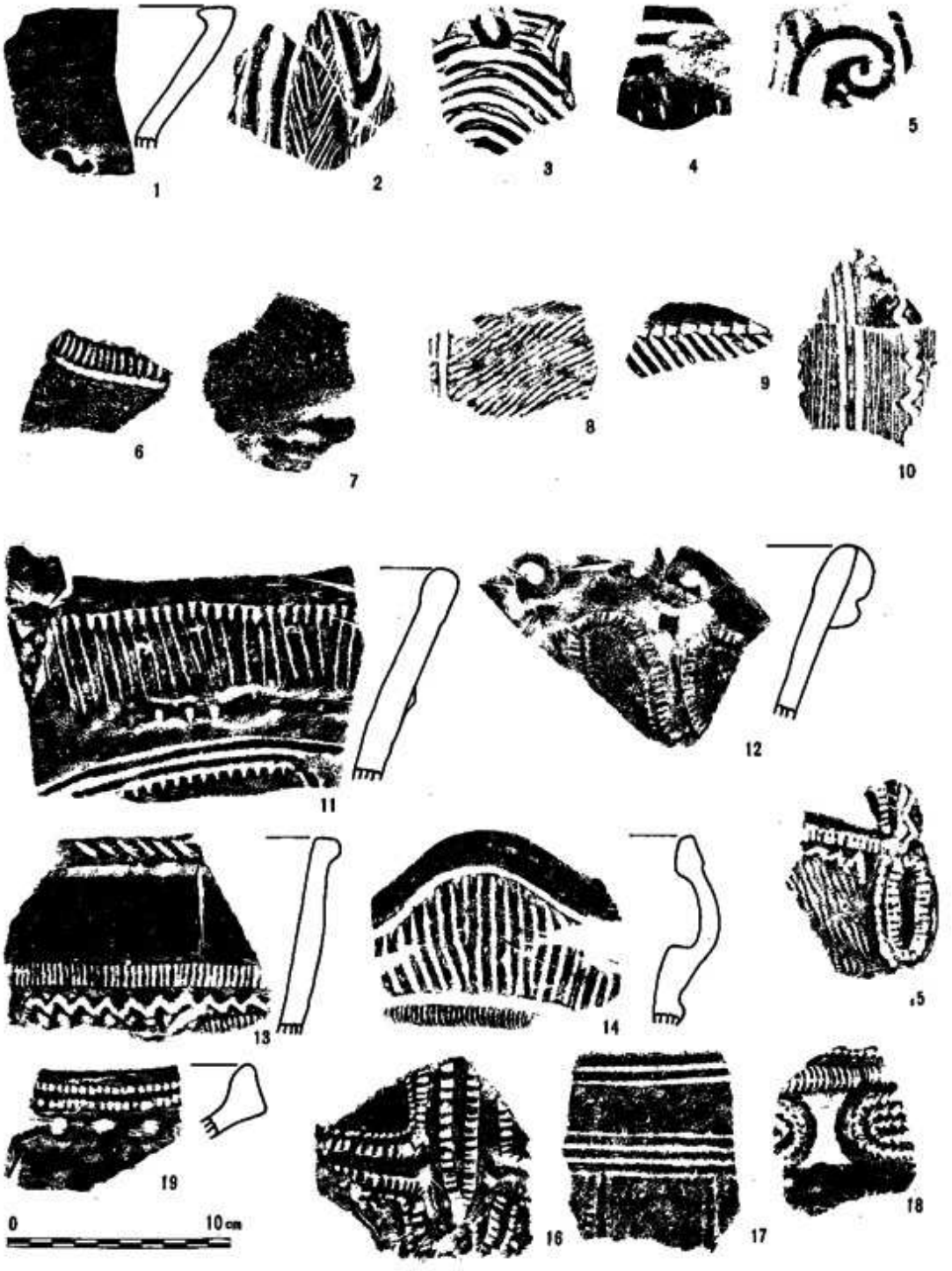
第 107図　荒神山遺跡50号住居址出土土器（1：3）



第 108図　荒神山遺跡53号・54号・56号住居址出土土器（1：3）
1～5　53号住居址，6～12　54号住居址，13～18　56号住

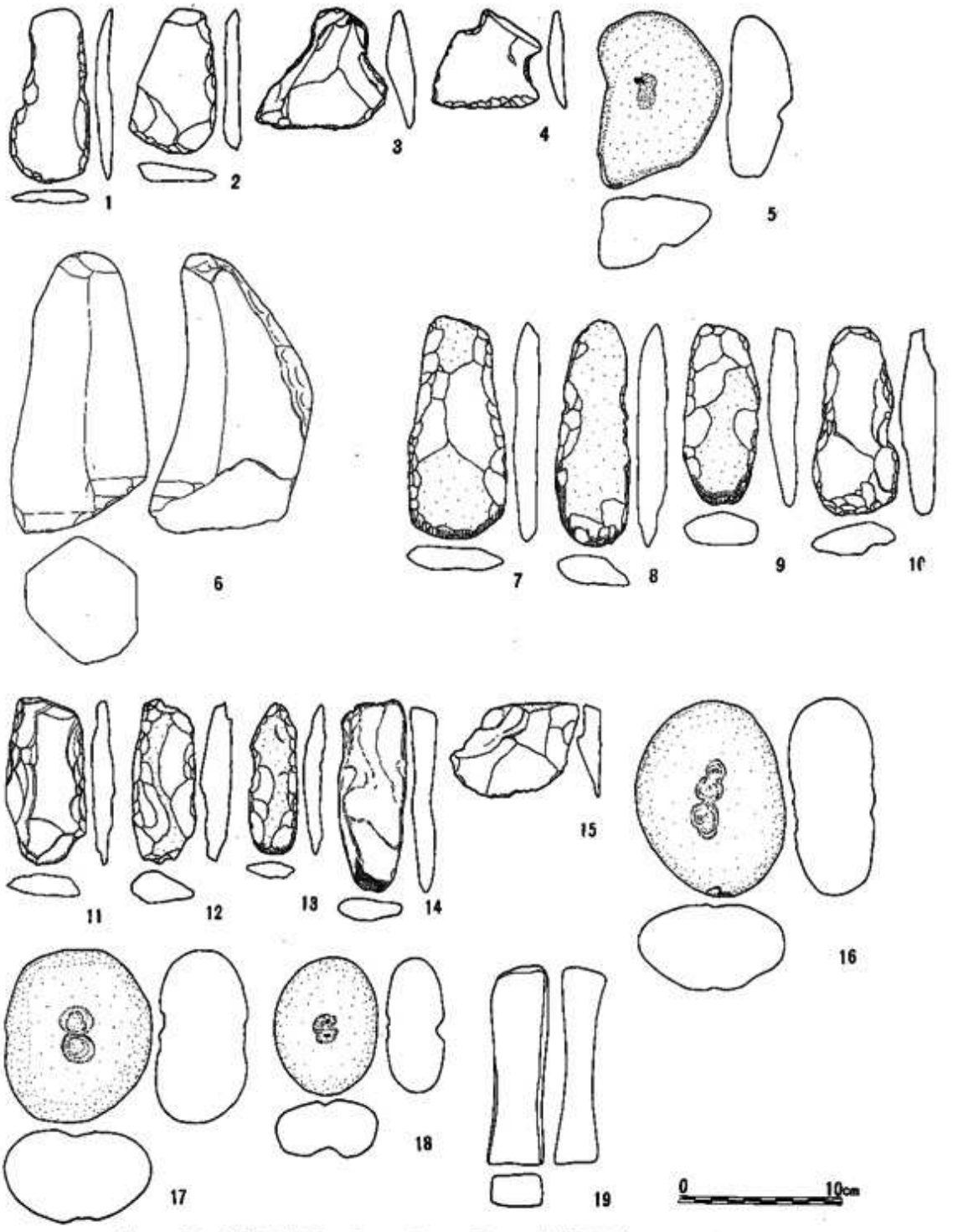


第 109図　荒神山遺跡55号・57号住居址出土土器（1：3）
1～17　55号住居址，18～24　57号住居址

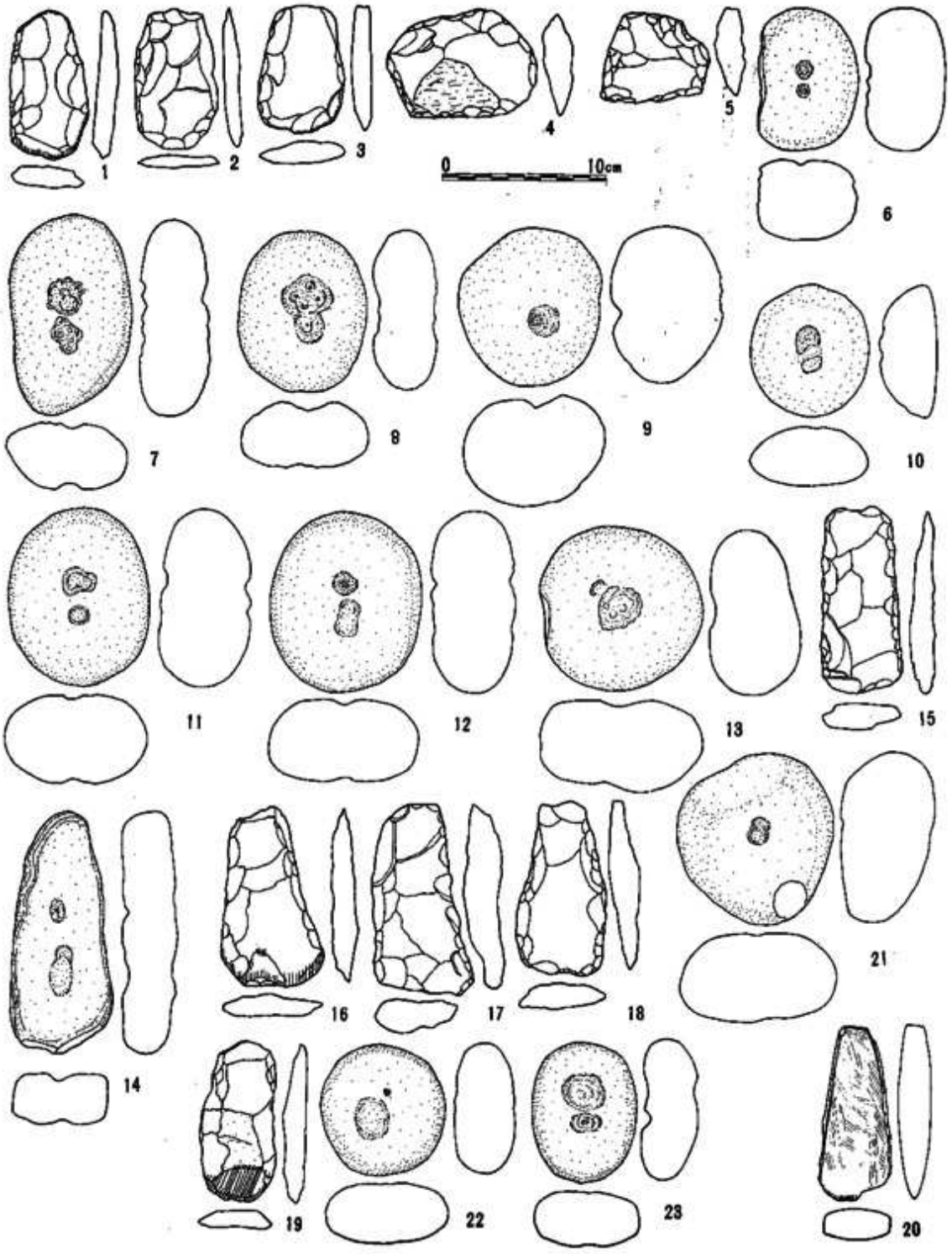


第 110図　荒神山遺跡58号・60号・61号・62号住居址（1：3）
1～5　58号住居址，6～7　60号住居址，8～10　61号住居址，
11～19　62号住居址

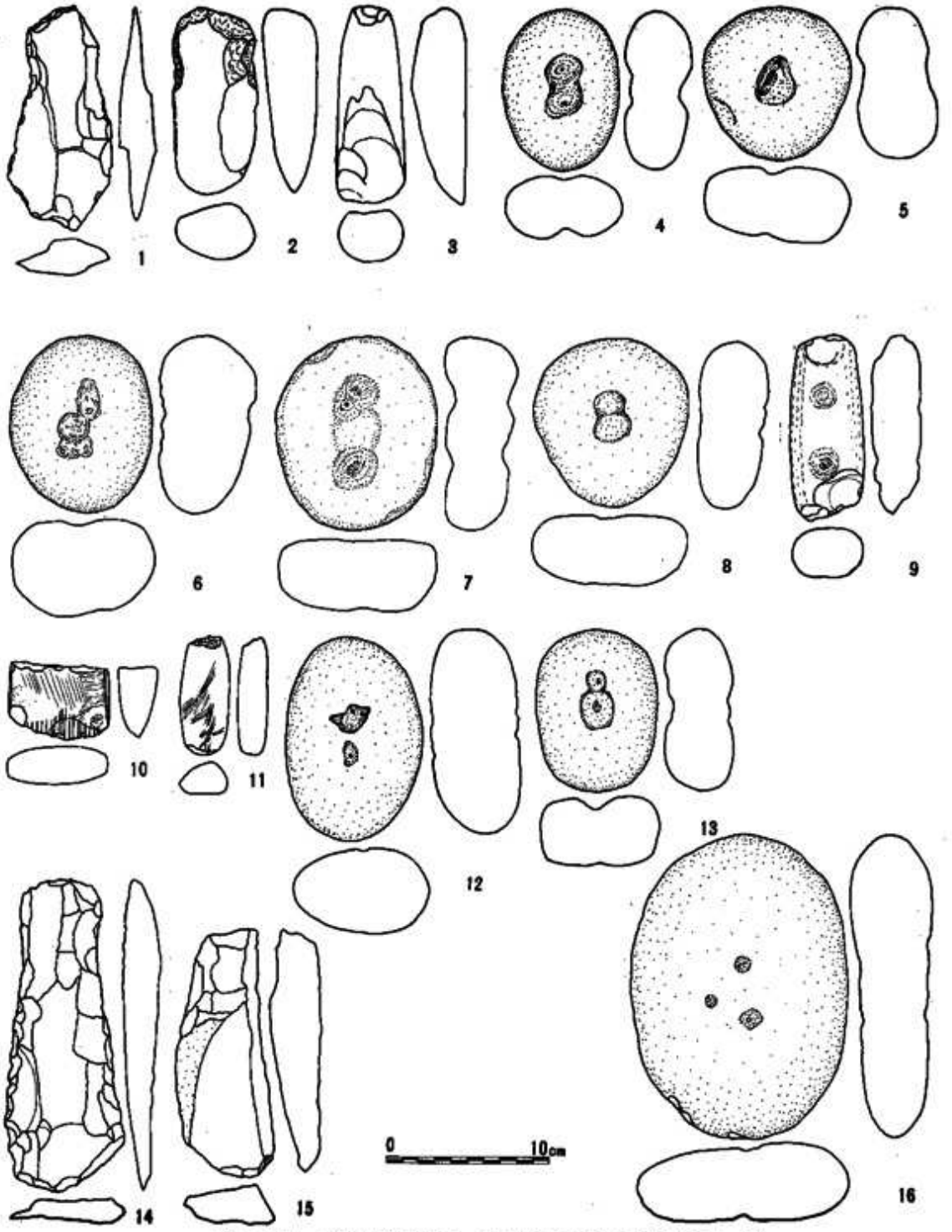
第 111図　荒神山遺跡63号・64号・65号・66号住居址出土土器（1：3）
1～3　63号住居址，4～11 64号住居址，12～14　65号住居址，15～20 66号住居址



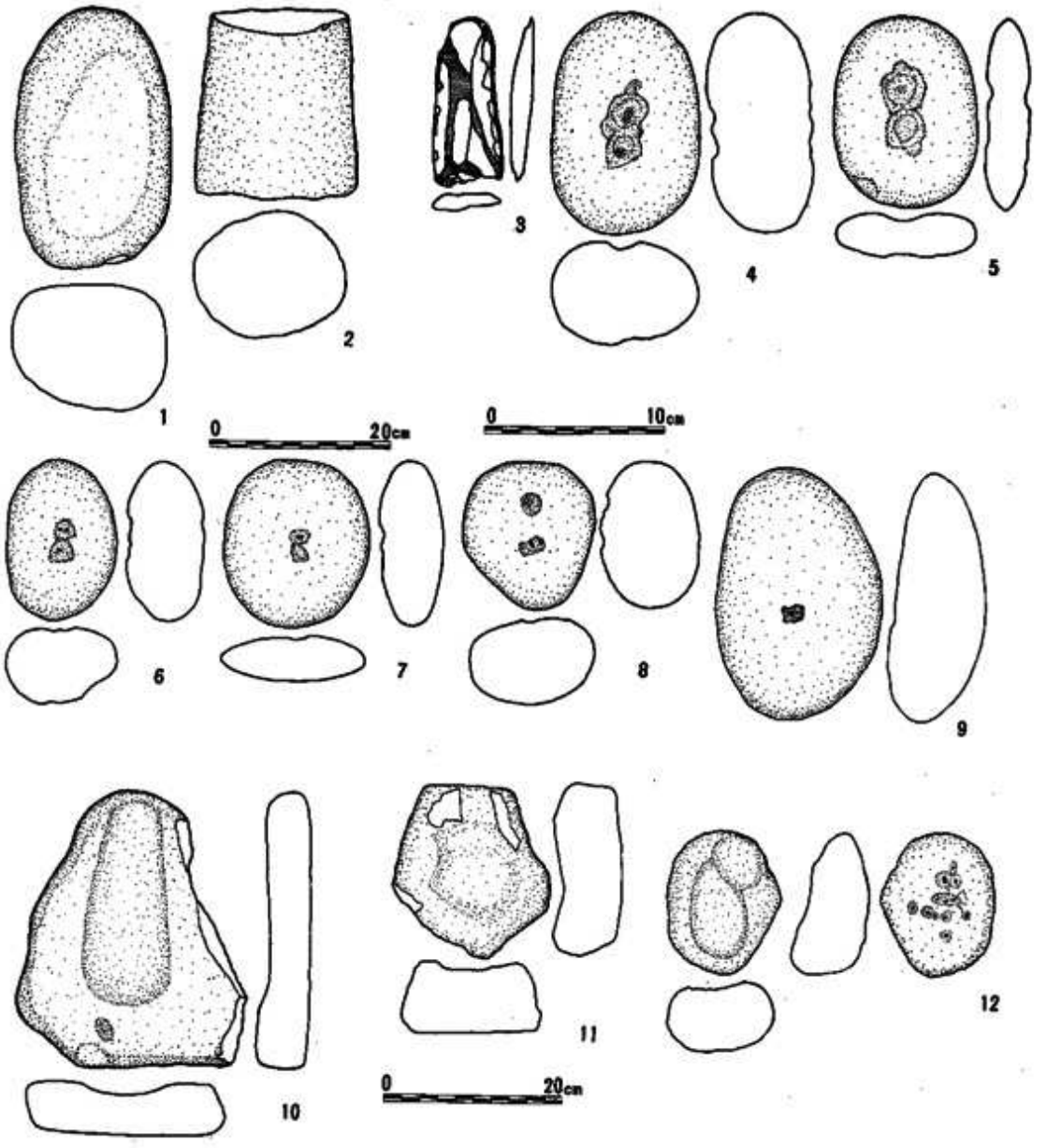
第 112図　荒神山遺跡1号・2号・4号・5号住居址出土石器（1：4）
1～5 1号住居址，6　2号住居址，7～18　4号 住居址覆土，19　5号住居址床面



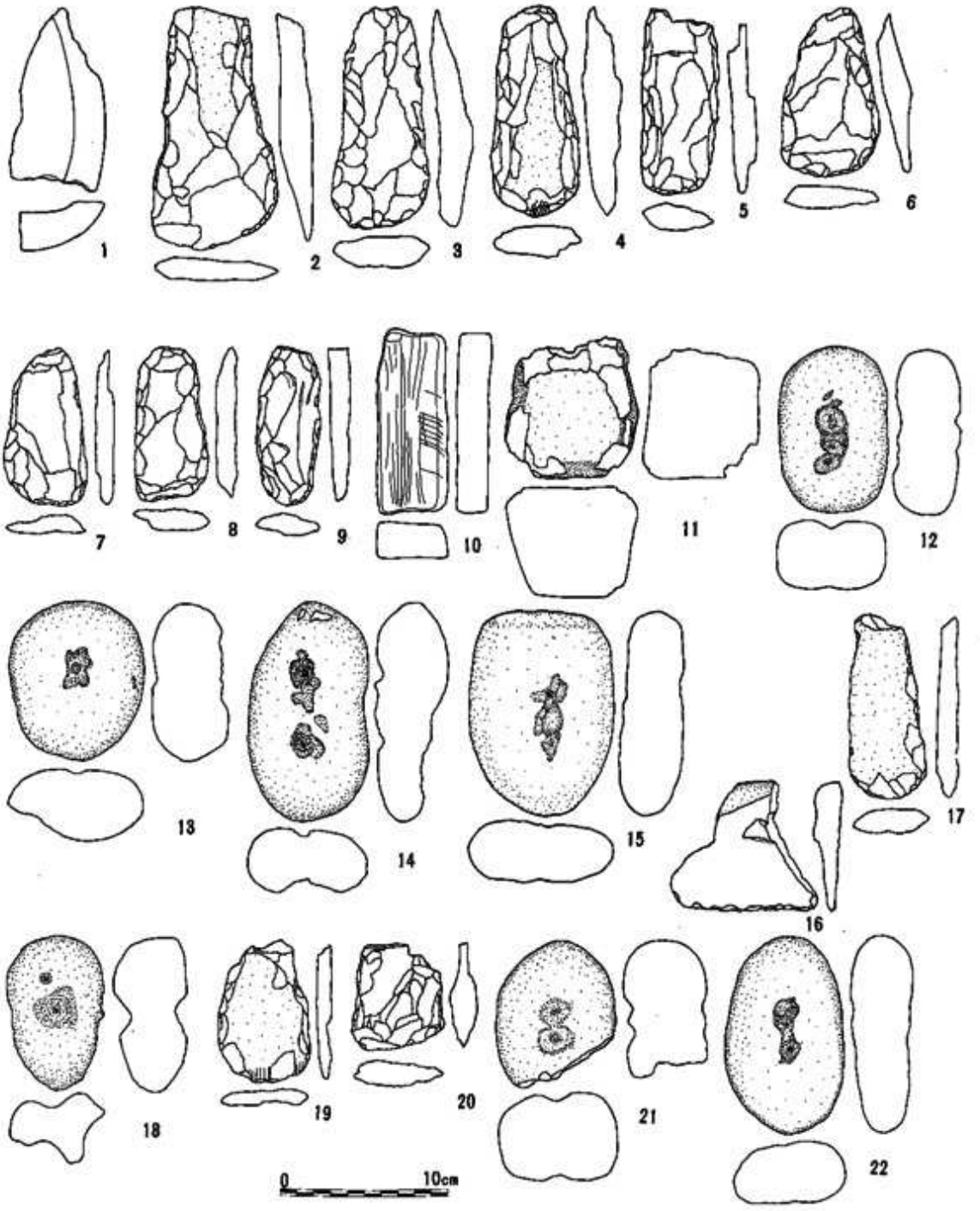
第 113図　荒神山遺跡３号・７号住居址出土石器（１：４）
１～９　３号住居址覆土，10～14　３号住居址床面，15～23 ７号住居址覆土



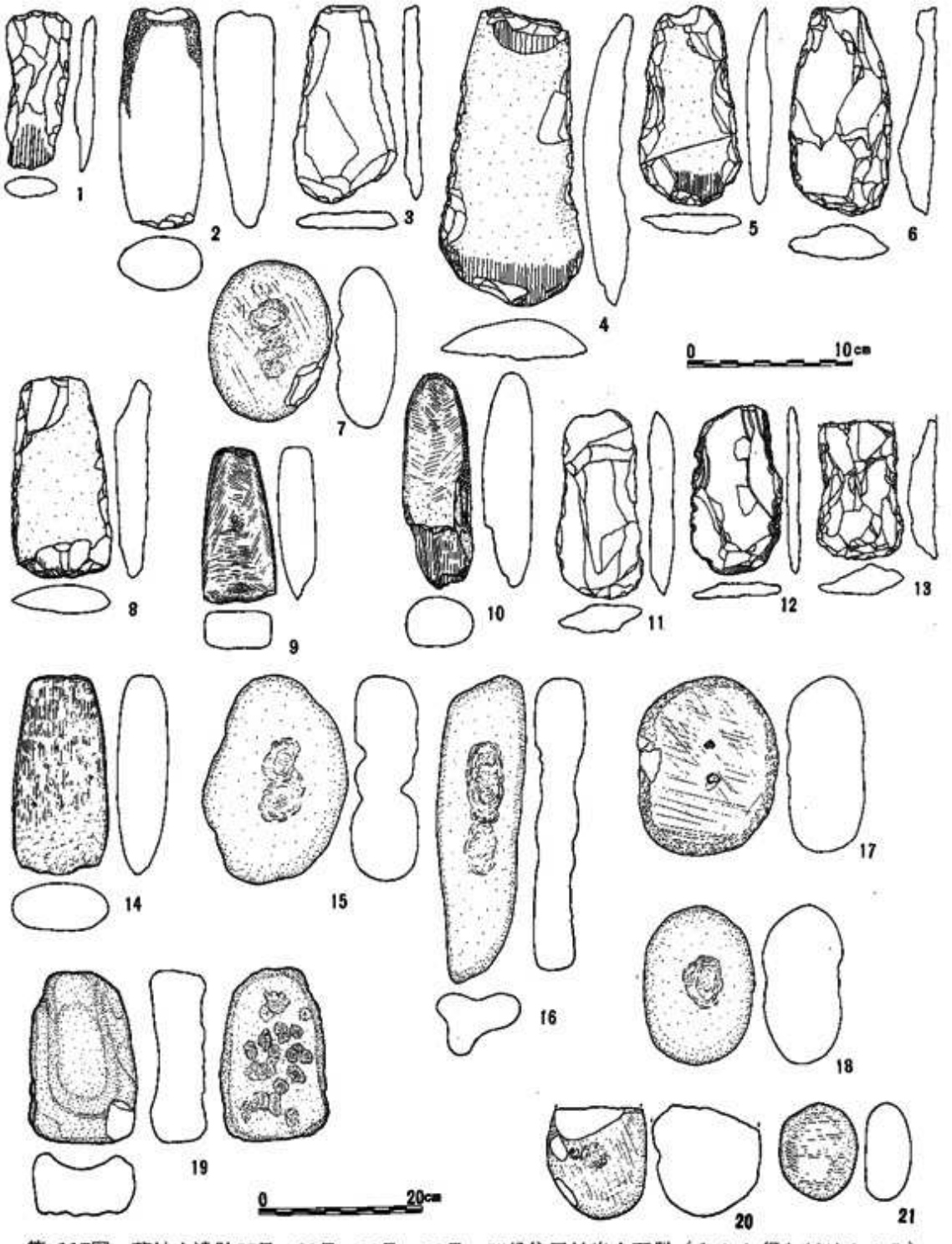
第 114図　荒神山遺跡8号・10号住居址出土石器（1：4）
1～8　8号住居址覆土，9・10　8号住居址床面，11～13　10号住居址覆土，
14～16 10号住居址床面



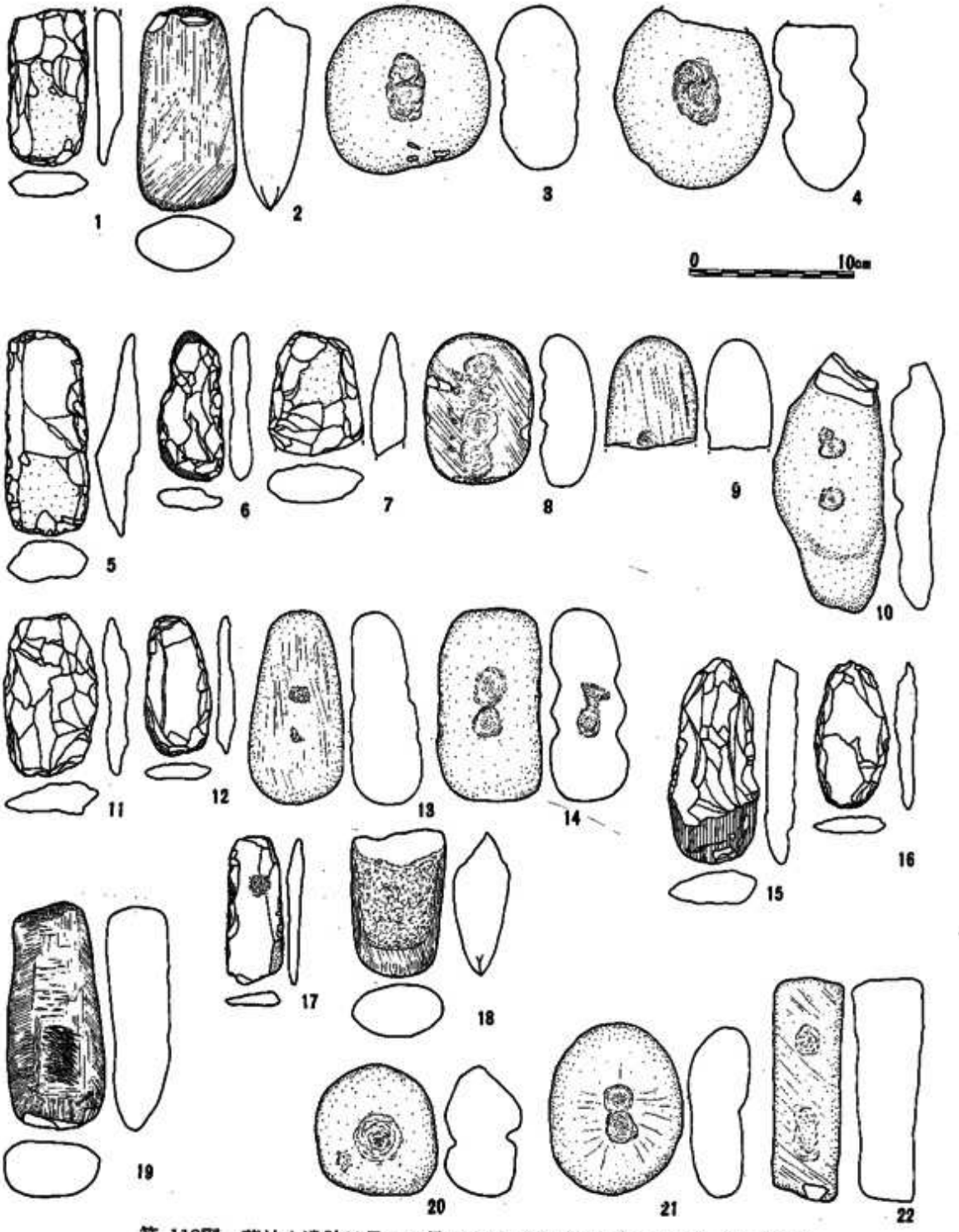
第 115図　荒神山遺跡10 号・12号住居址出土石器（1：4　但し1・2・10～12は1：8）
1・2　10号住居址，3～10　12号住居址覆土，11・12 12号住居址P 3



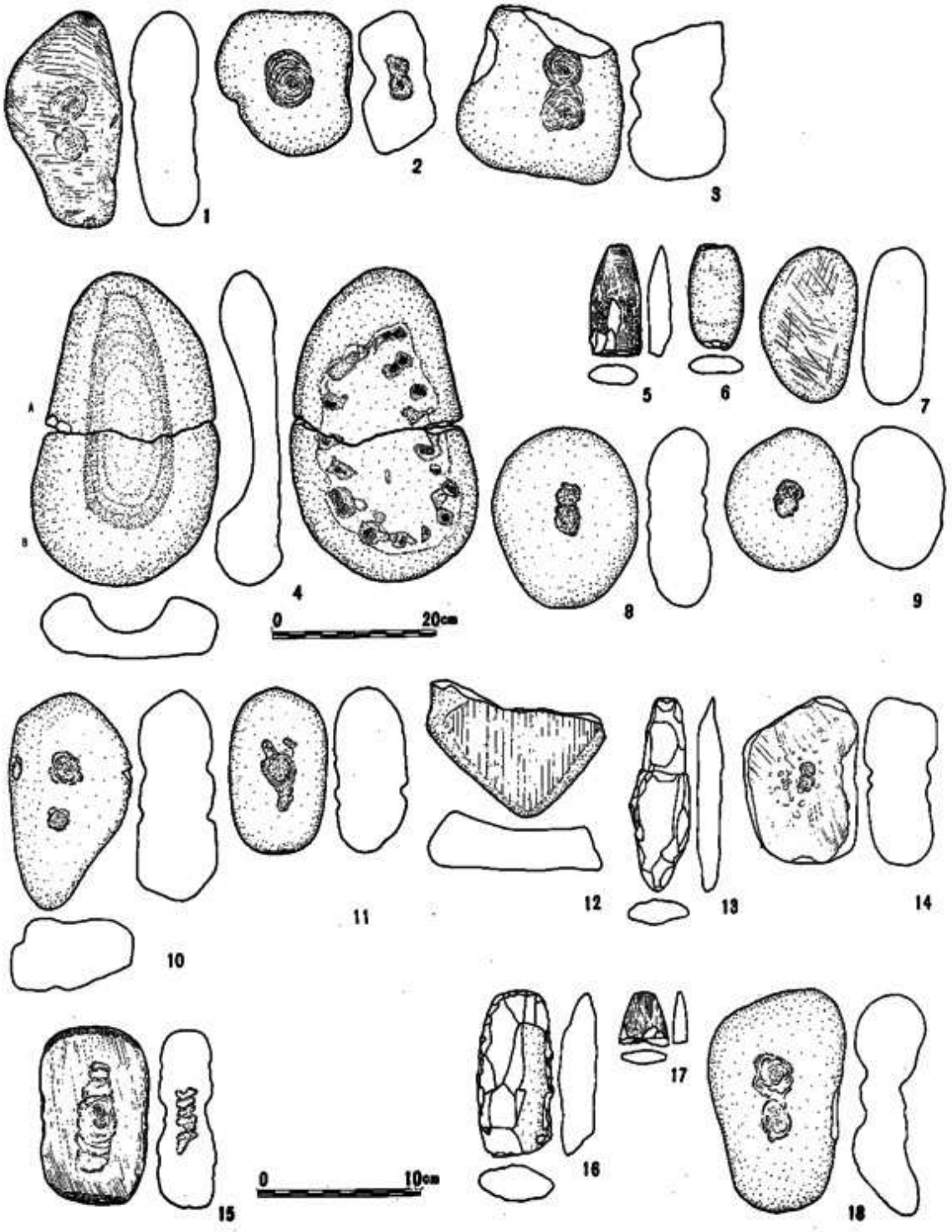
第 116図　荒神山遺跡15号・16号・17号・18号・19号住居址出土石器（1：4）
1　15号住居址，2～16　16号住居址覆土，17　17号住居址覆土，18　18号住居址覆土，
19～22　19号住居址覆土



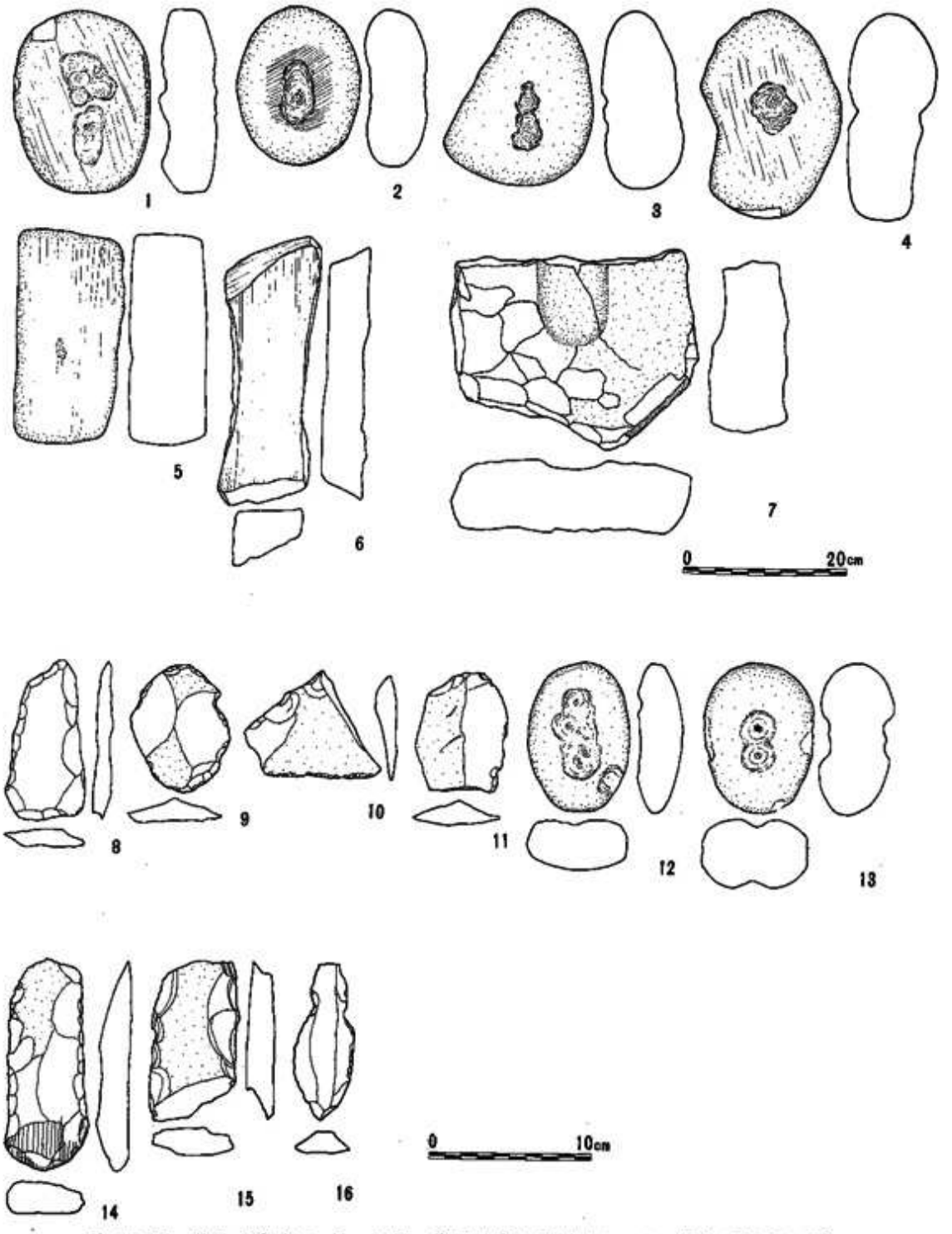
第 117図　荒神山遺跡22号・31号・32号・33号・35号住居址出土石器（1：4 但し19は1：8）
1　22号住居址，2・3 31号住居址覆土，4～7　32号住居址覆土，8～10　32号住居址床面，11～19　33号住居址床面，20・21　35号住居址



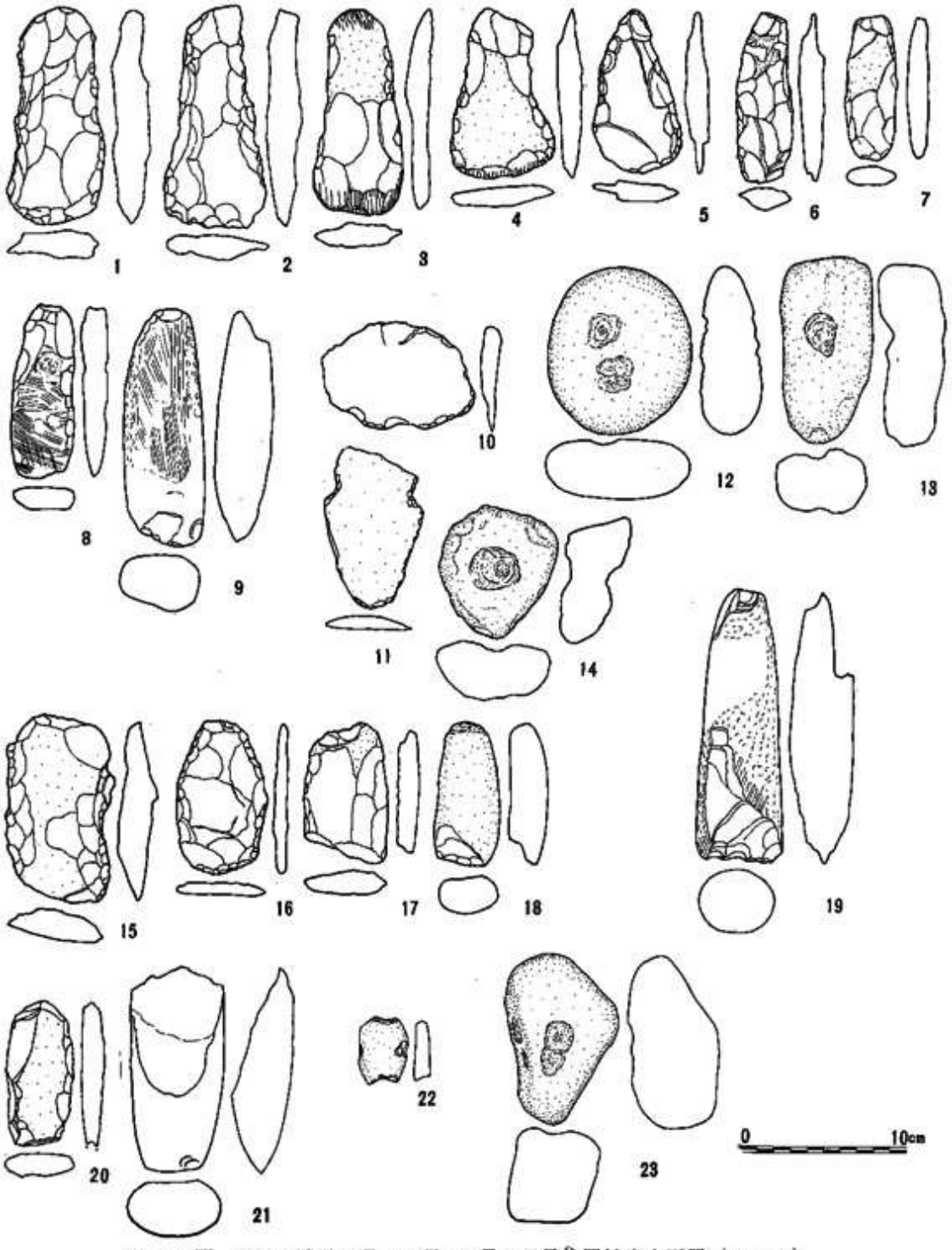
第 118図　荒神山遺跡37号・38号・40号・41号住居址出土石器（1：4）
1～4 37号住居址，5　38号住居址覆土，6～10 38号住居址床面，11　40号住居址床面，
12～14　40号住居址覆土，15～22　41号住居址覆土



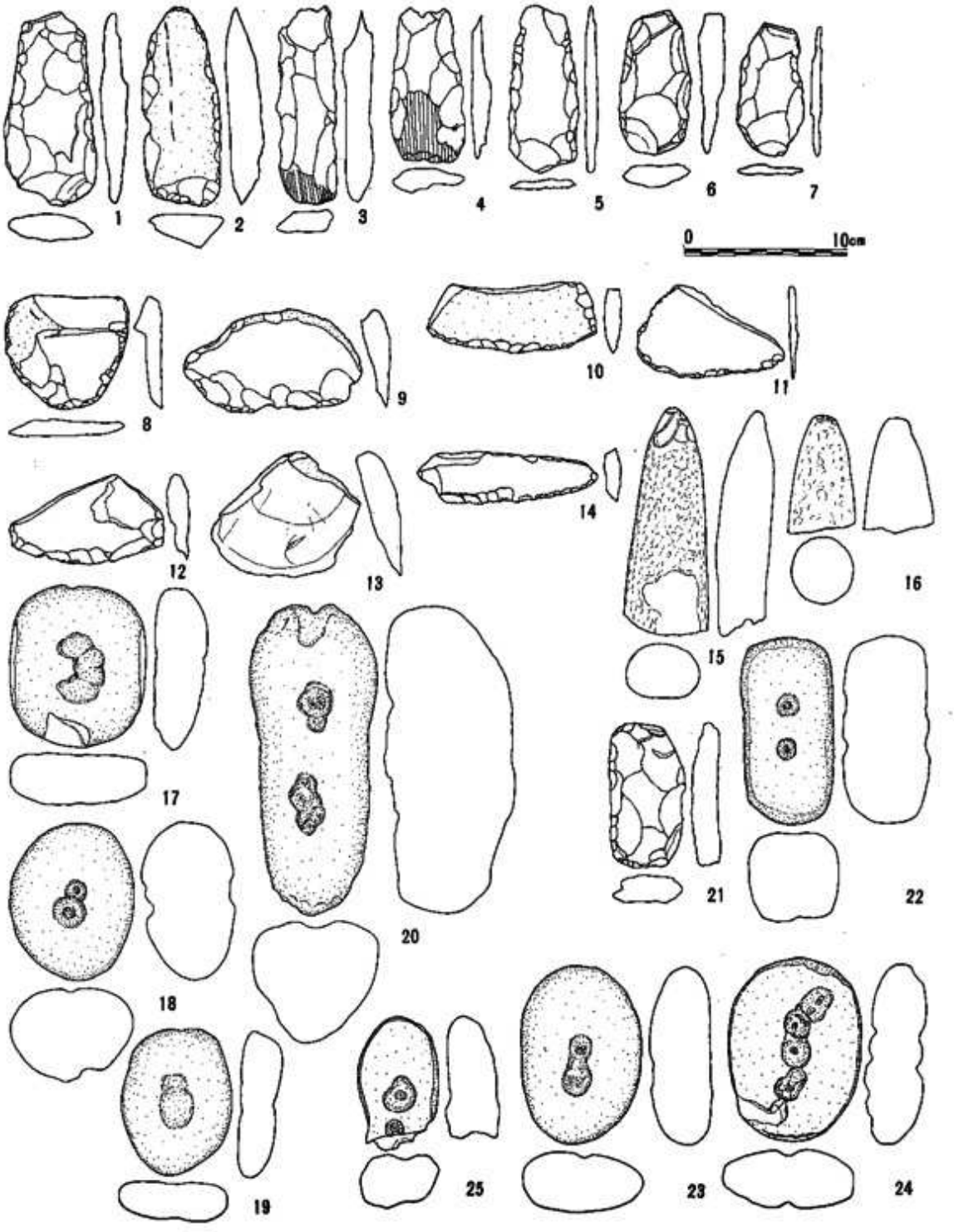
第 119図　荒神山遺跡41号・42号・43号・45号住居址出土石器（1：4　但し4・12は1：8）
1～4　41号住居址覆土，5～12　41号住居址床面，13・14　43号住居址炉内，15　45号住居址床面，
16～18 42号住居址覆土



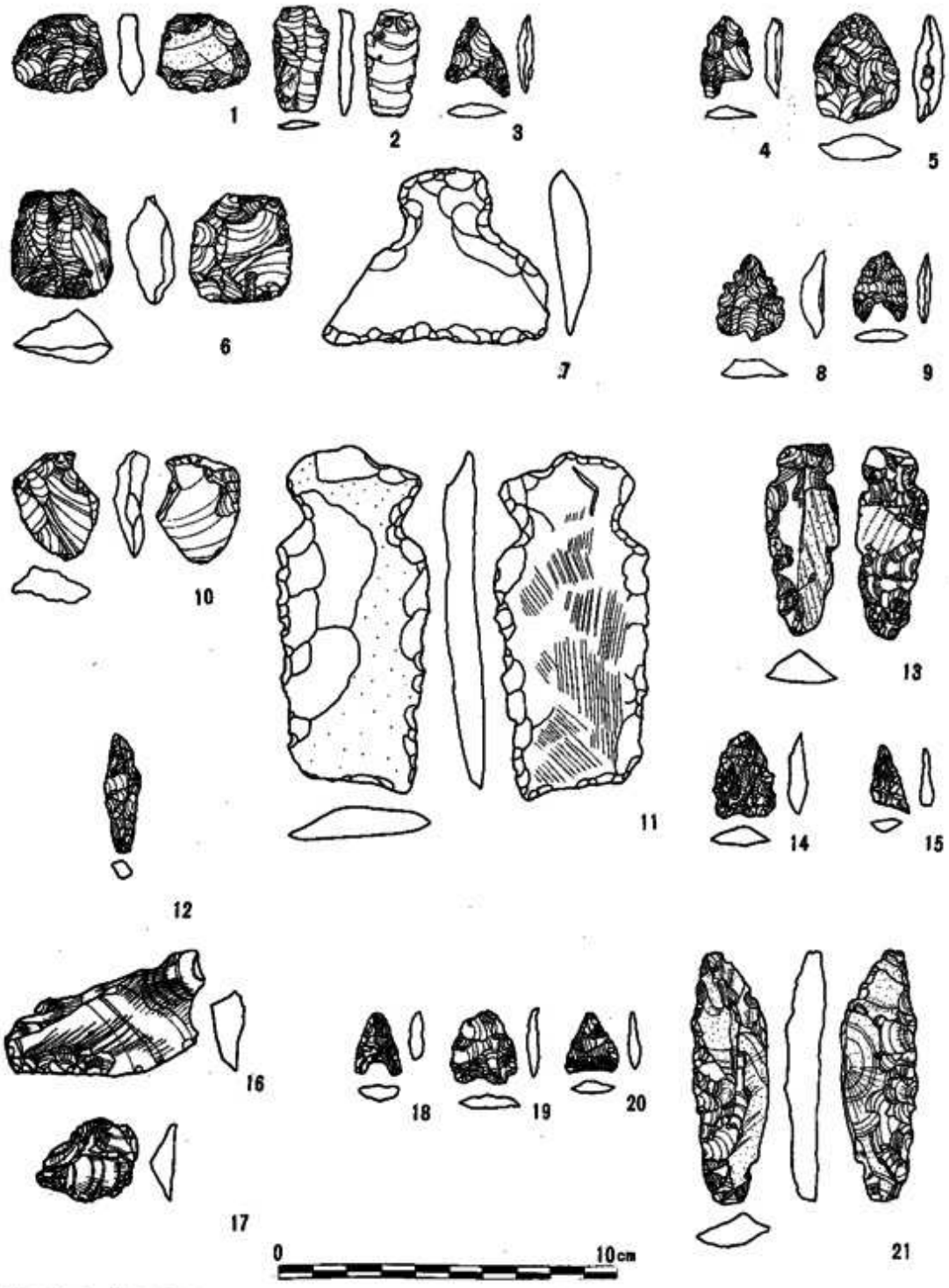
第 120図　荒神山遺跡42　号・48号・住居址出土石器（1：4　但し7は1：8）
1～7　42号住居址床面，8～13　48号住居址覆土，14～16　48号住居址床面



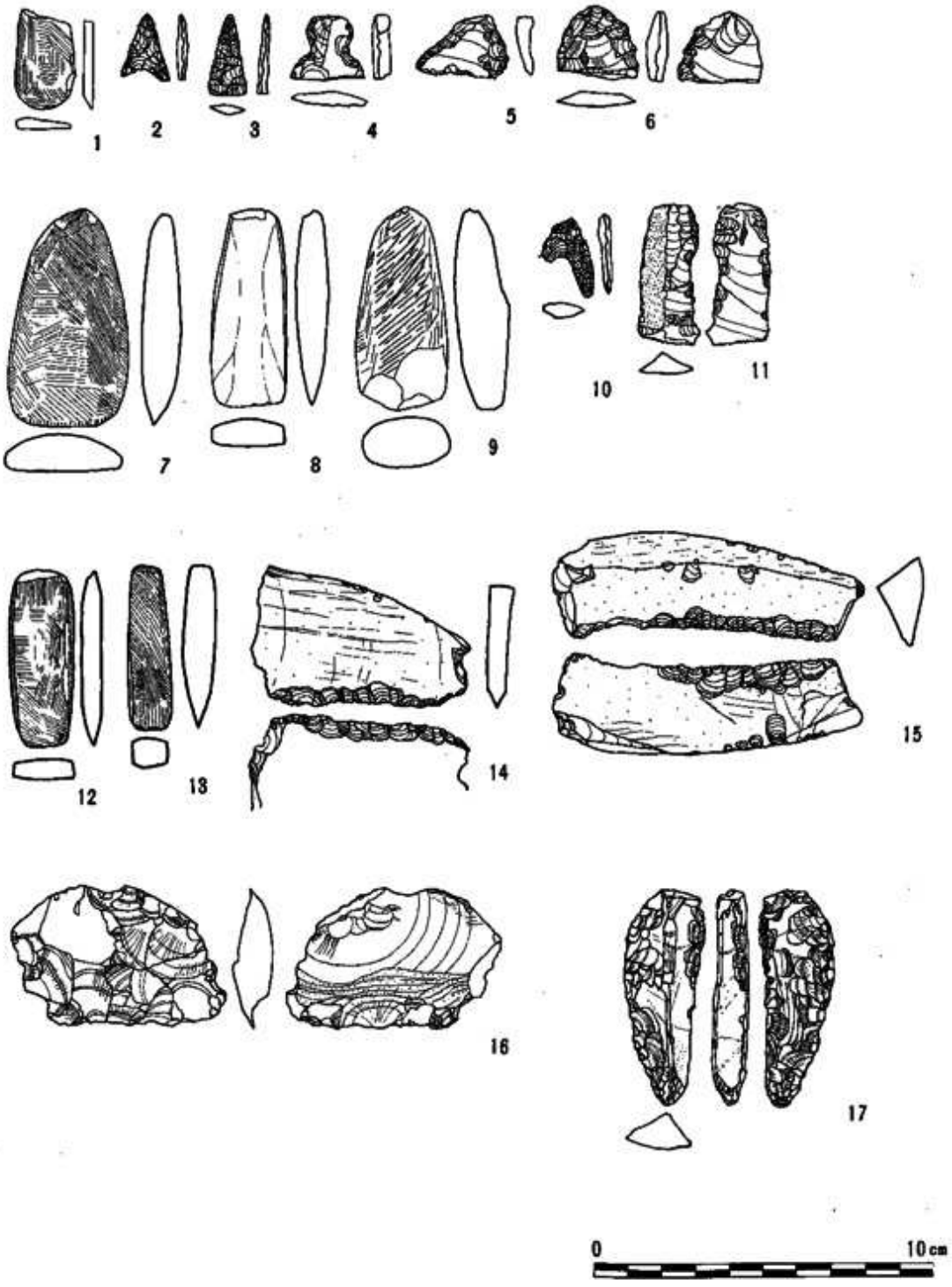
第 121図　荒神山遺跡49号・56号・57号・63号住居址出土石器（1：4）
1～14　49号住居址覆土，15～19　49号住居址床面，20　56号住居址床面，
21・22　57号住居址覆土，23　63号住居址炉内



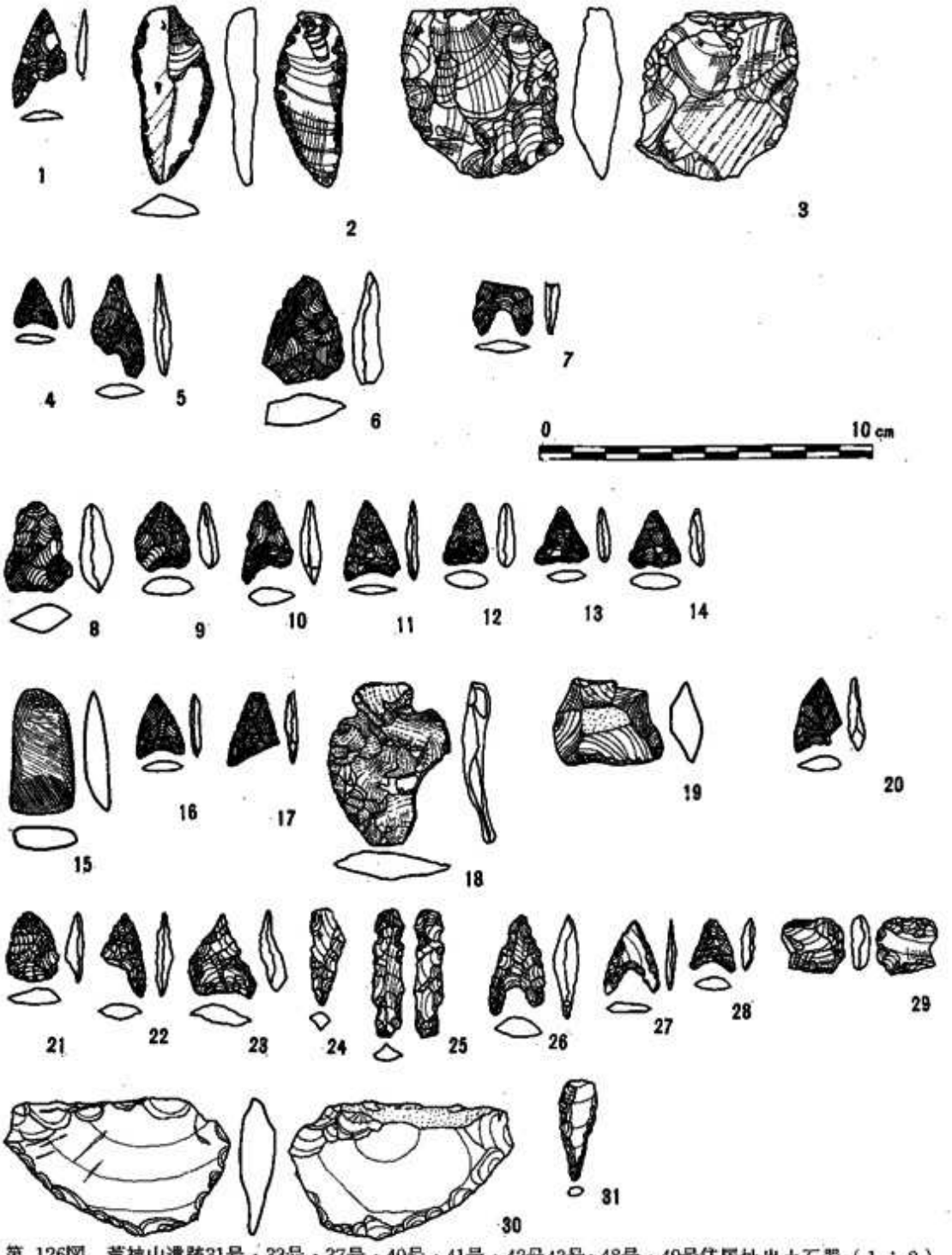
第 122図　荒神山遺跡50号・53号住居址出土石器（1：4）
1～20　50号住居址，21～24　53号住居址覆土，25　53号住居址炉内



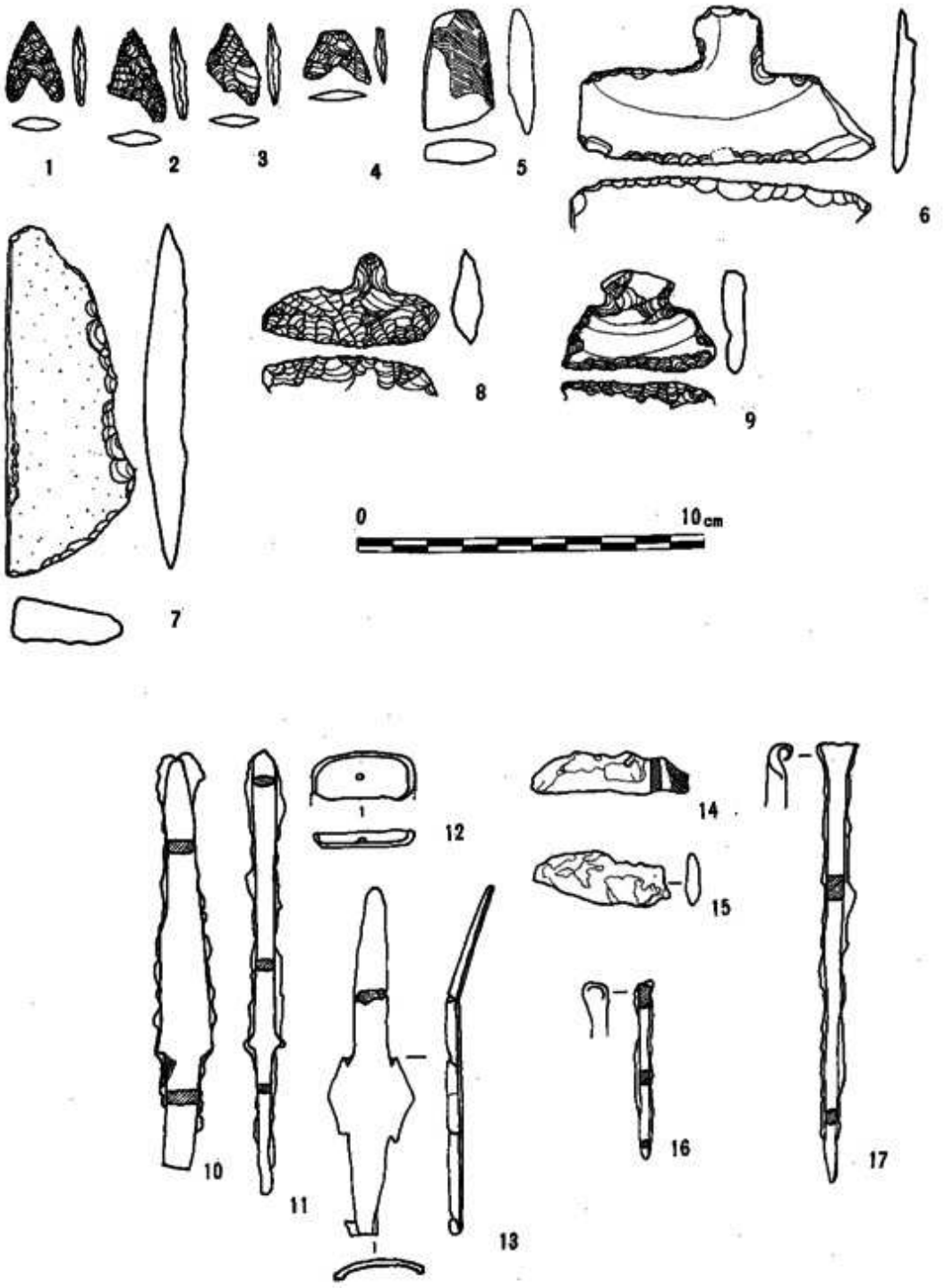
第 124図　荒神山遺跡1号・3号・4号・6号・10号・12号・16号住居址出土石器（1：2）
1・2　1号住居址覆土，3　1号住居址床面，4～7　3号住居址覆土，8～11　4号住居址覆土，12　6号住居址覆土，13　10号住居址覆土，14・15　10号住居址床面，16・17　12号住居址床面，18～21　16号住居址覆土



第 125図　荒神山遺跡8号・17号・19号住居址出土土器（1：2）
1～6　8号住居址覆土，7～11　8号住居址床面，12～15　8号住居址P 2，16　17号住居址覆土，17　19号住居址覆土

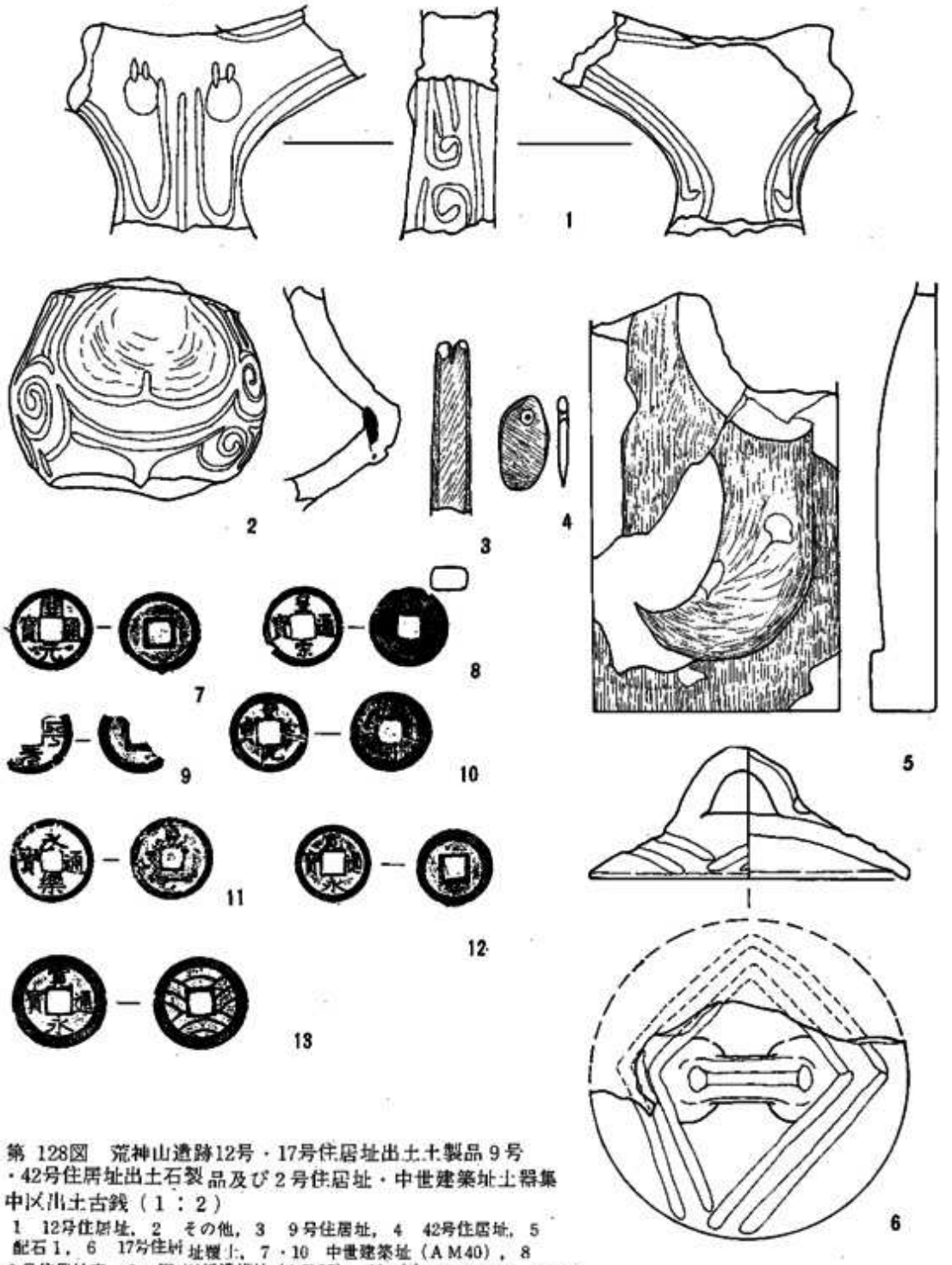


第 126図　荒神山遺跡31号・33号・37号・40号・41号・42号43号・48号・49号住居址出土石器（1：2）
1・2　31号住居址覆土，3　31号住居址P 2，4・5　33号住居址床面，6　37号住居址，7　40号住居址床面，8～14　41号住居址覆土，15～18　41号住居址 床面，19　42号住居址床面，20　43号住居址炉内，21～25　48号住居址床面，26～30　49号住 居址覆土，31　49号住居址床面



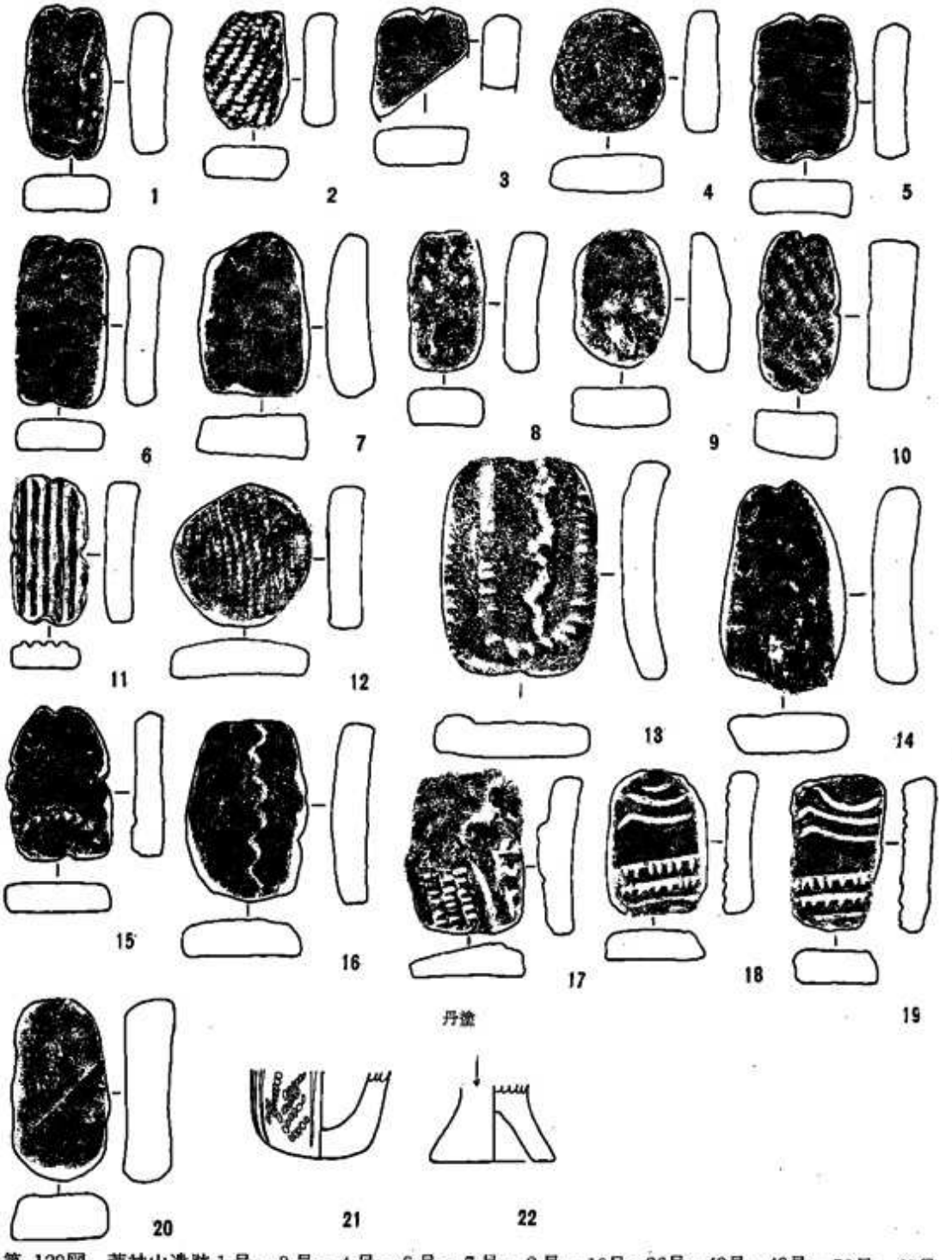
第 127図　荒神山遺跡50号・53号・62号住居址出土石器及び5号・13号・28号住居址・中世建築址出土鉄器（但し12・13は青銅製）（1：2）

1～7　50号住居址，8　53号住居址覆土，9　62号住居址，10　5号住居址，11　13号住居址，14・15　28号住居址，16・17　中世建築址



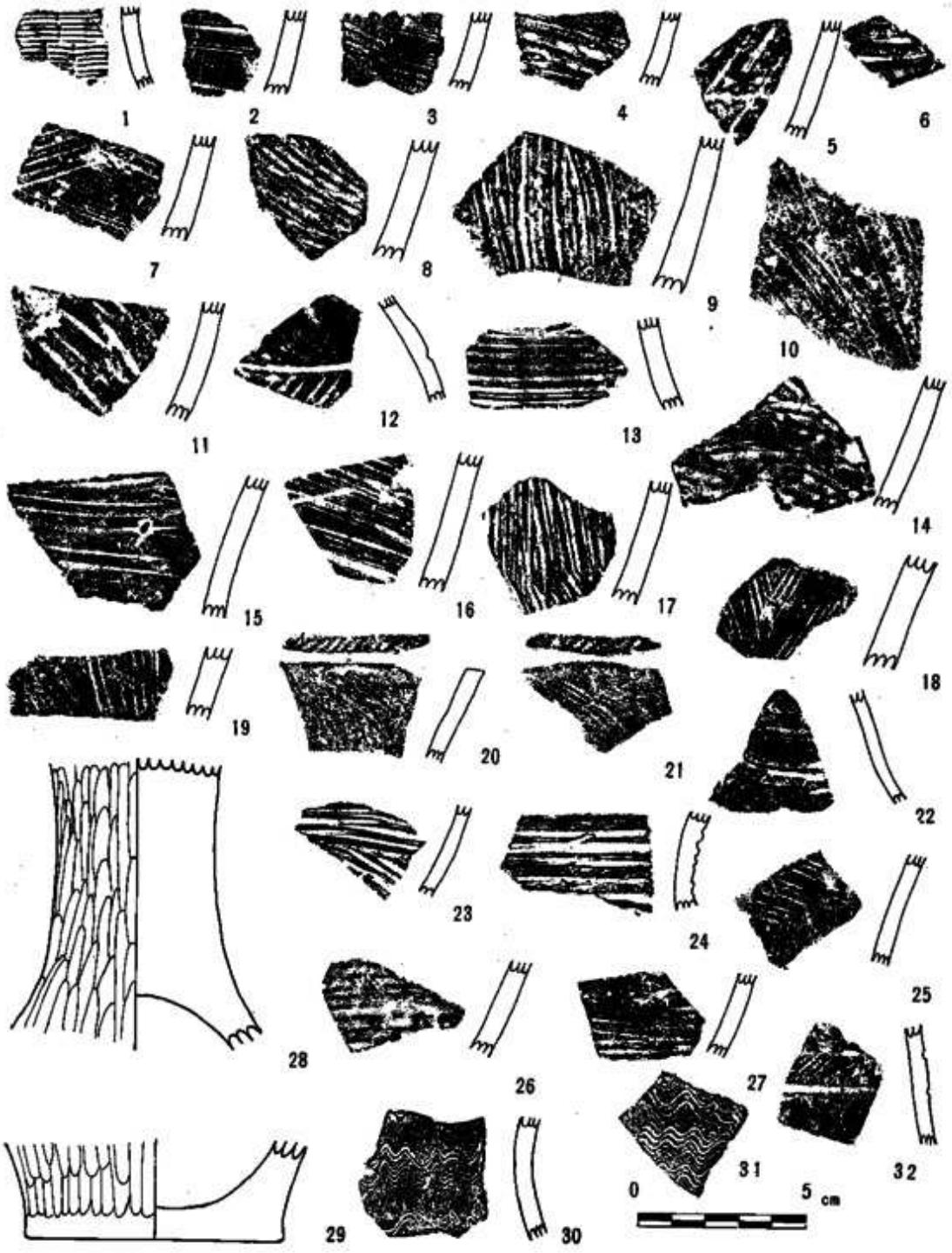
第 128図　荒神山遺跡12号・17号住居址出土土製品 9 号・42号住居址出土石製品及び 2 号住居址・中世建築址土器集中区出土古銭（1：2）

1　12号住居址，2　その他，3　9号住居址，4　42号住居址，5　配石 1，6　17号住居址覆土，7・10　中世建築址（A M40），8　2号住居址床，9　同 石組遺構外（A T 37），11　同 石組遺構内，12・13　土器集中区（A L 52）

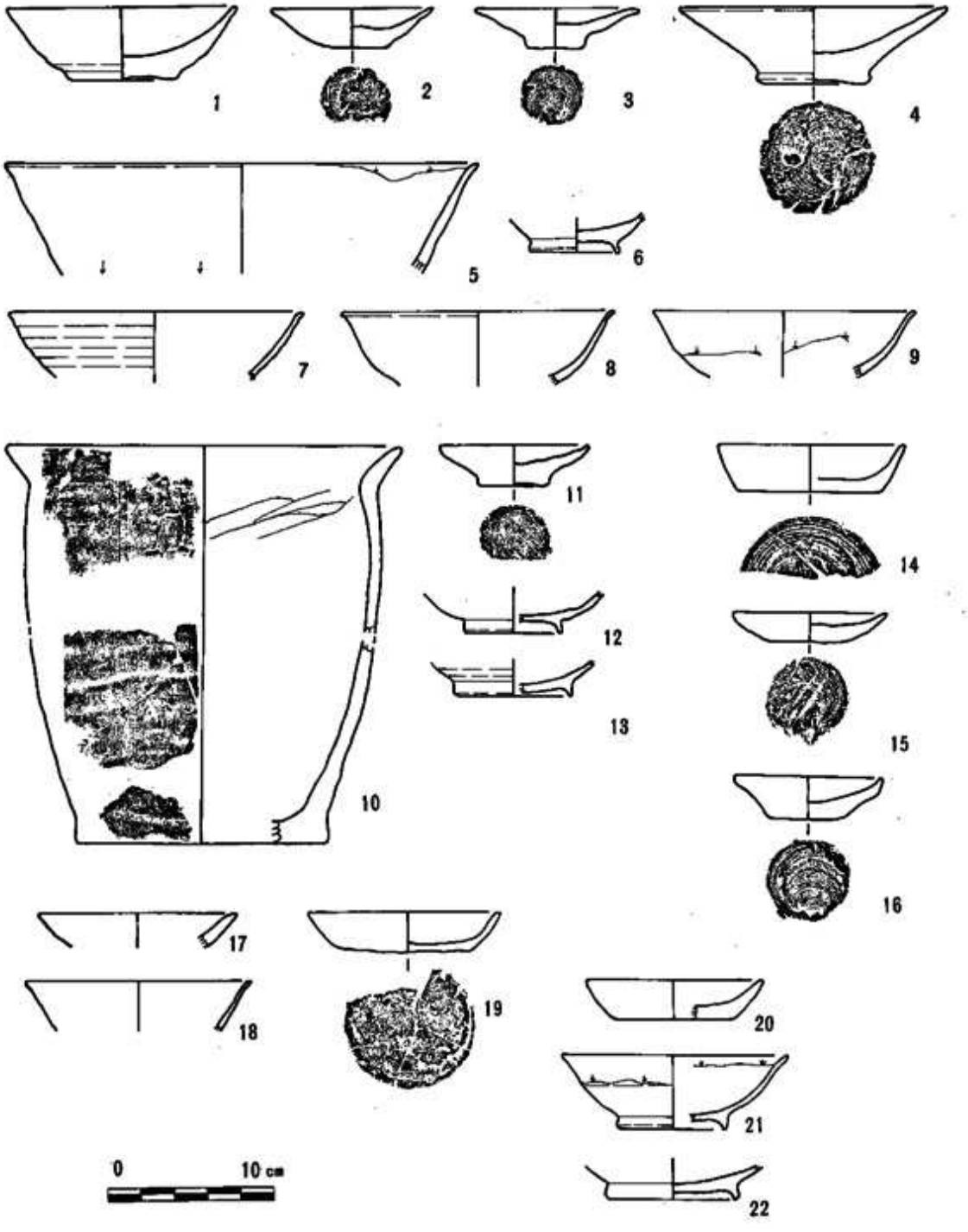


第 129図　荒神山遺跡 1 号・3 号・4 号・6 号・7 号・8 号・10号・26号・42号・48号・50号・62号住居址出土土製品（1：2）

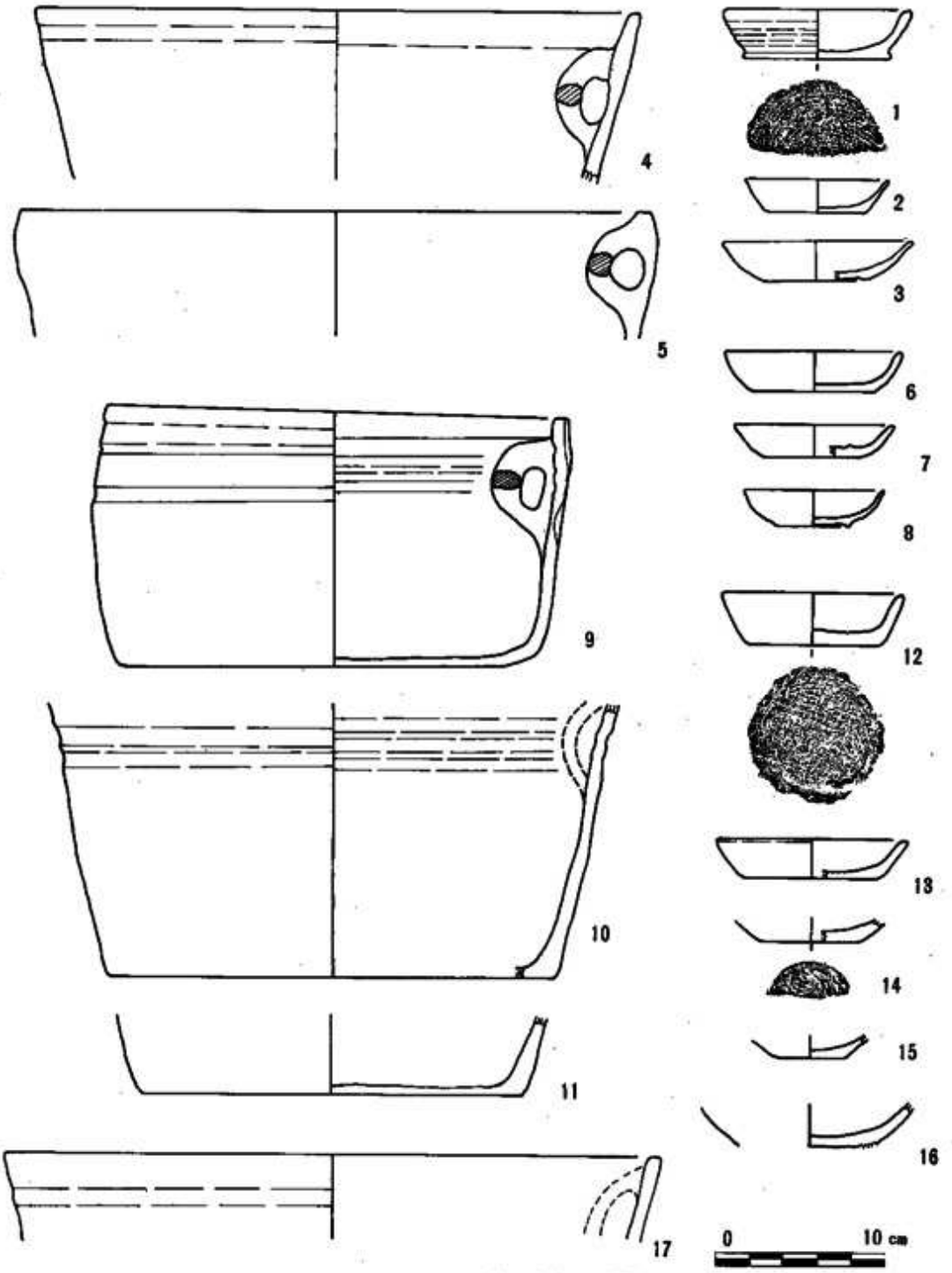
1　1号住居址，2・22　3号住居址，3～4　4号住居址，5～6　6号住居址，7～8　7号住居址，9　10号住居址
10　26号住居址，11　42号住居址，12　48号住居址，13～16　50号住居址，17～20　62号住居址，21　8号住居址



第 130図　荒神山遺跡44号・46号・47号住居址出土土器（1：2）
1　44号住居址覆土，2～11　46号住居址床面，12～19　47号住居址床面，20～32　47号住居址 覆土



第 131図　荒神山遺跡5号・9号・13号・27号・29号・36号住居址出土土器（1：4）
1～9　5号住居址床面（1～4　H，5～9　K）　10　9号住居址床面 11～13　9号住居址覆土（10～11　H，12～13　K）14　13号住居址覆土，15～16　13号住居址床（14～16　H），17～18　27号住居址覆土（17　H，18　K），19　29号住居址覆土（H），20　36号住居址床面，21～22　36号住居址覆土（20　H，21～22　K　）



第 132図　荒神山遺跡２号・14号・15号・30号住居址出土土器（１：４）
１～２　２号住居址床面，３　２号住居址覆土，４～５　14号住居址覆土，６～８　14号住居址床面，
10～13　16・15号住居址床面，14～15　15号住居址覆土，17　30号住居址覆土

あとがき

諏訪市内その1、その2地区の発掘調査は、7月30日、城山遺跡から始った。当初、富士見町内その1地区の発掘を終了した旧富士見班と作業員数人という規模であったが、9月より箕輪町地区の発掘を終了した旧箕輪班が合流し、調査速度もあるようになった。しかし、荒神山遺跡、本城遺跡の調査に入ると予想外に多くの遺構に遭遇し、幾層もの遺物包含層、複雑な遺構の切り合いから調査は難行した。従って労力不足は深刻で、諏訪市教育委員会の御尽力にもかかわらず作業員募集が思うに任せず、辰野町からも応援を求める結果となった。また、調査団内部の応援体制も組みかえ、本城遺跡、平林、金山北遺跡の調査には、既に整理作業に入り多忙な辰野班の協力を得た。このように調査団としては最大限の努力を払い費用の許す限り発掘を続け、荒神山遺跡の調査を終了したのが12月14日であった。本城、荒神山遺跡の調査完了は第二次調査に待たねばならなくなったとはいえ、湖南地域には大遺跡はないといわれてきた従来の考え方を改めさせるような成果をあげ得た。このことは、酷暑の中、城山遺跡の2m以上の深さに及ぶグリット掘りに始まり、本城、荒神山遺跡で寒風に吹きさらされ、雪の舞う中で調査を続けてきた作業員と各位の絶大な御協力、調査団諸君の努力の賜物である。

調査結果については、それぞれの項に詳述されているが、縄文時代から中世に至る遺構が多く、遺物も非常に多かった。

既に破壊されていたとは言え、小丸山古墳では相当量の鉄器、玉類を得、既出遺物の実測図をも収録したことは、諏訪地方の古墳研究に大きなプラスとなった。

本城遺跡では縄文中期住居址15軒、土壙35基、平安時代住居址2軒、中世配石址1を小区画の調査で検出しているが、大部分は二次調査の対象となったため、本年度分も次の報告書に記載されることになった。

城山遺跡では縄文中期住居址1軒、平安時代住居址1軒、土壙3、中世建築址1、井戸址1等を、荒神山遺跡では縄文時代住居址46軒、弥生時代住居址3軒、平安時代住居址8軒、中世住居址9軒、中世建築址1等を調査している。大熊道上遺跡では平安時代住居址3軒、中世住居址2軒、中世建築址1を検出した。

荒神山遺跡の縄文時代遺物は特に豊富で、貴重な資料が含まれ、二次調査の結果によっては縄文集落の構造が解明できよう。

大熊城址は諏訪市教育委員会によって用地外が今年調査されておる。ここに報告する本遺跡用地内、隣接する城山、荒神山、大熊道上遺跡の中世遺構とともに充分検討したならば、大熊城の構造がより一層明確になろう。県下では中世城郭の周辺部まで含めて調査した例はないので、中世城郭研究を大きく前進させたものと考える。

この報告書は、ごく短期間にまとめられたため不備な点は多々あろうが、資料集として活用頂ければ幸いである。

末尾ながら、調査に御協力頂いた諏訪市教育委員会、日本道路公団諏訪工事事務所、被買収者組合、関係区長、伊那教育事務所の方々に感謝の意を表わしたい。

（大沢和夫）

第1図　清水・平林遺跡

1．清水遺跡全景

2．平林遺跡全景

第2図　小丸山古墳

3．墳頂の神社

4．平林氏の氏神様

5．小丸山古墳全景（調査前）

6．小丸山古墳遠景（西南方山寄りから）

7．小丸山古墳近景（西方より）

第3図　小丸山古墳遺構

8．側壁石列

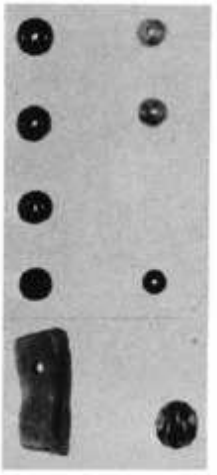
9．石室

10．石室全景

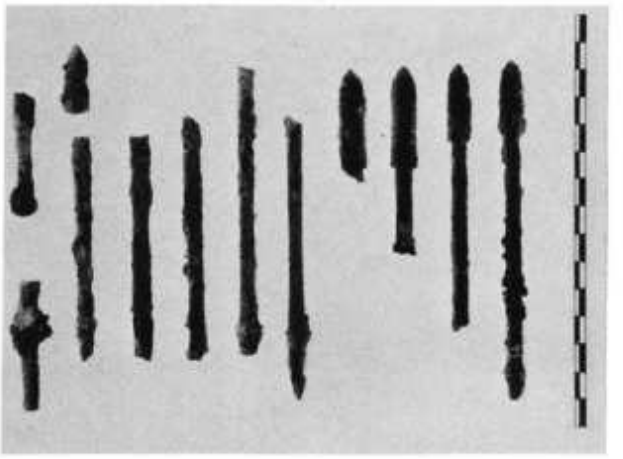
11．玄室

12．鏡石

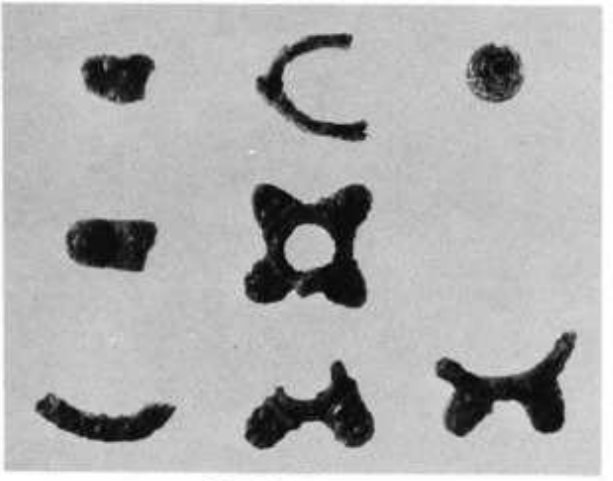
第4図　小丸山古墳出土遺物（本調査）



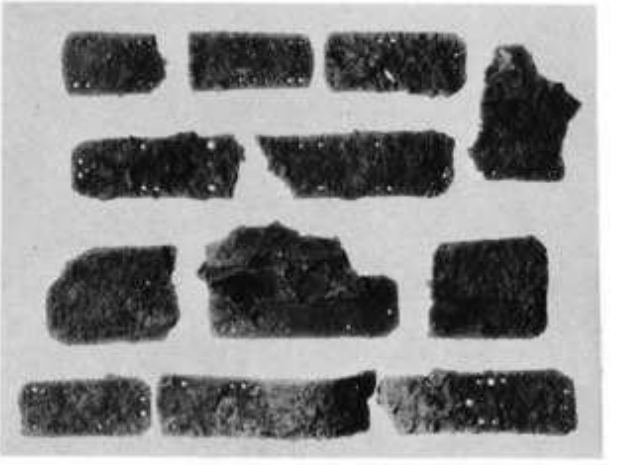
13. 玉類



14. 鉄鏃



15. 馬具類

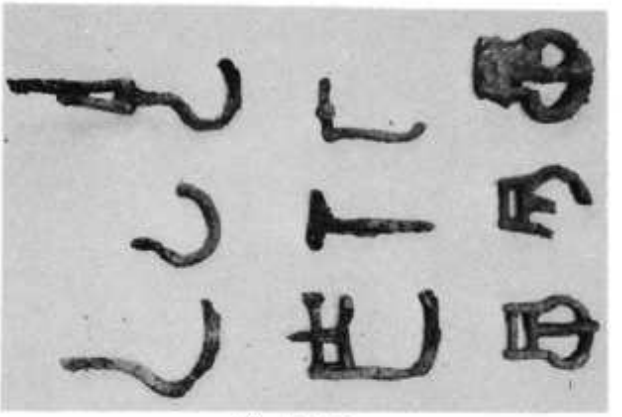


16. 挂甲小札

第5図　小丸山古墳出土遺物（東京国立博物館蔵）

17. 馬具類

18. 杏葉

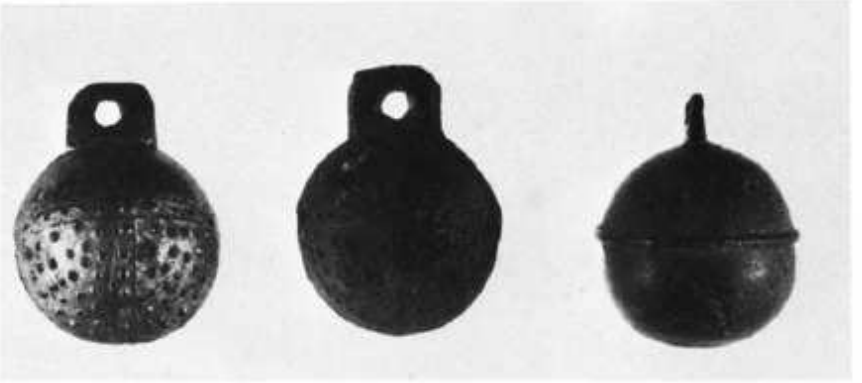


19. 馬具類

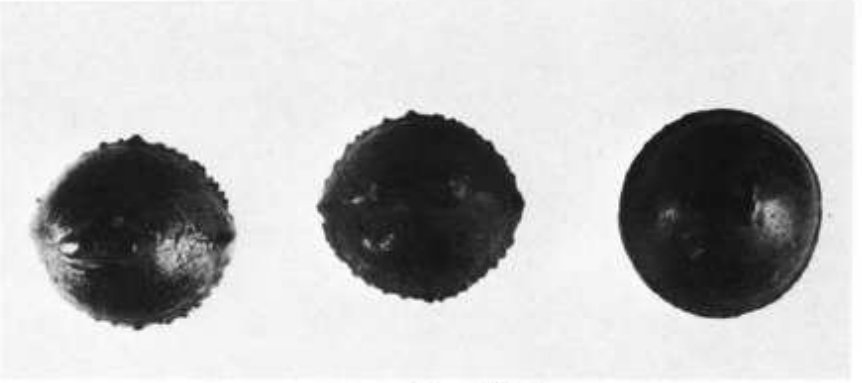
20. 輪鐙

21. 輪鐙

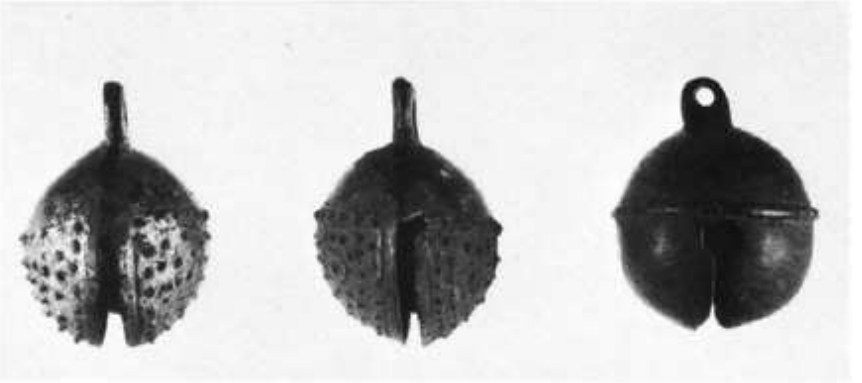
第6図　小丸山古墳出土遺物（平林氏蔵）



22. 馬鈴（正面）



23.　同　（上面）



24.　同　（側面）

25. 本城遺跡全景

26. 遺構全景

27. 金山北遺跡全景

28. 城山遺跡全景

29. 1号住居址

30. 同　石囲炉

31. 同　出土土器

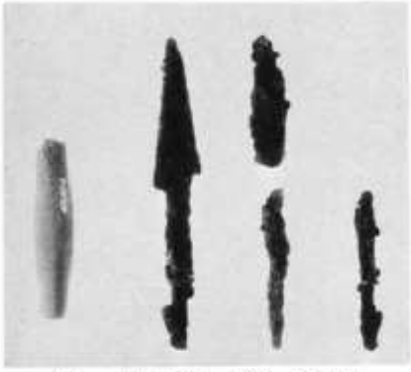
32. 2号住居址

33. 同　カマド

34.　2号住居址遺物出土状況

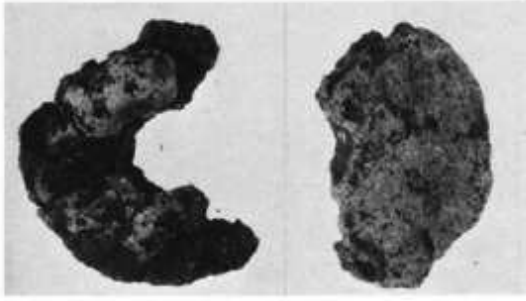
35.　同　出土灰釉陶器

36.　同　出土灰釉陶器

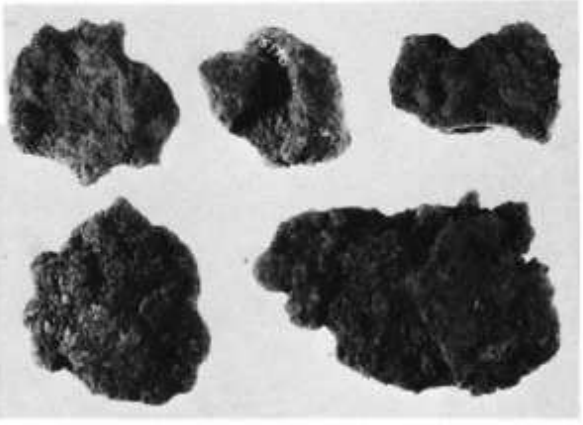


38.　同　出土土錘・鉄製品

37.　同　出土土師器



39.　同　出土フイゴロ



40.　同　出土鉄滓・溶滓

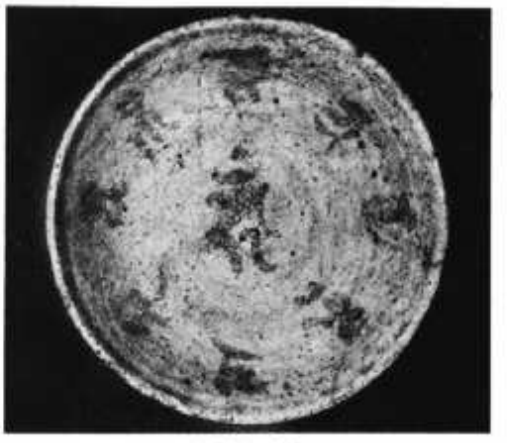
第12図　城山遺跡建築址

41.　1号建築址

42.　同　付属施設

43.　2号建築址

44.　同　土器出土状況



45.　同　梵字墨書土器

46. 井戸址

47.　同　木わく

48. 1号土壙

49.　同　出土鍔釜

50.　同　底部